

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第116集

有馬条里遺跡II

古墳時代～平安時代の集落址の調査

—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第35集—

1991

群馬県教育委員会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



遺跡西方より赤城山麓を望む



遺跡南方より利根川を望む（手前は有馬遺跡）

有馬条里遺跡の集落

鶴が翼をひろげて大空を舞う形に例えられる。群馬県の地形図。このうち、県南にあたる鶴の首とその付け根の部分を除く大半が山間部で、両翼と尻尾は特に険しい。県中央部には、標高1,448mの掃部ヶ岳を最高峰とする榛名山が、周囲に緩やかな裾野を広げる。

有馬条里遺跡の集落は、平坦地の少ない榛名山の東麓一帯で最も開けた扇状地上を占めている。弥生時代中期から続く集落の営みは、6世紀に被った二度にわたる榛名山の火山災害にも途絶えることなく、平安時代まで連続と続く。古墳時代には、検出した畠や水田が生業の実態をも明らかにした。榛名山二ツ岳の泥流に覆われた台地上に異々と築かれた堅穴住居群は、ここに営々と続いた古代集落の最後の姿を示しているのである。

145号住居出土遺物（45頁参照）



51号住居出土遺物（19頁参照）



94号住居出土遺物（132頁参照）





77号住居出土遺物(195頁参照)



171号住居出土遺物(268頁参照)



古墳時代～平安時代の集落

古墳時代後期以降の集落は、古墳時代後期の水田面を覆った礫名山ニツ岳第2軽石流(FPF-2)の上に立地する。つまり、この集落の基盤層である層厚1.5mのFPF-2層と、層厚5cmのニツ岳降下軽石層(FP)を除去すると下から水田面が現れ、写真左側の水田面と右側の集落は、火山災害の前後における土地利用の変遷を対照的に映し出す。

139号住居出土遺物(254頁参照)





刻書紡錘車(140頁參照)



鉄器

天王立像(380頁參照)



地藏菩薩立像(372頁參照)



群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第116集

有馬条里遺跡II

古墳時代～平安時代の集落址の調査

一 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第35集一

1991

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

関越自動車道新潟線は、太平洋側の首都東京と日本海側の新潟市を結ぶ高速自動車道として、昭和60年10月1日に開通いたしました。本道路の開通に際しては、数多くの埋蔵文化財が、事前の道路建設工事に先立って調査されました。本県でも58箇所の埋蔵文化財包蔵地が発掘調査され、記録保存されています。

本報告による有馬条里遺跡は、渋川市八木原に所在する埋蔵文化財包蔵地であり、昭和57年1月から昭和59年3月にかけて、当事業団が調査しました。弥生時代中期から平安時代にかけて継続的に営まれた集落跡・古墳時代の水田・畠等が調査され、古代における本県の歴史を知る上での数々の貴重な資料が得られました。これら資料は、昭和62年10月から報告書作成のための整理作業が行われ、弥生時代から古墳時代中期の集落跡と古墳時代の水田・畠については、「有馬条里遺跡」の第1分冊として平成元年10月に報告書を刊行しました。今回、古墳時代後期から平安時代にかけての集落跡について整理が完了し、ここに有馬条里遺跡の第2分冊としての報告書を作成することができました。

発掘調査から報告書の作成に至るまで、日本道路公団東京第二建設局、群馬県教育委員会、渋川市教育委員会、地元関係者等から種々のご援助、ご指導、ご協力を賜りましたことに対し、深甚なる感謝の意を表し、併せて本報告書が広く県民各位、研究者、教育機関等に活用され、本県の歴史を解明するための資料として、役立てられることを願ひ序とします。

平成3年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水 一郎

例 言

- 1 本書は関越自動車道(新潟線)の建設工事に伴って事前調査された、有馬条里遺跡の発掘調査報告書第2分冊である。この遺跡は弥生、古墳、奈良、平安の各時代にわたる複合遺跡であり、本書はこのうちの古墳時代後期から平安時代の集落に関する発掘調査結果を掲載した。
- 2 弥生時代から古墳時代中期までの集落および、古墳時代の畠跡・水田跡に関する発掘調査結果は、関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書「有馬条里遺跡Ⅰ」を参照されたい。
- 3 本遺跡は群馬県渋川市八木原字堰上、堰下に所在する。
- 4 遺跡名については、この地域に現存する整然とした水田区画が条里制遺構に想定され、有馬条里と呼称されていたことに由来する。
- 5 事業主体 日本道路公団
- 6 調査主体 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 7 調査期間 第1次 昭和57年1月12日～同年3月25日 (昭和56年度)
第2次 昭和57年4月21日～昭和58年3月25日 (昭和57年度)
第3次 昭和58年4月7日～昭和59年3月31日 (昭和58年度)
- 8 調査組織 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
常務理事 小林起久治
事務局長 沢井良之助(昭和56年度) 白石保三郎(昭和57・58年度)
管理部長 大澤秋良(昭和58年度)
調査研究部長 井上唯雄(昭和56年度) 松本浩一(昭和57・58年度)
庶務課長 近藤平志(昭和56・57年度) 大澤秋良(昭和58年度)
調査研究第1課長 平野進一
事務担当 国定 均 笠原秀樹 山本朋子 吉田有光 柳岡良宏 吉田恵子 並木綾子
野島のぶ江 吉田笑子 今井もと子
調査担当 第1次 石北直樹 坂口 一 大西雅広(調査研究員)
第2次 市 隆之(主任調査研究員) 小安和順 須田 努(調査研究員)
三浦京子(嘱託員)
第3次 市 隆之(主任調査研究員) 須田 努 小林裕二(調査研究員)
- 9 整理主体 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 10 整理期間 平成元年6月1日～平成3年3月31日
- 11 整理組織
常務理事 邊見長雄
事務局長 松本浩一
管理部長 田口紀雄
調査研究部長 神保脩史
庶務課長 住谷 進(平成元年度) 岩丸大作(平成2年度)
調査研究第1課長 真下高幸

事務担当 笠原秀樹 国定 均 小林昌嗣 須田朋子 吉田有光 柳岡良宏 野島のよ
江 今井もと子 松井美智子 角田みづほ

整理担当 坂口 一 (主任調査研究員)

- 12 本書作成の担当者は次のとおりである。

編集 坂口 一

執筆 I 章 市 隆之 (群馬県埋蔵文化財調査事業団 調査研究第3課長)・小安和順 (甘楽郡甘
楽町教育委員会 社会教育主事)

II～V章 坂口 一

VI 章 浅井和春 (東京国立博物館) 平尾良光 (東京国立文化財研究所) 宮崎重雄 (群
馬県立大間々高等学校)

整理班員 阿部由美子 金子加代 木暮紀子 板井繁美 須田はつ江 角田孝子 手塚ふみ江

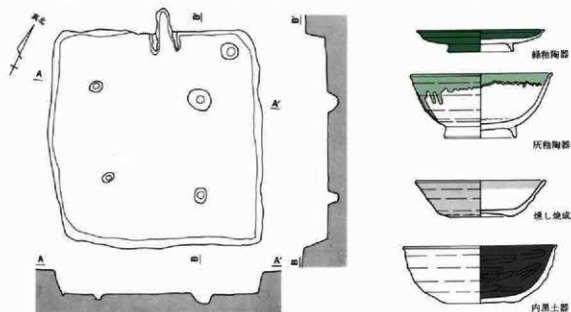
保存科学 関 邦一 北爪健二 小材浩一

- 13 火山噴出物の鑑定については、新井房夫氏 (群馬大学) に御協力を頂いた。
14 獣骨の鑑定については、金子浩昌氏 (早稲田大学) に御協力を頂いた。
15 出土遺物と、有馬条里遺跡に関する整理済み記録資料の一切は、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管
している。
16 本書の作成にあたっては、次の方々に有益な指導と助言を賜った。記して深甚なる感謝の意を表す次第
である。

赤山容造 浅井和春 新井房夫 五十嵐 信 石井克己 岩崎卓也 今泉泰之 大塚初重 大塚昌彦
加島 勝 金子浩昌 唐澤保之 桐原 健 小島純一 後藤 直 小林良光 小安和順 佐藤明人
白石太一郎 杉山晋作 須田 努 須永光一 田辺昭三 東野治之 成田滋彦 橋本澄朗 平尾良光
春成秀爾 樋口昇一 平川 南 藤原宏志 洞口正史 松下 勝 宮崎重雄 宮下健司 森田克行
森本岩太郎 柳沼賢治 山田真一 吉田俊爾 東京国立博物館 東京国立文化財研究所 (敬称略)

凡 例

- 1 調査区域には国家座標に基づいて2m間隔のグリッドを設定し、南北50グリッド(100m)を単位としてA~Gの調査区に分割した。グリッドの国家座標上における位置は、付図1周辺地形図に示した。
- 2 住居の方位は、竈付き住居が竈の付設された壁に直交する軸線、竈のない住居が住居の長軸線の、それぞれ真北に対する傾きを示し、時計回りを+、反時計回りを-とした。
- 3 遺物観察表の記載方法は次のとおりである。
 - (1) 胎土中の砂粒の大きさによる分類は、土壌物理研究会による基準に従い、細砂粒 (<0.5mm)、粗砂粒 (0.5~2.0mm)、細礫 (2.0~5.0mm)、中礫 (5.0mm<)とした。
 - (2) 色調は農林省水産技術会議事務局監修、(財)日本色彩研究所色標監修の新版標準土色帖に従った。
 - (3) 出土状態は、遺構の底面から遺物までの垂直距離を示した。
- 4 竈穴住居の面積は1/40図上でプランメーターによる3回の計測平均値、住居確認面の掘り込みから内側。



※竈穴住居の検索には巻末の
竈穴住居索引表を参照。

竈穴住居外形分類基準

上段：長軸長(単位 m)
下段：長軸比(長軸長/短軸長)

規模	形状	形状		
		正 方 形	横 長 長 方 形	縦 長 長 方 形
超 大	形	6.5以上	6.5以上	6.5以上
		1.0~1.1未満	1.1以上	1.1以上
大	形	5.4~6.5未満	5.4~6.5未満	5.4~6.5未満
		1.0~1.1未満	1.1以上	1.1以上
中	形	4.3~5.4未満	4.3~5.4未満	4.3~5.4未満
		1.0~1.1未満	1.1以上	1.1以上
小	形	3.2~4.3未満	3.2~4.3未満	3.2~4.3未満
		1.0~1.1未満	1.1以上	1.1以上
超 小	形	3.2未満	3.2未満	3.2未満
		1.0~1.1未満	1.1以上	1.1以上

目 次

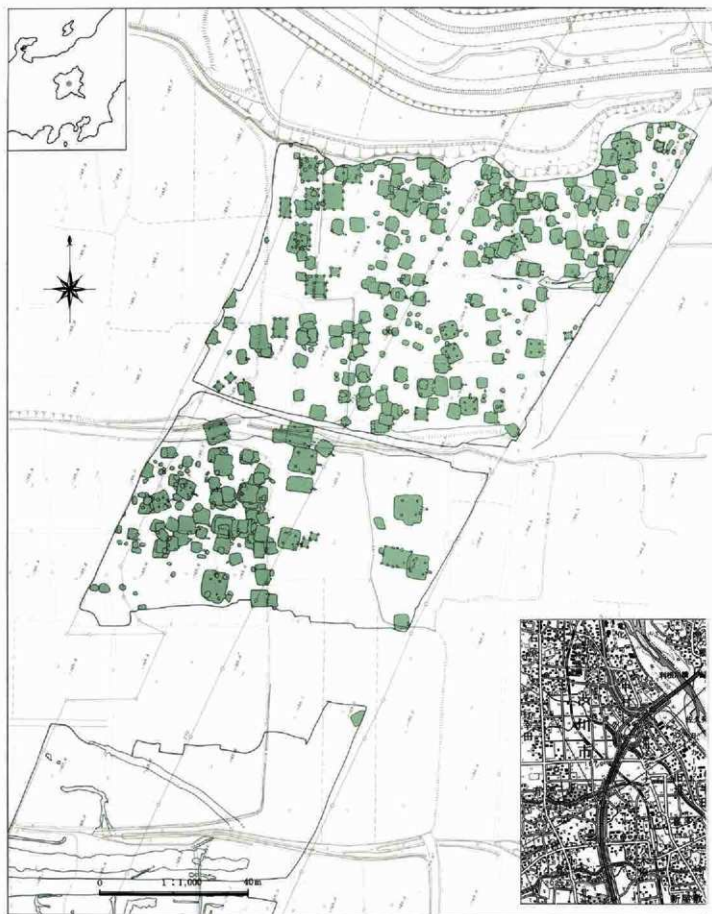
口絵	
序	iii
例言	v
凡例	vii
I 発掘調査と遺跡の概要	xi
1 調査の経過	xii
2 遺跡の位置と地形	xiii
3 遺跡の標準層序	xiv
II 竪穴住居	1
1 古墳時代後期	4
2 奈良時代	120
3 平安時代	140
III 鍛冶遺構	343
IV 掘立柱建物	347
V 土壇・井戸・溝	361
VI 出土獣骨	383
VII 分析鑑定所見	389
1 有馬条里遺跡出土金銅地藏菩薩立像および 銅造天王立像の調査概要	390
2 有馬条里遺跡出土地藏菩薩立像・天王立像の 非破壊蛍光X線分析法による科学組成の調査	394
3 有馬条里遺跡出土の馬歯	396
竪穴住居索引表	402
掘立柱建物索引表	407
別 冊	
遺物観察表	

挿 図 目 次

1 有馬条里遺跡位置図	x
2 発掘調査区域図	xii
3 周辺の地形図	xiii
4 標準層序図	xiv
5 6世紀代の竪穴住居分布図	2
6 7世紀代の竪穴住居分布図	58
7 F・G区遺構分布図	117
8 8世紀代の竪穴住居分布図	118
9 9世紀代の竪穴住居分布図	138
10 10世紀代の竪穴住居分布図	200
11 11世紀代の竪穴住居分布図	278
12 鍛冶遺構分布図	344
13 掘立柱建物分布図	348
14 掘立柱建物詳細分布図	360
15 土壇・井戸・溝分布図	362

付 図

- 1 周辺地形図
- 2 遺構全体図
- 3 竪穴住居全体図
- 4 竪穴住居外形分類一覧
- 5 年代別竪穴住居外形分類一覧



挿図1 有馬条里遺跡位置図

I 発掘調査と遺跡の概要

I 発掘調査と遺跡の概要

1 調査の経過

有馬系遺跡は、関越自動車道(新高線)の建設に伴う事前調査として、第1次から第3次にかけて、昭和57年1月12日～昭和59年3月31日までの、通算で2年3ヶ月を要して発掘調査が実施された。

第1次調査では、JR上越線と立体交差するための橋脚部分を先行して、昭和57年1月12日～同年3月25日にかけて、上越線の両側に変則的な区域を設定して実施した。この遺跡は、調査区域の全域が現状で水田地帯と重なっていたために、表面採集による地表面での調査から、埋没した遺構を推測することが不可能に近い状況であった。したがって、第1次調査の主眼は、橋脚部分の調査を終了させると同時に遺跡全体の調査指針を得るべく、遺構の垂直的な分布状況を把握することにあつた。しかし、結果的にこの調査では現地地表下1m程の古墳時代～平安時代の面と、さらに1.5m程下層の榛名山ニツ岳降下軽石層(FP)下の水田面を検出したのみで、さらに下層に存在した榛名山ニツ岳降下火山灰層(FA)下の畝や、弥生時代～古墳時代中期の集落を把握することができなかつた。

第2次調査は、昭和57年4月21日～昭和58年3月25日にかけて、FPに伴う泥流(FPF-2)の上面で古墳時代後期～平安時代の集落と、FP層下の水田跡が調査された。この時代の集落は調査区域北端の茂沢川に近い部分で濃密に分布し、検出した竪穴住居の総数は240軒にも達した。一方、FP層下の古墳時代後期の水田跡も、竪穴住居の分布域以上に広範囲なひろがりを示し、大畔で区画された中の小畔の状況に、三つの異なる形態が認められた。すなわち、①縦・横の小畦が完成している部分、②縦方向の畦の高まりが造られている部分、③小畦が全くなく、無数の足跡を残す部分の三種類である。

第3次調査は、昭和58年4月7日～昭和59年3月31日にかけて、主としてFA層下の古墳時代後期の畝跡と、さらに下層の弥生時代中期～古墳時代中期の集落および、古墳時代前期の浅間C軽石層(As-C)下の畝跡が調査された。集落は検出された竪穴住居が140軒で、隣接する有馬遺跡に近似した障床墓2基も検出された。なお、調査経過の詳細は、関越自動車道地域埋蔵文化財調査報告書「有馬系遺跡I」を参照されたい。



図2 発掘調査区域

2 遺跡の位置と地形

この遺跡は渋川市八木原字堰上・堰下に所在し、渋川市街地の南方2kmに位置する。群馬県は鶴が空を舞う形に例えられるが、県央部の渋川市から、南東部の前橋市、伊勢崎市、太田市にかけては平坦地がひろがる。この鶴首にあたる部分は関東平野で最奥部の平野部を形成し、ここを除く大半が山間部で特に両翼と尻尾の部分は険しい山岳地帯である。

遺跡は榛名山の山麓山地と現在の利根川の間位置し、遺跡の東方1kmに利根川が南流する。利根川を挟んで西側に榛名山、東側に赤城山が対峙している。両山ともに那須火山帯に属す第四紀の複式成層火山で、いずれも利根川に向かって緩やかな裾野地形を示し、利根川及び吾妻川に沿った狭い低地部分のみがわずかに平坦面を形成している。

東麓の末端にこの遺跡を載せる榛名山は、標高1,448mの^北掃部ヶ岳を最高峰として、直径20km程の範囲に緩やかな裾野をひろげている。洪積世にはこの東麓の末端が利根川、吾妻川の蛇行によって浸食されるが、その後山麓山地からの泥流堆積物によって扇状地状地形を呈し、現在、山麓山地から利根川にかけての大半は台地化している。この遺跡が立地する面は、周辺の台地化した部分より低位の扇状地形を示し、現在東麓の大半を占める台地上で畑が営まれるのと同様に、東西2km、南北1km程の広範囲に水田が営まれている。

周辺には多くの遺跡が立地する。その代表的なものは遺跡の南側に隣接する台地上の有馬遺跡で、ここでは弥生時代後期から平安時代にわたる集落と、古墳時代前期及び後期の畠跡が検出され、北側に隣接する中村遺跡では弥生時代中期から平安時代にわたる集落と、古墳時代後期の畠、水田跡が検出された。また、榛名山麓山地の末端に位置する行幸田山遺跡では、古墳時代前期から中期の古墳群が検出され、この遺跡の北側に位置する台地上の空沢遺跡では、古墳時代前期から後期の古墳群が検出されている。



図3 周辺の地形図(国土地理院5万分の1「榛名山」前橋)

3 遺跡の標準層序

この遺跡は、榛名山の山麓山地と現在の利根川の間位置し、堆積物の多くは榛名山に由来する。この遺跡の南側で接する有馬遺跡とは、隣接しているにもかかわらず弥生時代から古墳時代の基盤層が大きく異なる。すなわち、両遺跡ともに確認した最下層は利根川の氾濫層とされる礫層であるが、有馬遺跡はこの上位を榛名山系の河川による二次堆積ローム層が覆い、これによって、有馬遺跡の周辺は台地化した扇状地状地形を形成する。一方、有馬条里遺跡では二次堆積ローム層の堆積がなく、台地化することなく黒色土の低位面が形成されている。同じ現象はこの遺跡の北側に隣接する中村遺跡でも認められ、中村遺跡でも礫層の上位を黒色土が覆っている。

この遺跡で確認した標準層序は以下のとおりである。

I層 耕作土層 現在の水田耕作土壌。

II層 黄褐色土層 榛名山二ツ岳起源の角閃石安山岩を多量に含む、古墳時代後期から平安時代の遺構切込み面。

III層 榛名山二ツ岳第2軽石流堆積物層 (FPF-2) FPに伴う火山泥流堆積物層で、角閃石安山岩を多量に含む。

IV層 榛名山二ツ岳降下軽石層 (FP) 榛名山二ツ岳の形成期における噴火の降下軽石層で、6世紀中葉に比定されている。

V層 黒色土層 古墳時代後期の水田土壌。

VI層 榛名山二ツ岳第1軽石流堆積物層 (FPF-1) FAに伴う火山泥流堆積物層で、角閃石安山岩を多量に含む。

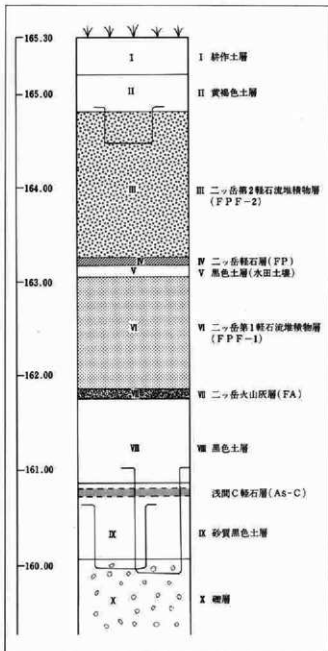
VII層 榛名山二ツ岳降下火山灰層 (FA) 榛名山二ツ岳の形成期における噴火の降下火山灰層で、6世紀初頭に比定されている。

VIII層 黒色土層 古墳時代前期から中期の遺構切込み面で、最上面は古墳時代後期の畠耕作土壌。

浅間C軽石層 (As-C) 標準層序としては捉え得ないが浅間山起源の降下軽石層で、IX層を耕作土とする畠跡の直上を覆う。古墳時代前期中葉に比定されている。

IX層 砂質黒色土層 弥生時代から古墳時代前期の遺構切込み面。

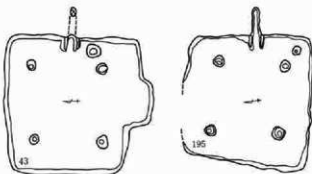
X層 礫層 洪積世の利根川氾濫原。



挿図4 標準層序図

II 豎穴住居

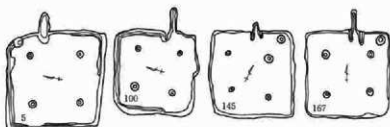
6世紀代の竪穴住居分布



超大型正方形

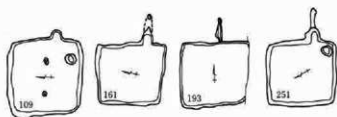


大形正方形

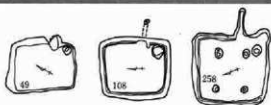


中形正方形

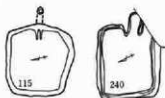




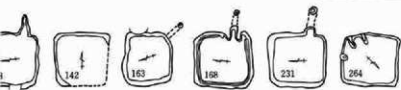
小形正方形



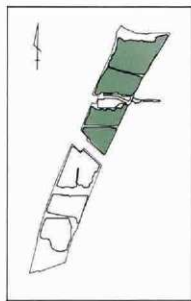
小形横長長方形



小形縦長長方形



超小形正方形

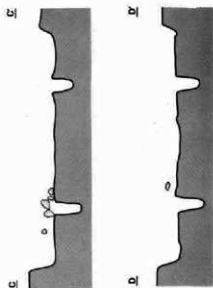
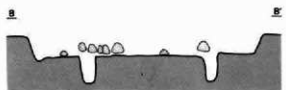
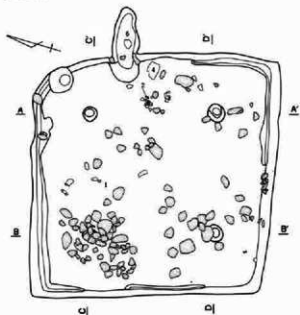


挿図5 6世紀代の竪穴住居分布図

1 古墳時代後期

遺物観察表 2

5号住居



L=163.60m

一辺5.1mの中形正方形住居。基盤層を40cm掘り込んで、平坦な床面を造る。住居のほぼ対角線上に4個の主柱穴を配置する。柱穴の芯々を結ぶ四角形は一辺2.7mで、住居の外形と相似形の整った正方形を示す。竈は東壁の北側に設置する。明確な袖部は検出できないが、焚口部の両側に補強材とした石材を検出した。燃燒部は幅50cm、奥行き50cmで、その大半を壁外に造り出し、煙道は燃燒部の外側50cmまで伸びる。北壁と住居の南東隅に、幅20cm、深さ10cmの壁溝が巡る。住居中央部の北側より坏、東壁際の中央部より鉢、甕が出土するが、床面に密着したものはない。また、住居の北西部を中心に出土する多量の角閃石安山岩は、出土レベルが床面より高い。重複する2住、4住、28住、37住が、この住居を切って構築し、34住との新旧関係を判定する資料はない。

方位 +75° 面積 25.89㎡

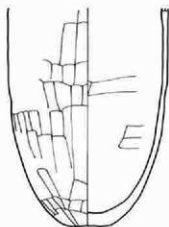




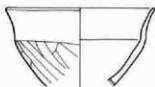
1



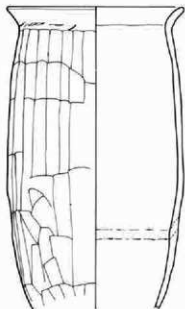
3



6



2



4



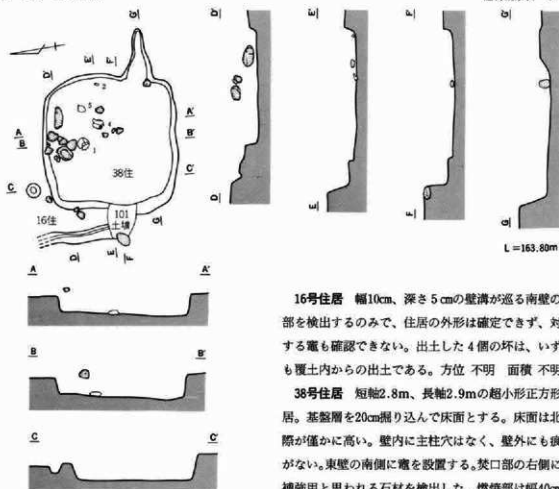
5



5

16・38号住居

遺物観察表 5・10



16号住居 幅10cm、深さ5cmの壁溝が巡る南壁の一部を検出するのみで、住居の外形は確定できず、対応する竈も確認できない。出土した4個の坏は、いずれも覆土内からの出土である。方位 不明 面積 不明

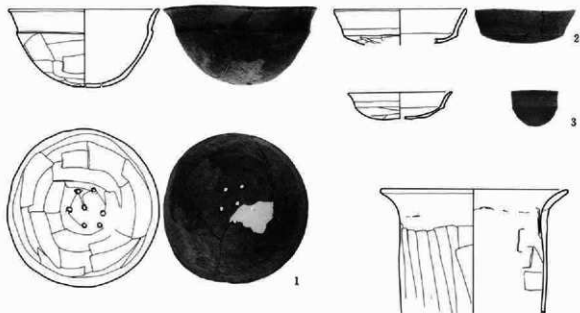
38号住居 短軸2.8m、長軸2.9mの超小形正方形住居。基盤層を20cm掘り込んで床面とする。床面は北壁際が僅かに高い。壁内に支柱穴はなく、壁外にも痕跡がない。東壁の南側に竈を設置する。焚口部の右側に、補強用と思われる石材を検出した。燃燒部は幅40cm、奥行き50cmで壁外に造り出し、煙道は燃燒部の外側40

cmまで伸びる。坏、甕が出土するが、床面に密着したものはない。この住居が29住を切り、15住がこの住居を切って構築する土層断面の所見を得た。16住との新旧関係を判定する実証的資料を欠くが、伴出する土器の型式は38住→16住の順を示す。方位 +98° 面積 7.47㎡

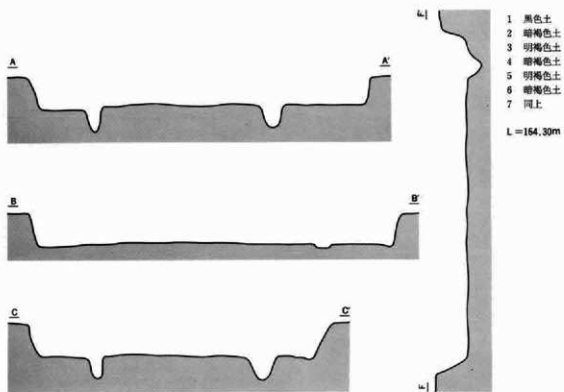
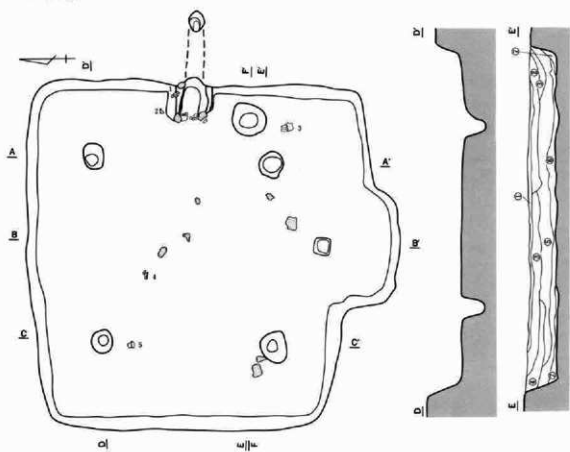




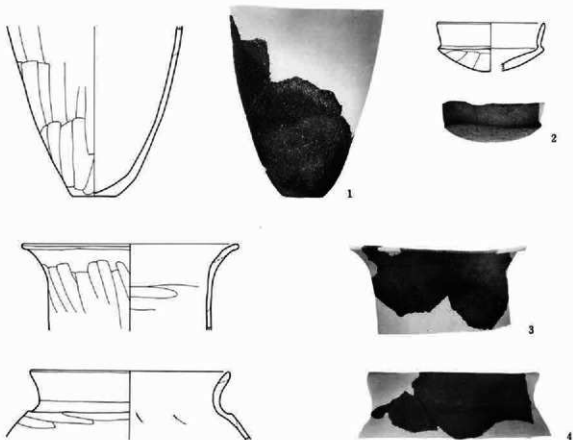
16号住層出土遺物



38号住層出土遺物



短軸6.9m、長軸7.2mで、南壁の中央部に幅2.4m、奥行き1.2mの張り出し部をもつ超大形正方形住居。
 基盤層を60cm掘り込んで床面とする。床面は平坦で全体に良く整っている。検出した4個の支柱穴は住居の
 対角線上になく、芯々を結ぶと一辺3.8mの正方形を示す。竈は東壁の中央部に設置する。壁内に造り付けた
 長さ40cmの袖部を検出した。燃焼部は幅40cm、奥行き60cmで壁内型を呈し、焚口部の両側に補強用の石材を
 据えている。煙道は壁の中段から切り込み、30cmの幅で壁外1.2mまで伸びる。貯蔵穴は竈の右脇に、短辺60
 cm、長辺80cmの不正方形プランで配置する。竈の周辺部から甕、坏、住居北西部の床面直上より須恵器揃鉢
 が出土するほか、覆土内より須恵器坏蓋が出土する。他の遺構と重複することなく、単独で占地する。
 方位 +90° 面積 48.63m²

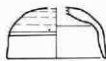




5



6



7



8



9



10



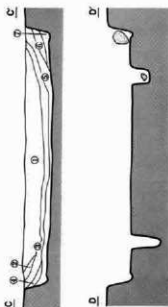
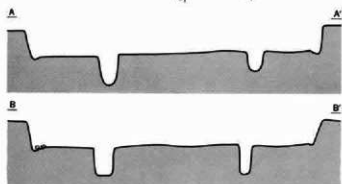
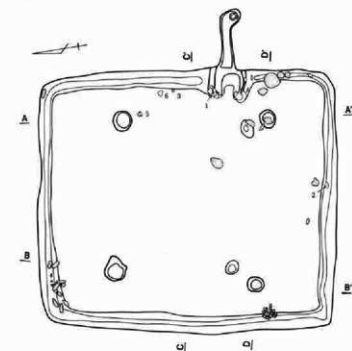
11



12



13

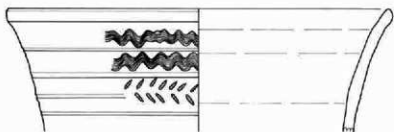
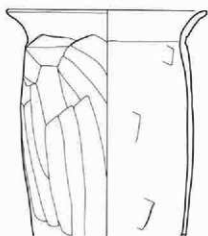
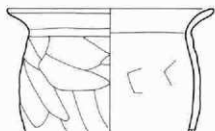


- | | |
|--------|---------|
| 1 黒褐色土 | 5 黒褐色土 |
| 2 灰褐色土 | 6 砂質黄色土 |
| 3 褐色土 | 7 黒褐色土 |
| 4 同上 | |
- L = 164.30m

短軸5.5m、長軸6.4mで、長軸を南北にもつ大形横長方形住居。基盤層を60cm掘り込んで床面とする。床面は全体に平坦で良く整っている。検出した4個の柱穴は住居の対角線上になく、

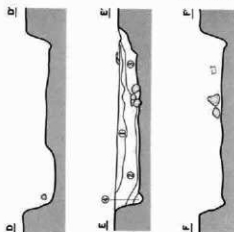
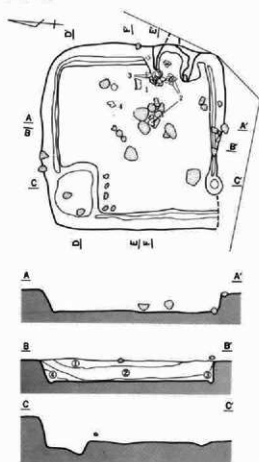
芯々を結ぶと住居の外形と異なる一辺3.2mの正方形を示す。東壁の南側に竈を設置する。壁内に長さ40cmの袖部を造り付けた壁内型で、両端に壘を伏せて補強材とする。燃焼部は幅40cm、奥行き40cmで、煙道は壁の中段から壁外1.2mまで伸びる。壁溝は幅20cm、深さ10cmで、竈の部分を除いて全周する。東壁隙の中央部より坏、壘が出土するほか、覆土内より須恵器の坏蓋、壘が出土する。住居の西側で1号掘立柱建物と重複するが、新旧関係を判定する資料を欠く。方位 +99° 面積 34.24㎡





45号住居

遺物観察表 13

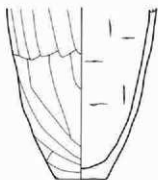


- 1 暗褐色土
- 2 茶褐色土
- 3 暗茶褐色土
- 4 黄褐色土

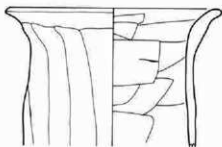
L=164.40m

短軸3.9m、長軸4.0mの整った小形正方形住居。基盤層を50cm掘り込んで床面とする。床面は住居の北西隅が一辺1m、深さ20cmの正方形に掘り込まれているほかは、平坦で整っている。壁内に支柱穴はない。竈は東壁の南側に設置する。壁内に長さ40cmの袖部を造り付けた壁内型を呈し、焚口部の両側に臺を伏せて補強材とする。燃焼部は幅40cm、奥行き50cmで、煙道は壁の中段から掘り込み、壁外20cmまで検出した。壁溝は幅10cm、深さ10cmで、住居の北西隅、南東隅および竈の部分を除いて巡る。竈の周辺部より臺が出土するほか、覆土内より坏が出土する。住居の中央部を中心にして出土する角閃石安山岩は、いずれも住居の埋没過程のもの。他の住居と重複することなく、単独で占地する。 方位 +82° 面積 14.67㎡

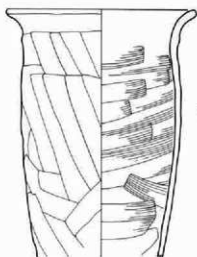




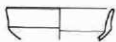
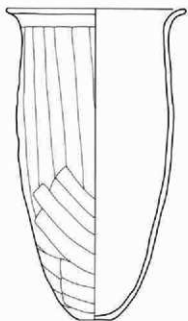
1



2



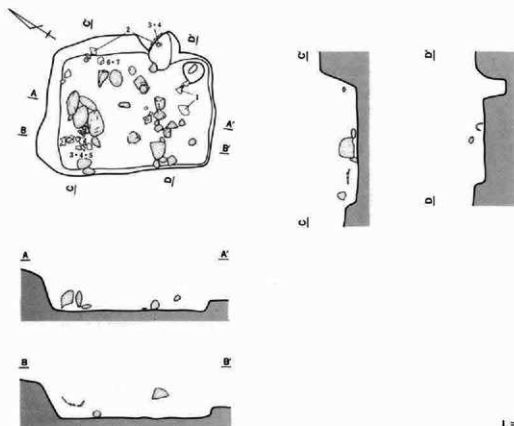
3



5

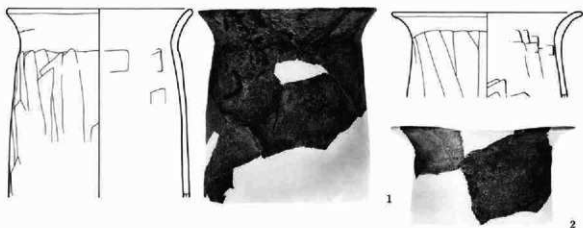


4



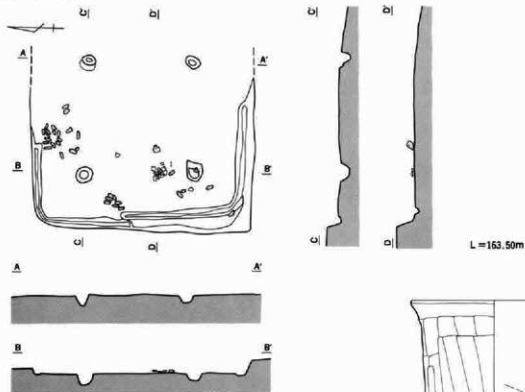
長軸を真北から西側に傾け、短軸3.0m、長軸3.6mの小形横長方形住居。基盤層を20cm掘り込んで床面とする。床面は全体に平坦で良く整っている。壁内に支柱穴はない。竈は東壁の南側に設置する。明確な袖部は検出できないが、短い袖部をもち、燃焼部の半分程を壁外に造り出すものと考えられる。壁への掘り込みから推定する燃焼部は幅40cm、奥行き50cm程で、煙道は検出できない。住居の南東隅に直径40cm、深さ50cmの不整形円形プランで貯蔵穴を配置する。住居の北西隅と竈内より壺、東壁際北側より坏が出土するが、床面に密着したものではなく、多量の角閃石安山岩と同様に、住居の埋設過程で廃棄されたものと考えられる。住居の北半を後世の溝に切られるが、他の住居との重複はない。方位 +57° 面積 9.53㎡



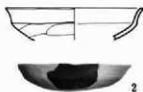
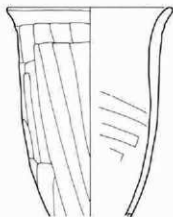


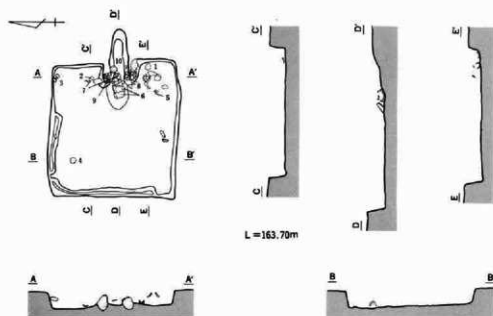
50号住居

遺物観察表 14



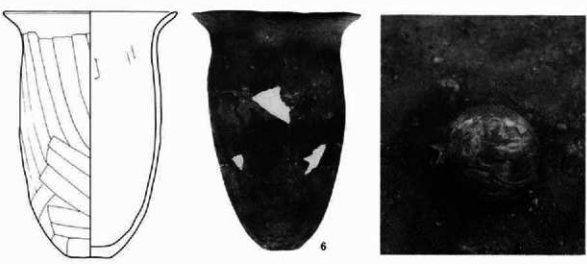
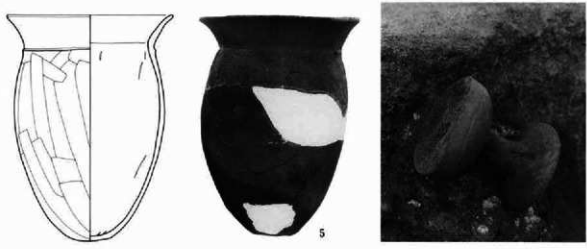
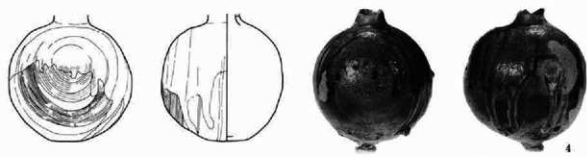
掘り込みが浅いために東壁部が検出できず、住居の外形は確定できない。整然と配置された4個の主柱穴と西壁から推定すると、一辺4.8mの中形正方形住居と推察され、近接する100号住居に住居の形状、規模、軸線の傾きが近似している。基盤層を20cm掘り込んで床面とする。検出した範囲の床面は、平坦で良く整っている。壁内に4個の柱穴を配置する。芯々を結ぶ四角形は、一辺2.4mの整った正方形を示す。竈および貯蔵穴は検出できない。壁溝は幅20cm、深さ10cmで、確認した壁下に巡る。床面に密着して甍、覆土内より坏が出土する。他の住居と重複することなく、調査区域の東側に単独で占地する。方位 +89° 面積 測定不可能

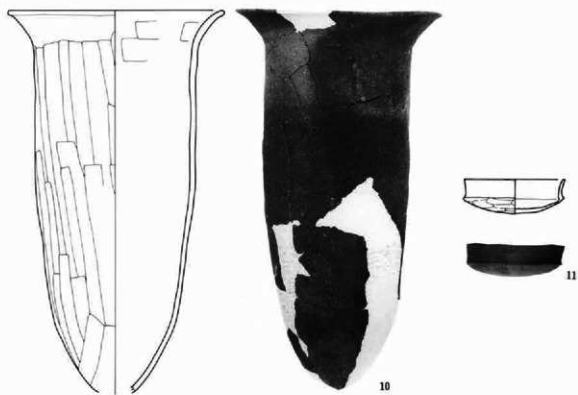
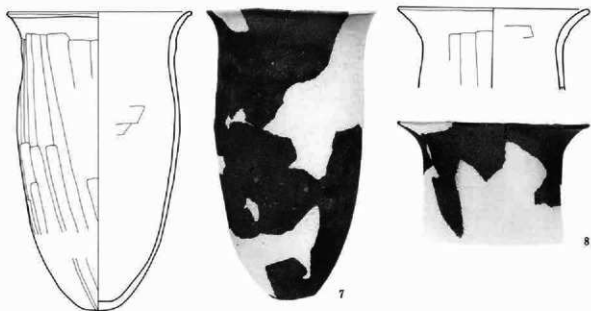




短軸2.8m、長軸2.9mの整った超小形正方形住居。基盤層を30cm掘り込んで床面とする。床面は全体に平坦で良く整っている。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の中央部に設置する。壁内に長さ30cmの袖部を造り付けた壁内型を呈し、燃烧部は幅30cm、奥行き30cmで、煙道は火床の底面から壁外60cmまで緩やかな勾配で立ち上がる。北壁と西壁に幅10cm、深さ5cmで壁溝が走る。竈の周辺部より坏、甕が出土するほか、住居の北東隅より須恵器高坏、北西隅より須恵器長頸壺が出土するが、いずれも床面に密着しておらず、住居の南東隅から出土する一群は、明らかに埋没過程で流れ込んでいる。他の遺構と重複することなく、調査区域の東側で単独で占地している。方位 +91° 面積 7.85㎡

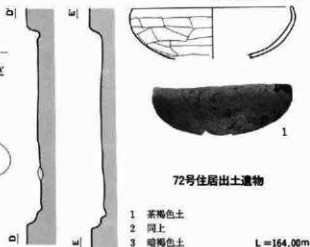
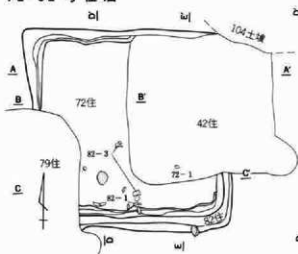






72・82号住居

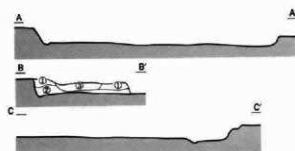
遺物観察表 19・22



72号住居出土遺物

- 1 茶褐色土
2 同上
3 暗褐色土

L=164.00m

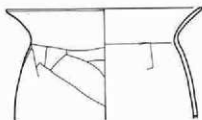


72号住居 住居の南西隅と北東隅が検出できないために外形は確定できないが、一辺4.0mの小形正方形住居と推定。基盤層を30cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に主柱穴はなく、竈も検出できない。南東部より坏が出土。方位+89° 面積15.96㎡(推)



82号住居 72住に平行な南壁と東壁の一部を検出し、一辺4.2mの小形正方形住居と推定する。主柱穴および竈は検出できない。覆土内より坏、壺が出土する。方位+89° 面積 17.93㎡(推)

この2軒は南壁と東壁がそれぞれ平行することから、北壁と西壁を共有する拡張住居と考えられる。重複する42住、79住に切られる土層断面の所見を得、土器型式が示す74住との関係は72住→74住の順。

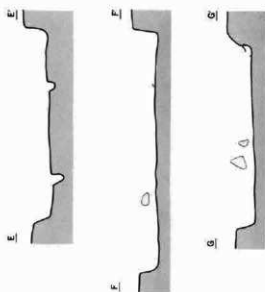
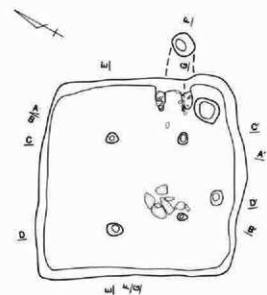


82号住居出土遺物



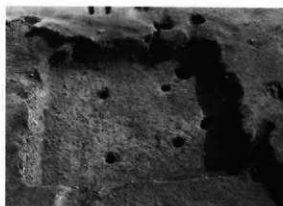
81号住居

遺物観察表 22

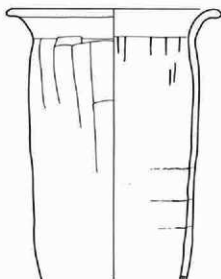


- 1 暗褐色土
- 2 暗茶褐色土
- 3 茶褐色土

L=154.00m



短軸4.2m、長軸4.4mの中形正方形住居。基盤層を60cm掘り込んで床面とする。床面は全体に平坦で良く整っている。住居のほぼ対角線上に4個の柱穴を配置するが、北西に位置する柱穴が対角線上になく、芯々を結ぶと短軸1.4m、長軸1.8mの不整形を示す。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅40cm、奥行き40cmで壁内に造り付け、袖部は石材と藁を芯にして構築する。煙道は壁の中段から切り込み、壁外1.0mまで伸びる。住居の南東隅に直径50cmの不整形円形プランで貯蔵穴を設ける。甕、坏、須恵器盤が出土するが、床面に密着したものはない。78住、80住がこの住居を切って構築する調査所見を得、伴出する土器の型式が示す74住との関係は、81住→74住の順を示す。 方位 +62° 面積 17.42㎡



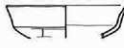
1



2



3



4

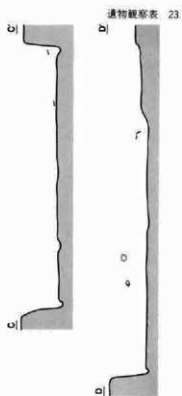
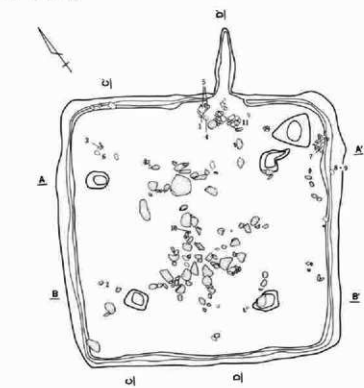


5



6

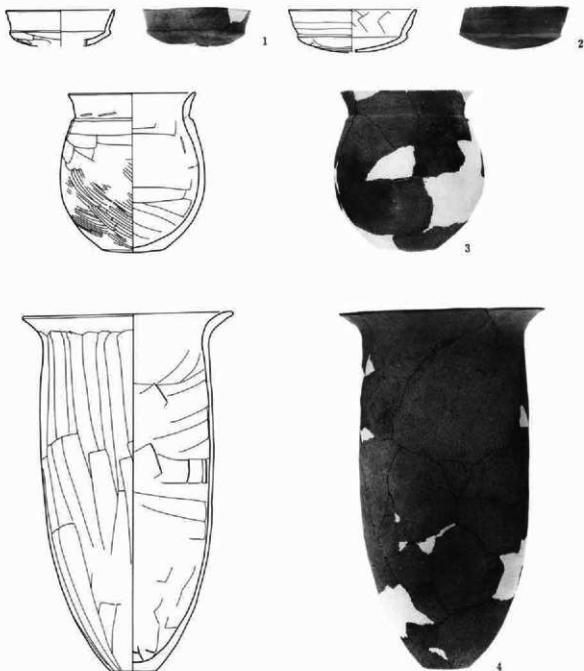
88号住居

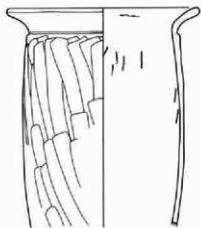


L = 164,30m



短軸5.7m、長軸6.0mの大形正方形住居。基盤層を70cm掘り込んで、平坦な床面を造る。住居のほぼ対角線上に3個の柱穴を検出するが、北西に位置する柱穴は確認できない。竈は北壁の中央部から僅か東側に設置する。明確な袖部は検出できないが、焚口部の両側に直径15cmの穴を掘り込み、ここに石材を埋め込んで補強材とし、この上に2個の長甕を組み合わせて横架する。燃燒部は幅40cm、奥行き60cmの壁内型で、煙道は壁の中段から壁外1.4mまで伸びる。貯蔵穴は住居の北東隅に一辺60cmの不整方形プランで設け、壁溝は幅20cm、深さ10cmで竈の部分を除いて全周する。坏、甕が床面直上より出土するほか、覆土内からも坏、甕、羽口が出土する。重複する84住、87住がこの住居を切って構築する土層断面の所見を得、これは伴出する土器の型式でも矛盾することがない。 方位 +34° 面積 33.26㎡

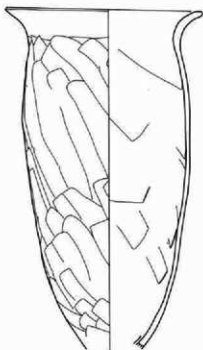




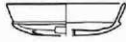
5



6



7



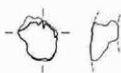
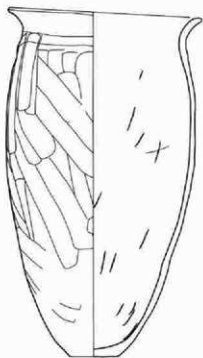
8



9



10



13



14

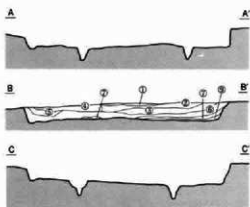
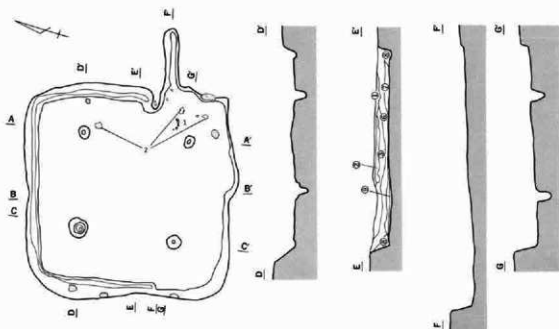


15



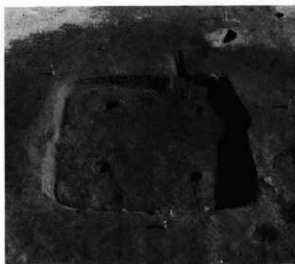
16

27



- 1 黒色土
- 2 黄褐色土
- 3 灰褐色土
- 4 黒褐色土
- 5 黄褐色土
- 6 黒褐色土
- 7 灰褐色土
- 8 黄褐色土
- 9 同上

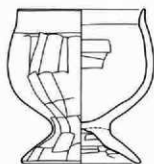
L=164.10m



短軸4.3m、長軸4.4mの中形正方形住居。基盤層を30cm掘り込んで床面とする。床面は住居の南西隅が僅かに低いほかは、平坦で整っている。住居の対角線上に4個の柱穴を配置する。芯々を結ぶと住居の外形と相似形で、一辺2.0m程の正方形を示す。竈は東壁の南側に設置する。壁内に造り付けた長さ40cmの袖部を検出した。向って右側の袖部は確認できないが、焼土の範囲から推定する燃焼部は幅40cm、奥行き40cmの壁内型で、煙道は壁の中段から壁外1.2mまで緩やかな勾配で立ち上がる。北壁と西壁、東壁の一部に幅20cm、深さ5cmの壁溝が巡る。竈手前の床面直上より坏、台付壺が出土するほか、覆土内より壺が出土する。他の住居と重複することなく、単独で占地する。 方位 +73° 面積 19.04㎡



1



2



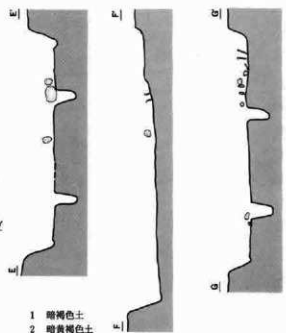
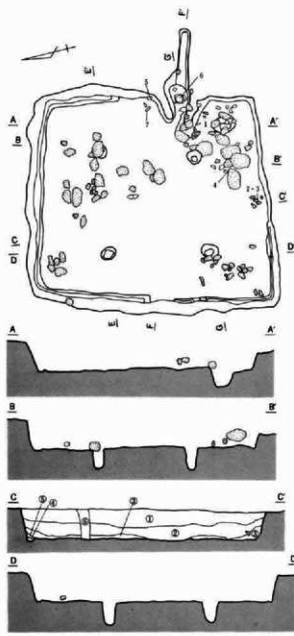
3



4



5

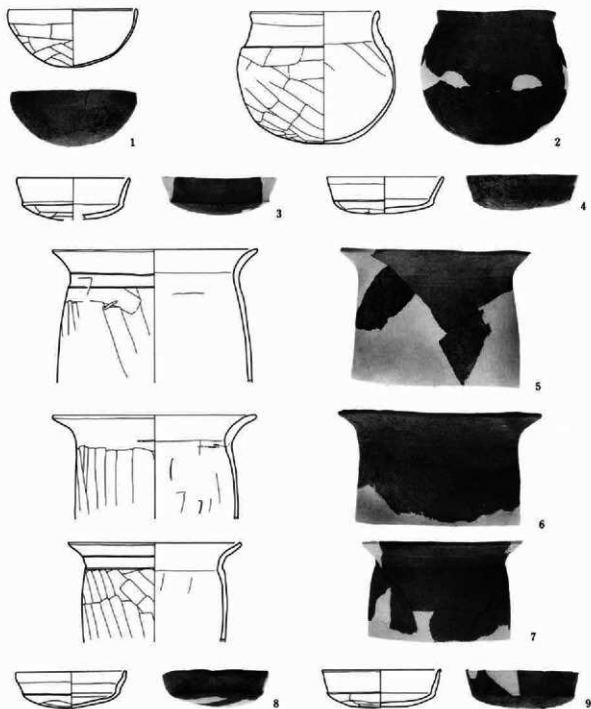


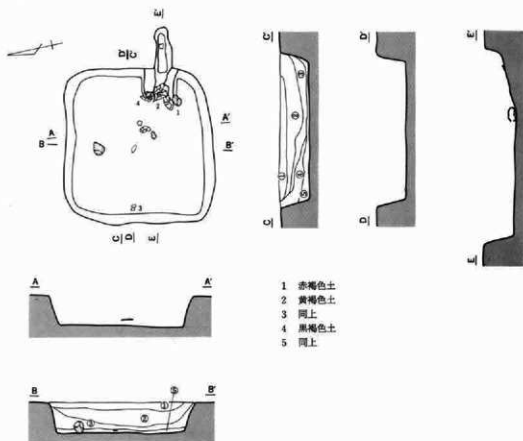
- 1 暗褐色土
- 2 暗黄褐色土
- 3 黒褐色土
- 4 茶褐色土
- 5 同上
- 6 黒褐色土

L = 164.60m



長軸を南北にもち、短軸4.7m、長軸5.2mの中形横長長方形住居。基盤層を60cm掘り込んで平坦な床面を造る。住居のほぼ対角線上に4個の柱穴を配置する。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅40cm、奥行き70cmでその半分を壁外に造り出し、向って右側の袖部は石材を並べて芯にしている。煙道は壁の中段から掘り込み、壁外1.1mまで伸びる。住居の南東隅に直径40cm、深さ40cmの不整円形プランで貯蔵穴を配置し、住居の南東部を除いて幅20cm、深さ5cmの壁溝が巡る。竈内より甕、住居南東部より坏、短頸甕が出土する。住居の東半を中心に出土する角閃石安山岩は、住居の埋没過程のもの。この住居が102住に切られる平面精査の所見を得、8号掘立との新旧関係を判定する資料はない。 方位 +107° 面積 23.35㎡



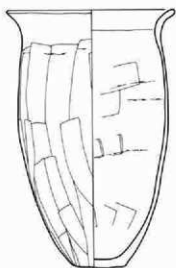


L=164.20m

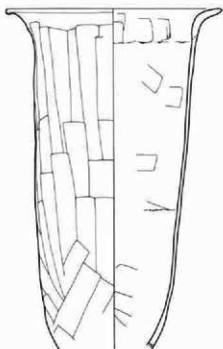
短軸3.2m、長軸3.3mの小形正方形住居。基盤層を60cm掘り込んで床面とする。床面は全体に平坦で良く整っている。壁内に支柱穴はない。竈は東壁の南側に設置する。壁内に造り付けた長さ50cmの袖部を検出した。燃烧部は幅30cm、奥行き40cmの壁内型で、両袖の端部には補強用の石材を据える。焚口部の床面に密着した2個体の竈は、補強用の石材の間に横架されていたものが落下したものと考えられる。煙道は壁の中段から掘り込み、壁外80cmまで緩やかな勾配で伸びて垂直に立ち上がる。竈の補強材の裏のほか、西壁際の中央部の床面直上より坏が出土する。他の住居と重複することなく、単独で占地する。

方位 +98° 面積 9.87㎡





1



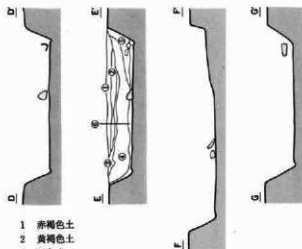
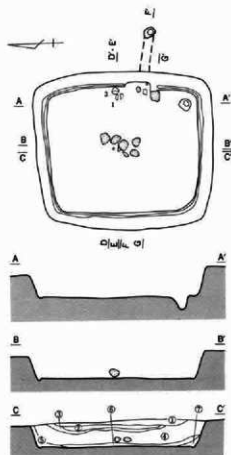
2



3



4



- 1 赤褐色土
- 2 黄褐色土
- 3 黒色土
- 4 黄褐色土
- 5 黒色土
- 6 黄褐色土
- 7 同上

L=164.28m

長軸線をほぼ真北にとり、短軸3.4m、長軸3.8mの小形横長方形住居。基盤層を50cm掘り込んで床面とする。床面は全体に平坦で良く整っている。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。明確な袖部は検出できないが、壁への掘り込みがないことから、燃焼部を壁内に造り付けた壁内型を呈す。燃焼部は幅40cm、奥行き40cmで、焚口部の右側に補強用の石材を検出した。煙道は壁の中段から掘り込み、壁外90cmまで緩やかな勾配で伸びた後、垂直に近い状態で立ち上がる。竈の北側の床面直上より坏、多孔の甗が出土するほか、覆土内より甕、脚付甕が出土する。住居の中央部から出土する角閃石安山岩は出土位置が床面より高く、住居の埋没過程のもの。他の住居と重複することなく、単独で占地する。方位 +91° 面積 11.78㎡

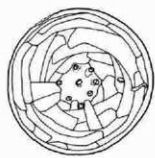
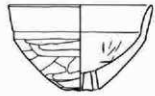




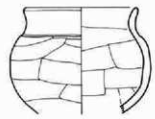
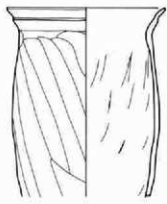
1



2



3



4

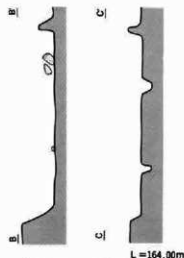
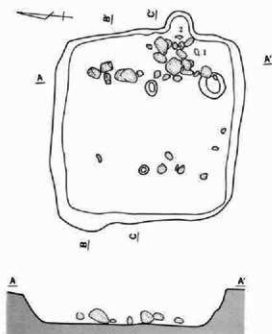


5



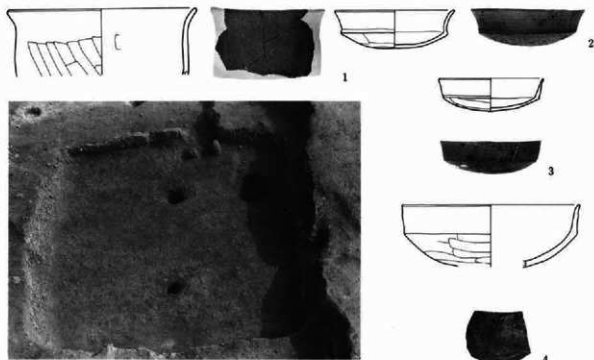
6





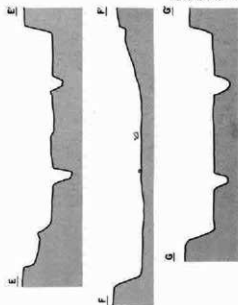
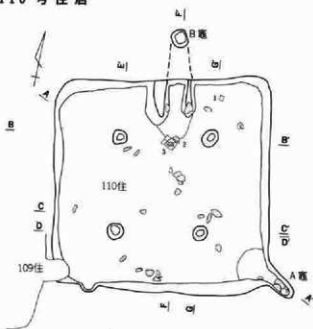
短軸4.0m、長軸4.1mの小形正方形住居。基盤層を60cm掘り込んで床面とする。竈が付設される壁に直交する中軸線上に、整然と2個の柱穴を配置する。

2本柱穴の類例はこの住居を除いて有馬条里遺跡にはない。竈は東壁の南側に設置する。袖部は確認できないが、焚口部の両側に据えた補強用の石材を検出した。貯蔵穴は住居の南東部に直径50cmの円形プランで設ける。竈付近より壺、住居の覆土内より坏が出土する。東壁と西壁の内側1.0mの位置に、各壁に沿って整然と並んだ角閃石安山岩の列を検出するが、いずれも床面より高い位置から出土し、東側の列は竈を塞いでいることから、少なくとも住居使用時のものとは考え難い。71住、111住がこの住居を切って構築する土層断面の所見を得、110住との新旧関係を判定する実証的資料を欠く。方位 +87° 面積 15.39㎡



110号住居

遺物観察表 30



- 1 黒褐色土
- 2 同上
- 3 同上
- 4 黒色土
- 5 黄褐色土
- 6 土城埋土

L=154.00m

短軸4.5m、長軸4.6mの整った中形正方形住居。基盤層を60cm掘り込んで、全体に平坦な床面を造る。住居のほぼ対角線上に4個の柱穴を配置する。芯々を結ぶと一辺2.0mのやや歪んだ正方形を示す。竈は住居の南東隅(A竈)と、北壁の中央(B竈)の2個所に設置する。A竈は袖部が全く検出できず、壁に掘り込んだ幅20cm、長さ60cmの煙道のみを確認した。B竈は燃焼部が幅40cm、奥行50cmの壁内型を呈し、焚口部の同側に石材を据えて補強材とする。煙道は壁の中段から壁外1.0mまで緩やかに立ち上がる。A竈からB竈への造り替えである。竈の東側より坏、南側より壺がそれぞれ床面に密着して出土し、覆土内より高坏、須恵器壺が出土。71住がこの住居を切って構築する土層断面の所見を得、伴出する土器の型式が示す109住との関係は、109住→110住の順を示す。方位 -12° 面積 20.40㎡

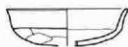




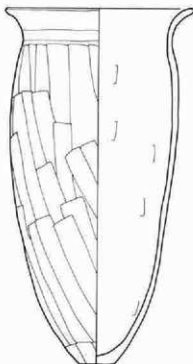
B窟



1



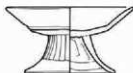
2



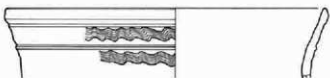
3



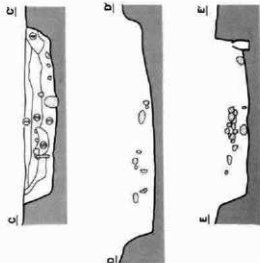
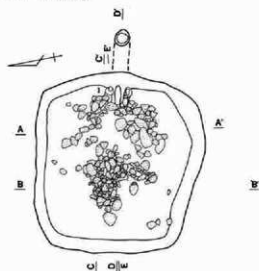
4



5



6



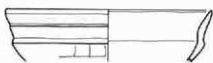
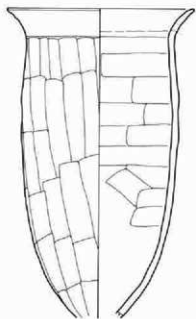
- 1 暗褐色土
- 2 同上
- 3 茶褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 角閃石安山岩集積

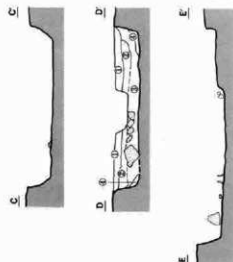
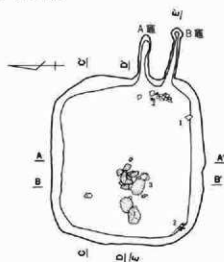
L=164.30m

長軸を東西にもち、短軸3.4m、長軸3.8mの小形縦長長方形住居。基盤層を70cm掘り込んで床面とする。床面は東壁際が壁に向かって緩やかに高くなっているほかは、平坦で良く整っている。壁内に支柱穴はなく、

壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の中央に設置する。壁内に造り付けた長さ30cmの袖部を検出した。燃焼部は幅30cm、奥行き30cmの壁内型を呈し、焚口部の向って左側には長壺を伏せ、右側には柱状の石材を埋め込んでそれぞれ補強材とする。煙道は壁の中段から掘り込み、壁外80cmまで緩やかに伸びて、垂直に近い状態で立ち上がる。壺、環が出土するが、竈の補強材の長壺を除いて床面に密着したものはない。多量に出土する角閃石安山岩は住居の埋没過程のもの。他の住居と重複せず、単独占地。 方位+105° 面積11.88㎡







- 1 暗褐色土
- 2 同上
- 3 黄褐色土
- 4 同上

L=154.30m

長軸を東西にもち、短軸3.3m、長軸3.5mの小形正方形住居。基盤層を50cm掘り込んで床面とする。床面は全体に平坦で良く整っている。壁内に支柱穴はない。竈は東壁の南側(A竈)と、南東隅寄り(B竈)の2箇所に検出した。A竈は袖部が検出できず、壁に掘り込んだ幅20cm、長さ90cmの煙道部を検出した。B竈も明確な袖部は検出できないが、焚口部の補強用と考えられる石材を検出した。この石材から推定すると燃焼部は幅30cm、奥行き40cm程の壁内型を呈し、煙道は壁の中段から掘り込んで壁外1.0mまで伸びる。A竈に袖部が確認できないことから、A竈からB竈への造り替えと考えられる。南壁際の東側より坏、西側より甕、住居中央部より甕がいずれも床面直上より出土する。単独で占地する。方位 +91° 面積 11.49㎡

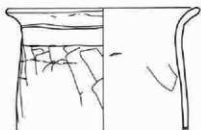




1



2

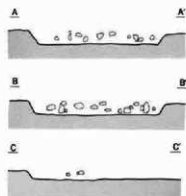
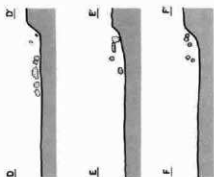
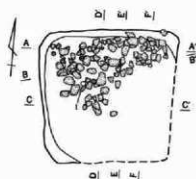


3



4





L = 164.80m

住居の南東部で他の住居と重複するために全形は確認できないが、一辺2.8mの超小形正方形住居と推定する。基盤層を30cm掘り込んで床面とする。床面は全体に平坦で整っている。壁内に主柱穴はなく、壁外にも

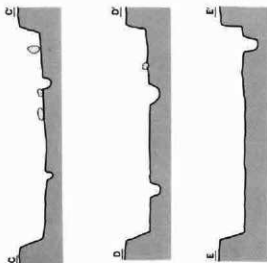
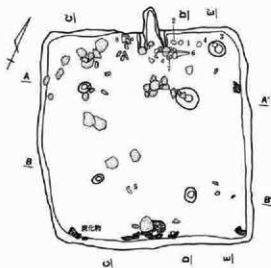
柱穴の痕跡がない。検出した壁に竈の痕跡を示す焼土、煙道の掘り込みなどは一切確認できない。おそらく重複した東壁の南側に設置されていたものと考えられる。住居中央部の西側より脚付礎が出土するが、床面に密着していない。住居の北半を中心にして出土する多量の角閃石安山岩は、出土位置が床面より高く、住居が埋没する過程で入り込んだものと考えられる。重複する141住がこの住居を切って構築する調査所見を得、143住、156住との新旧関係を判定する実証的資料を欠いている。伴出する土器の型式が示す新旧関係は、142住→143住→156住→141住の順を示し、この住居が最も古い。方位 +82° 面積 7.71㎡



1

145号住居

遺物観察表 40

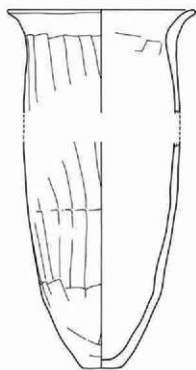
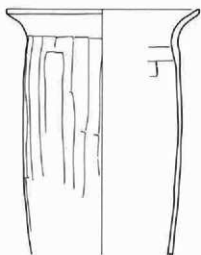


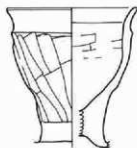
L=164.00m

一辺4.6mの整った中形正方形住居。基盤層を50cm掘り込んで平坦な床面を造る。住居の対角線からずれて4個の柱穴を配置する。芯々を結ぶ四角形は、一辺2.0mの平行四辺形状を示す。

竈は北壁の中央に設置する。壁内に造り付けた長さ40cmの袖部を検出した。燃焼部は幅40cm、奥行き40cmの壁内型を呈し、焚口部の両側に補強用の石材を埋め込んでいる。煙道は壁の中段から20cmの幅で掘り込むが、土城と重複するために煙出し部が確認できない。貯蔵穴は住居の北東隅に直径30cm、深さ30cmの円形プランで設ける。竈東側の床面に密着して坏、竈周辺部の床面直上より壺、脚付甕が出土する。西壁部で118住と重複する。118住がこの住居を切って構築する平面精査の所見を得、これはそれぞれの住居に伴出する土器の型式が示す新旧関係とも矛盾しない。 方位 -27° 面積 20.16㎡







8



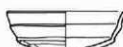
9



10

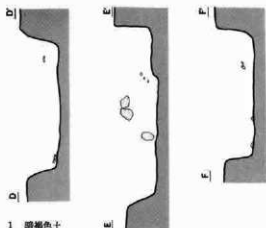
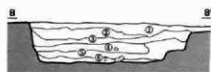
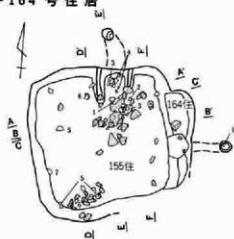


11



12





- 1 暗褐色土
- 2 同上
- 3 暗茶褐色土
- 4 暗灰褐色土
- 5 茶褐色土
- 6 暗灰色土

L=164.80m

155号住居 短軸3.0m、長軸3.1mの超小形正方形住居。基盤層を80cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に主柱穴はない。竈は北壁の中央に設置する。燃燒部は幅40cm、奥行き50cmの壁内型を呈し、焚口部の両側に補強用の石材を埋め込んでいる。煙道は壁の中段から掘り込んで、壁外1.0mまで水平に伸びた後、垂直に近い状態で立ち上がる。竈周辺部の床面直上より壁、覆土内より坏が出土する。重複する154住、164住との新旧関係を判定する実証的資料を欠くが、伴出する土器の型式は155住→154住の順を示す。

方位 -14° 面積 9.06㎡(推)

164号住居 住居の東壁部以外は確認できず、外形は確定できない。東壁の南側に設置する竈は壁内型の燃燒部で火床に石製の支脚を置き、幅20cmの煙道は壁外80cmまで伸びる。伴出遺物はない。 方位 +90°

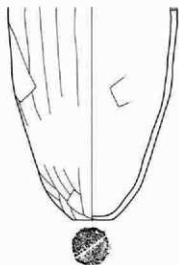
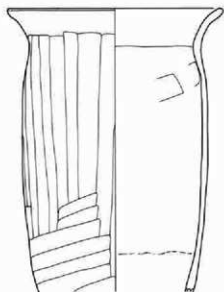




155号住居竈



164号住居竈

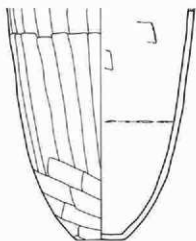


1

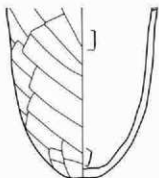


2

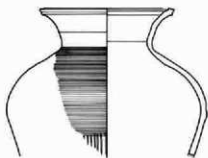
155号住居出土遺物



3



4



5



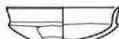
6



7



8

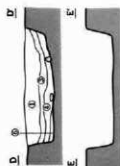


9



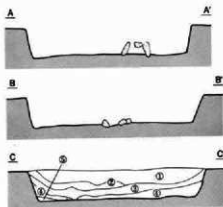
10

155号住居出土遺物

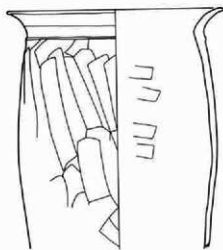


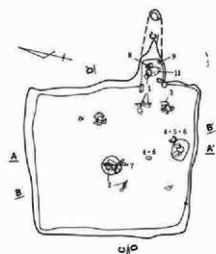
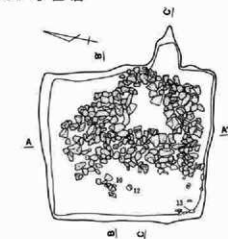
- 1 黒色土
- 2 黄色土
- 3 同上
- 4 淡黒褐色土
- 5 黄黒色土
- 6 黒色土

L=164.90m



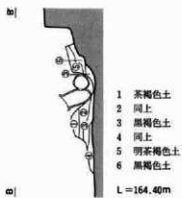
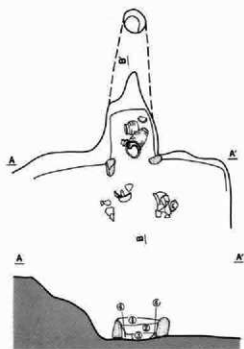
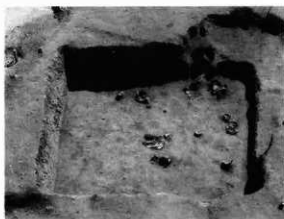
長軸を南北にもつ、短軸2.6m、長軸3.8mの小形横長方形住居。基盤層を60cm掘り込んで床面とする。床面は全体に平坦で良く整っている。壁内に主柱穴はなく、壁外にもその痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅30cm、奥行き40cmで壁内に造り付け、煙道は壁の中段から掘り込んで、壁外80cmまで伸びる。焚口部の両側に補強用の石材を埋め込み、手前に落下した石材は焚口部に横架されていたものと考えられる。住居北西部の床面直上より壘、覆土内より釘が出土する。他の住居と重複することなく、調査区域の西側に単独で占地する。方位 +83° 面積 9.12㎡

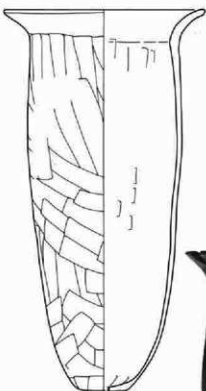
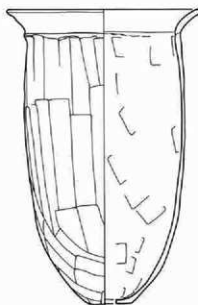




L=164.40m

長軸を南北にもつ、短軸3.3m、長軸3.6mの小形正方形住居。基盤層を40cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に支柱穴はない。竈は東壁の南側に設置する。燃烧部は幅40cm、奥行き50cmで壁外に造り出す壁外型で、焚口部の両側に柱状の石材を据えて補強材とする。煙道は奥壁の中段から掘り込んで、壁外80cmまで緩やかに伸びる。火床の向って左側に石製支脚を置く。燃烧部の向って右側に、大型の長壺(11)の中に小型の長壺(1)が組み込まれた状態で出土し、その奥には小型の壺(8)も出土する。長壺については、組み込まれた1の長壺の底部が三角形に割れていることから、長壺と転用の甕として使用状態を示す可能性がある。南壁際中央部の床面直上より坏が出土する。覆土内より出土する多量の角閃石安山岩は住居の埋没過程のものだが、一部に空白部が存在して単なる廃棄ではなさそうだ。住居の南東部で128住と、北西部で131住とそれぞれ重複する。この住居が128住、131住に切られる平面精査の所見を得た。方位 +75° 面積 11.33㎡

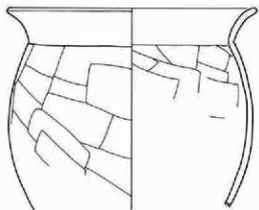




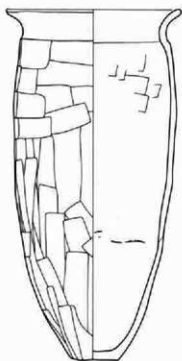
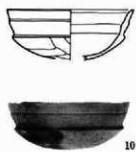
1

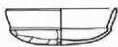


2

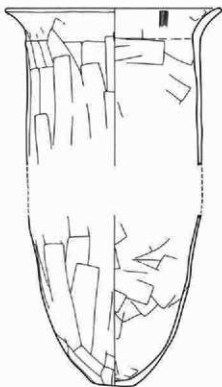


3





12

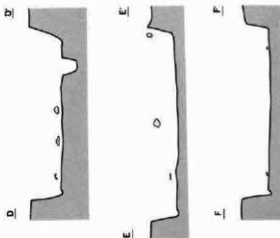
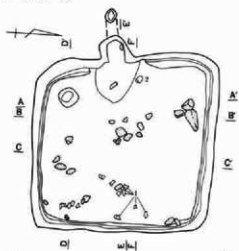


13



162号住居

遺物観察表 44



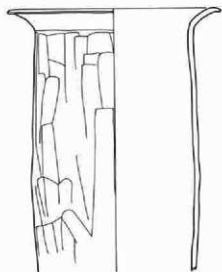
- 1 暗褐色土
- 2 黒褐色土
- 3 茶褐色土
- 4 同上
- 5 暗赤褐色土

L = 164.00m



短軸3.7m、長軸3.8mの小形正方形住居。基盤層を40cm掘り込んで床面とする。床面は全体に平坦で良く整っている。壁内に支柱穴はない。竈は西壁の南側に設置する。燃焼部は幅40cm、奥行き40cmで壁外に造り出す壁外型を呈し、煙道は奥壁の中段から壁外60cmまで伸びる。住居の南西隅に直径40cm、深さ30cmの円形プランで貯蔵穴を設ける。壁溝は幅10cm、深さ10cmで、竈の部分を除いて全周する。西壁際中央部より坏、東壁際北側より甕が、それぞれ床面直上より出土する。住居の北西部で96住と重複する。この住居が96住に切られる調査所見を得、これはそれぞれの住居に伴出する土器の型式でも矛盾がない。

方位 -93° 面積 13.72㎡



1



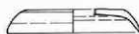
2



3

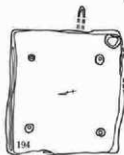


4



5

7世紀代の竪穴住居分布



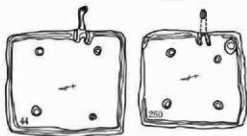
超大形正方形



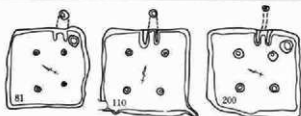
超大形縦長長方形



大形正方形

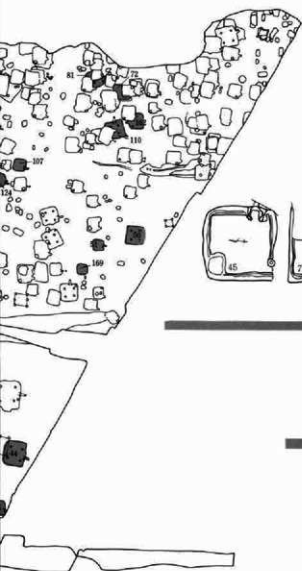


大形横長長方形

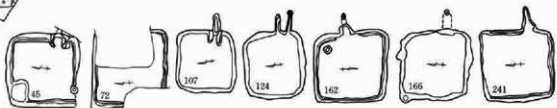


中形正方形





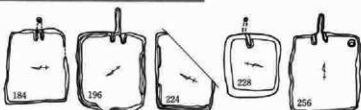
中形横長長方形



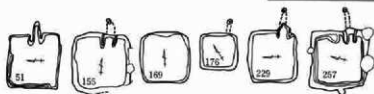
小形正方形



小形横長長方形



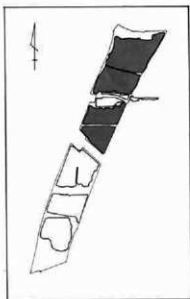
小形縦長長方形



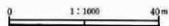
超小形正方形



超小形横長長方形

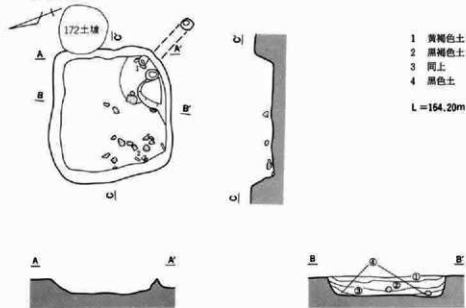


挿図 6 7世紀代の竪穴住居分布図



163号住居

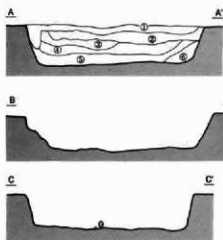
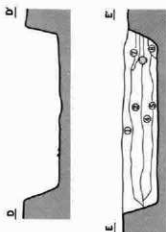
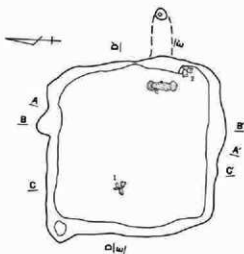
遺物観察表 45



- 1 黄褐色土
 - 2 黒褐色土
 - 3 同上
 - 4 黒色土
- L=164.20m

長軸を東西にもち、短軸2.5m、長軸2.8mの超小形正方形住居。基盤層を40cm掘り込んで床面とする。床面は全体に小さな起伏が多く、平坦ではない。壁内に主柱穴はない。竈は住居の南東隅に設置する。袖部は検出できないが壁に掘り込んだ煙道の状況から、燃焼部を壁内に造り付ける壁内型と推定される。煙道は壁の中段から掘り込んで、壁外1.0mまで伸びる。東壁際の南側より坏、西壁際の南側より甕が、それぞれ床面直上より出土する。住居の南半より出土する角閃石安山岩は、住居の埋没過程のもの。他の住居と重複することなく、単独で占地する。 方位 +107° 面積 6.77㎡





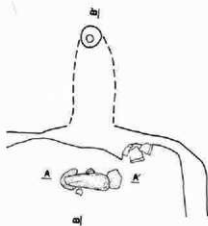
- 1 黒褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 同上
- 4 同上
- 5 同上
- 6 同上
- 7 黒褐色土
- 8 暗褐色土

L=164.40m

短軸3.7m、長軸3.8mの小形正方形住居。基盤層を70cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に支柱穴はない。竈は東壁の南側に設置する。袖部は検出できないが、焚口部に据えた補強用の石材を検出した。燃烧部は幅30cm、奥行き40cmの壁内型を呈し、焚口部の両側に補強用の石材を埋め込む。さらにこの石材の上に、焚口部の天井部を補強する石材を横架している。火床手前の中央部に置かれた石材は、支脚としては位置が焚口部に近過ぎて機能しない。煙道は火床の底面から水平に1.0m伸びて、垂直に近い状態で立ち上がる。住居中央部西側の床面に密着して坏、住居南東隅の床面直上より甕が出土するほか、覆土内より坏が出土する。他の住居と重複することなく、単独で占地する。

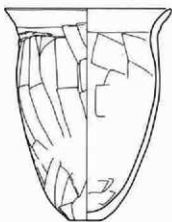
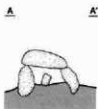
方位 +89° 面積 13.18㎡

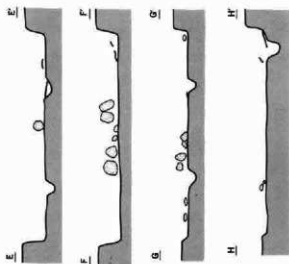
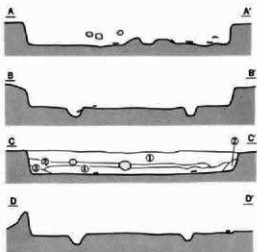
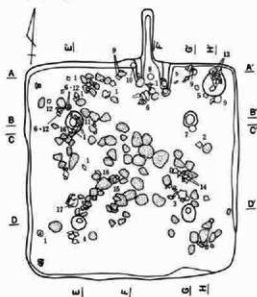




- 1 暗褐色土
- 2 同上
- 3 暗黄褐色砂質土
- 4 暗黄褐色土
- 5 粒土
- 6 深黑色土

L=164.20m



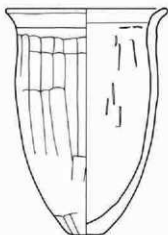
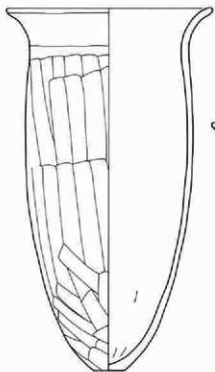


- 1 暗褐色土
- 2 黒褐色土
- 3 暗茶色土
- 4 黒褐色土

L=164.10m

短軸4.5m、長軸4.6mの整った中形正方形住居。基盤層を40cm掘り込んで平坦な床面を造る。住居のほぼ対角線上に4個の柱穴を配置する。芯々を結ぶと短軸2.0m、長軸2.4mの整った長方形を示す。竈は北壁の中央から僅か東側に設置する。燃烧部は幅40cm、奥行き60cmの壁内型を呈し、向って左側の袖部に1個、右側の袖部に2個の石材を埋め込んで、袖部の補強材とする。煙道は火床の底面から壁外1.0mまで、緩やかな勾配で立ち上がる。住居の北東隅に直径50cm、深さ30cmの貯蔵穴を配置する。多量の坏、甕の破片が床面直上より出土し、角閃石安山岩は覆土のもの。西壁部で123住と重複する。この住居が123住に切られる平面精査の所見を得、これはそれぞれの住居に伴出する土器の型式でも矛盾しない。方位 -4° 面積 20.40㎡

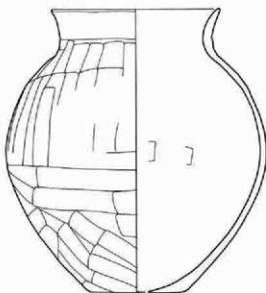




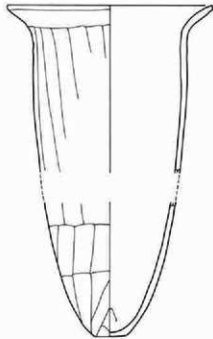
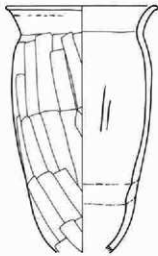
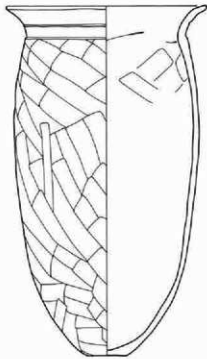
1

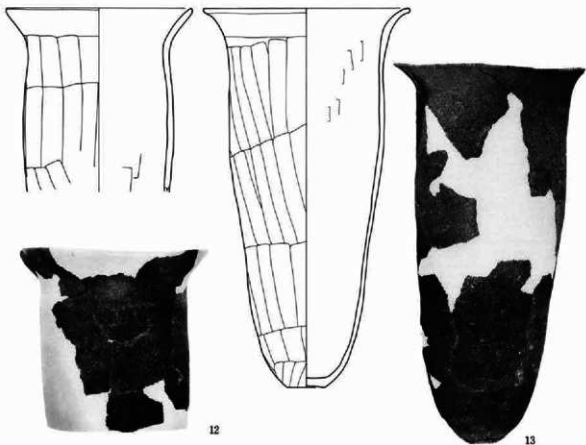
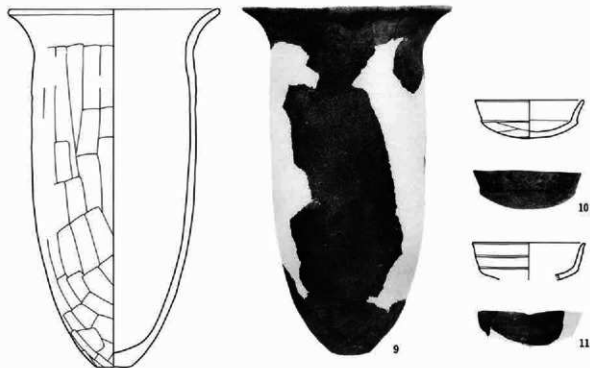


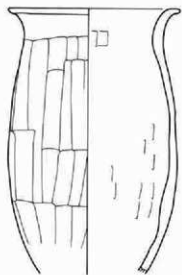
2



3







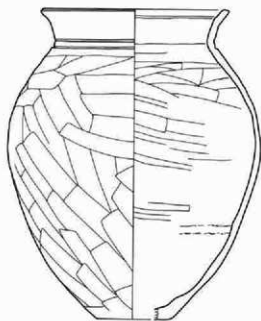
14



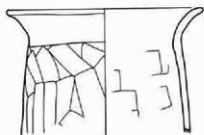
15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27

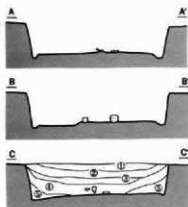
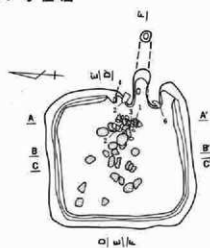


28

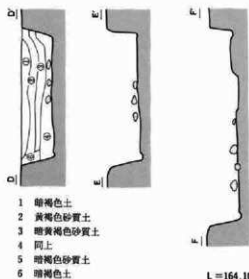


29





1

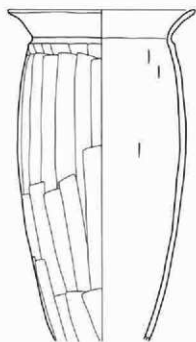
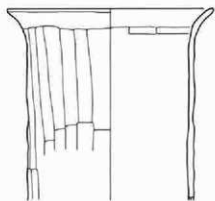


- 1 暗褐色土
- 2 黄褐色砂質土
- 3 暗黄褐色砂質土
- 4 同上
- 5 暗褐色砂質土
- 6 暗褐色土

L=164.10m

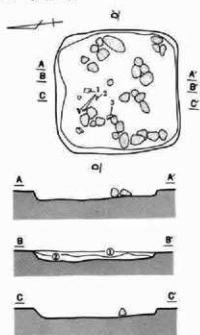
短軸2.9m、長軸3.1mの超小形正方形住居。基盤層を60cm掘り込んで床面とする。床面は全体に平坦で良く整っている。東壁の南側に竈を設置する。壁内に造り付けた長さ40cmの袖部を検出した。燃焼部は幅30cm、奥行き70cmで、その半分を壁外に造り出す。焚口部の両側に長梁を伏せて補強材とし、火床の向って左側に石製支脚を置く。煙道は火床の底面から掘り込んで、奥壁の外側80cmまで水平に伸びた後、垂直に近い状態で立ち上がる。壁溝は幅10cm、深さ5cmで、竈の部分を除いてほぼ全周する。竈の補強材の礎のほか、竈手前の床面直上より礎、覆土内より坏、高坏が出土する。住居中央部の角閃石安山岩は、住居の埋没過程のもの。他の住居と重複することなく、単独占地。方位 +83° 面積 8.80㎡





169号住居

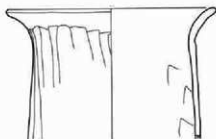
遺物観察表 47



L=164.00m

- 1 暗褐色土
- 2 黒褐色土

短軸2.5m、長軸2.6mの超小形正方形住居。111住、229住に住居の形状、規模、軸線の傾きが極めて近似し、111住は年代が不明だが、229住とは年代も近い。基盤層を10cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。掘り込みが浅いため電は検出できない。住居の形状、規模、軸線の傾きが近似する111住、229住はいずれも東壁に竈を設置する。住居中央北側の床面直上より竈、覆土内より坏が出土する。多量に出土する角閃石安山岩は、出土レベルが床面より高い。他の住居と重複することなく、単独で占地する。方位+96° 面積6.50㎡



1



2

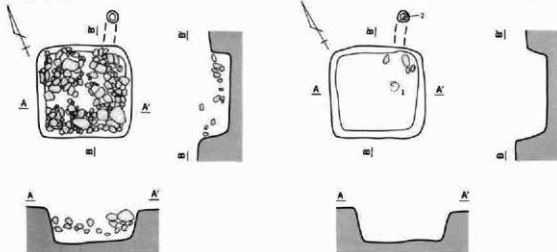


3



176号住居

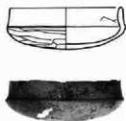
遺物観察表 49



L=164.50m



一辺2.0mの整った超小形正方形住居。基盤層を60cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に主柱穴はない。北壁の東側に設置する竈は、燃焼部が幅40cm、奥行き40cmの壁外型で、袖部に補強用の石材を据える。煙道は壁外80cmまで伸びて、垂直に立ち上がる。住居中央部の床面直上より坏、覆土内より壺が出土する。多量に出土する角閃石安山岩は、住居の埋没過程のもの。重複する129住に切られる平面精査の所見を得、伴出する土器の型式にも矛盾がない。 方位+22° 面積3.84㎡

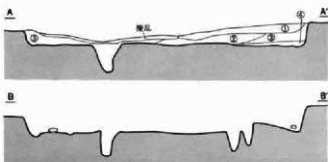
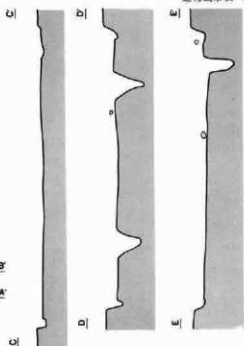


2



181号住居

遺物観察表 50

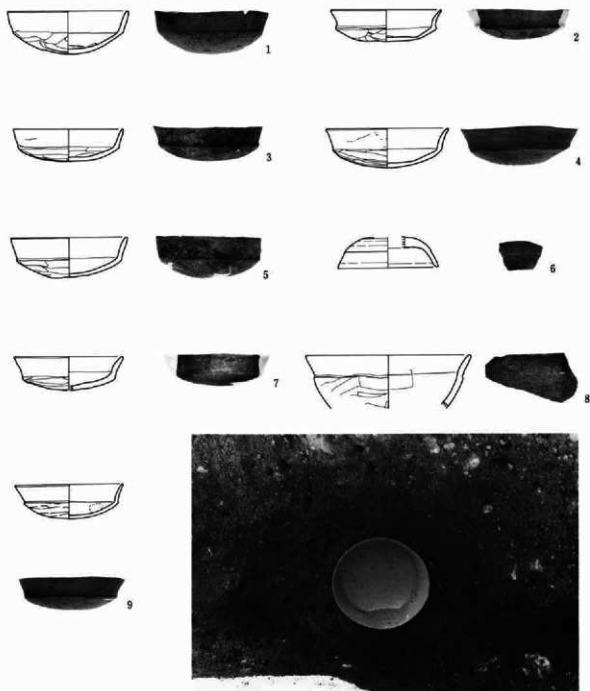


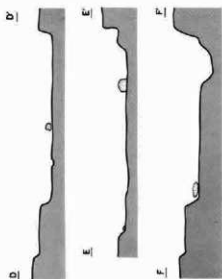
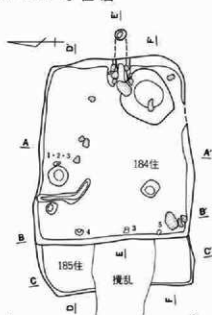
- 1 茶褐色土
- 2 同上
- 3 暗褐色土
- 4 明褐色土

L=164.70m

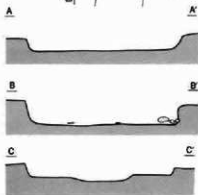


短軸5.9m、長軸6.1mの大形正方形住居。基盤層を30cm掘り込んで床面とする。床面は住居の北東隅が掘り込まれているほかは、平坦で良く整っている。住居のほぼ対角線上に4個の柱穴を配置する。芯々を結ぶと短軸3.0m、長軸3.4mの長方形を示し、住居の外形と相似形ではない。竈は東壁の南側に設置するが、後世の溝に削平されて袖部は検出できない。壁に掘り込んだ煙道の痕跡から、燃焼部を壁内に造り付ける壁内型と推定される。貯蔵穴は住居の南東隅に直径30cm、深さ50cmの不整形円プランで設け、壁溝は幅20cm、深さ10cmで全周する。南壁際中央部の床面直上より坏が出土するほか、覆土内より鉢、須恵器坏蓋が出土する。他の住居と重複することなく、単独で占地する。方位 +71° 面積 34.94㎡



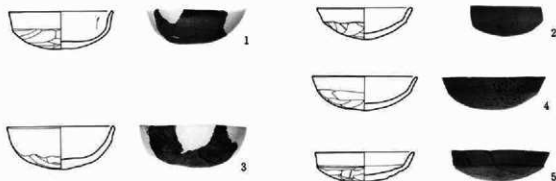


L=164.40m



184号住居 長軸を東西にもつ短軸3.2m、長軸3.8mの小形縦長長方形住居。基盤層を30cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に主柱穴はない。東壁の中央部に設置する竈は、燃焼部が幅30cm、奥行き40cmの壁内型を呈し、煙道は壁外60cmまで伸びる。住居の南東隅に直径1.0m、深さ20cmの貯蔵穴様ピットを検出した。北壁際の床面直上より坏が出土する。152住がこの住居を切る土層断面の所見を得、185住との新旧関係を判定する資料を欠く。 方位 +89° 面積 12.16㎡

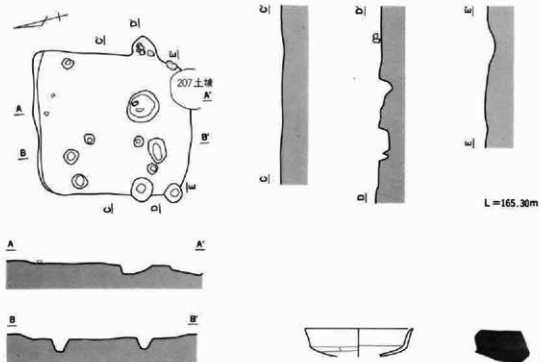
185号住居 西壁部以外は検出できず、住居の外形は確定できない。伴出遺物はない。 方位 +85°



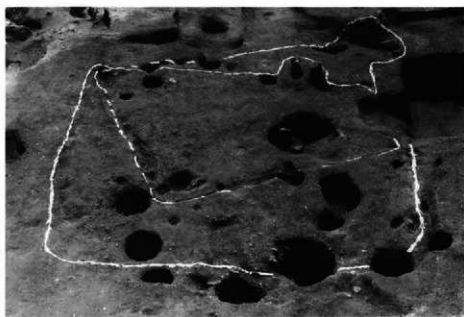
184号住居出土遺物

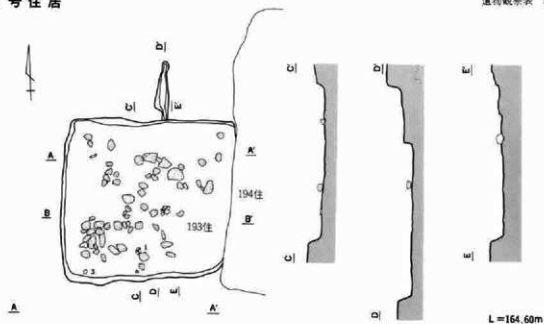
191号住居

遺物観察表 52



長軸を南北にもつ、短軸3.0m、長軸3.3mの小形横長方形住居。基盤層を5cm掘り込んで構築面とするが、掘り込みが浅いために生活面は確認できない。壁内に支柱穴はなく、住居の西半部で検出したピットもこの住居に伴うか否かが不明である。東壁の南側に竈を設置する。掘り込みが浅いために燃焼部は明確に確認できないが、燃焼部を壁外に造り出す壁外型と推定される。覆土内より坏が出土する。重複する192住、211住との新旧関係を判定する実証的な資料を欠くが、それぞれの住居に伴出する土器の型式は、191住→192住→211住の順を示す。方位 +104° 面積 9.38㎡





短軸3.4m、長軸3.7mの小形正方形住居。基盤層を15cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に主柱穴はない。竈は北壁の中央部に設置する。掘り込みが浅いために袖部は検出できないが、燃焼部を壁内に造り付ける壁内型と推定される。南壁際の床面直上より坏が出土する。多量に出土する角閃石安山岩は床面に密着するが、使用状態を示すとは考え難い。重複する194住との新旧関係を判定する実証的資料を欠くが、伴出する土器の型式は193住→194住の順を示す。方位 +4° 面積 12.15㎡



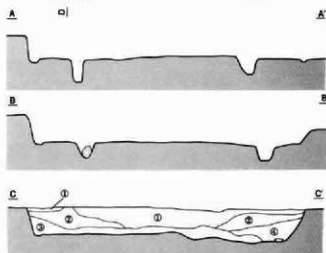
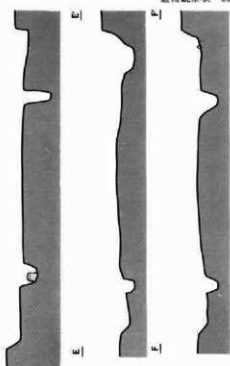
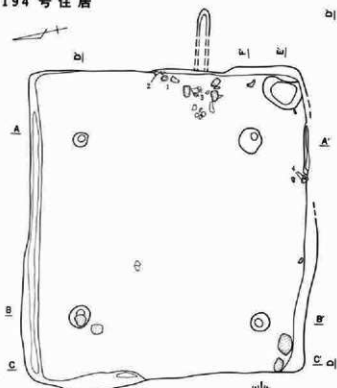
1



3

194号住居

遺物観察表 53

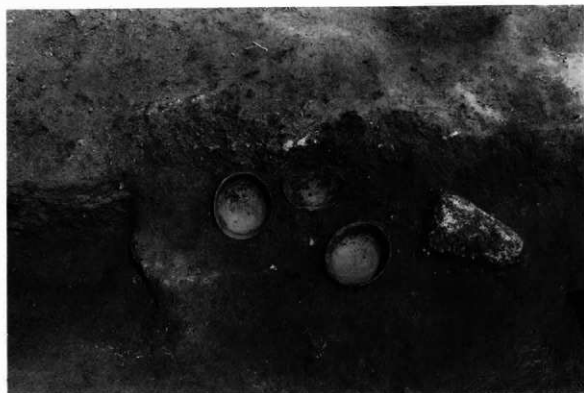
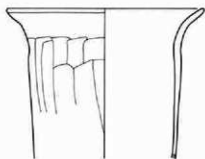


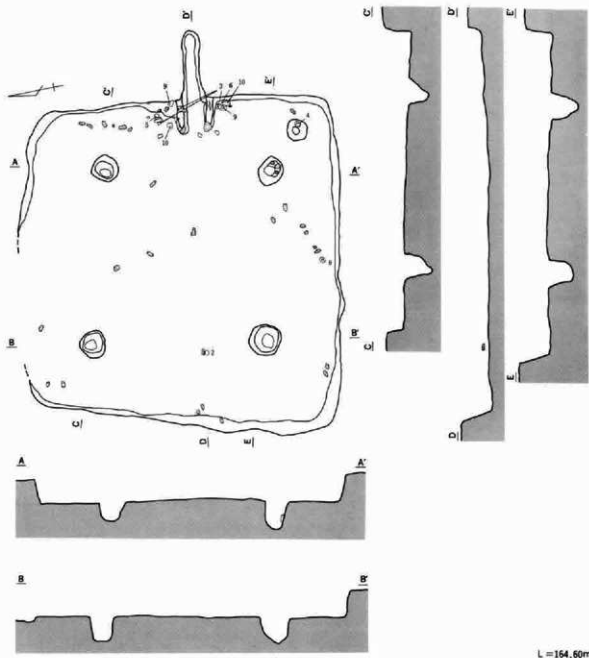
- 1 暗灰褐色土
- 2 暗茶褐色土
- 3 暗褐色土
- 4 赤褐色土

L=154.70m

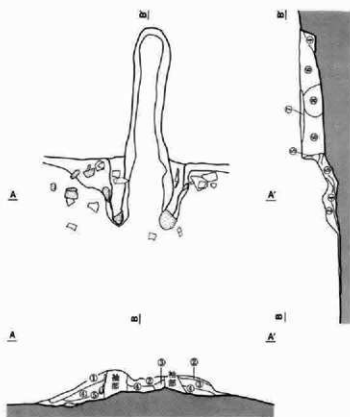
短軸6.2m、長軸6.5mの超大形正方形住居。基盤層を60cm掘り込んで平坦な床面を造る。住居のほぼ対角線上に4個の柱穴を配置する。芯々を結ぶと一辺3.8mの正方形を示す。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅50cm、奥行き50cmの壁内型を呈し、袖部には補強用の石材を据えている。煙道は壁外1.3mまで伸びる。貯蔵穴は住居の南東隅に直径70cm、深さ30cmの不整形円形プランで設ける。東壁際中央部の床面直上より坏が出土するほか、竈内より甕、須恵器坏蓋が出土する。西壁部で193住と、南壁部で195住とそれぞれ重複し、新旧関係を判定する実証的資料を欠いている。伴出する土器の型式は193住・195住→194住の順を示す。方位 +103° 面積 39.80㎡





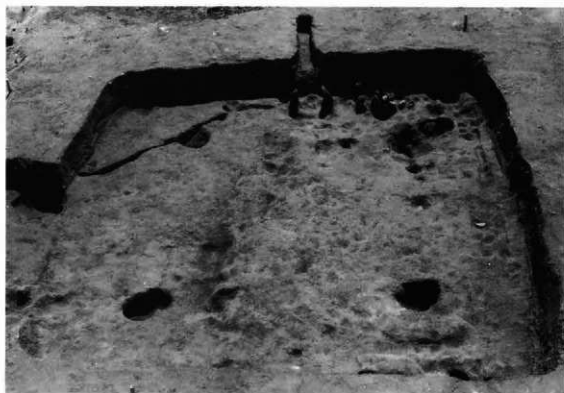


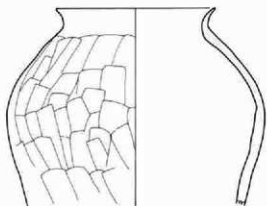
一辺6.9mの超大形正方形住居。北壁に対して南壁が長い不整形を示す。基盤層を50cm掘り込んで床面とする。床面は全体に平坦で良く整っている。住居のほぼ対角線上に4個の柱穴を配置する。芯々を結ぶと一辺3.6mの整った正方形を示し、住居の外形と相似形ではない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅40cm、奥行き50cmの壁内型を呈し、焚口部の両側に補強用の石材を埋め込む。煙道は壁の中段から掘り込み、幅30cmで壁外1.2mまで伸びる。貯蔵穴は住居の南東隅に直径40cmの円形プランで設ける。竈周辺部より坏、甕、住居西側の床面直上より須惠器坏が出土する。北壁部で194住と重複する。新旧関係を判定する実証的資料を欠くが、伴出する土器の型式は195住→194住の順を示す。方位 +101° 面積 45.70m² (推定)



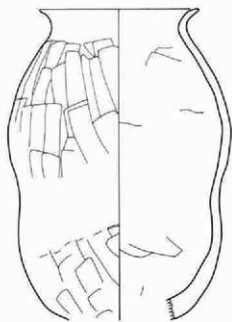
- 1 黒色灰炭化物の純層
- 2 褐色土
- 3 同上
- 4 同上
- 5 黄褐色土
- 6 同上
- 7 同上
- 8 同上

L=164.50m





4



1



2



3



5



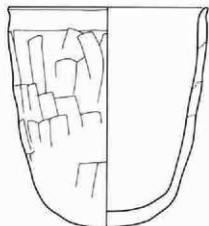
6



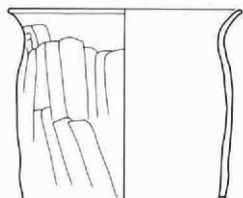
7



8

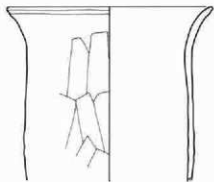


9

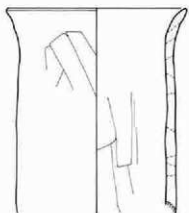


10





11



12



13



14

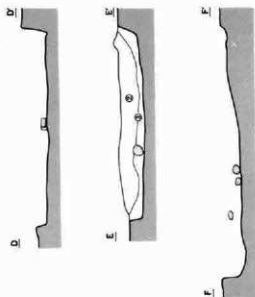
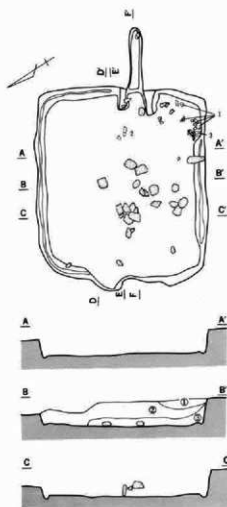


15



16





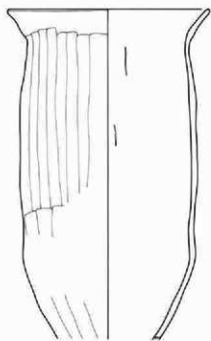
- 1 暗褐色土
- 2 茶褐色土
- 3 褐色土

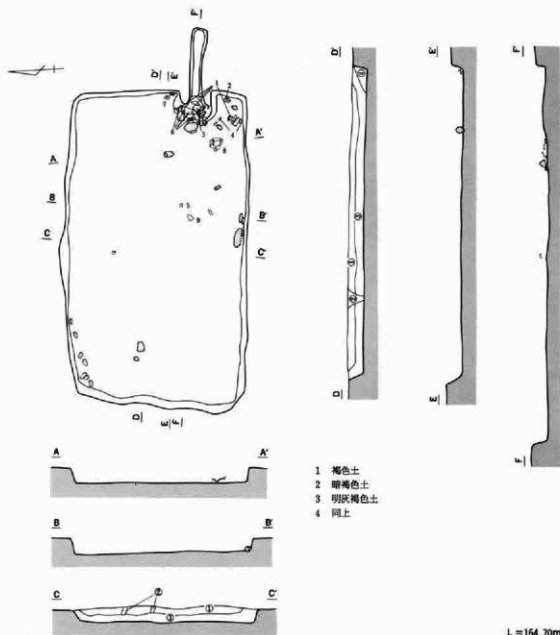
L=164.40m

短軸3.6m、長軸4.1mで、東西に長軸をもつ小形縦長方形住居。基盤層を50cm掘り込んで床面とする。床面は全体に平坦で良く整っている。壁内に主柱穴はなく、壁外にもその痕跡がない。東壁の中央から僅か南側に竈を設置する。壁内に造り付けた長さ40cmの袖部を検出した。燃焼部は幅40cm、奥行き40cmの壁内型を呈し、煙道は火床の底面から緩やかな勾配で立ち上がり、壁外1.2mまで伸びる。焚口部の両端に、補強用の石材を埋め込んだ穴の痕跡を検出した。壁溝は幅15cm、深さ5cmで、西壁下と住居南東隅を除いて巡る。竈の手前より坏、住居の南東隅より甕が、それぞれ床面直上より出土する。他の住居と重複することなく単独で占地するが、195住に極めて近接して同時存在は考え難い。

方位 +121° 面積 14.41㎡

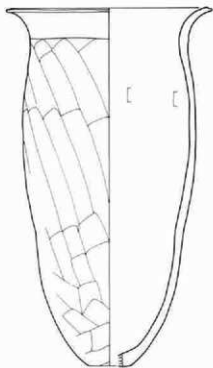


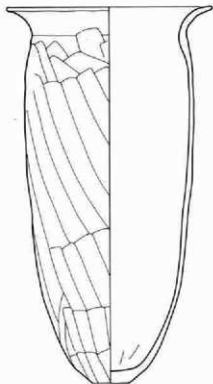




長軸を東西にもち、短軸4.0m、長軸6.7mの超大形縦長長方形住居。基盤層を30cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。東壁の南側に竈を設置する。壁内に造り付けた長さ50cmの袖部を検出した。燃焼部は幅40cm、奥行き50cmの壁内型を呈し、煙道は壁の中段から掘り込んで、壁外1.4mまで水平に伸びた後、垂直に近い状態で立ち上がる。焚口部の両側に補強用の石材を据え、この間に組み合わせた2個の長壘を構築して焚口部を構築する。補強材にした長壘のほか、竈の周辺部より坏、竈の西側より須恵器坏蓋が、それぞれ床面直上より出土する。他の住居と重複することなく単独で占地するが、近接する195住との間隔は1m程である。

方位 +95° 面積 25.76㎡

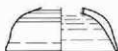




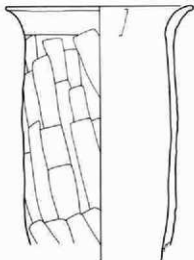
3



4



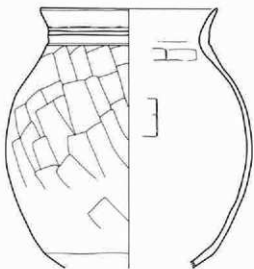
5



6



7



8



9



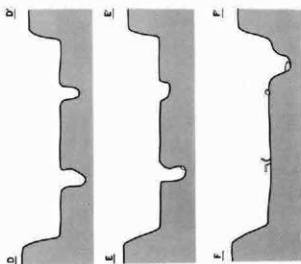
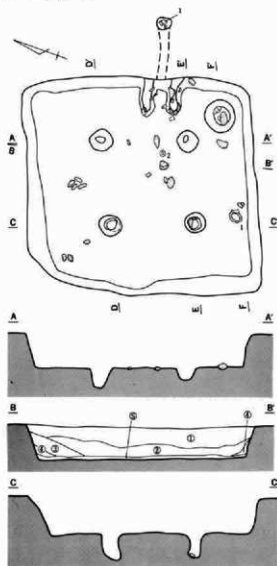
10



11



12

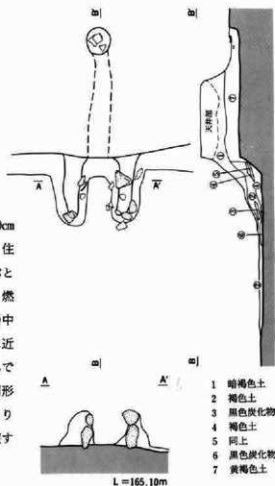


- 1 暗褐色土
- 2 茶灰褐色土
- 3 同上
- 4 黒褐色土
- 5 暗茶褐色土

L = 165.30m

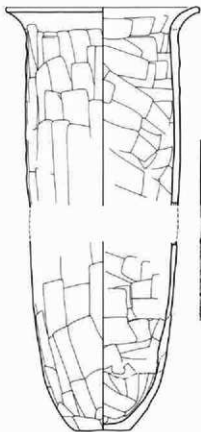
短軸4.6m、長軸4.9mの中形正方形住居。基盤層を60cm掘り込んで床面とする。床面は平坦で良く整っている。住居のほぼ対角線上に4個の柱穴を配置する。芯々を結びと一辺1.8mの正方形を示す。竈は東壁の南側に設置する。燃烧部は幅30cm、奥行き50cmの壁内型を呈し、煙道は壁の中段から掘り込んで壁外1.3mまで水平に伸びた後、垂直に近い状態で立ち上がる。袖部の基部に、石材を2段に積んで補強材とする。住居の南東隅に直径60cm、深さ40cmの円形プランで貯蔵穴を設ける。南壁際西側より竈、竈西側より環が、それぞれ床面直上より出土する。他の住居と重複することなく、単独で占地する。

方位 +67° 面積 21.84㎡



- 1 暗褐色土
- 2 褐色土
- 3 黒色炭化物
- 4 褐色土
- 5 同上
- 6 黒色炭化物
- 7 黄褐色土

L = 165.10m



1

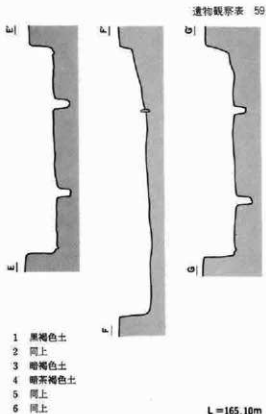
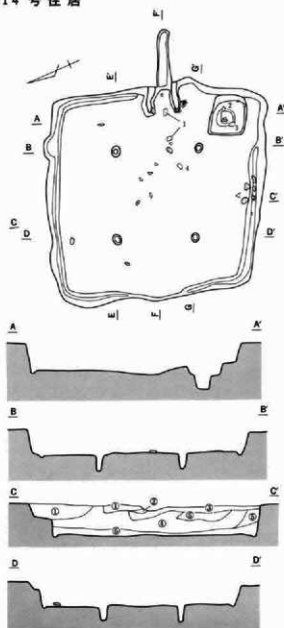


2



3

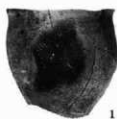
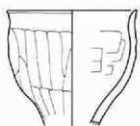
214号住居



短軸4.6m、長軸4.7mの中形正方形住居。基盤層を60cm掘り込んで平坦な床面を造る。住居の対角線上に4個の柱穴を配置する。芯々を結ぶと一辺1.8mの整った正方形を示す。東壁の中央部に竈を設置する。燃焼部は幅40cm、奥行き50cmで壁内に造り付け、煙道は火床の底面から壁外1.2mまで、緩やかな勾配で立ち上がる。焚口部の両側を石材で補強し、火床のほぼ中央部に石製の支脚を置く。住居の南東隅に貯蔵穴を設ける。貯蔵穴は一辺80cm、深さ20cmの正方形に掘り込んだ後、さらに一辺30cm、深さ30cmの正方形に掘り込む2段の構造をもつ。壁溝は幅15cm、深さ10cmで、西壁の一部と住居の南東隅を除く壁下に巡る。焚口部の床面に密着して脚付甕、覆土内より須恵器提瓶の破片が出土。他の住居と重複することなく単独占地。

方位 +114° 面積 19.87㎡

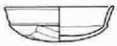




1



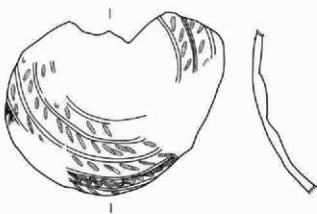
2



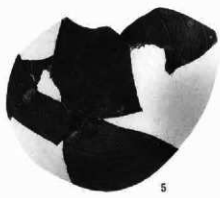
3



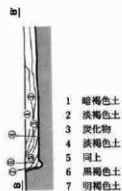
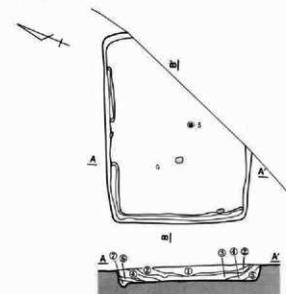
4



1



5

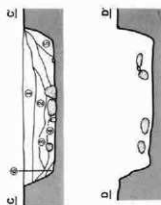
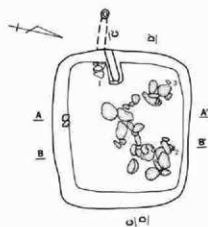


L=164.10m

住居の南東部が調査区域外のために全形は確認できないが、短軸3.1m、長軸4.1mの小形縦長方形住居と推定する。184住に住居の形状、規模、軸線の傾きが近似し、年代も近い。基盤層を30cm掘り込んで床面とする。床面は全体に平坦で良く整っている。確認した壁に竈の痕跡を示す焼土、掘り込みは検出できない。184住の類例からみても、東壁に設置されていた可能性が高い。壁溝は西壁と北壁の一部に幅10cm、高さ10cmで巡る。床面に密着した土器はなく、覆土内より坏、脚付甕が出土する。他の住居と重複することなく、単独で占地する。

方位 +67° 面積 12.28㎡ (推定)





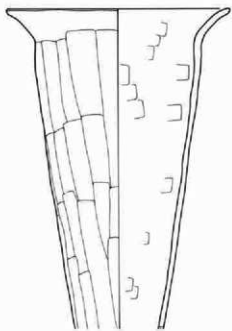
- 1 暗茶褐色土
- 2 明茶褐色土
- 3 茶褐色土
- 4 明茶褐色土
- 5 黄褐色土
- 6 明褐色土

L=164.90m



短軸2.9m、長軸3.3mで、長軸を東西にもつ小形縦長長方形住居。基盤層を60cm掘り込んで床面とする。床面は全体に平坦で良く整っている。竈は西壁の南側に設置する。壁内に造り付けた長さ40cmの袖部を検出するが、向って左側の袖部は検出できない。燃烧部を壁内に設ける壁内型を呈し、煙道は壁の中段から壁外90cmまで伸びる。燃烧部内より出土する長壺は、使用状態を示すものと考えられる。竈内より出土する長壺のほかに、北壁際の西側より坏、東側より脚付壺が出土するが、床面に密着したものはない。住居の北半部を中心に出土する角閃石安山岩は、出土レベルが床面より高く、住居の埋没過程のものと考えられる。単独で占地する。方位 -103° 面積 9.12m^2





1



2



4



5



6



3

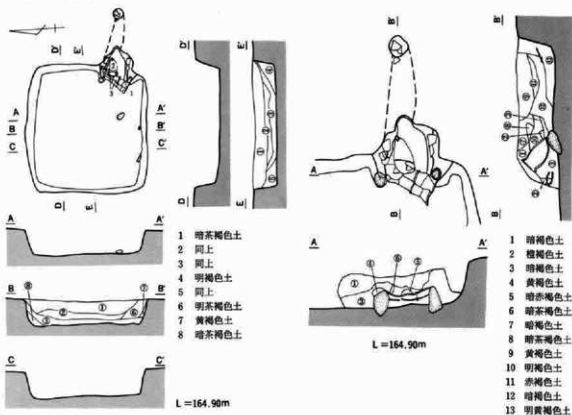


7



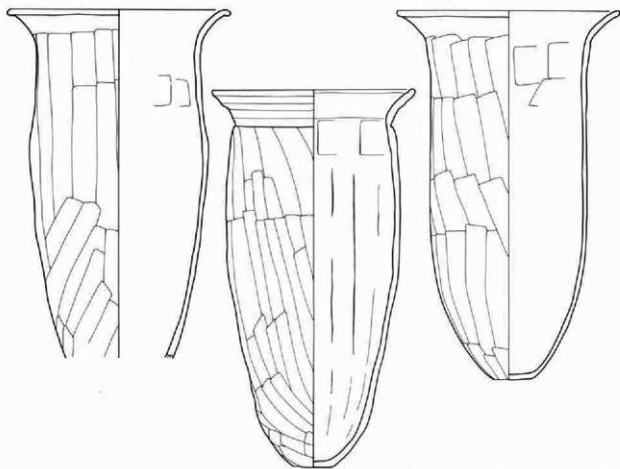
8

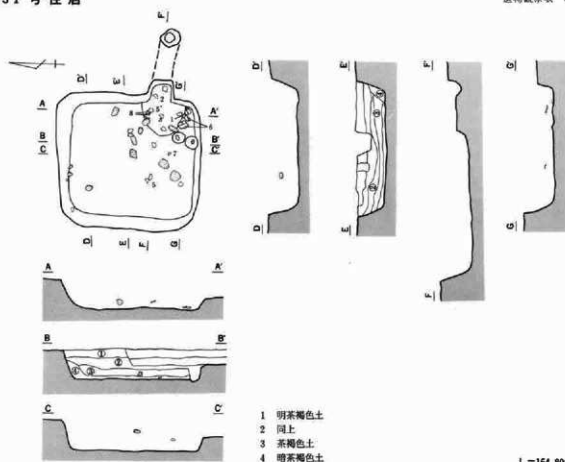




短軸2.6m、長軸2.7mの整った超小形正方形住居。基盤層を40cm掘り込んで、全体に平坦な床面を造る。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南端に設置する。壁内に造り付けた短い袖部を検出し、全体に残存状態が良好である。燃焼部は幅50cm、奥行き50cmで、約半分を壁外に造り出し、煙道は火床の底面から水平に壁外1.0mまで伸びた後、垂直に近い状態で立ち上がる。焚口部の両側に石材を据えて補強材とし、この間に組み合わせた2個の長梁を横架する。さらに燃焼部の両側を浅く掘り込み、ここに長梁を置いて袖部を構築する。火床の中央左側に石製支脚を置き、燃焼部内から出土する長梁はこの上に載って使用状態を示す。他の住居と重複することなく、単独で占地する。方位 +93° 面積 6.70㎡

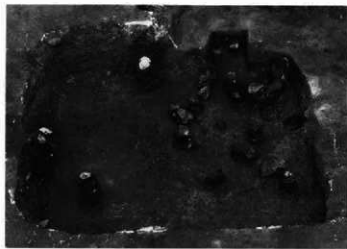


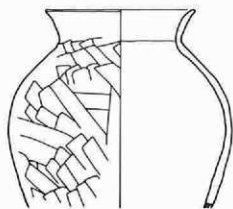
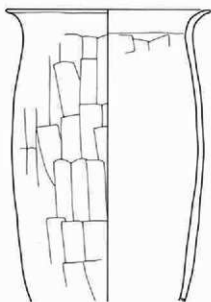


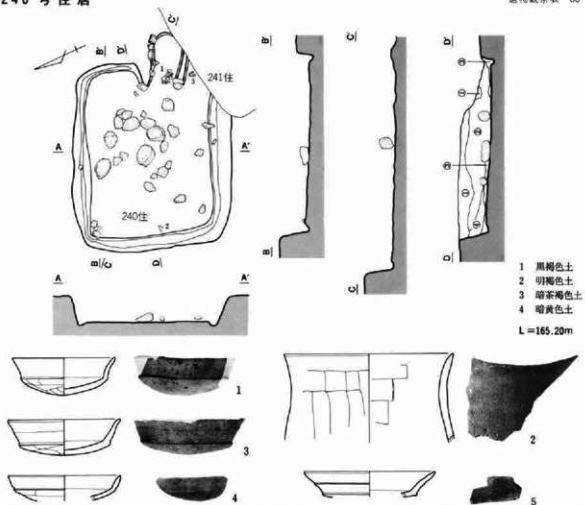


短軸2.9m、長軸3.1mの整った超小形正方形住居。基盤層を60cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に主柱穴はない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅40cm、奥行き40cmで壁外に造り出す壁外型を呈し、煙道は奥壁の中段から掘り込んで、壁外1.0mまで伸びる。竈の周辺部より坏、甕が出土するが、いずれも床面に密着していない。住居の南半で227住と重複する。この住居が227住に切られる平面精査の所見を得、これはそれぞれの住居に伴出する土器の型式が示す新旧関係とも矛盾しない。

方位 +88° 面積 8.33㎡

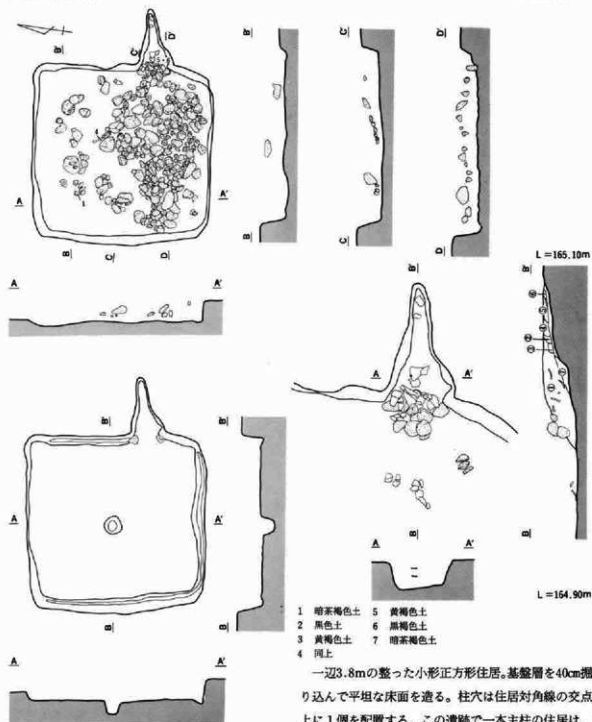




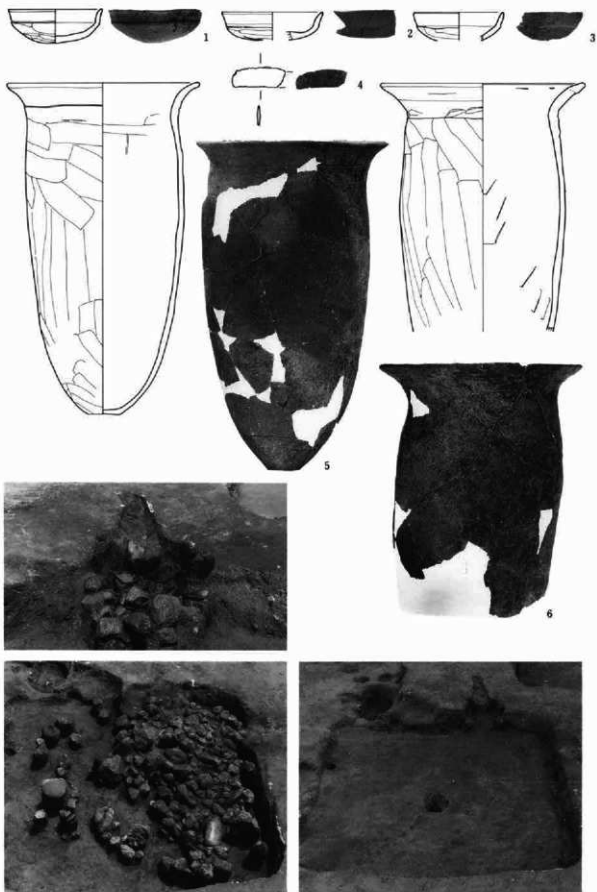


短軸3.4m、長軸4.0mの小形縦長長方形住居。基盤層を50cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に主柱穴はない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅50cm、奥行き60cmでその大半を壁外に造り出し、焚口部の両側に補強用の石材を据え、燃焼部の左側にも石材を並べる。煙道は確認できない。壁溝は幅15cm、深さ10cmで、確認した全壁下に巡る。竈内より坏、西壁際中央の床面直上より甕が出土する。多量に出土する角閃石安山岩は床面に密着しているが、後世のものと考えられる。重複する223住、241住がこの住居を切って構築する、平面精査の所見を得た。方位 +112° 面積 12.82㎡ (推定)



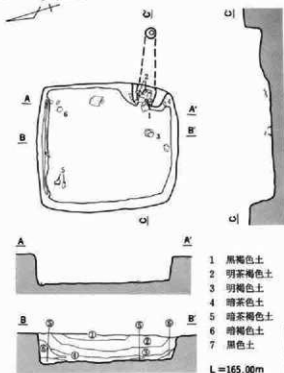


一辺3.8mの整った小形正方形住居。基盤層を40cm掘り込んで平坦な床面を造る。柱穴は住居対角線の交点上に1個を配置する。この遺跡で一本支柱の住居は、これ以外にない。東壁の南側に竈を設置する。燃焼部は幅40cm、奥行き50cmで壁外に造り出す壁外型を呈し、煙道は奥壁の中段から掘り込んで、壁外70cmまで緩やかな勾配で立ち上がる。焚口部の両側に補強用の石材を検出した。壁溝は幅10cm、深さ10cmで北壁を除いて巡る。竈内より甕が出土するほか、住居西北部の床面直上より坏が出土する。住居の南半を中心にして出土する多量の角閃石安山岩は、出土レベルが床面より高く、埋没過程のもの。この住居が240住を切り、203住、223住がこの住居を切って構築する平面精査の所見を得た。方位 +83° 面積 13.99m²

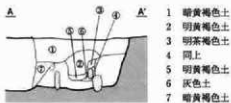
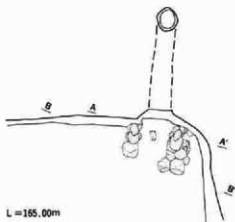


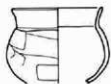
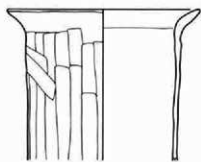
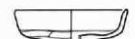
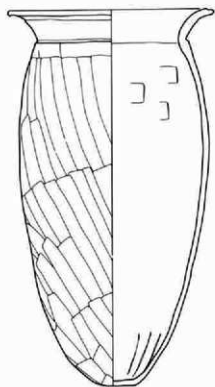
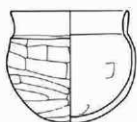
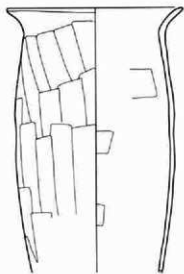
242号住居

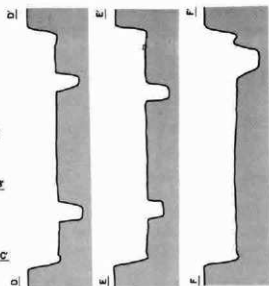
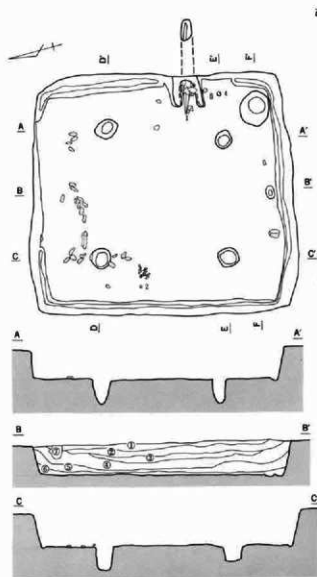
遺物観察表 67



短軸2.7m、長軸3.0mの超小形横長方形住居。基盤層を50cm掘り込んで床面とする。床面は全体に平坦で良く整っている。壁内に支柱穴はない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅40cm、奥行き50cmで壁内に造り付ける壁内型を呈し、煙道は壁の中段から掘り込んで、壁外1.2mまで伸びる。石材を並べて袖部の芯とし、火床の中央部に石製支脚を置く。燃焼部より出土する長壺は、掛けられていたものが崩れたものと考えられる。竈内より出土する甕のほか、覆土内より環、須恵器坏蓋が出土する。住居の西壁部で223住と重複する。この住居が223住に切られる調査所見を得、伴出する土器の型式が示す関係と矛盾がない。方位 +105° 面積 7.63㎡





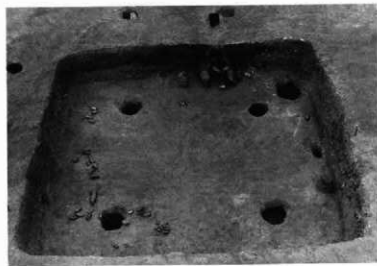


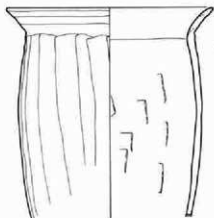
- | | |
|--------|--------|
| 1 黒褐色土 | 5 暗褐色土 |
| 2 褐色土 | 6 同上 |
| 3 暗褐色土 | 7 赤褐色土 |
| 4 褐色土 | |

L=164.60m

短軸5.1m、長軸5.6mで、長軸を南北にもつ大形横長方形住居。基盤層を70cm掘り込んで平坦な床面を造る。住居のほぼ対角線上に4個の柱穴を配置する。芯々を結ぶと、一辺2.6mの正方形を示す。竈は東壁の南側に設置する。燃烧部は幅40cm、奥行き50cmで壁内に造り付ける壁内型を呈し、煙道は壁の中段から掘り込んで、壁外1.2mまで伸びる。焚口部の両側を石材で補強し、火床の中央左側に石製支脚を置く。貯蔵穴は住居の南東隅に直径60cm、深さ50cmの円形プランで設け、壁溝は幅10cm、深さ5cmで、北壁と東壁の一部を除いて巡る。竈内より甕、西壁際中央部の床面に密着して石製紡錘車、覆土内より坏が出土する。18号掘立柱建物と平面形上で重複するが、新旧関係を判定する資料はない。

方位 +104° 面積 27.86㎡





1



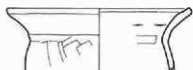
2



3

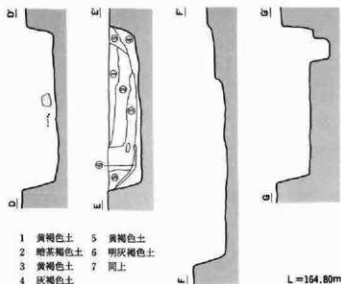
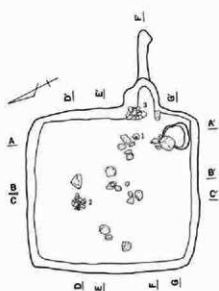


4



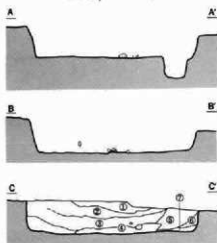
5





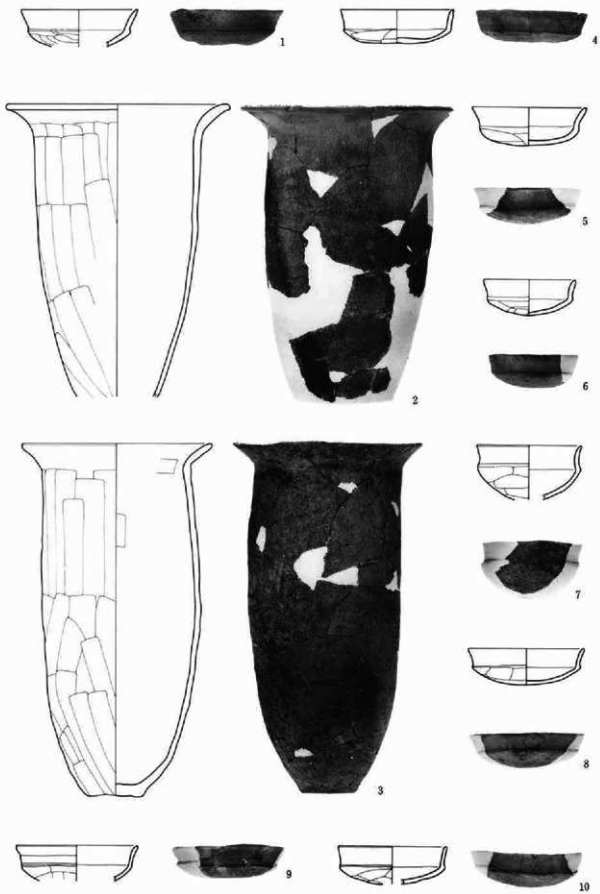
- | | |
|---------|---------|
| 1 黄褐色土 | 5 黄褐色土 |
| 2 暗茶褐色土 | 6 明灰褐色土 |
| 3 黄褐色土 | 7 同上 |
| 4 灰褐色土 | |

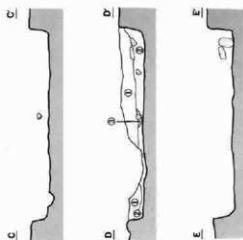
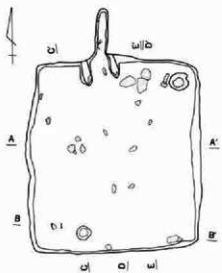
L=164.80m



短軸3.5m、長軸3.7mの整った小形正方形住居。基礎層を70cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に支柱穴はない。東壁の南側に竈を設置する。燃焼部は幅40cm、奥行き50cmで壁外に造り出す壁外型で、煙道は奥壁の中段から掘り込んで、壁外1.0mまで伸びる。焚口部の両側を石材で補強し、向って左側の石材の上に出土する壁は、石材の間に横架されて焚口部を構成していたものと考えられる。住居の南東隅に直径50cm、深さ40cmの不整形円プランで貯蔵穴を配置する。貯蔵穴内と、覆土内より坏が出土する。住居の中央部より出土する角閃石安山岩は、住居の埋没過程のもの。住居の南半で重複する212住が、この住居を切っている平面精査の所見を得た。方位 +117° 面積 12.26㎡





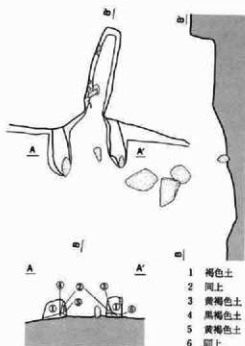


- 1 赤褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 黒褐色土
- 4 灰茶褐色土
- 5 暗褐色土

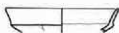
L=164.70m

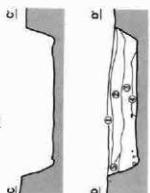
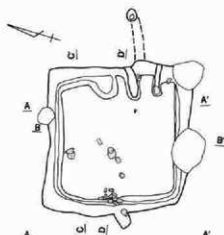


長軸を南北にもち、短軸3.7m、長軸4.1mの小形縦長長方形住居。基盤層を40cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に支柱穴はない。北壁の西側に竈を設置する。燃焼部は幅40cm、奥行き40cmで壁内に造り付ける壁内型を呈し、煙道は火床の底面から壁外1.0mまで、緩やかな勾配で立ち上がる。焚口部の向って左側に補強用の石材を据え、火床の中央右側に石製支脚を置く。住居南西部より礎、覆土内より坏が出土するが、床面に密着したものはない。重複する212住がこの住居を切って構築する調査所見を得た。220住、230住、235住、236住、239住との新旧関係を判定する実証的資料を欠くが、伴出する土器の型式からみるとこの住居が最も古い。 方位 -2° 面積 14.60㎡



L=164.50m





- 1 茶褐色土
- 2 同上
- 3 褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 暗灰褐色土

L=164.90m



短軸2.9m、長軸3.1mの超小形正方形住居。基盤層を60cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。東壁の南側に竈を設置する。燃烧部は幅30cm、奥行き40cmで壁内に造り付ける壁内型を呈し、煙道は壁の中段から掘り込んで、壁外1.1mまで伸びる。焚口部に向かって右側に補強用の石材を検出した。壁溝は幅

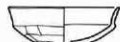
10cm、深さ5cmで、東壁の南半を除いて巡る。覆土内より灰、壘が出土するが、床面に密着したものはない。住居の北西部で263住と重複する。新旧関係を判定する実証的資料を欠き、263住の年代が確定できないために、土器型式による判定も不可能。方位 +71° 面積 9.23㎡



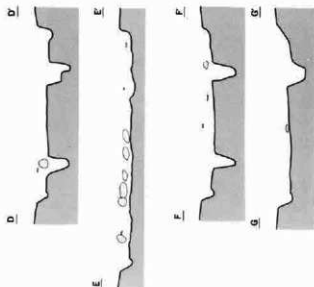
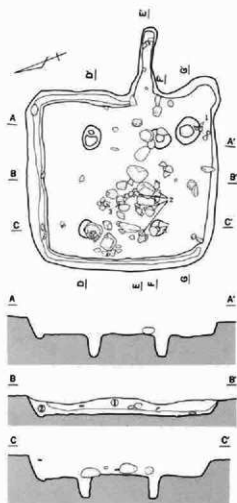
1



2



3

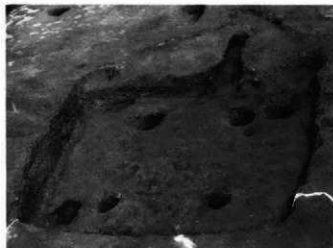


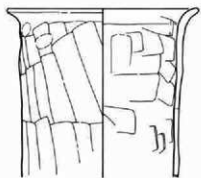
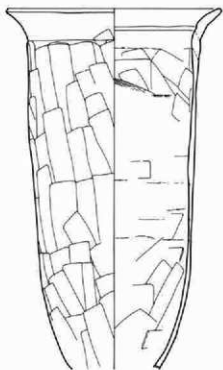
- 1 暗茶褐色土
2 同上

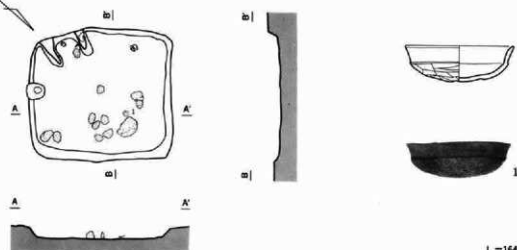
L=164.80m

短軸3.7m、長軸4.1mで、長軸を南北にもつ小形横長方形住居。基盤層を40cm掘り込んで平坦な床面を造る。住居のほぼ対角線上に4個の柱穴を配置する。芯々を結ぶと短軸1.4m、長軸2.0mで、住居外形の長軸線と直交する長軸をもつ。東壁の南側に設置する竈は、燃焼部が幅40cm、奥行き40cmの壁外型を呈し、煙道は壁外1.0mまで伸びる。

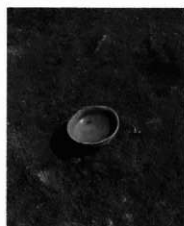
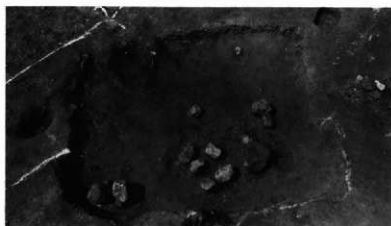
焚口部の両側を石材で補強する。貯蔵穴は住居の南東隅に直径50cm、深さ30cmの円形プランで設け、壁溝は幅10cm、深さ5cmで巡る。住居南東部の床面に密着して壘、覆土内より須恵器坏蓋が出土する。重複する252住、253住、254住がこの住居を切って構築する平面精査の所見を得た。方位 +111° 面積 14.56㎡

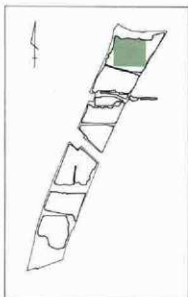
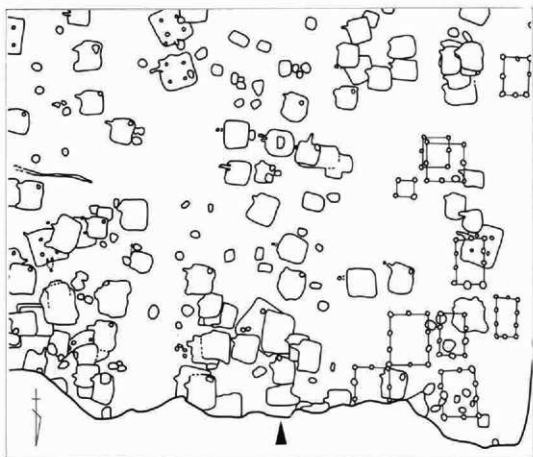






短軸2.8m、長軸3.0mの超小形正方形住居。基盤層を20cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に支柱穴はない。西壁の南側に竈を設置する。燃焼部は幅50cm、奥行き40cmで壁内に造り付ける壁内型を呈す。煙道は検出できないが、おそらく壁の中段から掘り込むものと推定される。住居中央北側の床面に密着して坏が出土する。住居の北半部から出土する角閃石安山岩は、出土レベルが床面より高く、住居の埋没過程のもの。重複する246住、247住がこの住居を切って構築する調査所見を得た。263住との新旧関係を判定する資料が欠き、263住の年代が確定できないために、土器型式による判定も不可能。方位 -131° 面積 8.05㎡





神図7 F・G区遺構分布図

0 1:500 10m



8世紀代の竪穴住居分布



中形正方形



中形横長長方形



小形正方形



小形横長長方形



小形縦長長方形

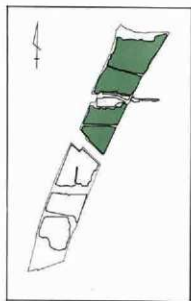


超小形正方形





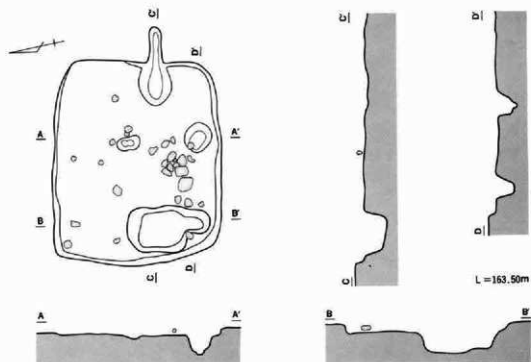
挿図8 8世紀代の型穴住居分布図



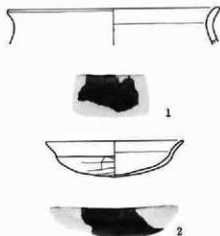
2 奈良時代

遺物観察表 I

2号住居

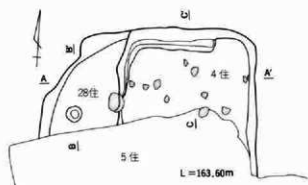


長軸を東西にもち、短軸3.6m、長軸4.3mの小形縦長長方形住居。基盤層を5cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。南壁際に直径50cm、深さ40cmのピットを2個検出するが、性格は不明で、この住居に伴うか否か疑わしい。竈は東壁の南側に設置する。袖部は検出できないが、壁に掘り込んだ煙道の痕跡から、燃焼部を壁内に造り付ける壁内型と推定される。煙道は壁外80cmまで伸びる。覆土内より甕、坏が出土する。南壁際から出土する角閃石安山岩は、床面に密着していない。この住居が5住を切って構築する調査所見を得、伴出する土器の型式でも矛盾がない。また、位置的な関係から近接する37住との同時存在はあり得ない。方位 +95° 面積 15.54㎡

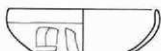


4・28号住居

遺物観察表 1



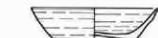
2



3



5



1



4



6

4号住居 住居の北半部を検出するのみで、外形は確定できない。基盤層を40cm掘り込んで床面とする。壁内に主柱穴はなく、竈も検出できない。覆土内より坏、須恵器の坏、高台付坏が出土する。この住居が5住を切り、28住がこの住居を切って構築する土層断面の所見を得た。

方位 +87° 面積 測定不可能

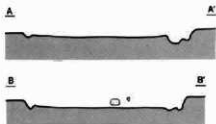
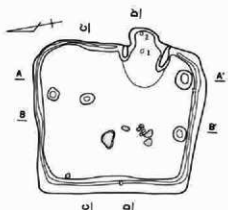
28号住居 住居の北西隅を検出するのみで、外形は確定できない。柱穴、竈はなく、伴出土器もない。

方位 測定不可 面積 測定不可

4号住居出土遺物

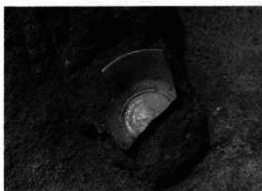
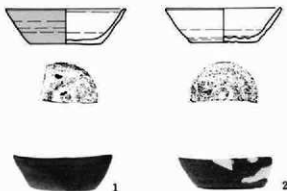
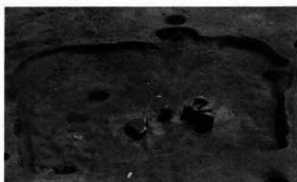
6号住居

遺物観察表 2



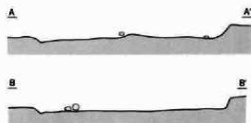
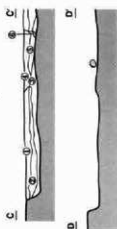
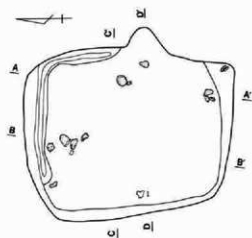
L=163.50m

短軸3.2m、長軸3.6mで、長軸を南北にもつ小形横長長方形住居。基盤層を15cm掘り込んで床面とする。床面は全体に平坦で整っている。壁内に支柱穴はない。東壁の南側に竈を設置する。燃烧部は幅60cm、奥行き60cmで、約半分を壁外に造り出す。煙道は検出できない。住居の南東隅に直径30cm、深さ20cmの円形プランで貯蔵穴を配置する。壁溝は幅15cm、深さ5cmで、竈の部分を除いて全周する。竈内より須恵器坏2個体が出土する。住居中央西側の偏平な石は床面に密着し、住居南西部より出土する角閃石安山岩は、出土レベルが床面より高い。他の住居と重複することなく、単独で占地する。方位 +102° 面積 10.86㎡



10号住居

遺物観察表 3



L=163.60m

- 1 暗褐色土
- 2 同上
- 3 黄褐色土
- 4 暗茶褐色土
- 5 暗褐色土
- 6 同上



3

長軸を南北にもち、短軸3.6m、長軸4.4mの中形横長方形住居。基盤層を30cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に支柱穴はなく、壁外にも支柱の痕跡がない。東壁の中央部に竈を設置する。燃焼部は幅60cm、奥行き40cmで、半円形状に壁外に造り出す壁外型を呈す。煙道は検出できない。北壁と東壁の一部に幅20cm、深さ5cmの壁溝を検出した。西壁際中央部の床面直上より、竈内より壁が出土する。この住居が9住を切る土層断面の所見を得たが、伴出する土器の型式は10住→9住の順を示す。方位 +89° 面積 14.35㎡



1



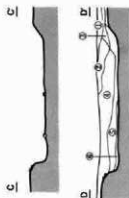
2



4



L=163.50m



- 1 黒色土
- 2 同上
- 3 同上
- 4 黒褐色土
- 5 黄褐色土
- 6 灰色土

住居東半部の大半が調査区域外のため、西壁と北壁の一部を検出するのみで、外形は確定できない。基盤層を30cm掘り込んで床面とする。検出した面は平坦で良く整っている。検出した床面に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。確認した壁の範囲では、竈の痕跡を示す焼土などは一切検出できない。西壁際中央部の床面直上より環、住居の覆土内より環が出土する。検出した住居の範囲では他の住居と重複することなく、調査区域の北東部に単独で占地する。

方位 +108° 面積 測定不可能

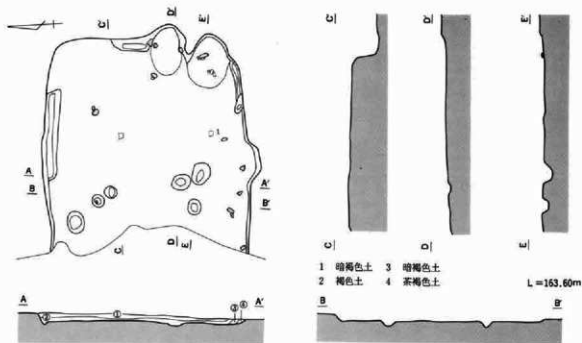


1

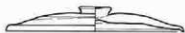


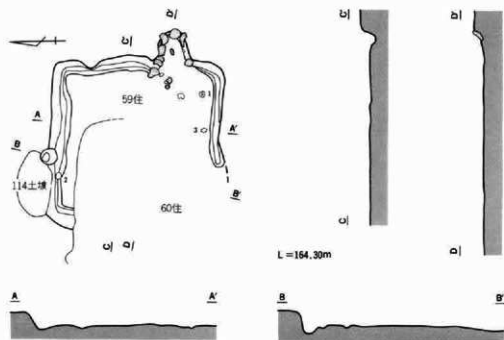
2





住居の西壁部が調査区域外のため全形は確認できず外形は確定できないが、長軸を東西にもち、南北軸4.4mを測る。基盤層を10cm掘り込んで平坦な床面を造る。住居の西側に柱穴様のピットを検出するが、対応するピットが検出できず、柱穴列をなさない。東壁の南側に2個の竈を検出した。いずれも燃焼部が幅50cm、奥行き50cmで、半円形状に壁外に造り出す壁外型を呈し、北側の竈は焚口部の両側に補強用の石材を据える。南壁際中央部の床面直上より須恵器坏蓋が出土する。この住居が5住を切って構築する調査所見を得、位置的な関係から2住との同時存在はあり得ない。方位 +91° 面積 測定不可能





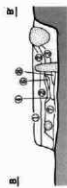
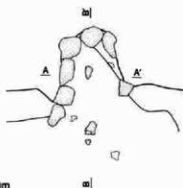
住居の南西部は検出できないが、短軸3.6m、長軸3.7mの小形正方形住居と推定する。基盤層を20cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に主柱穴はない。竈は東壁の南側に設置する。燃燒部は幅50cm、奥行き60cmで壁外に造り出し、焚口部のほかに燃燒部の壁に沿って石材を並べ、火床の中央左側に石製支脚を置く。煙道は検出できない。南壁際より須恵器環、北壁際西側より須恵器坏蓋が、それぞれ床面直上より出土する。住居の南西部で60住と重複する。この住居が60住を切って構築する土層断面の所見を得たが、伴出する土器の型式は59住→60住の順を示して逆転している。方位 +92° 面積 13.31m² (推定)





- 1 褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 赤褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 同上
- 6 黑色灰土
- 7 暗褐色土
- 8 赤褐色土

L = 164.20m



2



1



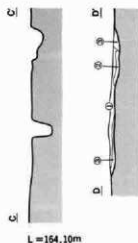
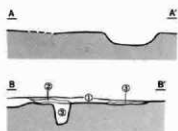
3



4

74号住居

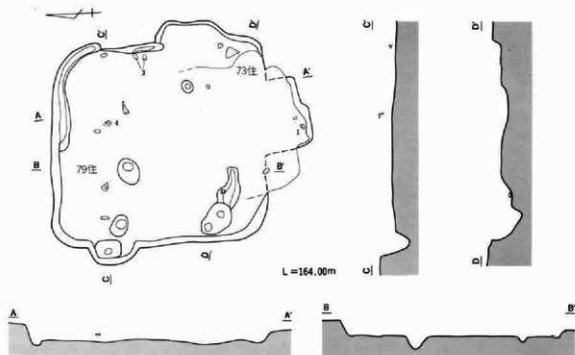
遺物観察表 20



長軸を南北にもち、短軸2.6m、長軸3.3mの小形横長方形住居。基盤層を10cm掘り込んで床面とする。北壁部の掘り込みは、重複する土壇のもの。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。検出した壁に竈の痕跡を示す焼土などは一切検出できない。住居の覆土内より壺が出土する。住居の西側で81住と、南東部で72住とそれぞれ重複する。いずれも新旧関係を判定する実証的資料を欠くが、伴出する土器の型式は81住→72住の順を示す。
方位 +96° 面積 8.34㎡

- 1 暗褐色土
- 2 同上
- 3 赤褐色土





南壁に幅1.6m、奥行き80cmの張り出し部をもつ、短軸4.3m、長軸4.6mの中形正方形住居。基盤層を30cm掘り込んで床面とする。壁内に支柱穴はない。竈は東壁の南側に設置する。残存状態が悪いために全形は確認できないが、燃焼部を壁外に造り出す壁外型を呈す。甕、坏、須恵器の坏、高台付埴、坏蓋が出土するが、床面に密着したものはない。住居の南半で73住と、北東部で72住、82住とそれぞれ重複する。73住がこの住居を切り、この住居が72住、82住に切られる調査所見を得、73住との新旧関係は伴出する土器の型式が示す順と一致している。方位 +88° 面積 20.73㎡ (推定)





1



2



3



5



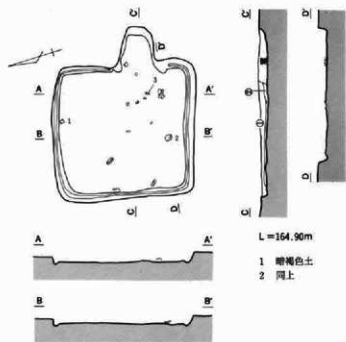
6



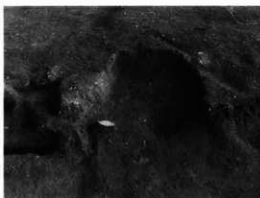
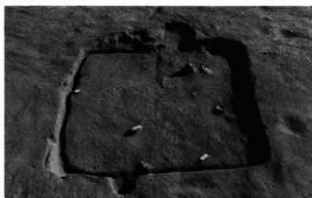
4



7



短軸2.8m、長軸3.0mの超小形正方形住居。基盤層を20cm掘り込んで床面とする。床面は全体に平坦で良く整っている。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。東壁の両側に竈を設置する。燃焼部は幅60cm、奥行き80cmで壁外に造り出す壁外型を呈す。煙道は検出できない。壁溝は幅10cm、深さ5cmで、竈の部分を除いて全周する。北壁際中央の床面に密着して須恵器坏蓋、南壁際中央の床面直上より坏、竈西側の床面直上より壺が出土する。他の住居と重複することなく、調査区域の北西部に単独で占地する。
方位 +104° 面積 8.43㎡



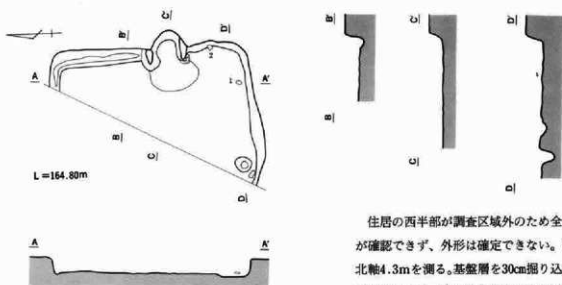
1



2

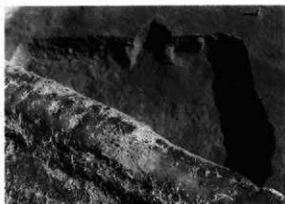


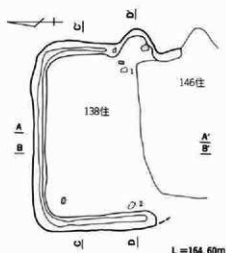
3



住居の西半部が調査区域外のため全形が確認できず、外形は確定できない。南北軸4.3mを測る。基盤層を30cm掘り込んで床面とする。検出した範囲の床面は平坦で良く整っている。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅50cm、奥行き50cmで約半分を壁外に造り出し、焚口部の右側に補強用の石材を据える。煙道は検出できない。住居南東部の床面直上より須恵器坏が出土するほか、覆土内より坏、釜が出土する。他の住居と重複することなく単独で占地する。方位 +87°

住居の西半部が調査区域外のため全形が確認できず、外形は確定できない。南北軸4.3mを測る。基盤層を30cm掘り込んで床面とする。検出した範囲の床面は平坦で良く整っている。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅50cm、奥行き50cmで約半分を壁外に造り出し、焚口部の右側に補強用の石材を据える。煙道は検出できない。住居南東部の床面直上より須恵器坏が出土するほか、覆土内より坏、釜が出土する。他の住居と重複することなく単独で占地する。方位 +87°

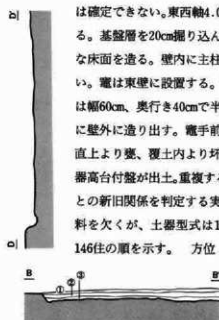




L=164.60m



- 1 暗褐色土
- 2 同上
- 3 同上
- 4 黄褐色土



南壁が検出できないため、外形は確定できない。東西軸4.0mを測る。基盤層を20cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に支柱穴はない。竈は東壁に設置する。燃燒部は幅60cm、奥行き40cmで半円形状に壁外に造り出す。竈手前の床面直上より壘、覆土より坏、須恵器高台付盤が出土。重複する146住との新旧関係を判定する実証的資料を欠くが、土器型式は138住→146住の順を示す。方位 +88°



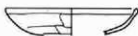
1



2



3

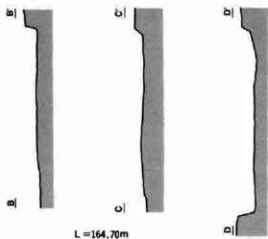
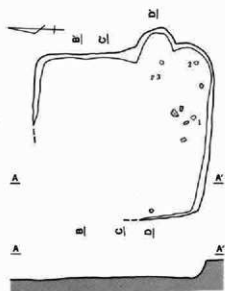


4



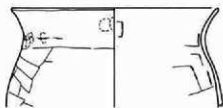
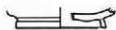
5





住居の北西部は検出できないが、短軸3.5m、長軸3.8mの小形正方形住居と推定する。基盤層を20cm掘り込んで床面とし、壁内に支柱穴はない。東壁の南側に設置する竈は、幅60cm、奥行き50cmの燃焼部を、半円形状に壁外に遊り出す。南壁際の床面に密着して須恵器高台付坏が出土。重複する住居との新旧関係を判定する実証的資料を欠くが、土器型式は142住→143住→156住→141住の順。

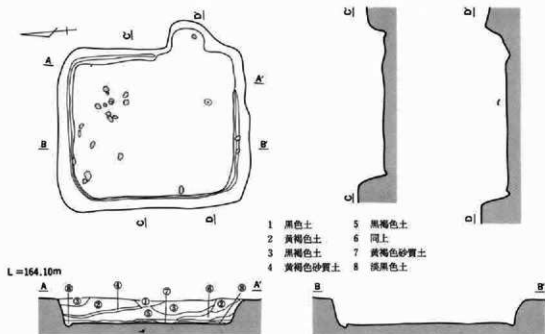
方位 +89° 面積 13.25㎡ (推定)



2



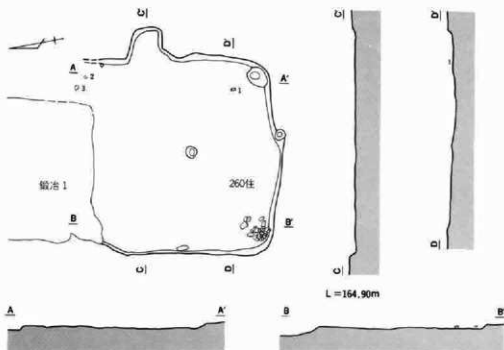
3



長軸を南北にもち、短軸3.4m、長軸4.1mの小形横長長方形住居。基盤層を40cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。燃燒部は幅70cm、奥行き40cmで壁外に造り出す壁外型を呈す。煙道は検出できない。壁溝は幅10cm、深さ5cmで住居の南東隅を除いて全周する。覆土内より坏が出土する。他の住居と重複することなく、単独で占地する。

方位 +94° 面積 .13.64㎡





北壁が検出できないために、住居の外形は確定できない。東西軸4.2mを測る。基盤層を10cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁に設置する。燃焼部は幅50cm、奥行き60cmで壁外に造り出す壁外型を呈す。煙道は検出できない。住居南東隅の床面直上より坏、覆土内より甕、須恵器の坏、高台付埴が出土する。住居の北側で1号鍛冶遺構と重複する。1号鍛冶遺構がこの住居を切って構築する平面精査の所見を得、伴出する土器の型式でも矛盾がない。

方位 +100° 面積 測定不可能





1



2



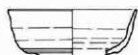
5



3



6



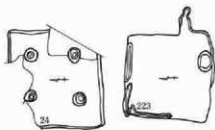
4



7



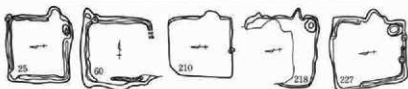
9世紀代の竪穴住居分布



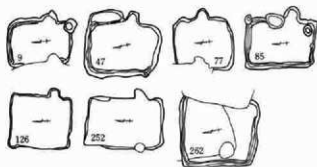
中形正方形



中形横長長方形



小形正方形



小形横長長方形





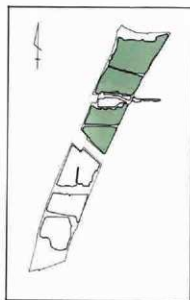
超小形正方形



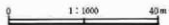
超小形縦長長方形



超小形縦長長方形



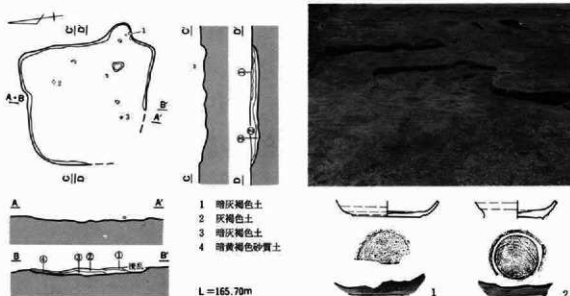
挿図9 9世紀代の竪穴住居分布図



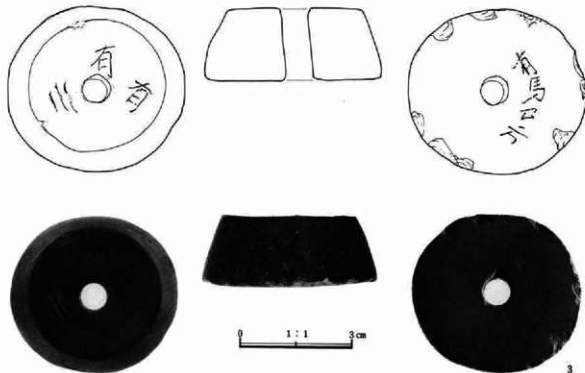
3 平安時代

遺物観察表 1

1号住居

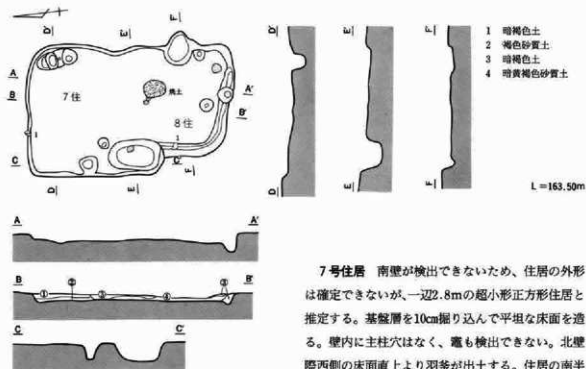


住居の南西隅は検出できないが、短軸2.5m、長軸2.6mの超小形正方形住居と推定する。基盤層を5cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に支柱穴はない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅40cm、奥行き30cmで、半円形状に壁外に造り出す壁外型を呈す。竈内より須恵器坏、住居北東部より須恵器高台付埴が床面直上より出土するほか、南壁際西側より「有馬公口」が線刻された石製紡錘車が出土。他の住居と重複することなく単独で占地。この遺跡では古墳時代後期～平安時代の住居の分布が、遺跡全城のうちの北半部に限定されるが、この住居のみはその分布域から大きく離れて特異な立地を示す。方位 +95° 面積 6.42㎡(推)



7・8号住居

遺物観察表 2



7号住居 南壁が検出できないため、住居の外形は確定できないが、一辺2.8mの超小形正方形住居と推定する。基盤層を10cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に主柱穴はなく、竈も検出できない。北壁際西側の床面直上より羽釜が出土する。住居の南半で8住と重複する。新旧関係を判定する実証的資料

を欠くが、伴出する土器の型式は8住→7住の順を示す。方位 +97° 面積 測定不可能

8号住居 住居の北半が検出できないため、外形は確定できない。東西軸2.4mを測る。基盤層を15cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に主柱穴はない。東壁に竈を設置する。燃焼部は幅40cm、奥行き30cmで、半円形状に壁外に這り出す壁外型と推定される。煙道は検出できない。壁溝は幅10cm、深さ10cmで、西壁と南壁の壁下に巡る。西壁際の床面直上より甕が出土するほか、覆土内より甕が出土する。

方位 +101° 面積 測定不可能

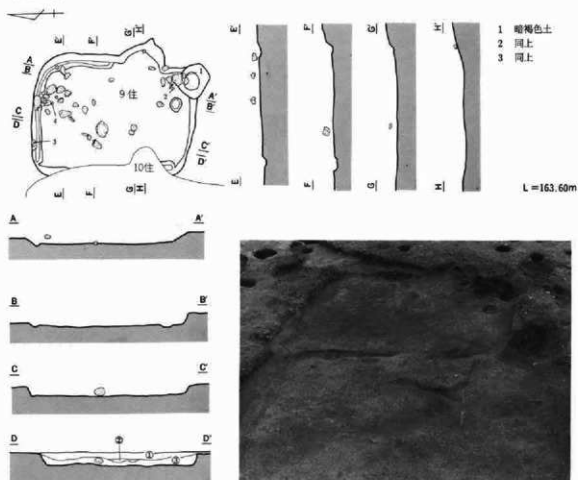




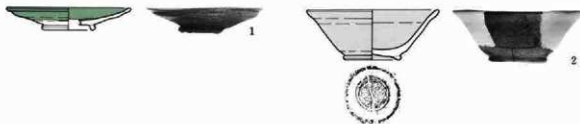
7号住居出土遺物

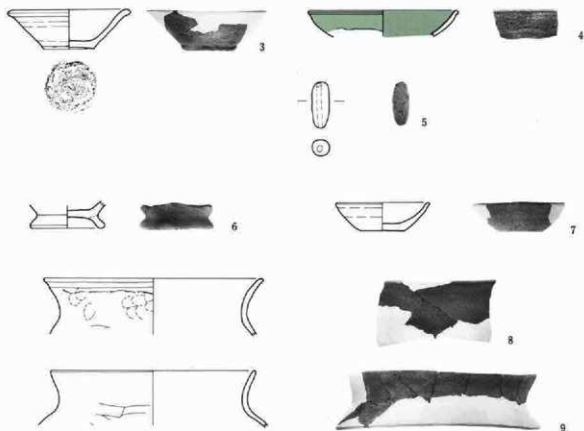


8号住居出土遺物



長軸を南北にもち、短軸2.5m、長軸3.5mの小形横長方形住居。基盤層を20cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。東壁の南側に竈を設置する。明確な袖部は検出できないが、壁への掘り込みが少ないことから、幅60cm程の燃焼部は半分を壁外に造り出すものと推定される。煙道は検出できない。住居の南東隅に直径60cmの貯蔵穴を、半分壁外に張り出して配置する。壁溝は幅10cm、深さ5cmで、北壁と東壁の壁下に巡る。住居南東部の床面に密着して灰軸陶器皿、須恵器高台付埴が出土するほか、覆土内より甕、須恵器環が出土する。住居の北半部に出土する多量の石は、出土レベルが床面より高く住居の埋没過程のもの。西壁部で10住と重複する。この住居が10住に切られる土層断面の所見を得たが、伴出する土器の型式は10住→9住の順を示して逆転している。方位 +94° 面積 8.22m²(推定)





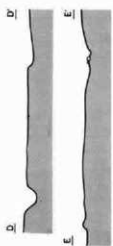
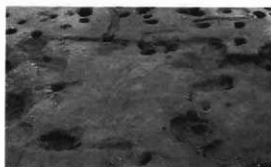
11号住居

遺物観察表 3



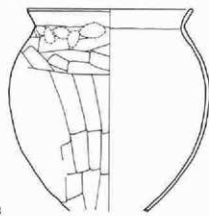
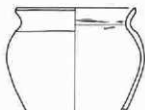
L=163.50m

1 暗褐色土

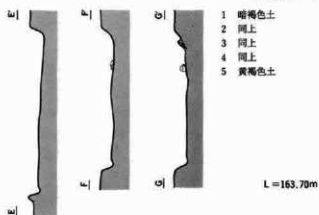
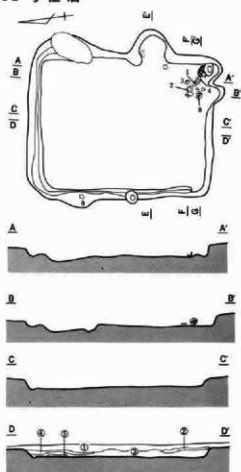


北壁が検出できないため、住居の外形は確定できない。東西軸3.8mを測る。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅70cm、奥行き40cmの方形で、壁外に造り出す壁外型を呈す。煙道は検出できない。貯蔵穴は住居の南東隅に短径50cm、長径1.0mの楕円形プランで設ける。竈内より甕、西壁際の床面直上より甕、灰軸陶器皿がそれぞれ出土する。住居の南半で12住と重複する。この住居が12住を切って構築する調査所見を得たが、伴出する土器の型式は11住→12住の順を示して逆転している。

方位 +102° 面積 測定不可能



12号住居



遺物観察表 4

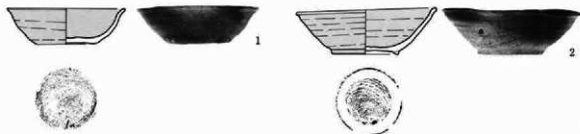
- 1 暗褐色土
- 2 同上
- 3 同上
- 4 同上
- 5 黄褐色土

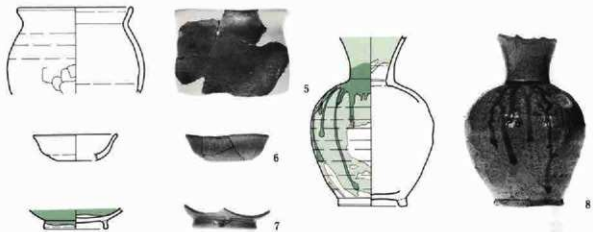
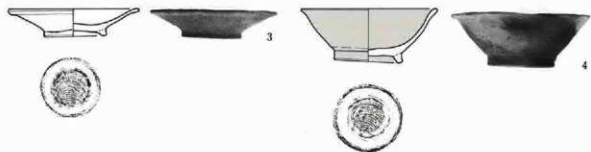
L=163.70m



短軸3.2m、長軸4.0mで、長軸を南北にもつ小形横長方形住居。基盤層を20cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅50cm、奥行き60cmで壁外に造り出す壁外型を呈す。煙道は検出できない。燃焼部より石材が出土する。原位置にはないが、焚口部の補強用に使われていたものと考えられる。住居南東隅の床面直上より須恵器の高台付皿、高台付碗、坏、長頸甕がそれぞれ出土する。住居の北半部で11住と、西壁部で13住とそれぞれ重複する。この住居が11住に切れ、13住を切って構築する調査所見を得たが、11住との新旧関係については、伴出する土器の型式が11住→12住の順を示して逆転している。

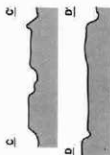
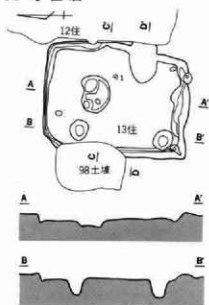
方位 +98° 面積 12.62㎡





13号住居

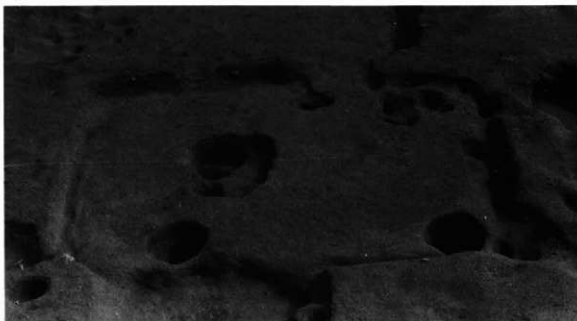
遺物観察表 4



L=163.70m

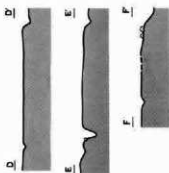
長軸を南北にもち、短軸2.4m、長軸3.1mの超小形横長方形住居。基盤層を15cm掘り込んで平坦な床面を造る。住居中央北側に直径70cm、深さ10cmの掘り込みがあるほか、西壁際にも直径40cm、深さ40cmのピット2個を検出するが、いずれもこの住居に伴うか否かが判定できない。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。東壁の南側に竈を設置する。掘り込みが浅いために全形は確認できないが、燃焼部は幅60cm程で、壁外に造り出すものと推定される。壁溝は幅10cm、深さ5cmで、東壁の南半を除く各壁下に検出した。

住居中央東側の床面に密着して須恵器高台付境が出土するほか、覆土内より瓦、須恵器高台付境が出土する。竈の部分で12住と、住居の南西部で14住とそれぞれ重複する。この住居が12住に切られる調査所見を得た。14住との新旧関係を判定する実証的資料を欠くが、伴出する土器の型式は13住→14住の順を示す。方位 +96° 面積 6.83㎡

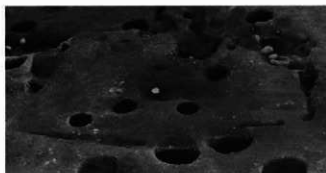
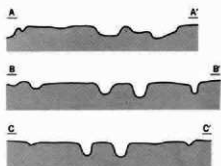


14号住居

遺物観察表 4

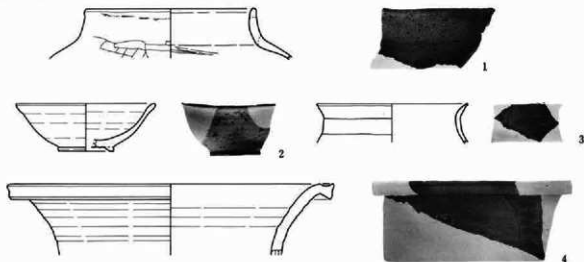


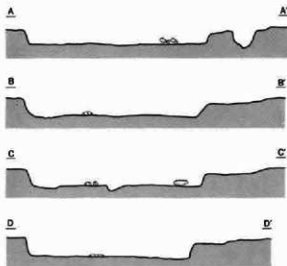
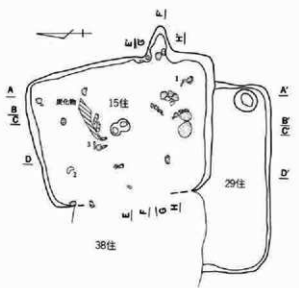
L=163.70m



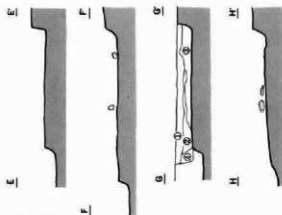
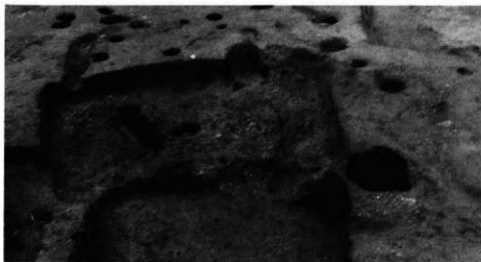
東壁部が検出できないため、住居の外形は確定できない。南北軸3.7mを測る。基盤層を5cm掘り込んで床面とする。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。住居の西半部に直径30cm、深さ20cm程のピット5個を検出するが、いずれも柱穴列をなさない。掘り込みが浅いために竈は検出できないが、住居中央東側の浅い掘り込みは火床の構築面である可能性があり、竈は東壁の南側に設置されていたものと推定される。壁溝は幅10cm、深さ5cmで、検出した全壁下に巡る。住居北東部の床面直上より竈、覆土内より竈、須恵器の高台付壺、壺がそれぞれ出土する。住居の北東部で13住と重複する。新旧関係を判定する実証的資料はないが、伴出する土器の型式は13住→14住の順を示す。

方位 +91° 面積 測定不可能





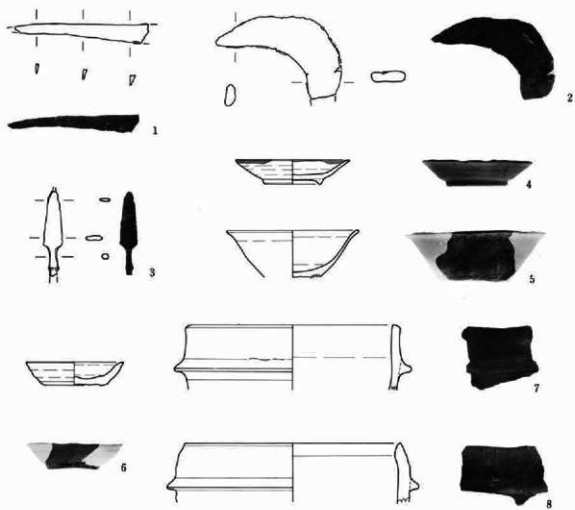
- 1 暗褐色土
- 2 同上
- 3 同上
- 4 同上



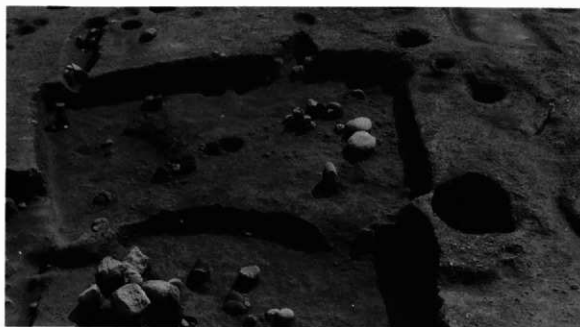
L=163.80m

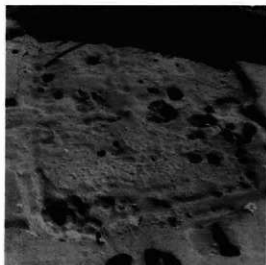
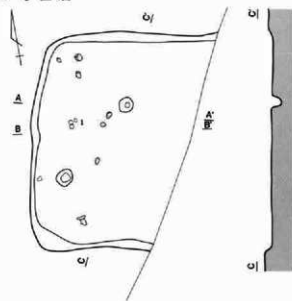
15号住居 長軸を南北にもち、短軸3.0m、長軸3.8mの小形横長方形住居。基盤層を40cm掘り込んで床面とする。住居のほぼ中央に柱穴様のピットを検出するが、掘り込みは浅い。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅30cm、奥行き30cmで壁外に造り出し、焚口部を石材で補強する。住居南東部と北西部の床面直上より刀子、鉄鏃、鎌が出土するほか、覆土内より須恵器の坏、高台付碗、羽釜、灰釉陶器皿が出土する。この住居が、重複する29住、38住を切って構築する土層断面の所見を得た。方位 +82° 面積 10.98㎡ (推定)

29号住居 住居の南壁部を検出するのみで、外形は確定できない。東西軸4.0mを測る。柱穴、竈は検出できず、伴出土器もない。方位 +90°

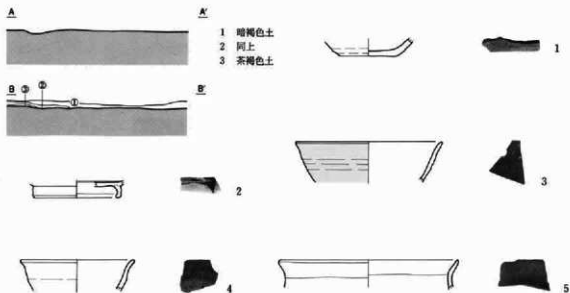


15号住居出土遺物





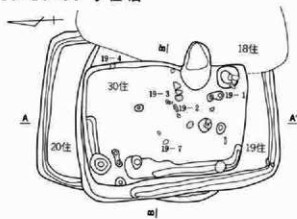
L=163.60m



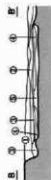
住居の東半が調査区域外のため全形が確認できず、外形は確定できない。南北軸4.6mを測る。基盤層を10cm掘り込んで床面とする。床面は北壁と南壁の際が、幅50cm程の範囲で住居中央部よりも僅かに深く掘り込まれている。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。住居の西半で柱穴様のピット2個を検出するが、いずれも対応するピットが確認できず、柱穴列をなさない。検出した壁下に竈の痕跡を示す焼土などは一切検出できない。竈は東壁に設置されていた可能性が高い。住居中央西側の床面に密着して須恵器環が出土するほか、覆土内より甕、須恵器高台付埴、灰軸陶器皿が出土する。住居の西側で19住、20住、30住と重複する。新旧関係を判定する実証的資料はないが、伴出する土器の型式は19住→18住→20住の順を示す。30住は伴出土器がないために、新旧関係の判定ができない。方位 +100° 面積 測定不可能

19・20・30号住居

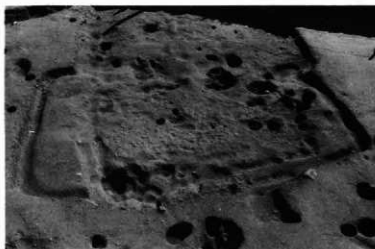
遺物観察表 6・7



L=163.70m



- 1 暗褐色土
- 2 同上
- 3 茶褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 茶褐色土



19号住居 東壁部が検出できないために全形は確認できず、外形が確定できない。南北軸4.4mを測る。基盤層を10cm掘り込んで床面とするが、検出した床面は南壁際の一部にすぎない。壁内に主柱穴はなく、竈も検出できない。壁溝は幅10cm、深さ5cmで、西壁と南壁下に検出した。床面直上より壺が出土するほか、覆土内より須恵器の坏、高台付塚が出土する。18住、20住、30住と重複する。いずれも新旧関係を判定する実証的資料を欠くが、伴出する土器の型式は19住→18住→20住の順を示す。30住は伴出土器がないために、新旧関係の判定ができない。

方位 +85° 面積 測定不可能

20号住居 北壁部を検出するのみで、外形は確定できない。東西軸3.4mを測る。基盤層を10cm掘り込んで床面とする。壁内に主柱穴はなく、竈も検出できない。壁溝は幅10cm、深さ10cmで北壁下に検出した。覆土内より須恵器坏が出土する。

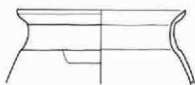
方位 +97° 面積 測定不可能

30号住居 長軸を南北にもち、短軸2.4m、長軸3.4mの小形横長長方形住居。基盤層を20cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅50cm、奥行き60cmで、半円形状に壁外に造り出す壁外型を呈す。煙道は検出できない。住居の南東隅に直径40cmの円形プランで貯蔵穴を配置する。壁溝は幅20cm、深さ5cmで、西壁と北壁の一部に連る。18住、19住、20住と重複する。いずれも新旧関係を判定する実証的資料を欠き、この住居に伴出土器がないために、土器型式による判定もできない。方位 +93° 面積 8.20㎡



19号住居出土遺物





2



3



4



5



6



7



8



9



10

19号住居出土遺物



1



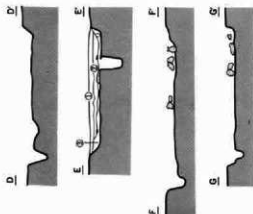
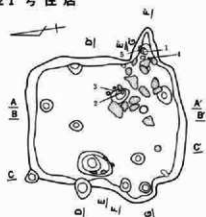
2



20号住居出土遺物

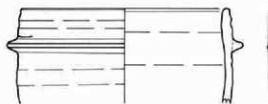
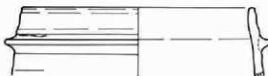
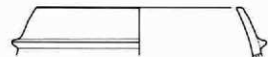
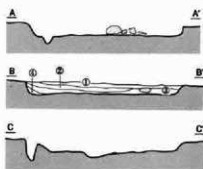
21号住居

遺物観察表 7



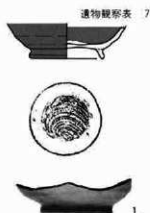
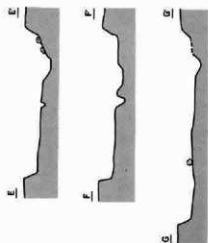
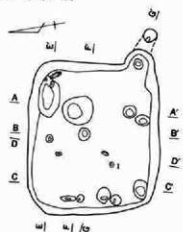
- 1 暗褐色土
- 2 同上
- 3 同上
- 4 同上

L=163.70m



長軸を南北にもち、短軸2.7m、長軸3.4mの小形横長方形住居。基盤層を20cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に主柱穴はない。西壁際南側に検出した2個のピットは性格が不明。竈は東壁の南側に設置する。燃烧部は幅30cm、奥行き30cmで壁外に造り出す壁外型を呈す。焚口部の両側に補強用の石材を据え、火床の中央部に石製支脚を置く。煙道は奥壁の中段から掘り込む。竈周辺部の床面直上より羽釜、竈内の支脚の上より須恵器環が出土する。竈の周辺部より出土する石は、出土レベルが床面より高い。重複がなく単独で占地するが、位置的な関係から、23住との同時存在はあり得ない。方位 +98° 面積 8.70㎡

22号住居



L = 163.70m



- 1 暗褐色土
2 同上

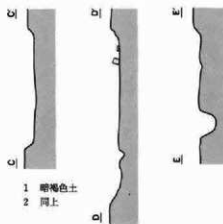
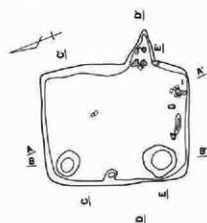


長軸を東西にもち、短軸2.8m、長軸3.2mの小形縦長長方形住居。この遺跡では縦長型の住居の類例が少ない。36住と住居の形状、規模、軸線の傾きが近似しているが、年代がやや異なる。基盤層を30cm掘り込んで床面とする。床面は全体に平坦で整っている。壁内に支柱穴はないと判定した。住居中央部の柱穴様ピットは1本支柱を示す可能性もあるが、位置が住居の対角線の交点よりもやや北側にずれている。竈は東壁の南側に設置する。燃烧部は幅40cm、奥行き40cmで、壁外に造り出す壁外型を呈し、煙道は火床の底面から奥壁の外側50cmまで伸びる。火床の中央部に小さなピットを検出するが、ここには支脚が埋め込まれていたものと考えられ、焚口部の右側にも浅い掘り込みがあることから、焚口部に補強用の石材を使用していたものと推定される。住居中央西側の床面直上より灰胎陶器高台付塊が出土する。他の住居と重複することなく単独で占地するが、位置的な関係から17住との同時存在はあり得ない。

方位 +101° 面積 8.66㎡

23号住居

遺物観察表 7



L=163.70m



1

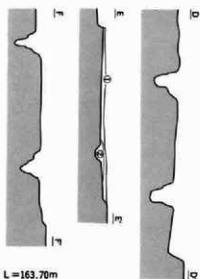


2

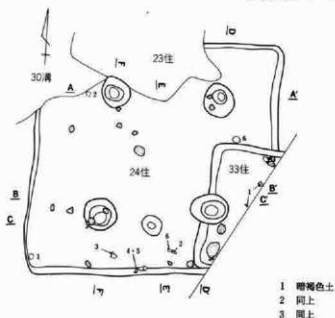


短軸2.6m、長軸3.1mで、長軸を南北にもつ超小形横長長方形住居。基盤層を15cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅40cm、奥行き40cmで壁外に造り出す壁外型を呈し、煙道は奥壁の中段から掘り込む。焚口部の両側を石材で補強し、火床の中央部に石製支脚を置く。貯蔵穴は住居の南西隅と北西隅に、それぞれ直径60cm、深さ30cm、直径50cm、深さ30cmの円形プランで配置する。竈手前の床面直上と覆土内より須恵器坏が出土する。住居の南東部で24住と重複する。この住居が24住を切って構築する土層断面の所見を得、これは伴出する土器の型式でも矛盾がない。また、住居の西側に近接する21住とは、位置的な関係から同時存在はあり得ない。

方位 +108° 面積 7.69㎡

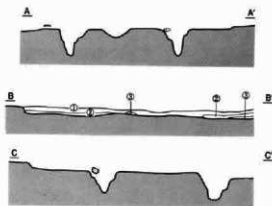


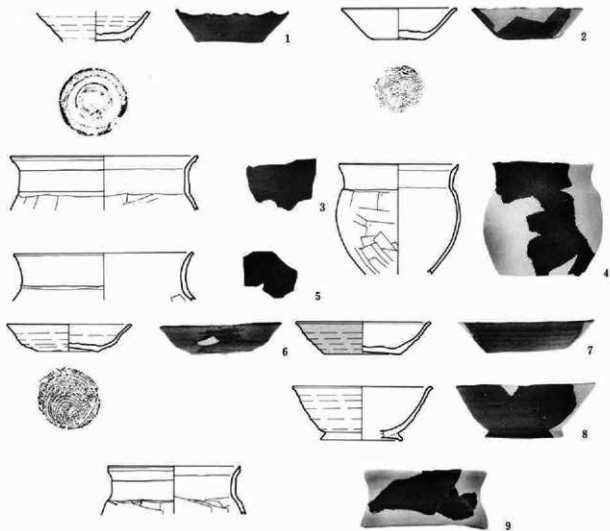
L=163.70m



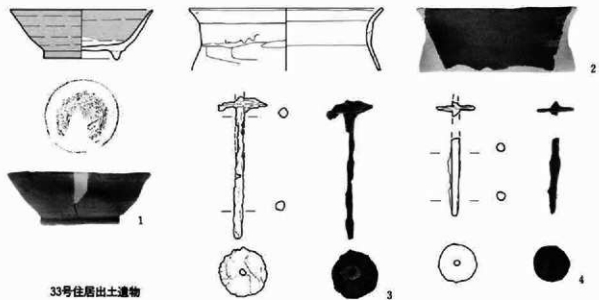
24号住居 短軸4.9m、長軸5.2mの中形正方形住居。基盤層を10cm掘り込んで床面とする。検出した面は平坦で整っている。壁内に4個の主柱穴を配置する。芯々を結ぶ四角形は、短軸2.2m、長軸2.4mで南北に長軸をもつ長方形を示す。検出した壁に竈の痕跡がない。北壁部と東壁部で他の住居と重複するので、このいずれかに設置されていたものと考えられる。南壁際の床面直上より甕、須恵器の高台付埴、坏が出土する。北壁部で重複する23住がこの住居を切って構築する、土層断面の所見を得た。東壁部で重複する33住との新旧関係を判定する実証的資料を欠くが、伴出する土器の型式は24住→33住の順を示す。方位 +89° 面積 25.53m²

33号住居 住居の東半が調査区域外のため全形は確認できず、外形は確定できない。南北軸2.6mを測る。基盤層を20cm掘り込んで床面とする。検出した床面の範囲に主柱穴はなく、竈も検出できない。床面直上より須恵器高台付埴、覆土内より甕、鉄製紡錘車が出土。方位 +92° 面積 測定不可能





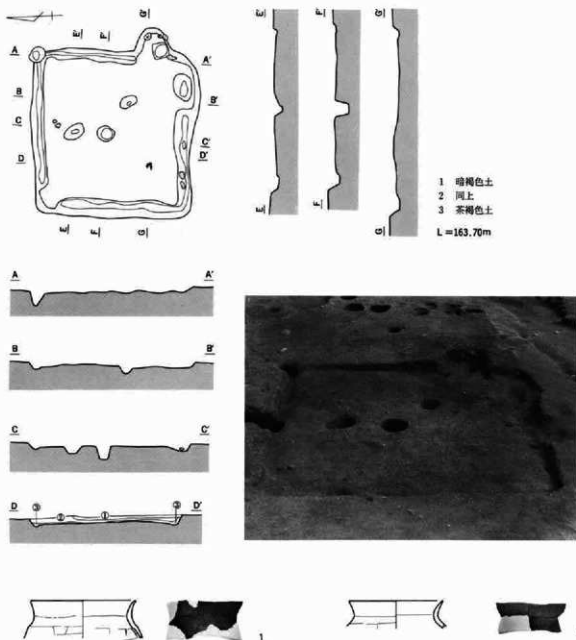
24号住居出土遺物



33号住居出土遺物

25号住居

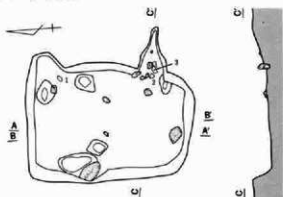
遺物観察表 8



短軸3.4m、長軸3.5mの小形正方形住居。基盤層を10cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に主柱穴はないと判定した。住居の中央部に直径30cm、深さ20cm程の柱穴様のビットを検出するが、位置が住居対角線の交点よりも僅か北側にずれ、近似した形状、規模のビットが住居の北東隅および壁外にも認められることから、この住居に伴うか否か疑わしい。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅60cm、奥行き50cmで壁外に造り出す壁外型を呈す。煙道は検出できない。おそらく奥壁の中段から掘り込むものと考えられる。住居の南東隅に短軸40cm、長軸50cmの不正方形プランで貯蔵穴を設ける。壁溝は幅20cm、深さ5cmで、住居の北西隅と南東隅を除いて巡る。覆土内より壁が出土するが、床面に密着したものはない。他の住居と重複することなく、単独で占地する。方位 +92° 面積 11.89㎡

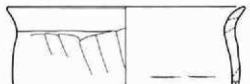
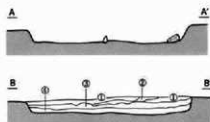
26号住居

遺物観察表 8



- 1 暗褐色土
- 2 暗黄褐色土
- 3 暗褐色土
- 4 同上

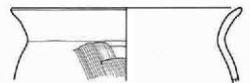
L=163.90m



東壁の北端に幅60cm、奥行き40cmの張り出し部をもつ、短軸2.5m、長軸3.5mの小形横長長方形住居。長軸を南北にもつ。基盤層を30cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に支柱穴はなく、



壁外にも柱穴の痕跡がない。東壁の南側に竈を設置する。燃焼部は幅50cm、奥行き50cmで壁外に造り出す壁外型を呈し、煙道は奥壁の中段から緩やかな勾配で立ち上がる。焚口部の向って左側に補強用の石材を挿出し、右側には石材を据えた掘り込みがある。火床の中央に棒状の石材を埋め込んで支脚とする。東壁際北側の床面直上より須恵器の高台付埴、覆土内より甕、灰軸陶器高台付埴が出土する。西壁際と南壁際



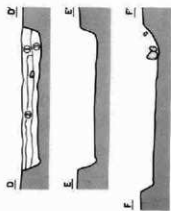
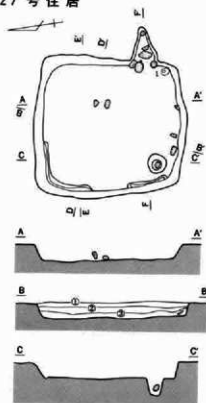
際出土する角閃石安山岩は、住居の埋没過程のもの。他の住居と重複することなく、単独で占地する。



方位 +97° 面積 8.26m²

27号住居

遺物観察表 8



- 1 暗褐色土
- 2 同上
- 3 明茶褐色土

L=163.90m

長軸を南北にもち、短軸2.9m、長軸3.3mの小形横長方形住居。基盤層を30cm掘り込んで床面とする。床面は全体に平坦で良く整っている。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。東壁の南側に竈を設置する。燃焼部は幅30cm、奥行き

30cmで壁外に造り出す壁外型を呈し、煙道は奥壁の中段から緩やかな勾配で立ち上がり、壁外40cmまで伸びる。焚口部の両側に補強用の石材を据える。住居の南西隅に直径40cm、深さ40cmの円形プランで貯蔵穴を設ける。住居南東隅の床面直上より灰軸陶器高台付塊、覆土内より羽釜、高台付塊がそれぞれ出土する。他の住居と重複することなく、単独で占地する。

方位 +98° 面積 8.88㎡



1



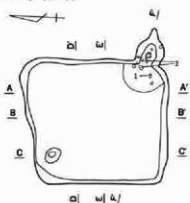
2



3

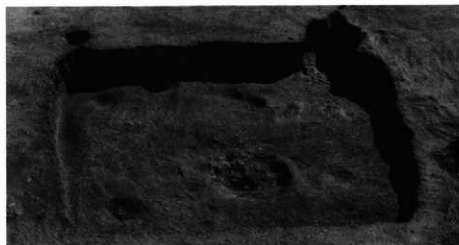
35号住居

遺物観察表 9



L=164.20m

- 1 黄褐色土
- 2 淡黒色土
- 3 黄褐色土

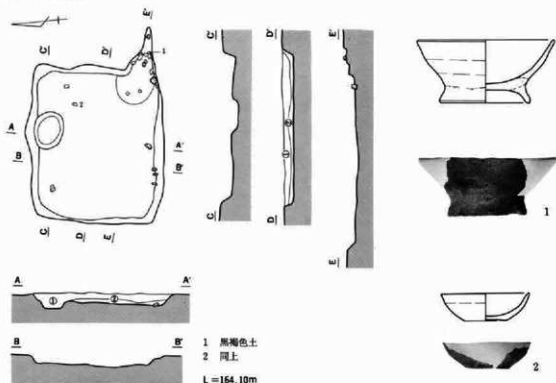


長軸を南北にもち、短軸2.6m、

長軸3.0mの超小形横長長方形住居。基盤層を30cm掘り込んで床面とする。床面は住居中央西側と、住居の北西隅が僅かに掘り込まれているほかは、平坦で良く整っている。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南端に設置する。燃焼部は幅30cm、奥行き40cmで壁外に造り出す

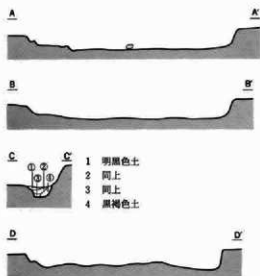
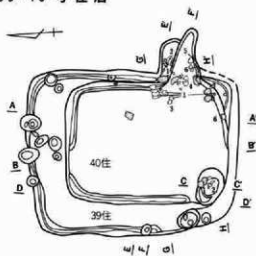
壁外型を呈し、煙道は奥壁の中段から掘り込んで、緩やかな勾配で立ち上がる。火床の中央部に棒状の石材を置いて支脚とする。住居北西隅のピットは掘り込みが浅いため、貯蔵穴とは認定し難い。竈内より羽釜、須恵器高台付埴が出土するほか、覆土内より須恵器高台付埴が出土する。他の住居と重複することなく単独で占地するが、立地する位置的な関係から、近接する36住との同時存在はないものと考えられる。

方位 +87° 面積 7.63㎡

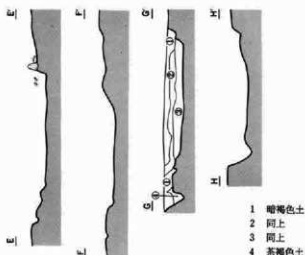


長軸を東西にもち、短軸2.9m、長軸3.3mの小形縦長長方形住居。基盤層を20cm掘り込んで床面とする。床面は全体に平坦で良く整っている。北壁際中央部に検出した直径60cm、深さ10cmの円形ピットは、この住居に伴うか否かの判定ができない。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。東壁の南端に竈を設置する。燃燒部は幅50cm、奥行き50cmで壁外に造り出す壁外型を呈し、煙道は火床の底面から壁外60cmまで、緩やかな勾配で立ち上がる。焚口部の右側に補強用の石材を検出した。竈内より須恵器高台付埴、住居北東部の床面直上より須恵器坏が出土する。他の住居と重複することなく単独で占地するが、立地する位置的な関係から、近接する35住との同時存在は考え難い。方位 +95° 面積 9.02㎡





L=163.90m



39号住居 長軸を南北にもち、短軸3.5m、長軸4.5mの中形横長長方形住居。基盤層を20cm掘り込んで床面とする。壁内に支柱穴はない。東壁の南側に設置する竈は燃焼部を壁外に造り出す壁外型を呈すが、全形は確認できない。覆土内より羽釜、須恵器坏が出土する。重複する40住との新旧関係を判定する実証的資料を欠き、伴出する土器型式でも判定ができない。

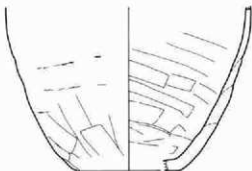
方位 +93° 面積 14.88㎡

40号住居 長軸を南北にもち短軸2.6m、長軸3.7mの小形横長長方形住居。基盤層を30cm掘り込んで床面とする。壁内に支柱穴はない。東壁の南側に設置する竈の燃焼部は幅40cm、奥行き40cmで壁外に造り出す壁外型を呈し、焚口部の両側を石材で補強。竈周辺部の床面直上より羽釜、土釜が出土。方位+97° 面積8.78㎡



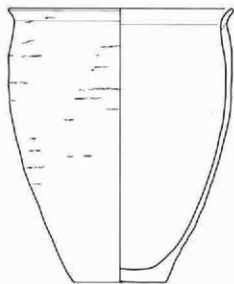


1



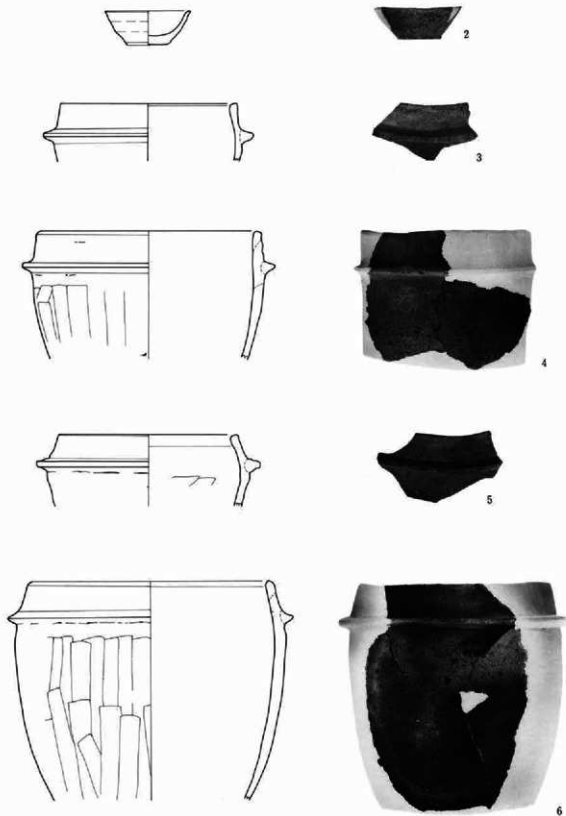
2

39号住居出土遺物



1

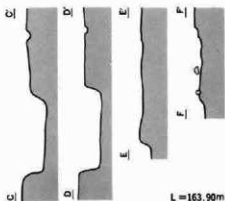
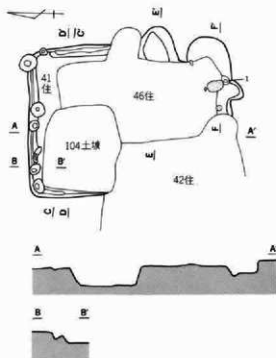
40号住居出土遺物



40号住居出土遺物

41号住居

遺物観察表 11

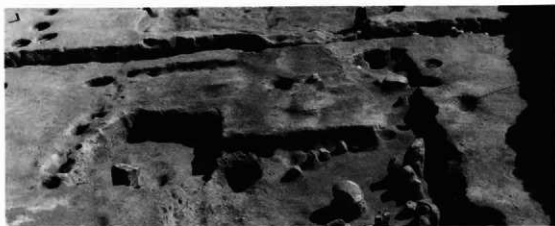


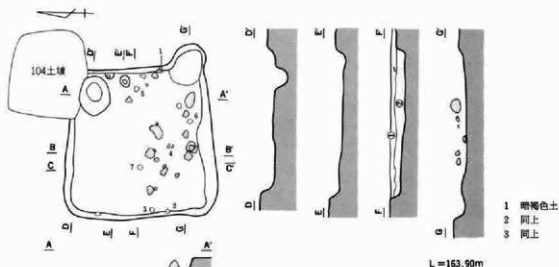
住居の南西部は検出できないが、長軸を南北にもち、短軸3.2m、長軸4.4mの中形横長長方形住居と推定する。基盤層を5cm掘り込んで床面とするが、北壁際と東壁際の一部を検出するにすぎない。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅50cm、奥行き50cm程で壁外に造り出す壁外型を呈す。煙道は検出できない。壁溝は幅10cm、深さ5cmで、検出した北壁と東壁の各壁下に巡る。住居の南西部で42住と、南東部で46住とそれぞれ重複する。いずれも新旧関係を判定する実証的資料を欠くが、伴出する土器の型式は41住→42住の順を示す。46住に伴出土器がないために、46住との新旧関係は判定が不可能。

方位 +90° 面積 測定不可能



1

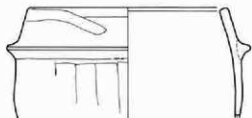


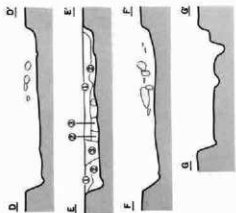


短軸3.1m、長軸3.2mの小形正方形住居。基礎層を20cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。東壁の南端に竈を設置する。燃焼部は幅60cm、奥行き60cmで、半円形状に壁外に造り出す壁外型を呈す。焚口部の両側と火床の中央部に小さな掘り込みを検出することから、焚口部を石材で補強し、火床には支脚を埋め込んでいた可能性が高い。住居の北

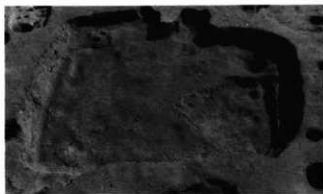
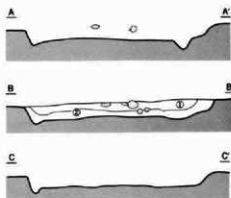
東部に直径60cm、深さ30cmの不整形円形プランで貯蔵穴を設ける。東壁際南側より須恵器高台付埴、西壁際南側より須恵器坏が、それぞれ床面直上より出土するほか、覆土内より羽釜が出土する。この住居が重複する46住、72住、82住を切って構築する土層断面および平面精査の所見を得た。41住との新旧関係を判定する実証的資料を欠くが、伴出する土器の型式は41住→42住の順を示す。方位 +86° 面積 9.70㎡





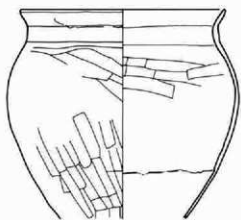


L=163.70m

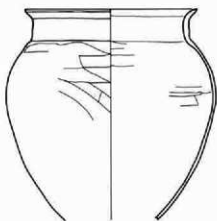


長軸を南北にもち、短軸3.1m、長軸4.0mの小形横長方形住居。東壁の北側に幅1.6m、奥行き60cmの張り出し部様の掘り込みを検出するが、この住居に伴うか否かの判定ができない。基盤層を30cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の中央よりやや南側に設置する。燃烧部は幅50cm、奥行き40cmで壁外に造り出す壁外型を呈す。煙道は検出できない。住居の南東隅に直径40cm、深さ20cmの不整円形プランで貯蔵穴を設ける。壁溝は幅10cm、深さ5cmで、北壁と西壁下に巡る。竈内より甕、竈周辺部の覆土内より須恵器甕が出土する。竈の周辺部を中心に出土する石は出土レベルが床面より高く、住居の埋没過程のもの。住居の北西隅で48住と重複する。この住居が48住を切って構築する土層断面の所見を得た。方位 +109° 面積 11.97㎡

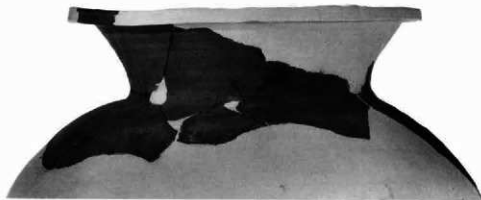
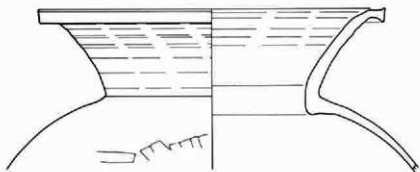




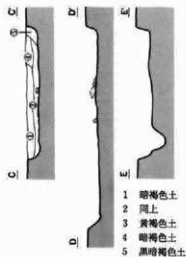
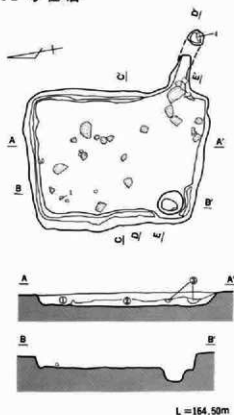
1



2



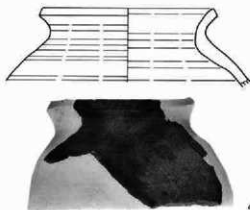
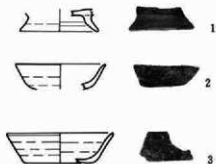
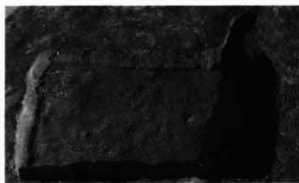
3

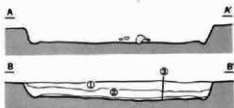
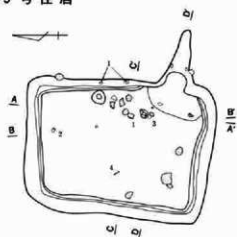


長軸を南北にもち、短軸2.9m、長軸3.7mの小形横長方形住居。基盤層を30cm掘り込んで床面とする。床面は住居の北東部が僅かに高いほかは、平坦で良く整っている。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅30cm、奥行き30cmで壁外に造り出す壁外型を呈し、煙道は火床の底面から1.0m

程水平に伸びた後、垂直に近い状態で立ち上がる。焚口部の向って右側に補強用の石材を検出した。左側にも小さな掘り込みが認められることから、焚口部は竈周辺部の床面に密着して出土する石材で構築されていたものと推定される。火床の中央部に石製支脚を埋め込む。住居の南西隅に直径50cm、深さ30cmの円形プランで貯蔵穴を配置する。壁溝は幅20cm、深さ5cmで、北壁、東壁、西壁の各壁下に巡る。住居北西部の床面直上より須恵器高台付埴、覆土内より須恵器坏、竈の煙出し部内より須恵器の甕がそれぞれ出土する。住居の北半部を中心に出土する石は、出土レベルが床面より高く、住居の埋没過程のもの。他の住居と重複することなく、単独で占地する。

方位 +99° 面積 10.56㎡



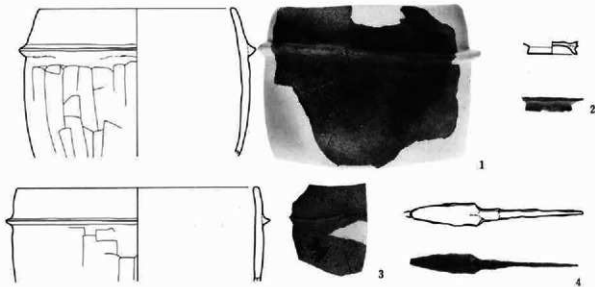


- 1 黒褐色土
2 同上
3 黄褐色土
L=164.40m



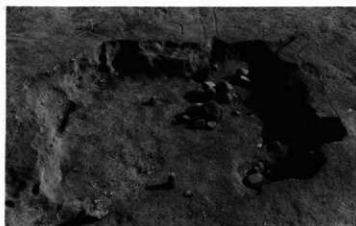
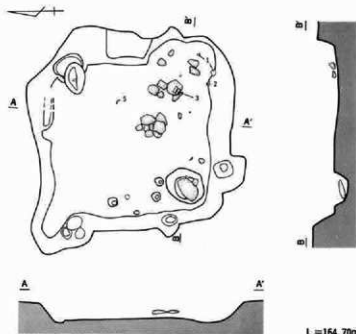
長軸を南北にもち、短軸2.9m、長軸4.0mの整った小形横長方形住居。基盤層を40cm掘り込んで床面とする。床面は全体に平坦で良く整っている。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。東壁の南側に竈を設置する。燃焼部は幅40cm、奥行き40cmで壁外に造り出す壁外型を呈し、煙道は壁の中段から掘り込んで、壁外1.0mまで緩やかな勾配で立ち上がる。壁溝は幅10cm、深さ5cmで、竈の部分を除く各壁下に巡る。住居南東部の床面直上より羽釜、住居中央西側の床面に密着して鉄鎌、覆土内より須恵器高台付境が出土する。また、住居南西部の床面には、偏平な河原石が据えられているが、性格は不明である。住居の東半部で86住と重複する。この住居が86住を切って構築する平面精査の所見を得、これはそれぞれの住居に伴出する土器の型式でも矛盾が認められない。

方位 +93° 面積 11.14㎡

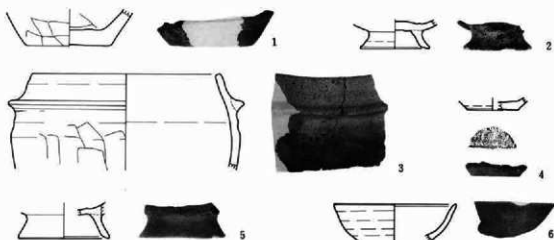


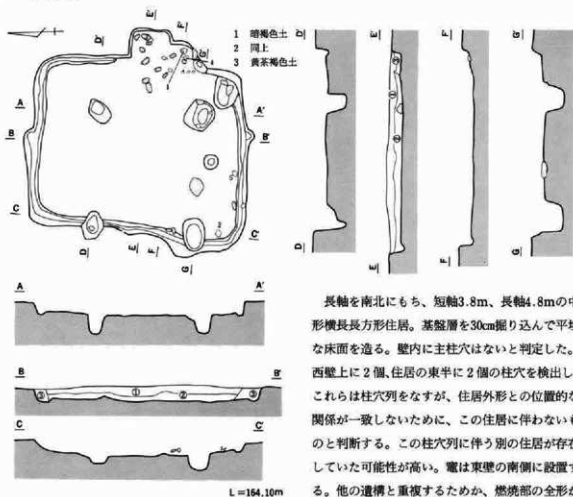
54号住居

遺物観察表 15



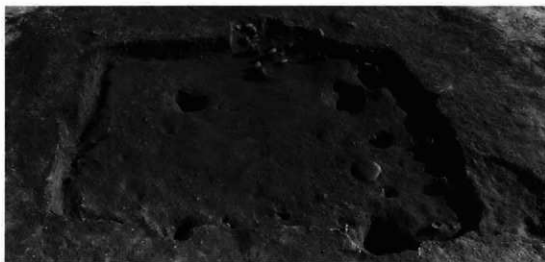
短軸4.1m、長軸4.1mの小形正方形住居。後世の土壌などと重複するため、外形が明確に確認できない。基盤層を40cm掘り込んで床面とする。床面は南壁際の中央部が僅かに掘り込まれている。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部の全形は確認できないが、奥行き50cm程で半円形状に壁外に遣り出す壁外型と推定される。焚口部の向って左側に補強用の石材を検出し、火床の中央に置かれた石材は支脚と考えられる。住居の南西隅に直径70cm、深さ30cmの円形プランで貯蔵穴を設ける。住居南東部の床面直上より羽釜、須恵器高台付埴、覆土内より須恵器坏が出土する。南東部を中心に出土する石は、出土レベルが床面より高く、住居の埋没過程のもの。重複する6号獨立柱建物との新旧関係を判定する資料はない。
方位 +93° 面積 17.26㎡

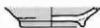


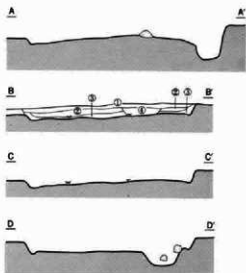
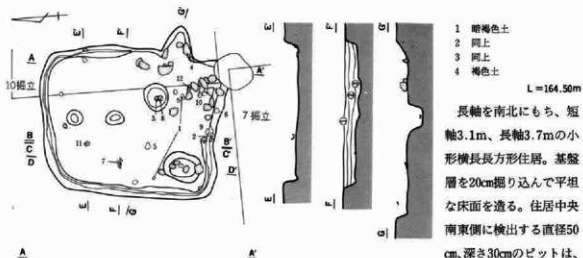


長軸を南北にもち、短軸3.8m、長軸4.8mの中形横長長方形住居。基盤層を30cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に主柱穴はないと判定した。西壁上に2個、住居の東半に2個の柱穴を検出し、これらは柱穴列をなすが、住居外形との位置的な関係が一致しないために、この住居に伴わないものと判断する。この柱穴列に伴う別の住居が存在していた可能性が高い。竈は東壁の南側に設置する。他の遺構と重複するためか、燃焼部の全形が

確認できないが、壁に沿って据えてある向って右側の焚口部の補強材を検出した。燃焼部は壁外に造り出すものと推定される。住居の南東隅に直径60cmほどの不整形円形プランで貯蔵穴を配置し、壁溝は幅15cm、深さ5cmで、東壁の一部を除いて巡る。竈内より甕、須恵器高台付埴、覆土内より須恵器皿がそれぞれ出土する。他の住居と重複することなく、単独で占地する。方位 +94° 面積 17.19m²

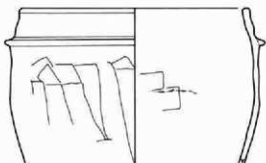
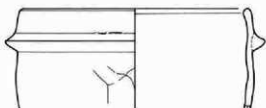


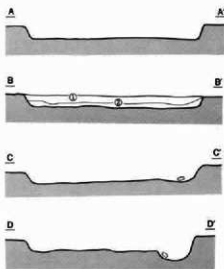
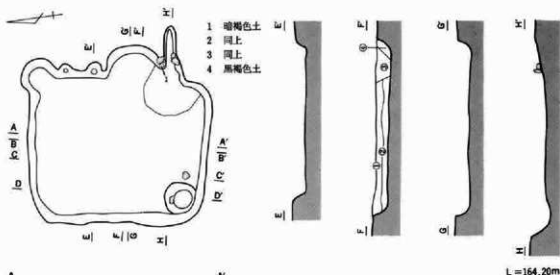




床下土壌と考えられる。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅40cm、奥行き40cmで壁外に造り出す壁外型を呈し、煙道は奥壁の中段から壁を掘り込む。焚口部の両側を石材で補強し、火床の中央部に石製支脚を置く。住居の南西隅に短軸60cm、長軸80cm、深さ30cmの方形プランで貯蔵穴を配置する。壁溝は幅10cm、深さ5cmで、東壁と南壁の一部を除いて巡る。床下土壌内より須恵器坏、住居南半の床面直上より羽釜、須恵器高台付塊が出土する。住居南東部より出土する石は出土レベルが床面より高く、住居の埋没過程のもの。住居の東半で10号掘立柱建物と重複する。新旧関係を判定する資料はない。方位 +9° 面積 11.30㎡



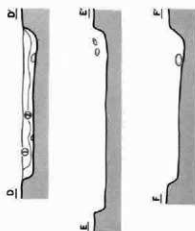
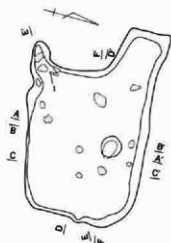




短軸3.6m、長軸3.9mの小形正方形住居。東壁の北端と南半に張り出し部を検出するが、この住居に伴うか否かの判定ができない。基礎層を20cm掘り込んで床面とする。床面は全体に平坦で良く整っている。壁内に支柱穴はなく、壁にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅40cm、奥行き30cmで壁外に造り出す壁外型を呈し、煙道は火床の底面から緩やかな勾配で立ち上がり、奥壁の外側80cmまで伸びる。燃焼部と煙道の境に石材を検出することから、燃焼部の側壁に沿って石材を並べていた可能性が高い。住居の南西隅に直径60cm、深さ20cmの円形プランで貯蔵穴を設ける。竈の石材の上部より羽釜が出土する。他の住居と重複することなく単独で占地するが、住居の北側で近接する66住とは、位置的な関係から同時存在はあり得ない。方位 +97° 面積 12.83㎡

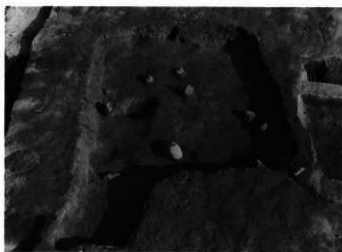


1



1 暗褐色土
2 同上

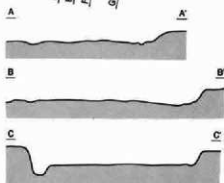
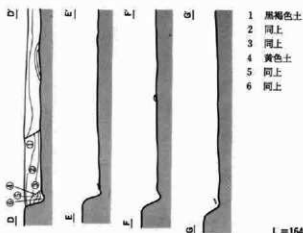
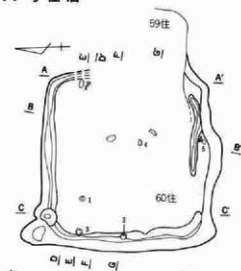
L=164.30m



西壁の北端に幅80cm、奥行き1.0mの張り出し部をもち、短軸2.5m、長軸3.3mの小形縦長長方形住居。長軸を東西にもつ。基盤層を20cm掘り込んで平坦な床面を造る。住居中央北側に直径40cm、深さ40cmのピットを検出した。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。住居の南西隅を斜めに掘り込んで竈を設置する。燃焼部は幅40cm、奥行き40cmで壁外に造り出す壁外型を呈し、煙道は火床の底面から水平に40cm伸びて、垂直に近い状態で立ち上がる。焚口部の両側に補強用の石材を検出した。竈内の床面直上より羽釜が出土する。住居の南西部で85住と、北西部で89住とそれぞれ重複する。この住居が85住を切って構築する平面精査の所見を得、伴出する土器の型式でも矛盾がない。89住との新旧関係を判定する資料を欠き、89住に伴出土器がないために土器型式による判定もできない。方位 -97° 面積 8.74m²(張り出し部含む)



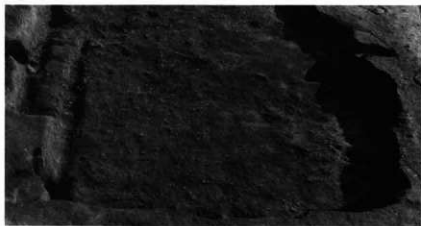
1

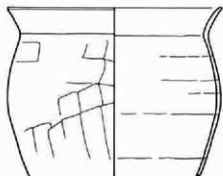
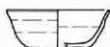
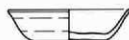


東壁部は検出できないが、一辺3.9mの小形正方形住居と推定する。南壁部は直線的な壁が検出できない。218住、227住と住居の形状、規模、軸線の傾きが近似し、年代も近い。基盤層を30cm掘り込んで床面とする。床面は平坦で良く整っており、重複する59住とのレベル差がほとんどない。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。検出した壁に竈の痕跡を示す焼土などは一切検出で

きないことから、竈は東壁に設置されていた可能性が高い。壁溝は幅15cm、深さ5cmで、北壁と西壁および南壁の一部に巡り、南壁部については壁の線に沿っていない。住居北西部の床面直上より須恵器環、西壁際中央部の床面直上より須恵器高台付埴、住居中央南側の床面直上より須恵器環がそれぞれ出土するほか、覆土内より甕が出土する。住居の東半で59住と重複する。59住がこの住居を切って構築する土層断面の所見を得たが、それぞれの住居に伴出する土器の型式は59住→60住の順を示して逆転している。また、住居の西側に近接する84住との重複はないが、極めて近接した位置関係から、同時存在はあり得ないものと考えられる。

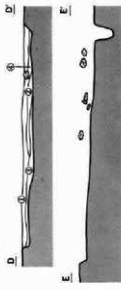
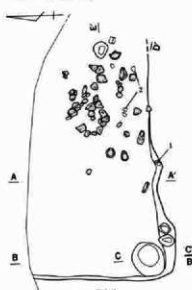
方位 +92° 面積 13.76㎡ (推定)





12

61号住居



- 1 黒褐色土
- 2 褐色土
- 3 黒色土
- 4 褐色土

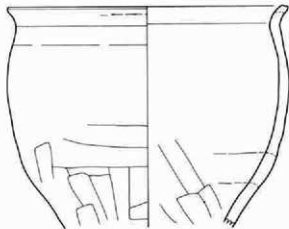
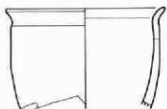
L=164.30m



- 1 黒色土
- 2 黒褐色土
- 3 黒色土

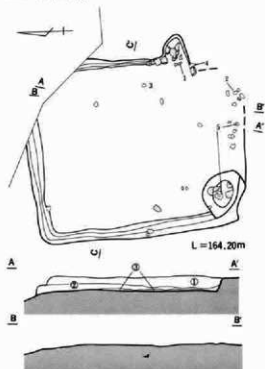
住居の北半が調査区域外のため、西壁と南壁の一部を検出するのみで外形は確定できない。基盤層を20cm掘り込んで床面とする。検出した床面は平坦で整っている。住居の南西隅に直径60cm、深さ30cmの円形ピットを検出した。検出した床面の範囲に主柱穴はなく、竈も検出できない。南壁際の覆土内より土釜が出土する。住居の東半を中心に出土する角閃石安山岩は出土レベルが床面より高く、住居の埋没過程のもの。住居の南東部で62住と重複する。この住居が62住を切って構築する土層断面の所見を得た。

方位 +90° 面積 測定不可能

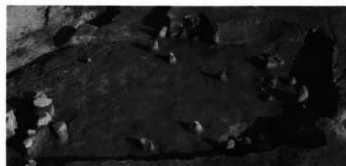


62号住居

遺物観察表 18

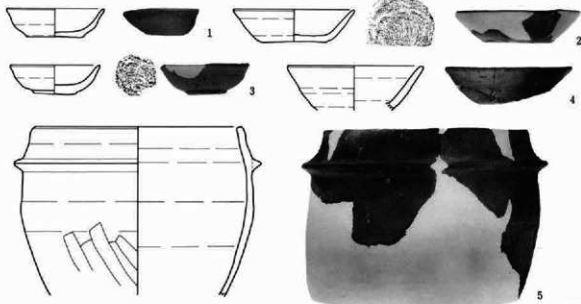


- 1 黒色土
- 2 同上
- 3 同上

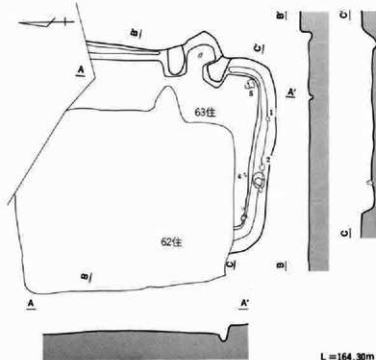


長軸を南北にもち、短軸3.8m、長軸4.7mの中形横長方形住居。北東隅と南東隅は検出できない。基盤層を25cm掘り込んで、平坦な床面を造る。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。焼坑部は幅40cm、奥行き50cmで、半円形状に壁外に造り出す壁外型を呈す。原位置は保っていないが、竈内より出土する石材は補強材として使用されていたものと考えられる。煙道は検出できない。住居の南西隅に直径80cmの不整形円形プランで貯蔵穴を設ける。壁溝は幅20cm、深さ5cmで、南壁を除く壁下に巡る。竈周辺部の床面直上より須恵器の坏、高台付埴、貯蔵穴内より羽釜がそれぞれ出土する。住居の北西部で61住と、南東部で63住とそれぞれ重複する。この住居が63住を切り、61住がこの住居を切って構築する土層断面の所見を得、伴出する土器の型式とも矛盾がない。

方位 +86° 面積 17.05㎡ (推)

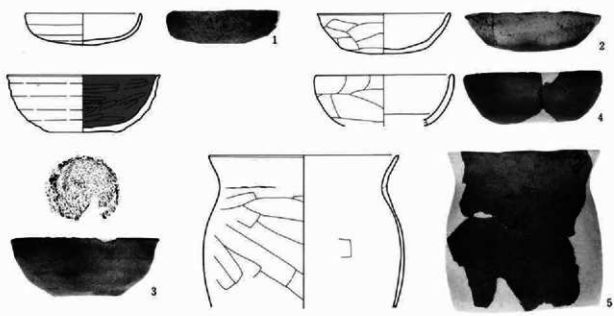


63号住居



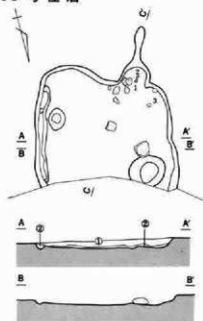
住居の西半部で他の住居と重複し、北壁部が調査区域外のため、東壁と南壁を検出するのみで、外形は確定できない。基盤層を25cm掘り込んで床面とする。検出した範囲の床面は平坦で良く整っており、重複する62住との床面のレベル差がほとんどない。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。壁内に造り付けた長さ30cmの袖部を検出した。燃焼部は幅60cm、奥行き60cmで、その半分を壁外に造り出す。煙道は検出できない。壁溝は幅20cm、深さ10cmで、竈の部分を除く各壁下に巡る。南壁際西側の床面直上より坏、住居南東隅の床面直上より壺が出土する。住居の西半で62住と重複する。この住居が62住に切られる土層断面の所見を得、伴出する土器の型式でも矛盾がない。

方位 +96° 面積 測定不可能



68号住居

遺物観察表 19



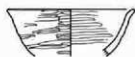
c

1 暗褐色土

2 同上

L=163.90m

北壁部が調査区域外のため全形は確認できず、外形は確定できない。南壁に竈をもつ住居の類例は、この住居も含めて3例あるのみ(114住、119住)。基盤層を15cm掘り込んで床面とする。床面は全体に平坦で良く整っている。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は南壁の西側に設置する。燃燒部は幅40cm、奥行き40cmで壁外に造り出す壁外型を呈し、煙道は火床の底面から緩やかに立ち上がり、奥壁の外側80cmまで伸びる。焚口部の両側に小さな掘り込みを検出することから、焚口部は石材で補強していたものと推定される。住居の北西隅に直径60cmの円形プランで貯蔵穴を設ける。住居南西隅の床面直上より須恵器坏が出土する。単独で占地するが、近接する74住とは立地する位置関係から同時存在はあり得ない。方位 -167° 面積 測定不可能



1

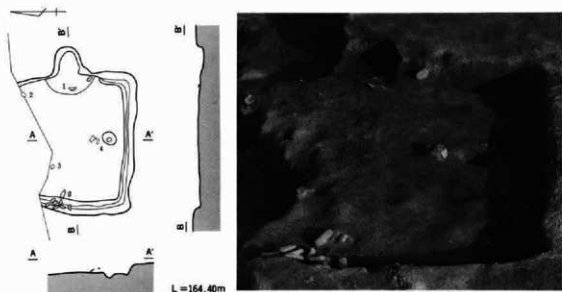


2



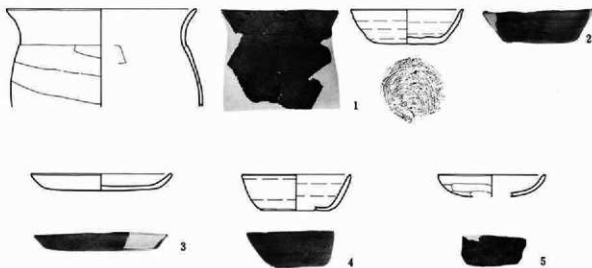
3

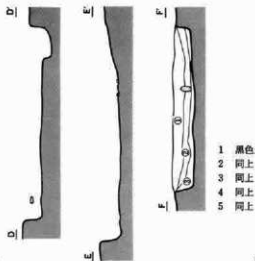
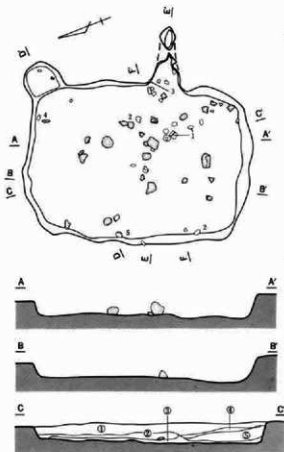




住居の北半が調査区域外のため全形は確認できず、外形は確定できない。東西軸3.0mを測る。基盤層を20cm掘り込んで床面とする。床面は全体に小さな起伏が多く、平坦な面は少ない。南壁際中央に直径25cm、深さ10cmの円形ピットを検出するが、この住居に伴うか否かの判定ができない。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁に設置する。燃焼部は幅50cm、奥行き50cmで壁外に造り出す壁外型を呈す。煙道は検出できない。壁溝は幅20cm、奥行き5cmで、西壁と南壁の壁下に巡る。竈の手前より裏、住居北西部より須恵器坏、住居中央西側より盤、住居中央南側より須恵器坏が、いずれも床面直上より出土するほか、覆土内より坏が出土する。住居の北東部で70住と重複する。新旧関係を判定する実証的資料を欠き、70住に伴出土器がないために、土器型式による新旧関係の判定もできない。また、住居の西側で10号掘立柱建物と近接し、立地する位置的な関係から同時存在はないものと考えられる。

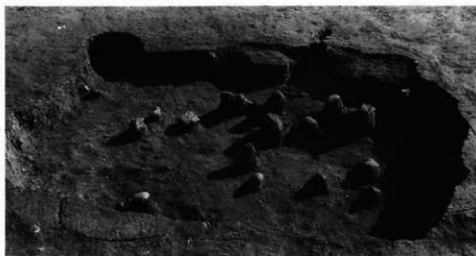
方位 +91° 面積 測定不可能

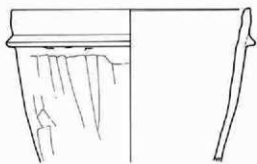




短軸3.4m、長軸4.8mで、長軸を南北にもつ中形横長方形住居。東壁の北端に検出した張り出し部様のピットは、この住居に伴うか否かの判定ができない。基盤層を40cm掘り込んで床面とする。床面は全体に平坦で良く整っている。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅60cm、奥行き50cm

で壁外に造り出す壁外型を呈し、煙道は火床の底面から緩やかな勾配で立ち上がり、奥壁の外側70cmまで伸びる。竈の周辺部より羽釜、須恵器環、北壁際東側の床面直上より須恵器環が、いずれも床面直上より出土するほか、西壁際中央部の覆土内より須恵器高台付埴が出土する。住居の西側で109住と、北半で110住とそれぞれ重複する。この住居が109住、110住を切って構築する土層断面の所見を得、これは伴出する土器の型式でも矛盾がない。方位 +111° 面積 14.83㎡

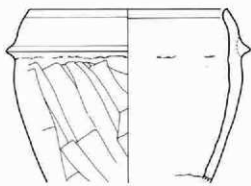




1



2



3



4



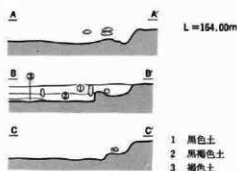
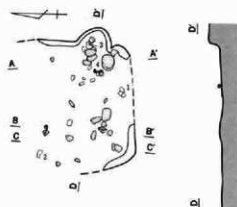
5



6

73号住居

遺物観察表 20

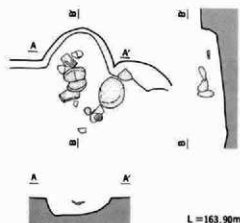


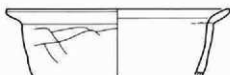
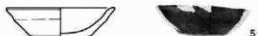
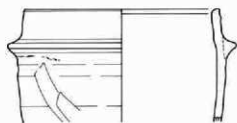
- 1 黒色土
- 2 黒褐色土
- 3 褐色土

住居の北半部が検出できないために全形は確認できず、外形が確定できない。東西軸2.8mを測る。南壁に検出した張り出し部は、壁際から出土する須恵器杯の型式が79住に伴出する土器の型式と一致するため、この住居に伴うものではないと判定した。基盤層を40cm掘り込んで床面とするが、生活面は明確に検出できない。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。

燃焼部は幅60cm、奥行き40cmで、半円形状に壁外に造り出す壁外型を呈す。煙道は検出できない。南壁際中央部より羽釜、竈手前より須恵器杯がそれぞれ床面直上より出土するほか、覆土内より羽釜、須恵器杯が出土する。竈の周辺部および住居の南半部より出土する多量の石は、出土レベルがいずれも床面より高く、住居の埋没過程で入り込んだものと考えられるが、性格が不明である。住居の大半が79住と重複する。この住居が79住を切って構築する平面精査の所見を得、これはそれぞれの住居に伴出する土器の型式でも矛盾が認められない。

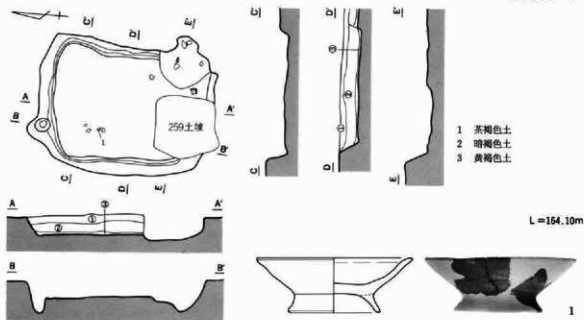
方位 +85° 面積 測定不可能



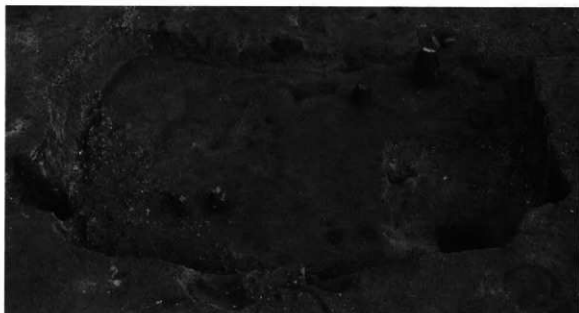


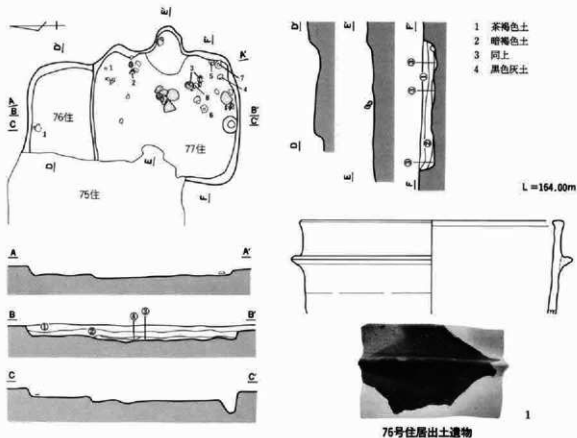
75号住居

遺物観察表 20



長軸を南北にもち、短軸2.7m、長軸3.8mの小形横長方形住居。基盤層を40cm掘り込んで床面とする。床面は小さな起伏が多く、住居の南西部を重複する土壇に切られる。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。77住との重複部にあたるために明確に確認できないが、燃烧部は幅50cm、奥行き40cmで壁外に造り出す壁外型と推定される。煙道は検出できない。壁溝は幅10cm、深さ5cmで、竈の部分と南壁を除く壁下に通る。住居北西部の床面直上より須恵器高台付埴が出土する。住居の東半で76住、77住とそれぞれ重複する。この住居が77住を切って構築する土層断面の所見を得、伴出する土器の型式でも矛盾がない。76住との新旧関係を判定する実証的資料を欠くが、伴出する土器の型式は77住→76住→75住の順を示す。方位 +90° 面積 9.47㎡





76号住居 住居の北東部を検出するのみで、外形は確定できない。基盤層を10cm掘り込んで床面とする。壁内に主柱穴はなく、竈も検出できない。北壁際の床面直上より羽釜が出土する。重複する75住、77住との新旧関係を判定する実証的資料を欠くが、伴出する土器の型式は77住→76住→75住の順を示す。方位+91°

77号住居 長軸を南北にもち、短軸2.7m、長軸3.2mの小形横長方形住居。基盤層を30cm掘り込んで平坦な床面を造る。南壁際に直径30cm、深さ30cmのピットを検出した。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の中央に設置する。燃焼部は幅60cm、奥行き50cmで、半円形状に壁外に遡り出す壁外型を呈す。煙道は検出できない。住居南東隅の床面直上より甕、須恵器の坏が出土する。住居中央東側より出土する石は出土レベルが床面より高く、住居の埋没過程のもの。方位+93° 面積 8.27㎡

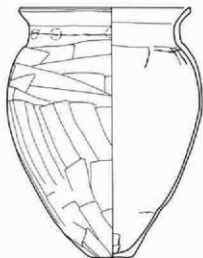




1



2



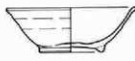
3



4



5



6



7

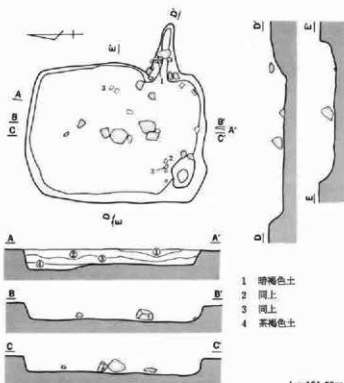


8

77号住居出土遺物

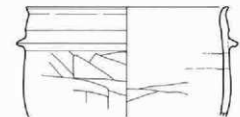
78号住居

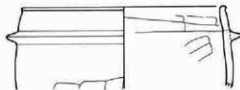
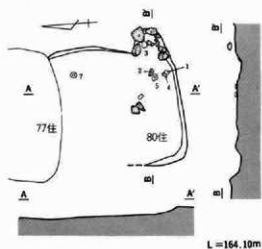
遺物観察表 21



長軸を南北にもち、短軸3.0m、長軸3.8mの小形横長方形住居。他の住居と重複する東壁の北半には、石材を積んで壁を構築する。基盤層を30cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅40cm、奥行き40cmで壁外に造り出す壁外型を呈し、煙道は奥壁の中段から掘り込んで、壁外80cmまで緩やかな勾配で立ち上がる。焚口部の両側に石材で補強し、煙道の入り口部に両側に据えた石材の間に天井石を横架して構築する。住居の南西隅に直径60cm、深さ20cm程の不整形円形プランで貯蔵穴を配置する。竈内より羽釜が出土するほか、覆土内より須恵器の坏、高台付埴、灰釉陶器高台付埴が出土する。この住居が重複する80住、81住を切って構築する平面精査の所見を得た。伴出する土器の型式は81住→80住→78住の順を示して、平面精査の所見と矛盾することがない。

方位 +91° 面積 10.36㎡

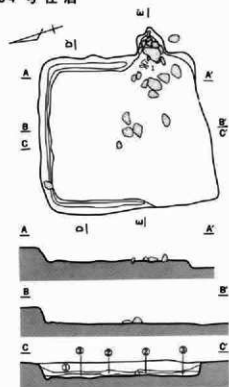




北壁部が検出できないために住居の全形が確認できず、外形は確定できない。東西軸2.6mを測る。基盤層を10cm掘り込んで床面とする。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南端に設置する。燃烧部は幅40cm、奥行き50cmで壁外に造り出す壁外型を呈し、焚口部の両側を石材で補強するほか、燃烧部の内側に石材を並べる。煙道は検出できない。竈周辺部の床面直上より羽蓋、須恵器の坏、高台付塊が出土する。住居の北半で77住と、南半で78住、81住とそれぞれ重複する。77住がこの住居を切り、この住居が81住を切って構築する平面精査の所見を得たが、77住との関係については伴出する土器の型式が示す77住→80住の順序と逆転している。78住との新旧関係を判定する実証的資料はないが、伴出する土器の型式は81住→77住→80住→78住の順を示す。方位 +88° 面積 測定不可能

84号住居

遺物観察表 23



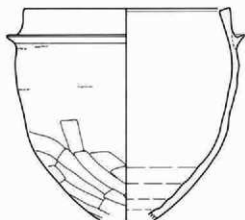
L=154.40m

- 1 黒褐色土
- 2 同上
- 3 同上



長軸を南北にもち、短軸3.2m、長軸3.6mのやや不整形な小形横長長方形住居。基盤層を30cm掘り込んで床面とする。床面は全体に平坦で良く整っている。壁内に支柱穴はなく、壁内にも柱穴の痕跡がない。東壁の両側に竈を設置する。燃焼部は幅50cm、奥行き40cm程で、壁外に造り出す壁外型を呈す。煙道は東壁の中段から壁を掘り込んでいる。焚口部の向って右側に補強用の石材を検出した。また、竈周辺部の床面に密着した河原石は、燃焼部、煙道部の天井石として使用されていた可能性が高い。壁溝は住居北半の各壁下に幅10cm、深さ5cmで巡る。竈焚口部の床面直上より羽釜が出土する。住居の南半で88住と重複する。この住居が88住を切って構築する土層断面の所見を得、これは伴出する土器の型式とも矛盾がない。また、住居の西側に近接する87住とは、立地する位置関係から同時存在はあり得ない。

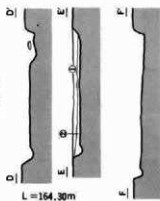
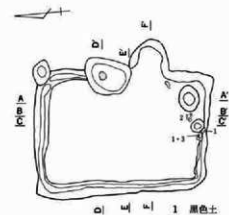
方位 +102° 面積 11.52㎡



1

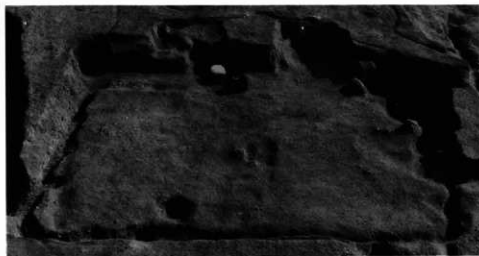
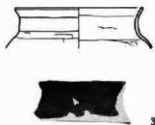
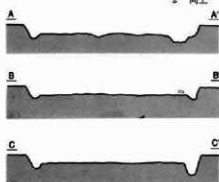
85号住居

遺物観察表 23

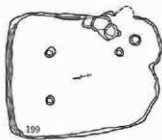


長軸を南北にもち、短軸2.6 m、長軸3.7mの小形横長方形住居。基盤層を20cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に支柱はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。東壁の南側に竈を設置する。燃烧部は幅50cm、奥行き60cmで壁外に造り出す壁外型を呈す。煙道は検出できない。住居の南東隅に直径50cm、深さ20cmの円形プランで貯蔵穴を配置する。壁溝は幅15cm、深さ10cmで、住居の南東隅と竈の部分を除く各壁下に巡る。南壁際中央部の床面直上より坏、壺が出土する。北壁部で58住と、南壁部で86住、87住とそれぞれ重複する。58住がこの住居を切って構築する平面精査の所見を得た。86住、87住との新旧関係を判定する実証的資料を欠くが、伴出する土器の型式は87住→85住→86住の順を示す。

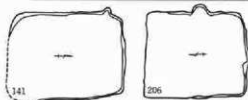
方位 +96° 面積 9.57㎡



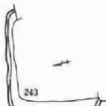
10世紀代の竪穴住居分布



超大形横長長方形



大形横長長方形



大形縦長長方形



中形正方形



中形横長長方形

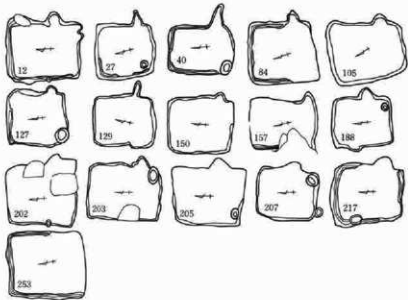
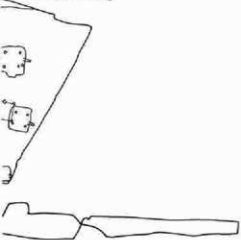
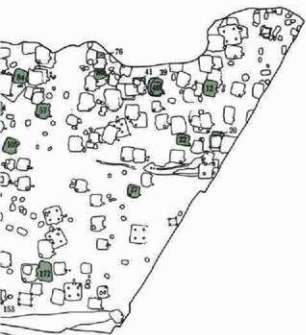


中形縦長長方形



小形正方形





小形横長長方形



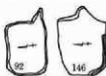
小形縦長長方形



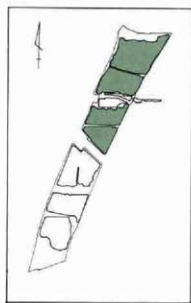
超小形正方形



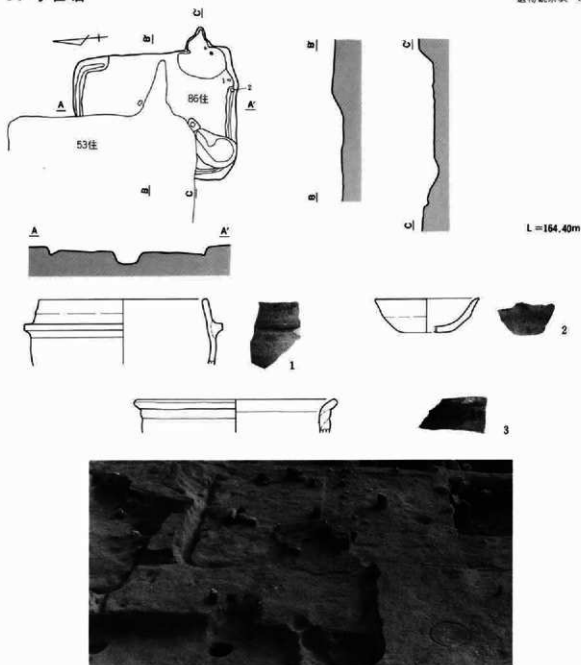
超小形横長長方形



超小形縦長長方形



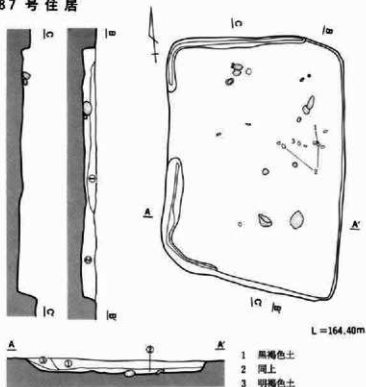
挿図10 10世紀代の整穴住居分布図



住居の北西部は検出できないが、短軸2.7m、長軸3.4mで、長軸を南北にもつ小形横長方形住居。基礎層を10cm掘り込んで床面とする。検出した範圍の床面は平坦で良く整っている。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。東壁の両側に竈を設置する。燃焼部は幅40cm、奥行き30cmで壁外に造り出す壁外型を呈し、煙道は火床の底面から約30°の角度で立ち上がる。壁溝は幅20cm、深さ5cmで、検出した壁下に巡る。南壁際東側の床面直上より羽釜、須恵器坏、覆土内より土釜がそれぞれ出土する。住居の西半で53住と、北東隅で85住と、東壁部で87住とそれぞれ重複する。この住居が87住を切り、53住がこの住居を切って構築する土層断面の所見を得、これは伴出する土器の型式とも矛盾がない。85住との新旧関係を判定する実証的資料を欠くが、伴出する土器の型式は85住→86住の順を示す。方位 +90° 面積 9.23㎡ (推定)

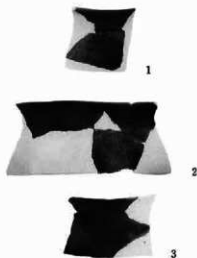
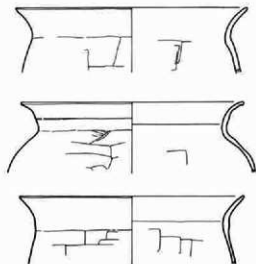
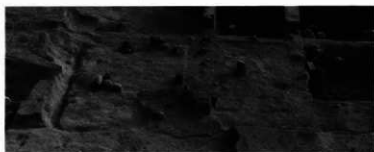
87号住居

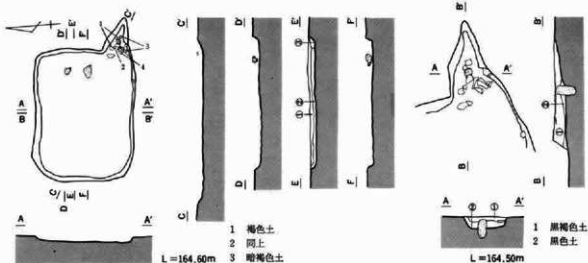
遺物観察表 23



長軸を南北にもち、短軸3.8m、長軸5.3mの不整形な中形横長方形住居。基盤層を30cm掘り込んで床面とする。床面は小さな浅い起伏が多いが、全体的には平坦で整っている。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。検出した壁に竈の痕跡を示す焼土などが一切ないことから、竈は88住との重複部にあたる東壁に設置されていたものと推定される。貯蔵穴はなく、壁溝は幅10cm、深さ5cmで、北壁、西壁、南壁の一部に検出した。住居中央東側の床面直上より竈が出土する。北壁部で85住と、西壁部で86住と、住居の東半で88住とそれぞれ重複する。この住居が88住を切り、86住がこの住居を切って構築する土層断面の所見を得、伴出する土器の型式でも矛盾が認められない。また、85住との新旧関係を判定する実証的資料を欠くが、伴出する土器の型式は87住→85住の順を示す。

方位 +97° 面積 19.54㎡



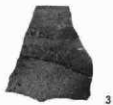
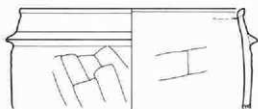
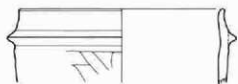


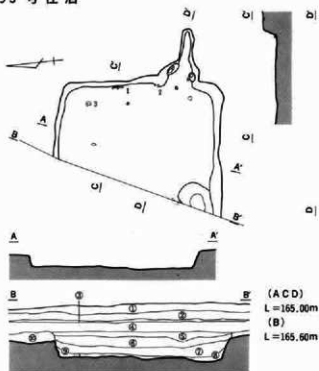
長軸を東西にもち、短軸2.1m、長軸2.8mの整った超小形縦長方形住居。この遺跡で検出した縦長型の住居のなかで最も規模が小さく、南側に近接して立地する156号住居に、住居の形状、規模、軸線の傾きが近似している。基盤層を10cm掘り込んで床面とする。床面は南壁際が住居の中央部

よりやや深く掘り込まれているほかは、平坦で良く整っている。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅50cm、奥行き40cmで壁外に造り出す壁外型を呈し、煙道は火床の底面から掘り込んで、奥壁の外側40cmまで緩やかな勾配で立ち上がる。火床の中央奥側に柱状の河原石を埋め込んで支脚とする。貯蔵穴および壁溝は検出できない。竈内の床面直上より羽釜が出土するほか、覆土内より灰釉陶器の壺が出土する。東壁際で出土する2個の石は、出土レベルが床面より僅かに高い。東壁部で12号掘立柱建物と重複する。新旧関係を判定する実証的資料を欠き、12号掘立柱建物に伴出土器がないために、土器型式による新旧関係の判定もできない。

方位 +95° 面積 5.76㎡



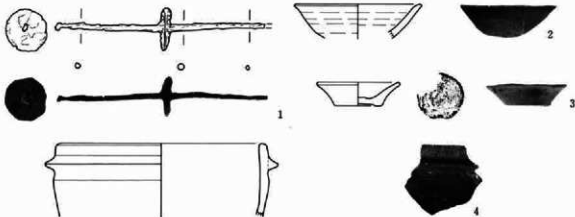


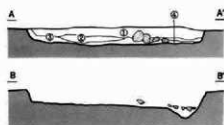
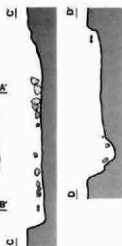
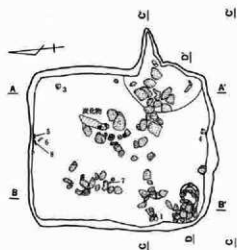


- | | |
|----------|--------|
| 1 表土 | 6 黒色土 |
| 2 現代水田土壌 | 7 同上 |
| 3 現代水田床土 | 8 黒褐色土 |
| 4 黒褐色土 | 9 同上 |
| 5 黒色土 | 10 同上 |

西壁部が検出できないために全形が確認できず、外形は確定できない。南北軸3.6mを測る。基盤層を30cm掘り込んで床面とする。検出した範囲の床面は平坦で良く整っている。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。燃烧部は幅60cm、奥行き60cmで壁外に造り出す壁外型を呈し、煙道は奥壁の中段から掘り込んで、壁外60cmまで緩やかな勾配で立ち上がる。焚口部の両側と奥壁の両側に小さな掘り込みを検出することから、燃烧部内の四隅を石材で補強していたものと推定される。南壁際西側に検出したピットは床面からの深さが10cmで、貯蔵穴とは考え難い。東壁際北側の床面に密着して鉄製紡錘車、東壁際の床面直上より須恵器の坏、坑、竈内より羽釜がそれぞれ出土する。他の住居と重複することなく、調査区域の北西部に単独で占地する。

方位 +97° 面積 測定不可能

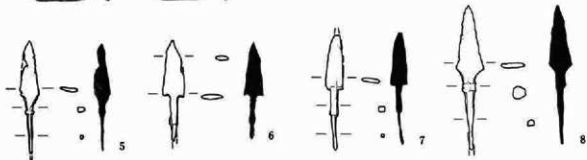
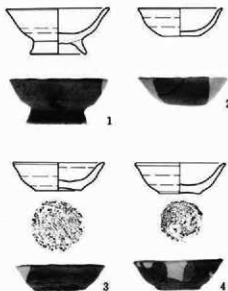




- 1 黒色土
- 2 同上
- 3 同上
- 4 炭火物

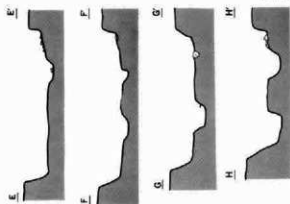
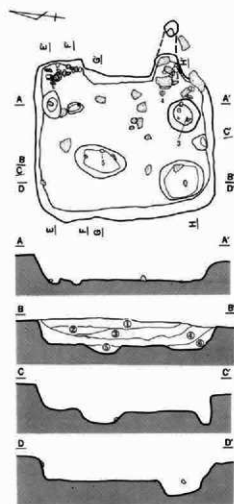
L=164.00m

長軸を南北にもつ短軸3.4m、長軸4.0mの小形横長方形住居。基盤層を30cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。東壁の南側に竈を設置する。燃焼部は幅40cm、奥行き40cmで壁外に造り出す壁外型を呈し、煙道は奥壁の中段から掘り込んで、壁外60cmまで伸びる。貯蔵穴は住居の南西隅に直径40cm、深さ20cmの円形プランで配置する。西壁際南側の床面に密着して須恵器高台付壇、南壁際中央部の床面直上より須恵器坏、北壁際中央より鉄鎌が出土する。多量に出土する石は出土レベルが床面より高く、住居の埋設過程のもの。この住居が162住を切って構築する平面精査の所見を得た。

方位 +95° 面積 12.99m²

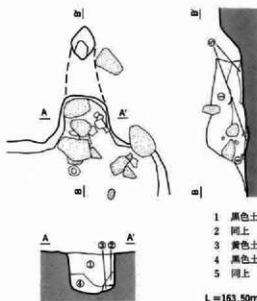
97号住居

遺物観察表 26



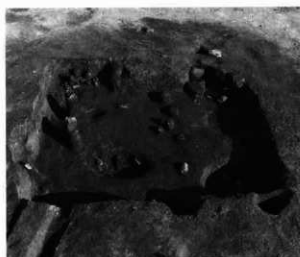
- 1 赤褐色土
- 2 黒色土
- 3 赤褐色土
- 4 黒色土
- 5 黒褐色土
- 6 同上

L=163.90m

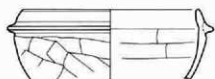


- 1 黒色土
- 2 同上
- 3 黄色土
- 4 黒色土
- 5 同上

L=163.50m

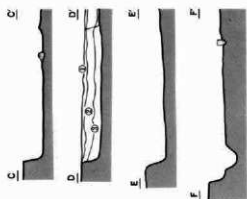
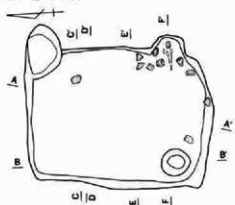


東壁の北端に幅1.0m、奥行き50cmの張り出し部をもち、短軸3.0m、長軸3.8mで長軸を南北にもつ小形横長長方形住居。基盤層を50cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に支柱穴はない。東壁の南側に竈を設置する。燃焼部は幅60cm、奥行き50cmで壁外に造り出す壁外型を呈し、煙道は火床の底面から水平に50cm伸びて、約45°の角度で立ち上がる。竈内より出土する河原石は、天井部に使用されていたものと推定される。貯蔵穴は住居の南東隅に直径60cm、深さ30cmの円形プランで設ける。竈周辺部の床面直上より須恵器の坏、羽釜が出土する。竈の煙出し部で17住と重複する。新旧関係を判定する実証的資料を欠き、17住に伴う土器がないために土器型式による判定もできない。 方位 +80° 面積 11.36m² (張り出し部含む)



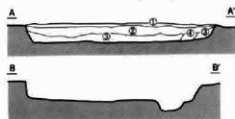
98号住居

遺物観察表 26

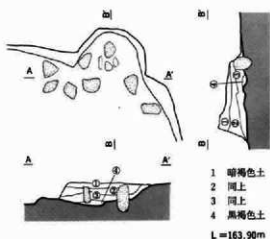


- 1 黒色土
- 2 同上
- 3 同上
- 4 黄褐色土

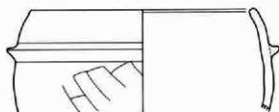
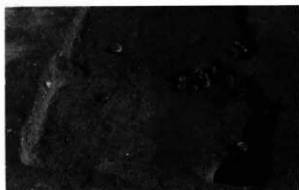
L=164.00m



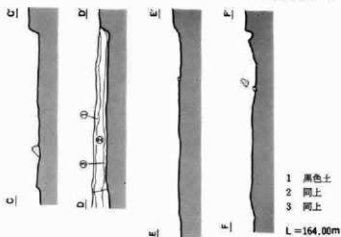
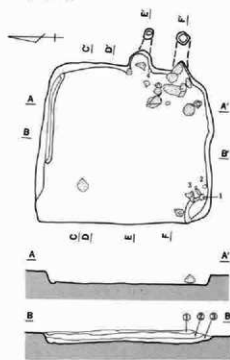
長軸を南北にもつ短軸3.0m、長軸4.0mの小形横長長方形住居。基盤層を40cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に支柱穴はない。竈は東壁の両側に設置する。燃烧部は幅60cm、奥行き40cmで壁外に造り出す壁外型を呈す。焚口部の同側に補強用の石材を据え、火床の中央に石製支脚を埋め込む。煙道は検出できない。貯蔵穴は住居の南西隅に直径50cm、深さ20cmの円形プランで設ける。竈内より羽釜が出土。東壁部で99住と重複する。この住居が99住を切って構築する平面精査の所見を得、伴出する土器型式でも矛盾がない。方位 +92° 面積 11.38㎡



- 1 暗褐色土
 - 2 同上
 - 3 同上
 - 4 黒褐色土
- L=163.90m

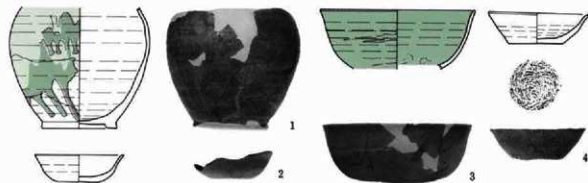
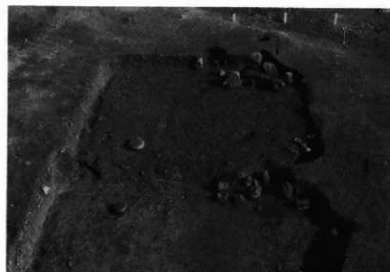


1



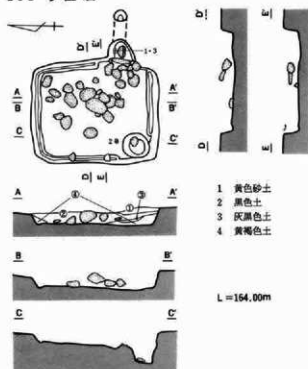
短軸3.4m、長軸3.7mの小形正方形住居。基盤層を30cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。東壁の南側に2個の竈を検出した。いずれも燃焼部は幅40cm、奥行き40cmで壁外に造り出す壁外型で、煙道は奥壁の外側60cmまで伸びる。南側の竈の周辺部から構築材である石材が床面に密着して出土することから、北側の竈から南側の竈への造り替えと考えられる。住居南西部より須恵器坏、灰釉陶器塊、東壁際中央より須恵器坏が、いずれも床面直上より出土する。西壁部で98住と重複する。この住居が98住に切られる平面精査の所見を得、判出する土器の型式でも矛盾が認められない。

方位 +89° 面積 11.95㎡



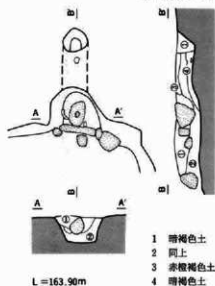
101号住居

遺物観察表 27



- 1 黄色砂土
- 2 黒色土
- 3 灰黒色土
- 4 黄褐色土

L=164.00m

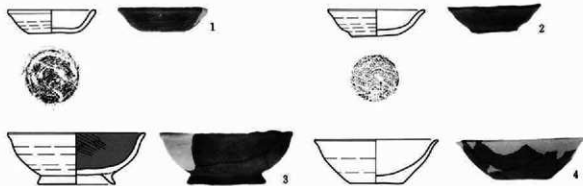


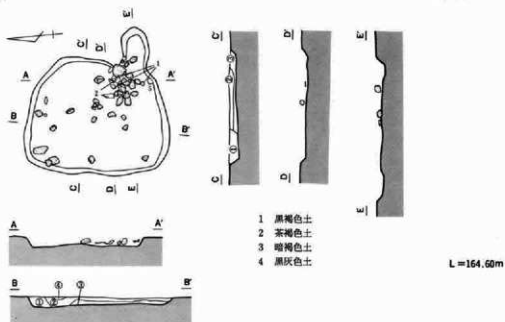
- 1 暗褐色土
- 2 同上
- 3 赤褐色土
- 4 暗褐色土

L=163.90m



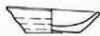
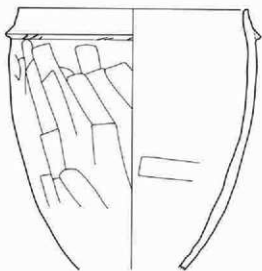
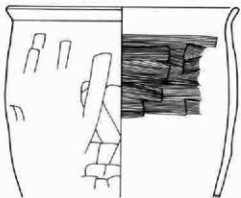
長軸を南北にもつ短軸2.2m、長軸2.7mの超小形横長方形住居。基盤層を30cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に主柱穴はない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅40cm、奥行き40cmで壁外に造り出す壁外型で、煙道は火床の底面から壁外50cmまで水平に伸びる。焚口部の両側に河原石を据えて補強材とし、この間に加工した石材を横架する。住居の南西隅に直径50cm、深さ40cmの円形プランで貯蔵穴を配置する。壁溝は幅10cm、深さ5cmで竈と貯蔵穴の部分を除いて巡る。西壁際南側と竈内の床面直上より坏、高台付塊が出土する。住居中央部の石は出土レベルが床面より高い。単独で占地。方位 +87° 面積 5.70㎡





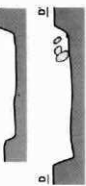
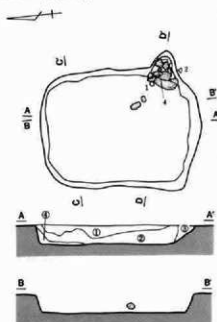
長軸を南北にもつ短軸2.4m、長軸3.0mの不正形な超小形横長方形住居。基盤層を15cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。燃烧部は幅40cm、奥行き60cmで、半円形状に壁外に造り出す壁外型を呈す。煙道は検出できない。貯蔵穴および壁溝は確認できない。竈周辺部の床面直上より土釜、羽釜が出土するほか、覆土内より須恵器環が出土する。竈の周辺部を中心に出土する多量の石は出土レベルが床面の直上だが、住居の埋没過程のものと考えられる。住居の北西部で104住と、南東部で103住とそれぞれ重複する。この住居が104住、103住を切って構築する平面精査の所見を得、これは伴出する土器の型式でも矛盾が認められない。

方位 +95° 面積 6.45㎡



103号住居

遺物観察表 28

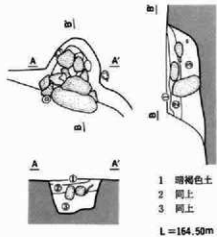


L=164.50m

- 1 暗褐色土
- 2 茶褐色土
- 3 暗褐色土
- 4 茶褐色土

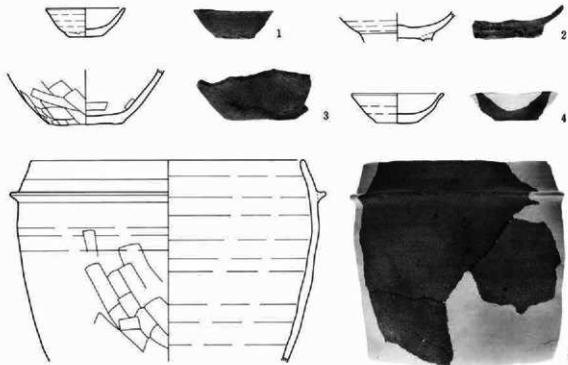
長軸を南北にもつ短軸2.4m、長軸3.4mの小形横長方形住居。基盤層を40cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に主柱穴はない。竈は東壁の南側に設置する。燃燒部は幅40cm、奥行き40cmで壁外に造り出す壁外型を呈す。焚口部の両側に上半を打ち欠いた河原石を据え、この間に石材を横架し、さらに燃燒部の天井部にも石材を用いている。煙道は検出できない。竈内より須恵器坏、覆土内より羽釜が出土する。住居の北西部で102住と重複する。この住居が102住に切られる平面精査の所見を得、これは伴出する土器の型式でも矛盾が認められない。

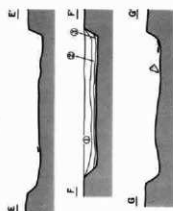
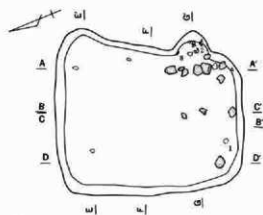
方位 +95° 面積 7.74㎡



- 1 暗褐色土
 - 2 同上
 - 3 同上
- L=164.50m

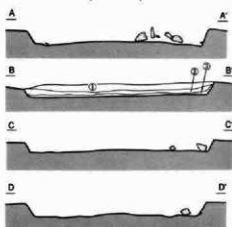




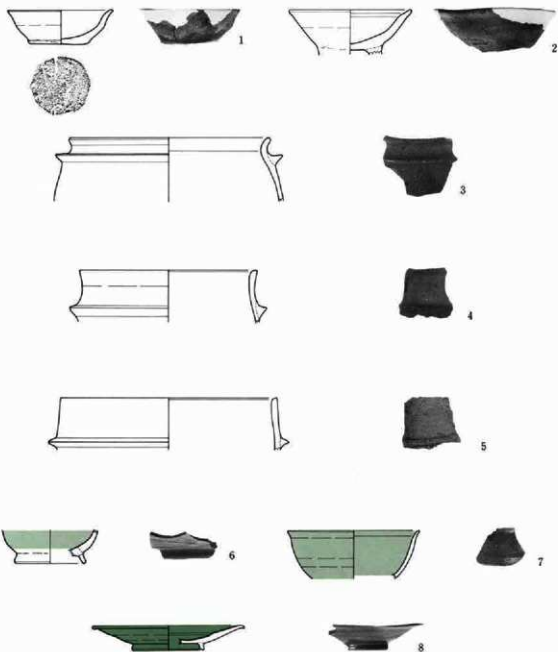


- 1 黒褐色土
- 2 黒色土
- 3 河上

L=163.80m

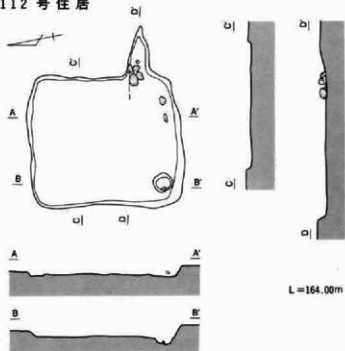


東壁の北端が不整形に張り出した、短軸3.2m、長軸4.0mの小形横長方形住居。長軸を南北にもつ。基盤層を20cm掘り込んで床面とする。床面は全体に平坦で良く整っている。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。東壁の南側に竈を設置する。燃焼部は幅60cm、奥行き40cmで、半円形状に壁外に造り出す壁外型を呈す。焚口部手前の床面に密着して出土する上半部を打ち欠いた2個の河原石は、焚口部の両側に補強材として用いられたもの。貯蔵穴および壁溝は検出できない。南壁際西側の床面直上より須恵器坏、覆土内より羽釜、灰軸陶器塊が出土するほか、竈内より緑釉陶器段皿が出土する。他の住居と重複することなく、単独で占地する。 方位 +110° 面積 12.21㎡ (張り出し部含む)

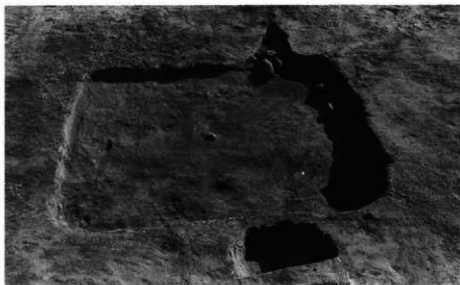
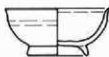


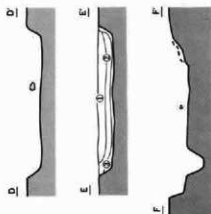
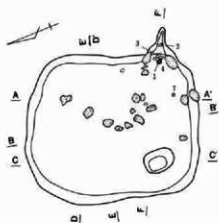
112号住居

遺物表 31



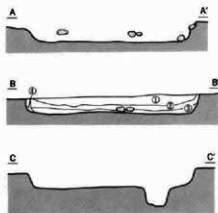
長軸を南北にもつ、短軸2.6m、長軸3.2mの整った小形横長方形住居。基盤層を10cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅30cm、奥行き60cmで壁外に造り出す壁外型を呈し、煙道は火床の底面から掘り込んで、奥壁の外側60cmまで緩やかな勾配で立ち上がる。火床の中央部に石製支脚を埋め込む。焚口部手前の石材は原位置にない。貯蔵穴は住居の南西隅に直径40cm、深さ20cmの円形プランで配置する。竈内より高台付塊が出土する。他の住居と重複することなく、単独で占地する。
方位 +98° 面積 8.74m²





- 1 暗褐色土
- 2 同上
- 3 同上
- 4 茶褐色土

L=164.40m

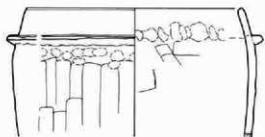


短軸3.1m、長軸3.7mで、長軸を南北にもつ小形横長方形住居。四隅は丸味をもつ。基盤層を30cm掘り込んで床面とする。床面は全体に平坦で良く整っている。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。東壁の南端部に竈を設置する。燃焼部は幅40cm、奥行き20cm程で、壁を僅かに掘り込む程度だが、壁外に造り出した壁外型を呈す。煙道は奥壁の上部から掘り込んで緩やかな勾配で立ち上がり、壁外40cmまで検出し

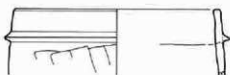
た。焚口部の両側に補強用の石材を据え、火床の中央部に石製支脚を置く。貯蔵穴は住居の南西隅に直径50cm、深さ40cmの不整形円プランで配置する。竈内より羽釜、覆土内より須恵器坏、角閃石安山岩製紡錘車が出土する。住居中央部から出土する石は出土レベルが床面より高く、住居の埋没過程のもの。他の住居と重複することなく、単独で占地する。

方位 +112° 面積 10.35㎡

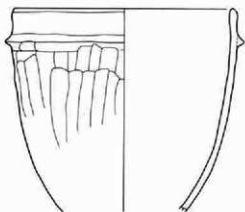




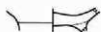
1



2



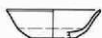
3



4



5

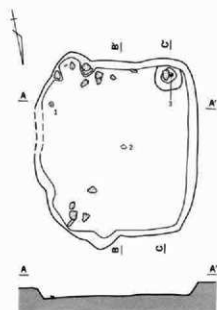


6



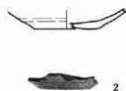
7

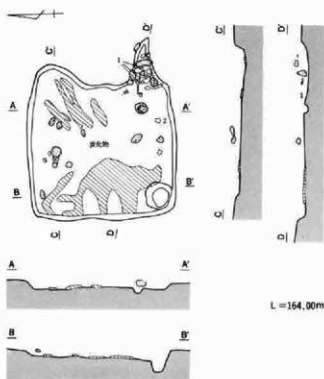




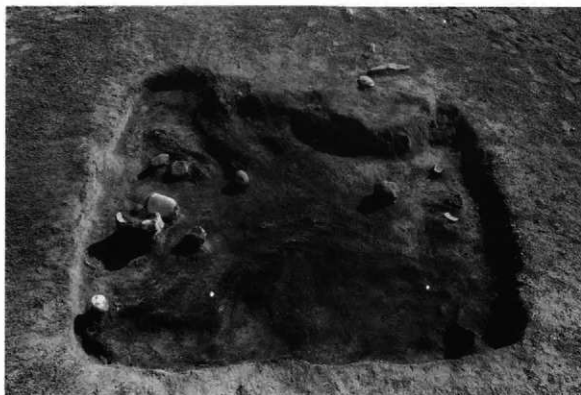
L=164.30m

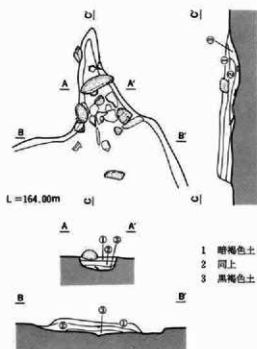
短軸3.5m、長軸3.7mの小形正方形住居。基盤層を20cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に支柱穴はない。竈は南壁の東端に設置する。燃焼部は幅50cm、奥行き30cmで壁外に造り出す壁外型を呈す。焚口部の両側を石材で補強し、火床の中央部に河原石を埋め込んで支脚とする。貯蔵穴は住居の南西隅に直径60cm、深さ20cm程の円形プランで設ける。東壁際南側と住居中央部の床面直上より須恵器杯、貯蔵穴内より須恵器高台付埴が出土する。他の住居と重複することなく、単独で占地する。方位 -169° 面積 11.78㎡

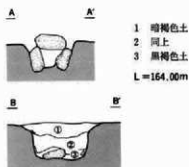
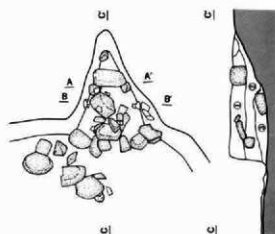
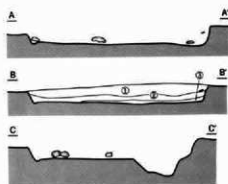
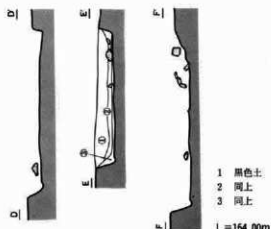
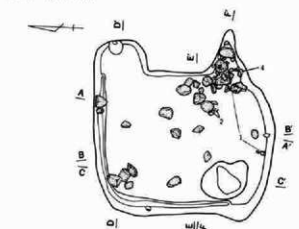




東壁の北端に張り出し部をもち、短軸2.8m、長軸3.2mで南北に長軸をもつ小形横長長方形住居。基盤層を15cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に支柱穴はない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅40cm、奥行き40cmで壁外に造り出す壁外型を呈し、煙道は火床の底面から壁外60cmまで緩やかな勾配で立ち上がる。焚口部の両側を石材で補強し、煙道の入口部の天井部にも石材を横架する。火床の中央部には石製支脚を埋め込む。竈内より羽釜が出土する。貯蔵穴は住居の南西隅に直径50cm、深さ20cmの円形プランで設ける。床面直上より多量の炭化材を検出した焼失住居である。他の住居と重複することなく、単独で占地する。方位 +88° 面積 9.03㎡(張り出し含む)

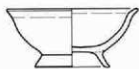
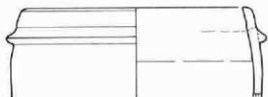
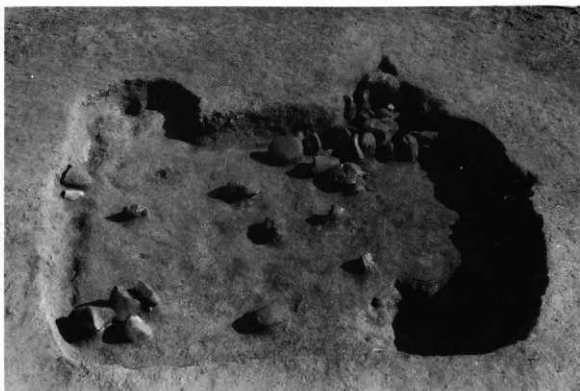




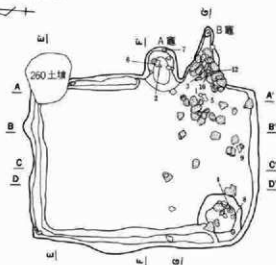


東壁の北端に幅1.0m、奥行き80cmの張り出し部をもち、短軸3.0m、長軸3.8mで長軸を南北にもつ小形横長方形住居。基盤層を30cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に支柱穴はない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅50cm、奥行き50cmで壁外に造り出す壁外型で、煙道は火床の底面から約30°の角度で立ち上がる。焚口部の両側と奥壁の両側に石材を据え、煙道の入口部の天井に石材を横架する。幅15cm、深さ5cmの壁溝が北壁と西壁に巡り、貯蔵穴は住居の南西隅に直径80cm、深さ40cmの不整形円形プランで設ける。竈の周辺部より羽釜、須恵器高台付埴、覆土内より須恵器環が出土。他の住居と重複することなく単独で占地。方位 +88° 面積 11.47㎡ (張り出し部含む)

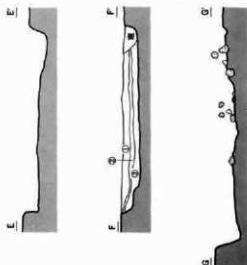




118号住居



遺物観察表 32



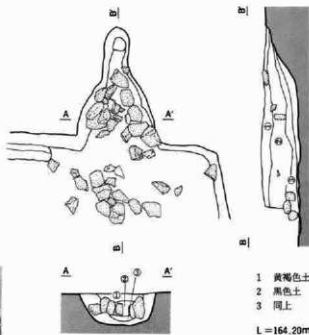
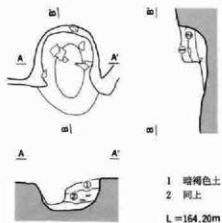
- 1 黒褐色土
- 2 黒色土
- 3 同上

L=164.20m

長軸を南北にもつ短軸3.7m、長軸4.8mの中形横長長方形住居。基盤層を30cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に支柱穴はない。東壁の南側に2個の竈を検出した。北側の竈（A竈）は燃燒部が幅60cm、奥行き60cmで壁外に造り出す壁外型で、煙道は検出できない。南側の竈（B竈）は燃燒部が幅70cm、奥行き60cmで壁外に造り出す壁外型を呈し、煙道は奥壁の上面から緩やかな勾配で伸びる。焚口部の右側に補強用の

石材を検出することから、A竈からB竈への造り替えと考えられる。住居の南西隅に直径80cmの円形プランで貯蔵穴を設ける。壁溝は幅25cm、深さ5cmで、竈の部分と南壁を除く壁下に巡る。竈内より羽釜、竈手前の床面直上より須恵器片が出土する。住居の北東部で145住と重複する。この住居が145住を切って構築する平面積査の所見を得た。

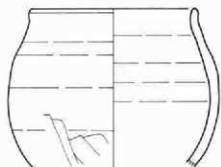
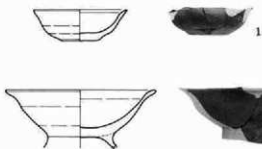
方位 +87° 面積 16.85㎡

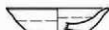
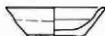
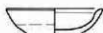
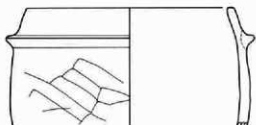
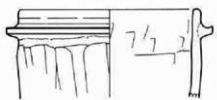


A 窟



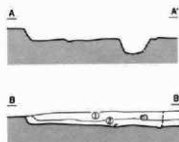
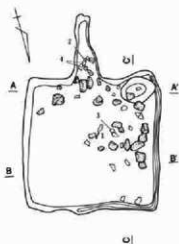
B 窟





119号住居

遺物観察表 33



L=164.40m

- 1 暗褐色土
- 2 同上

短軸2.8m、長軸2.9mの超小形正方形住居。基盤層を30cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に支柱穴はない。竈は南壁の中央部に設置する。燃燒部は幅40cm、奥行き50cm程で、壁外に造り出す壁外型を呈す。煙道は火床の底面から奥壁の外側90cmまで、緩やかな勾配で立ち上がる。焚口部の両側に一方を打ち欠いて平にした補強用の河原石を据え、火床の中央部に柱状の石製支脚を埋め込む。住居の南西隅に直径60cm、深さ30cmの円形プランで貯蔵穴を設ける。壁溝は幅10cm、深さ5cmで、北壁と西壁下に巡る。竈内より土釜、須恵器坏、住居中央部の床面直上より刀子が出土する。この住居が171住を切つて構築する土層断面の所見を得た。
方位 -164° 面積 8.02m²





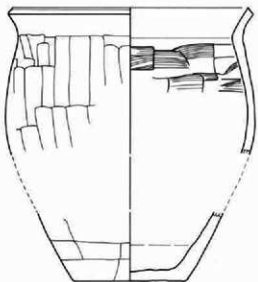
1



2



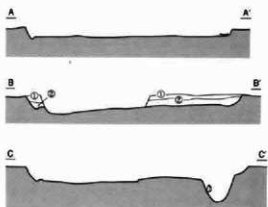
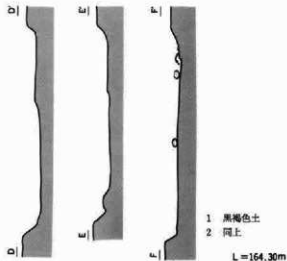
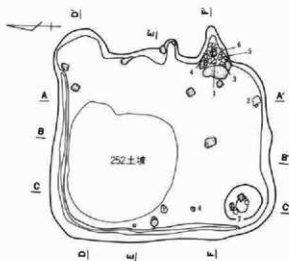
3



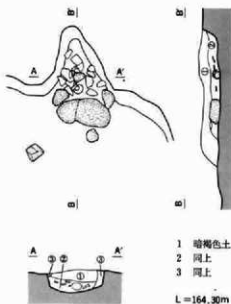
4

120号住居

遺物観察表 34



東壁の北端に不整形な張り出し部をもち、短軸4.0m、長軸4.7mの中形横長長方形住居。基盤層を30cm掘り込んで床面とする。壁内に支柱穴はない。東壁の南側に竈を設置する。燃烧部は幅40cm、奥行き40cmで壁外に造り出す壁外型を呈し、煙道は火床の底面から約30°の角度で立ち上がる。焚口部の両側に補強用の石材を据える。焚口部手前の床面に密着して出土する河原石は、焚口部両側の石材の上に横架されていたもの。住居の南西隅に直径70cm、深さ50cmの円形プランで貯蔵穴を配置し、壁溝は幅10cm、深さ5cmで北壁と西壁下に巡る。竈内より羽釜、須恵器坏が出土する。この住居が172住を切って構築する平面精査の所見を得た。方位 +88° 面積 18.05㎡(張り出し部含む)

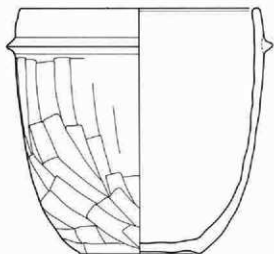




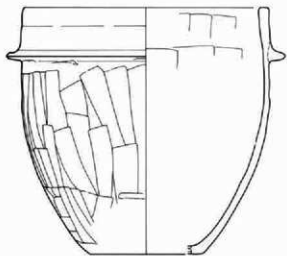
1



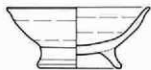
2



3



4



5

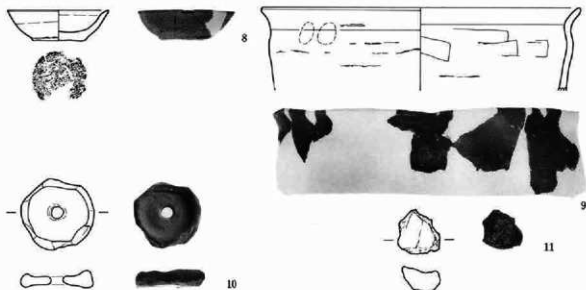


6



7

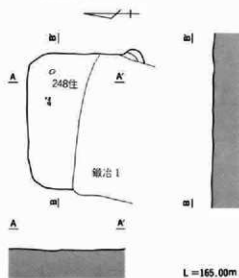




120号住居出土遺物

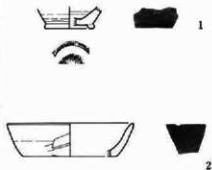
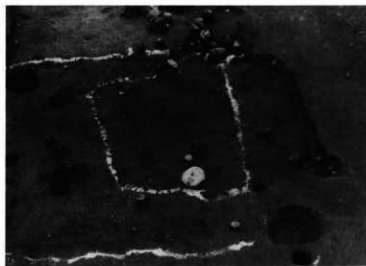
248号住居

遺物観察表 69



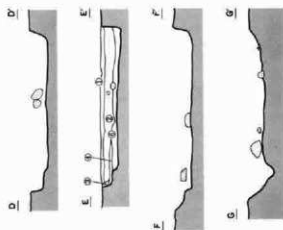
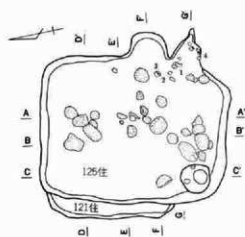
北壁と東壁の一部を検出するのみで全形が確認できず、外形は確定できない。東西軸2.9mを測る。基盤層を僅かに掘り込んで床面とする。検出した床面の範囲に主柱穴はない。竈は東壁に設置する。他の遺構と重複するため全形が確認できず、燃焼部の一部を検出するにすぎない。貯蔵穴、壁溝は検出できない。覆土内より坏、須恵器壺が出土する。住居の大半で244住、1号銀冶遺構と重複する。この住居が244住を切り、1号銀冶遺構がこの住居を切って構築する調査所見を得たが、伴出する土器の型式では244住との新旧関係が逆転し、248住→244住の順を示す。

方位 +88° 面積 測定不可能

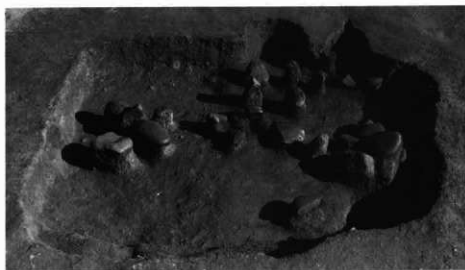


121・125号住居

遺物観察表 34・35

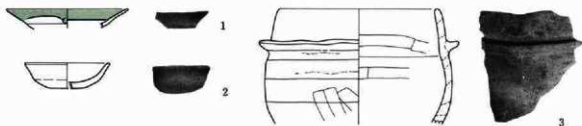


- 1 黒褐色土 4 黒色土
 2 同上 5 同上
 L=164.50m 3 黒色土 6 黄褐色土

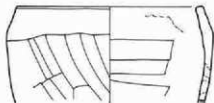
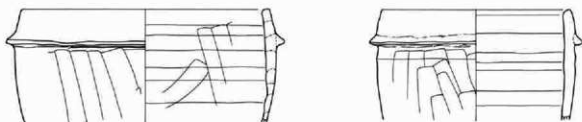


121号住居 住居の大半が125住との重複部にあたるため、住居の西壁部と東壁に設置された竈を検出するのみで、外形が確定できない。基盤層を30cm掘り込んで床面とする。壁内に主柱穴はない。東壁に設置された竈は燃焼部が幅80cm、奥行き40cmの掘り込みをもつ。覆土内より羽釜、須恵器環、灰釉陶器段皿が出土する。この住居が125住を切って構築する土層断面の所見を得たが、住居の埋没過程で入り込んだ多量の石の分布状況とは矛盾する。伴出する土器の型式では型式差がなく判定不可能。 方位 +102° 面積 測定不可能

125号住居 長軸を南北にもつ短軸3.1m、長軸4.0mの小形横長方形住居。基盤層を30cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に主柱穴はない。東壁の南側に設置する竈は、燃焼部が幅60cm、奥行き50cmの壁外型を呈し、煙道は奥壁の上面から壁を掘り込む。住居の南西隅に直径60cm、深さ30cmの貯蔵穴を設ける。竈の周辺部より羽釜、土釜、須恵器高台付埴が出土する。 方位 +105° 面積 11.64㎡



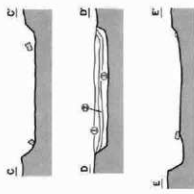
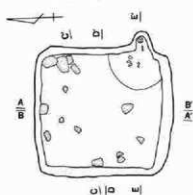
121号住居出土遺物



125号住居出土遺物

122号住居

遺物観察表 34



L=164.20m

短軸2.7m、長軸3.0mで、長軸を南北にもつ整った超小形横長長方形住居。基盤層を30cm掘り込んで床面とする。床面は住居の南西隅が中央より僅かに低いほかは、平坦で良く整っている。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅30cm、奥行き30cmで壁外に造り出す壁外型を呈す。煙道は検出できない。貯蔵穴および壁溝も確認できない。竈内より須恵器杯、甕手前の床面直上より灰釉陶器境がそれぞれ出土する。住居の北東隅を中心に出土する石は出土レベルが床面より高く、住居の埋没過程で入り込んだもの。住居の南西隅で16号掘立柱建物の柱穴と重複する。新旧関係を判定する実証的資料を欠き、16号掘立柱建物に伴出土器がないために、土器型式による判定もできない。

方位 +92° 面積 7.72㎡

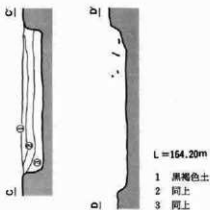
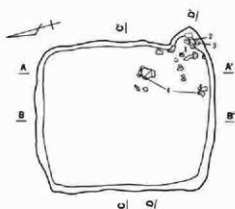


- 1 黒褐色土
- 2 同上
- 3 黒色土
- 4 黄色土



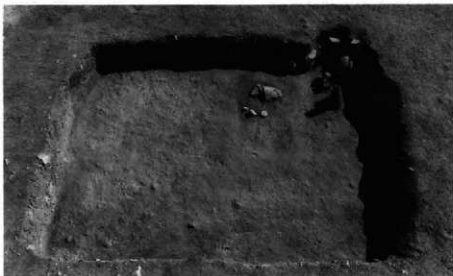
123号住居

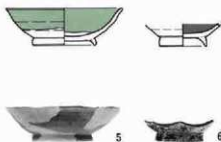
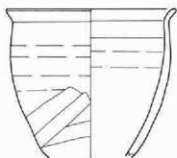
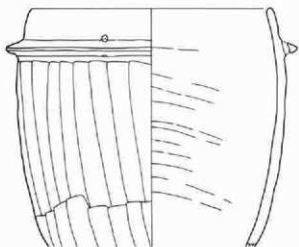
遺物観察表 35



長軸を南北にもち、短軸3.2m、長軸3.8mの小形横長方形住居。基礎層を40cm掘り込んで床面とする。床面は全体に平坦で良く整っている。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南端に設置する。燃焼部は幅40cm、奥行き40cmで壁外に造り出す壁外型を呈し、焚口部の両側に補強材を据える。奥壁の中央部手前に石製支脚を置く。煙道は検出できない。貯蔵穴および壁溝はない。竈内より高台付塊、羽釜が出土するほか、覆土内より灰軸陶器高台付塊が出土する。住居の北東部に167住と重複する。この住居が167住を切って構築する平面精査の所見を得、これはそれぞれの住居に伴出する土器の型式が示す順序と一致している。

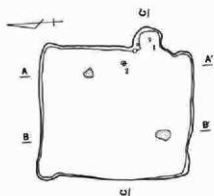
方位 +105° 面積 11.46㎡





126号住居

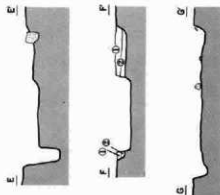
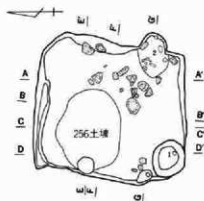
遺物観察表 35



長軸を南北にもち、短軸2.8m、長軸3.3mの整った小形横長方形住居。基盤層を10cm掘り込んで床面とする。床面は住居の北半部が南半部より僅かに低い。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅40cm、奥行き40cmで、壁外に造り出す壁外型を呈す。煙道は検出できない。おそらく奥壁の上面から壁を掘り込むものと推察される。竈内より甕、東壁際中央部の床面直上より甕が出土するが、いずれも小破片である。住居の南西部には角閃石安山岩が据えられたように置かれているが、性格は不明である。貯蔵穴および壁溝は検出できない。他の住居と重複することなく単独で占地するが、立地する位置的な関係から、東側で近接する136住、137住との同時存在はあり得ないものと考えられる。

L=164.50m 方位 +96° 面積 8.94㎡





- 1 暗褐色土
2 暗茶褐色土



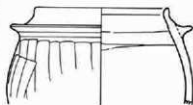
L = 164.50m

長軸を南北にもつ短軸2.9m、長軸3.2mの小形横長方形住居。基盤層を20cm掘り込んで平坦な床面を造る。住居の北西部を後世の土壌に切られる。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅40cm、奥行き30cmで壁外に透り出す壁外型を呈す。焚口部の向って左側に補強用の石材を検出した。煙道は確認できない。住居の南西隅に直径70cm、深さ30cmの円形プランで貯蔵穴を配置する。竈内より羽釜、貯蔵穴内より高台付坑が出土する。住居の東半部を中心に出土する石は出土レベルが床面より僅かに高く、住居の埋没過程で入り込んだもの。他の住居と重複することなく、単独で占地する。

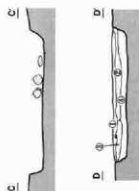
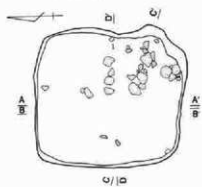
方位 +94° 面積 8.95m²



1

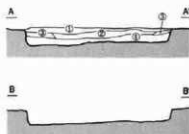


2

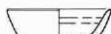


- 1 暗褐色土
- 2 明褐色土
- 3 褐色土
- 4 同上

L=164.50m



短軸2.9m、長軸3.1mの超小形正方形住居。基礎層を30cm掘り込んで床面とする。床面は全体に平坦で良く整っている。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅40cm、奥行き10cm程で、壁を僅かに掘り込むにすぎない。煙道は検出できない。貯蔵穴および壁溝はない。床面に密着して緑釉陶器折縁皿が出土するほか、覆土内より須恵器環が出土する。住居の南東部を中心にして出土する石は床面に密着している。住居廃棄後の所産と考えられるが、単なる廃棄ではないような配列を示す。この住居が161住を切って構築する平面精査の所見を得、これは伴出する土器の型式が示す順序と一致している。また、立地する位置的な関係から、南側で近接する129住との同時存在はないものと考えられる。方位 +92° 面積 8.60m²



1

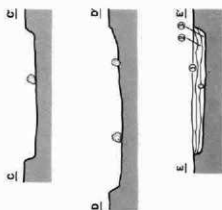
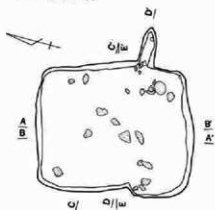


2



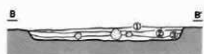
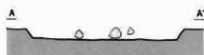
3



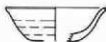


L=164.50m

- 1 暗褐色土
- 2 褐色土
- 3 暗黄褐色土



長軸を南北にもち、短軸2.7m、長軸3.4mの小形横長長方形住居。基盤層を30cm掘り込んで床面とする。床面は全体に平坦で良く整っている。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。東壁の南側に竈を設置する。燃燒部は幅30cm、奥行き40cm程で、壁外に造り出す壁外型を呈す。煙道は火床の底面から緩やかな勾配で立ち上がり、奥壁の外側40cmまで伸びる。貯蔵穴および壁溝はない。住居の覆土内より羽釜、須恵器環が出土する。住居の中央部より出土する石は出土レベルが床面より高く、埋没過程のもの。



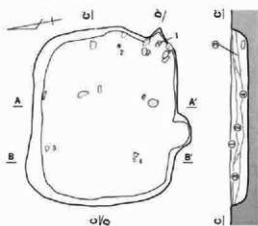
- 1 この住居が176住を切って構築する平面精査の所見を得、これは伴出する土器の型式が示す順序と一致している。また、立地する位置的な関係から、住居の北東部に近接する128住との同時
- 2 存在はないものと考えられる。

方位 +76° 面積 8.64㎡



130号住居

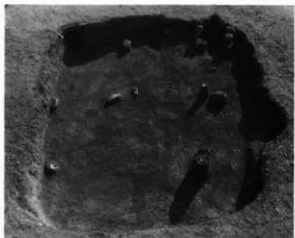
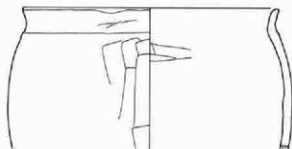
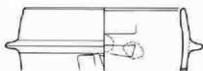
遺物観察表 36

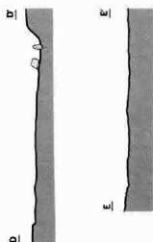
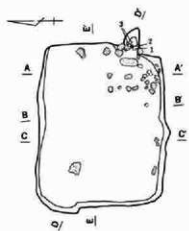


L=164.70m

- 1 暗褐色土
- 2 明黒褐色土
- 3 暗黄褐色土
- 4 暗褐色土

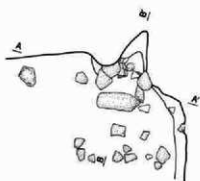
長軸を東西にもち、短軸3.1m、長軸3.8mの小形縦長方形住居。基盤層を40cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。燃燒部は幅40cm、奥行き40cmで、壁内に造り付ける壁内型を呈し、煙道は壁の上面から掘り込む。焚口部の両側と奥壁の両側に合計4個の石材を据える。平安時代で燃燒部を壁内に造り付ける住居の類例は、この遺跡では極めて少ない。貯蔵穴および壁溝はない。竈内と東壁際中央部の床面直上より羽釜、北壁際西側の床面直上より灰軸陶器高台付埴、覆土内より須恵器坏がそれぞれ出土する。他の住居と重複することなく、単独で占地する。方位 +105° 面積 10.88㎡





L=164.60m

- 1 暗褐色土
- 2 茶褐色土
- 3 同上



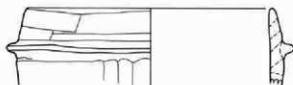
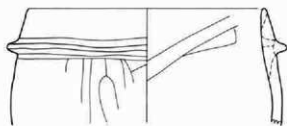
L=164.50m

- 1 暗褐色土
- 2 同上
- 3 黑色灰土



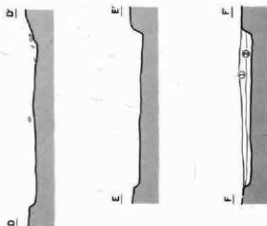
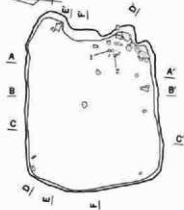
長軸を東西にもち、短軸2.8m、長軸3.4mの小形縦長長方形住居。基盤層を10cm掘り込んで床面とする。床面は全体に平坦で良く整っている。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅30cm、奥行き40cmで壁外に造り出す壁外型を呈し、煙道は火床の底面から約45°の角度で立ち上がる。焚口部の両側に補強用の石材を据え、火床の中央部に石製支脚を埋め込む。焚口部手前の床面に密着した石は、焚口部に横架されていたもの。貯蔵穴および壁溝は検出できない。竈内より羽釜、土釜が出土する。住居の北東部で131住と重複する。この住居が131住を切って構築する調査所見を得た。また、立地する位置的な関係から、住居の南側で近接する133住との同時存在はあり得ない。

方位 +92° 面積 9.06㎡



133号住居

遺物観察表 37



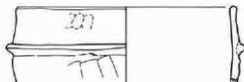
L=164.60m

- 1 暗褐色土
- 2 同上



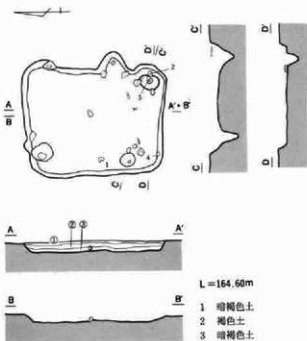
長軸を東西にもつ短軸2.8m、長軸3.4mの小形縦長方形住居。東壁北端の不整形な張り出しは、重複する他の遺構と判断した。基盤層を20cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に主柱穴はなく壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅40cm、奥行き30cmで壁外に造り出す壁外型を呈し、焚口部の両側に河原石を据えて補強材とする。煙道は明確に確認できない。東壁際南側の床面直上より羽釜、須恵器坏、覆土内より灰釉陶器皿がそれぞれ出土する。他の住居と重複することなく単独で占地するが、立地する位置的な関係から住居の北側で近接する132住との同時存在はあり得ない。

方位 +83° 面積 9.32㎡



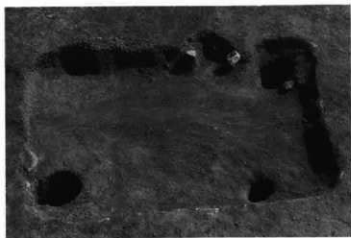
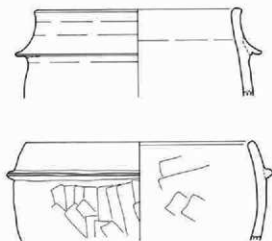
134号住居

遺物観察表 37



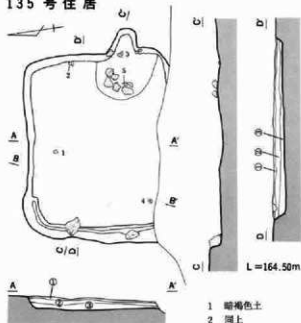
長軸を南北にもち、短軸2.3m、長軸3.0mの超小形横長方形住居。基盤層を20cm掘り込んで床面とする。床面は全体に平坦で良く整っている。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡が認められない。壁外の南側に竈を設置する。燃焼部は幅40cm、奥行き30cmで、半円形状に壁外へ造り出す壁外型を呈し、焚口部の両側に補強用の石材を据える。煙道は検出できない。住居の南東隅に直径30cm、深さ20cmの不整形円プランで貯蔵穴を配置する。壁溝は検出できない。住居南東隅より羽釜、須恵器高台付埴、住居南西部より羽釜、須恵器坏が、いずれも床面直上より出土する。他の住居と重複することなく、単独で占地する。

方位 +88° 面積 6.75㎡



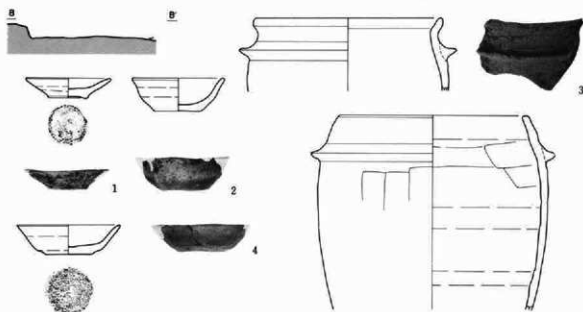
135号住居

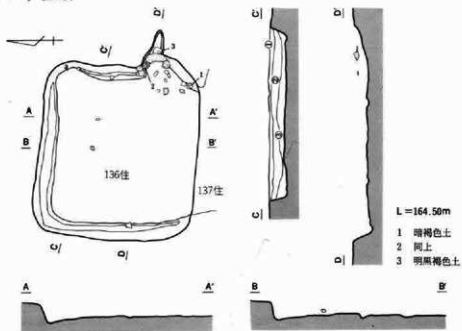
遺物観察表 37



- 1 暗褐色土
- 2 同上
- 3 同上

南壁部が調査区域外のため住居の全形は確認できないが、長軸を東西にもつ短軸3.2m、長軸4.0mの小形縦長方形住居と推定する。基盤層を20cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅40cm、奥行き40cmで壁外に造り出す壁外型を呈す。竈手前の床面に密着して出土する石は、竈の構築材として用いられていた可能性が高い。煙道は検出できない。竈周辺部より羽釜、東壁際北側、北壁際中央、住居西南部より須恵器坏がいずれも床面直上より出土するほか、底面に鉄が入った須恵器壺が覆土内より出土する。他の住居と重複することなく単独で占地する。方位 +98° 面積 測定不可能

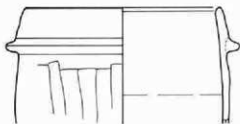




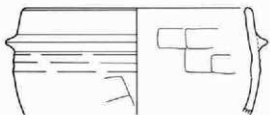
短軸3.4m、長軸3.7mの小形正方形住居。基盤層を30cm掘り込んで床面とする。検出した範囲の床面は平坦で良く整っている。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。燃燒部は幅40cm、奥行き40cmで壁外に造り出す壁外型を呈し、奥壁の両側に石材を据え、この間に河原石を横架して煙道の入口部の天井を構築する。煙道は火床の底面から緩やかな勾配で立ち上がり、奥壁の外側60cmまで伸びる。壁溝は幅20cm、深さ5cmで、竈の部分と南壁を除く壁下に巡る。住居南東隅の床面直上より羽釜、覆土内より須恵器片が出土する。住居の南半で137住と重複する。新旧関係を判定する実証的資料を欠くが、伴出する土器の型式は136住→137住の順を示す。

方位 +94° 面積 12.07㎡

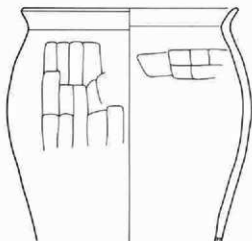




1



2



3



4

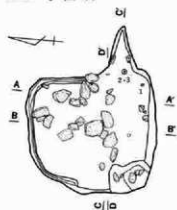


5

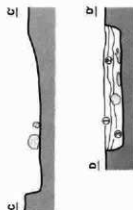


137号住居

遺物観察表 38



L=164.50m



- 1 暗褐色土
- 2 同上
- 3 明黒褐色土

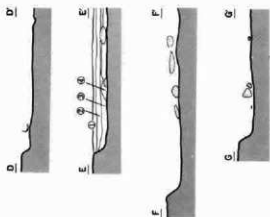
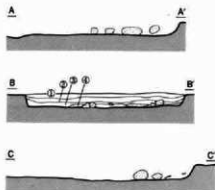
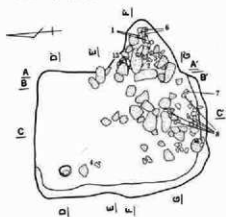
短軸2.5m、長軸2.7mの超小形正方形住居。基盤層を40cm掘り込んで床面とする。床面は全体に平坦で良く整っている。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。燃烧部は幅40cm、奥行き40cmで壁外に造り出す壁外型を呈し、煙道は火床の底面から緩やかな勾配で立ち上がり、奥壁の外側60cmまで伸びる。奥壁の両側で、燃烧部和煙道部の境に石材を据えて補強材とする。住居の南西隅に直径60cm程の不整形プランで貯蔵穴を配置する。住居南東隅の床面下より2個体

の須恵器高台付埴が口縁部を合わせて出土するほか、床面直上より高台付埴が出土する。住居の北半部の床面直上より多量に出土する河原石は、この住居の使用時のものとは考え難い。住居の北半部で136住と重複する。新旧関係を判定する実証的資料を欠くが、伴出する土器の型式は136住→137住の順を示す。方位 +83° 面積 6.26m²



139号住居

遺物観察表 39

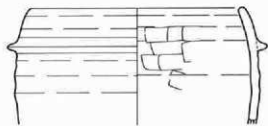


L = 164.60m

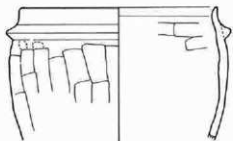
- 1 暗褐色土
- 2 同上
- 3 明黒褐色土
- 4 同上

短軸2.7m、長軸3.7mで、長軸を南北にもつ小形横長方形住居。基盤層を30cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の両側に設置する。燃焼部は幅60cm、奥行き60cm程で壁外に造り出す壁外型を呈す。奥壁の両側に位置する一方を打ち欠いた河原石以外は原位置を留めず、天井部に使用された石材も含めて竈の周辺部に散乱した状態で出土する。煙道は検出できない。竈内より羽釜、南壁際より須恵器坏、土釜が出土するほか、覆土内より灰輪陶器高台付塊が出土する。住居の南半で出土する多量の石は出土レベルが床面よりやや高く、住居の埋没過程のもの。140住、157住、158住、159住と重複する。この住居が重複するすべての住居を切って構築する平面精査の所見を得た。方位 +91° 面積 9.15㎡

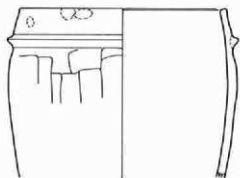




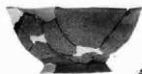
1



2



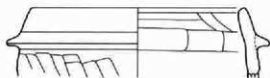
3



4



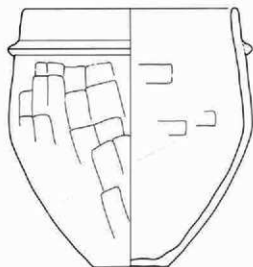
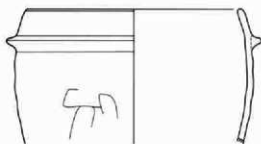
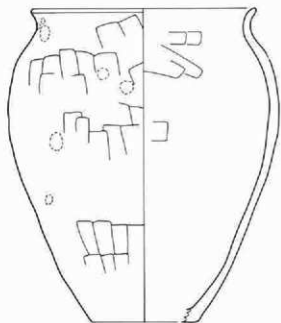
5



6

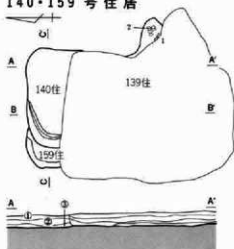


7



140・159号住居

遺物観察表 39



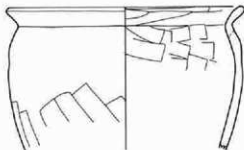
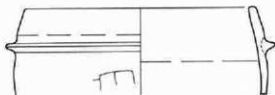
- 1 暗褐色土
 - 2 同上
 - 3 同上
- L=164.60m



140号住居 北壁部と竈の一部を検出するのみで住居の全形が確認できず、外形は確定できない。基盤層を10cm掘り込んで床面とする。壁内に支柱穴はない。竈は東壁の南側に設置する。全形は確認できないが東壁との位置的な関係から、燃焼部を壁外に造り出す壁外型と推定する。竈内より土釜が出土する。139住に切られる平面精査の所見を得た。146住、158住、159住との新旧関係を判定する実証的資料が欠くが、伴出する土器の型式は140住→158住の順を示す。

方位 +88° 面積 測定不可能

159号住居 住居の北西隅を検出するのみで、外形が確定できない。竈、柱穴は検出できず、伴出土器がない。方位 +86° 面積 測定不可能

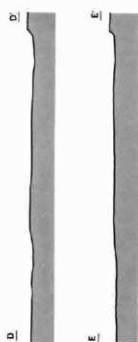
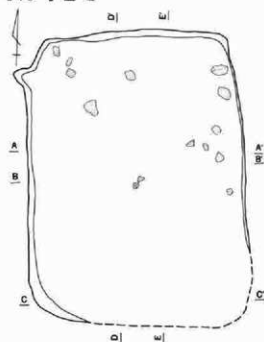


140号住居出土遺物



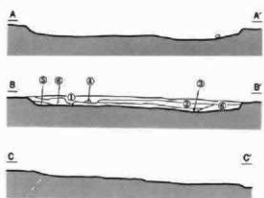
141号住居

遺物観察表 40



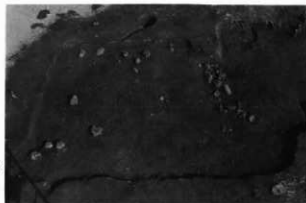
L=164.70m

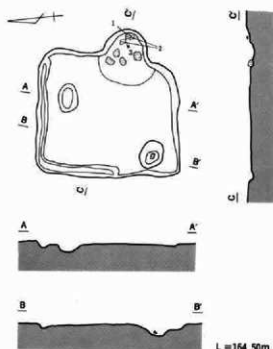
- 1 暗褐色土
- 2 赤褐色土
- 3 黒褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 褐色土
- 6 黒褐色土



短軸4.6m、長軸6.2mで、長軸を南北にもつ大形横長長方形住居。住居の南東隅は検出できない。基盤層を15cm掘り込んで床面とする。床面は全体に平坦で良く整っている。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡が認められない。検出した壁に電の痕跡を示す焼土などが一切なく、貯蔵穴、壁溝も検出できない。灰釉陶器高台付埴が2個体と、須恵器坏がいずれも覆土内より出土する。住居の南半で142住、143住、156住とそれぞれ重複する。この住居が142住を切って構築する平面精査の所見を得た。143住、156住との新旧関係を判定する実証的資料を欠くが、それぞれの住居に伴出する土器の型式は142住→143住→156住→141住の順を示す。

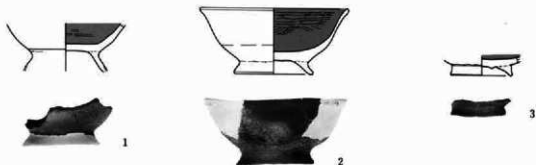
方位 +87 面積 28.01㎡ (推定)





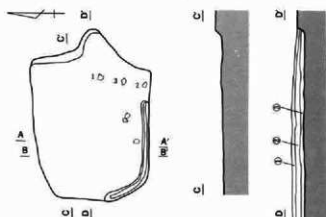
短軸2.6m、長軸3.0mで、長軸を南北にもつ超小形横長方形住居。基盤層を10cm掘り込んで床面とする。床面は北壁際に深さ15cmの不整形な掘り込みが認められるほかは、平坦で整っている。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅50cm、奥行き50cmで、半円形状に壁外へ造り出す壁外型を呈し、焚口部の両側に石材を据えて補強材とする。煙道は検出できない。住居の南西隅に直径50cm、深さ15cmの円形プランで貯蔵穴を配置する。壁溝は幅15cm、深さ5cmで、北壁と西壁下に巡る。竈内より高台付塊が出土し、これらはいずれも内面に黒色処理が施され、軸軸回転によって整形されている。他の住居と重複することなく、単独で占地する。

方位 +97° 面積 7.51㎡

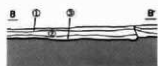


146号住居

遺物観察表 41



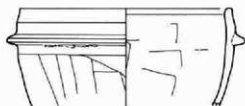
L=164.60m

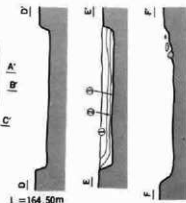
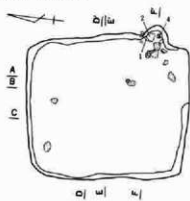


- 1 暗褐色土
- 2 同上
- 3 同上

長軸を東西につ短軸2.4m、長軸3.0mの超小形縦長方形住居。基盤層を10cm掘り込んで床面とする。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の中央部に設置する。燃焼部は幅50cm、奥行き50cmで、半円形状に壁外へ造り出す壁外型を呈す。煙道は検出できない。西壁と南壁の一部に幅10cm、深さ5cmの壁溝が巡る。住居南東部の床面直上より羽釜、高台付壇が出土する。住居の北半で138住と、南半で140住、158住、159住とそれぞれ重複する。いずれも新旧関係を判定する実証的資料を欠くが、各住居に伴出する土器の型式は138住→146住→140住→158住の順を示している。

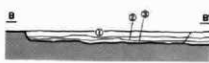
方位 +87° 面積 6.77㎡





L=164.50m

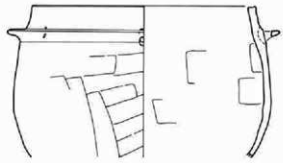
短軸3.1m、長軸3.5mで、長軸を南北にもつ小形横長方形住居。基盤層を20cm掘り込んで床面とする。床面は全体に平坦で良く整っている。壁内にも支柱穴はなく、壁外にも支柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅40cm、奥行き20cmで、半円形状に壁外へ造り出す壁外型を呈す。煙道は明確に検出



できない。竈手前の床面に密着して出土する石は、竈の構築材として用いられていたものと推察される。貯蔵穴および壁溝はない。竈内より羽釜、須恵器高台付境が出土するほか、覆土内からも須恵器坏が出土する。住居の南東部で151住と重複する。この住居が151住を切って構築する土層断面の所見を得た。151住に伴う土器がないために、土器型式による新旧関係の判定はできない。

方位 +85° 面積 9.94㎡

- 1 暗褐色土
- 2 同上
- 3 同上



152号住居

遺物観察表 42



- 1 暗褐色土
- 2 同上
- 3 同上

L=164.50m

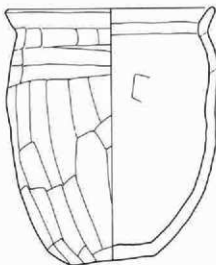
長軸を東西にもち、短軸2.6m、長軸3.8mの小形縦長長方形住居。基盤層を30cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に主柱穴はない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅30cm、奥行き40cmで壁外に造り出す壁外型を呈す。焚口部の両側に一方を打ち欠いた河原石を据え、火床の中央部に石製支脚を置く。竈内より出土する土釜は石製支脚の上に取り、使用状態を示している。煙道は奥壁の上面から壁を切り込む。竈内より土釜が出土するほか、住居の覆土内より灰釉陶器高台付碗が出土する。この住居が184住を切る土層断面の所見を得た。151住、153住との新旧関係を判定する

実証的資料を欠くが、伴出する土器の型式は153住→152住の順。

方位 +95° 面積 10.10㎡



1



2



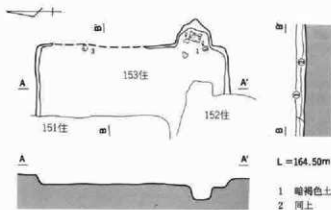
3



4

153号住居

遺物観察表 42



住居の西半が検出できないため全形は確認できず、外形は確定できない。南北軸4.2mを測る。基盤層を20cm掘り込んで床面とする。検出した範囲の床面は平坦で整っている。壁内に支柱穴はない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅60cm、奥行き30cmで壁外に造り出す壁外型を呈し、煙道は奥壁の中段から壁を掘り込む。火床の中央部に検出した河原石は、原位置を動いているが、竈の構築材と推

察される。竈内より羽釜、東壁際北側の床面直上より灰釉陶器壺が出土する。住居の東半部で165住、西半で151住、152住とそれぞれ重複する。いずれも新旧関係を判定する実証的資料を欠くが、伴出する土器の型式は153住→152住・165住の順を示す。方位 +88° 面積 測定不可能



1



2

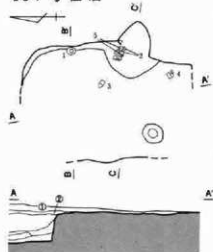


3



154号住居

遺物観察表 42



L=164.80m

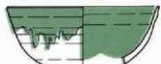
- 1 暗褐色土
- 2 同上



1



2



3



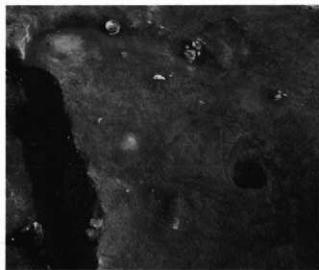
4



5



6

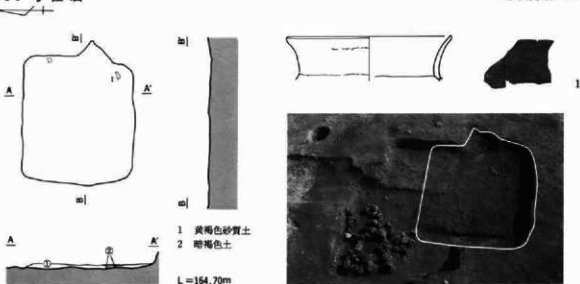


住居の西半が明確に検出できないため、外形は確定できない。基盤層を10cm掘り込んで床面とする。検出した範囲の床面は平坦で良く整っている。検出した床面の範囲に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。掘り込みが浅いために全形は明確に把握できないが、燃焼部は幅60cm、奥行き60cmで、半円形状に壁外へ造り出す壁外型と考えられる。煙道は検出できない。東壁際北側より須恵器高台付埴、住居南東隅より須恵器坏、竈内より須恵器の坏、高台付埴が出土するほか、灰釉陶器埴が出土する。住居の北半で155住、164住と重複する。新旧関係を判定する実証的資料を欠くが、伴出する土器の型式は155住→154住の順を示す。164住には伴出土器がない。

方位 +90° 面積 測定不可能

156号住居

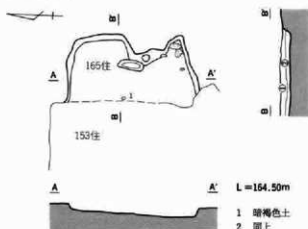
遺物観察表 43



長軸を東西にもつ短軸2.4m、長軸2.7mの超小形縦長方形住居。基盤層を20cm掘り込んで床面とする。壁内に支柱穴はない。東壁の南側に設置する竈は燃焼部が幅40cm、奥行き30cmの壁外型を呈す。住居南東隅の床面直上より甕が出土する。重複する141住、142住、143住との新旧関係を判定する実証的資料を欠くが、伴出する土器の型式は142住→143住→156住→141住の順を示す。方位+93° 面積6.13㎡

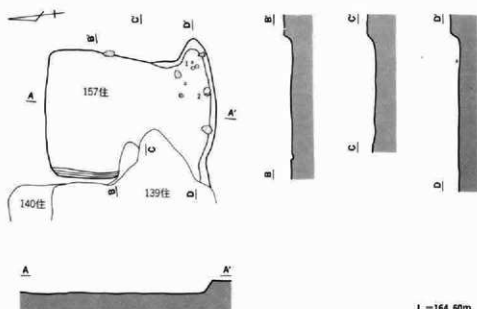
165号住居

遺物観察表 45



住居の西半が検出できないため、外形は確定できない。東壁の北端に幅1.2m、奥行き50cmの張り出し部をもち、南北軸2.8mを測る。壁内に支柱穴はない。竈は東壁の南端に設置する。燃焼部は幅40cm、奥行き30cmで壁外に造り出す壁外型を呈す。住居中央部の床面直上より須恵器環が出土。重複する153住との新旧関係を判定する実証的資料はないが伴出する土器の型式は153住→165住の順。方位+88° 面積測定不可能



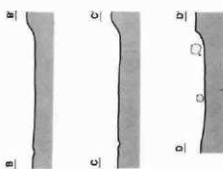
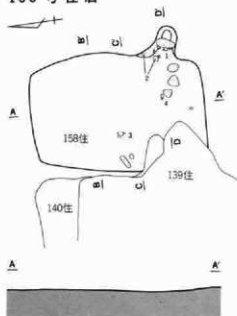


住居の南西隅は検出できないが、短軸2.5m、長軸3.6mで長軸を南北にもつ小形横長方形住居と推定する。基盤層を20cm掘り込んで床面とする。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南端に設置する。燃焼部は幅50cm、奥行き40cmで、半円形状に壁外に造り出す壁外型を呈す。煙道は検出できない。西壁下に幅10cm、深さ5cmの壁溝が巡る。竈内より須恵器杯、南壁際東側の床面直上より須恵器高台付坩が出土する。139住、140住、158住と重複する。139住がこの住居を切って構築する平面精査の所見を得た。140住、158住との新旧関係を判定する実証的資料を欠くが、伴出する土器の型式は157住→158住の順を示し、140住とは年代が近接して、土器型式による判定ができない。方位 +98° 面積 8.84㎡ (推定)



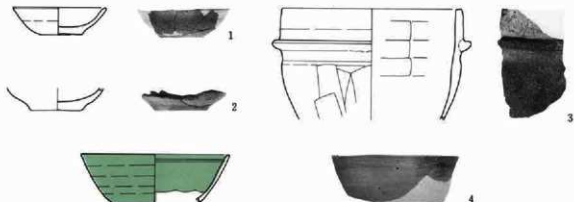
158号住居

遺物観察表 43

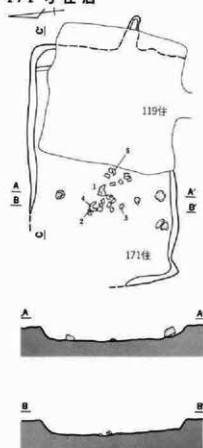


L=164.60m

住居の南西隅は検出できないが、短軸2.5m、長軸3.7mで、長軸を南北にもつ小形横長方形住居と推定する。基盤層を20cm掘り込んで床面とする。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅40cm、奥行き40cmで壁外に造り出す壁外型を呈す。燃焼部に検出する石は、燃焼部と煙道部の境の天井部に用いられていたものと考えられる。竈周辺部の床面直上より須恵器環、住居中央南側の覆土内より灰軸陶器埴が出土する。139住がこの住居を切る平面精査の所見を得た。140住、146住、157住との新旧関係を判定する実証的資料を欠くが、伴出する土器の型式は146住→140住・157住→158住の順を示す。方位 +95° 面積 8.59㎡ (推定)



171号住居

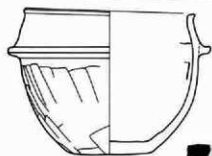
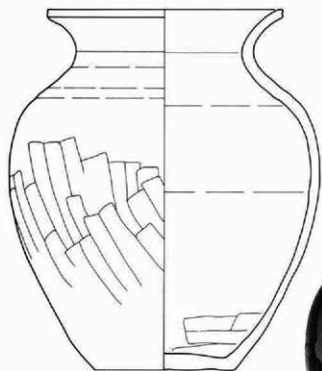
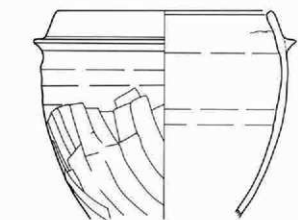


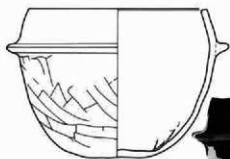
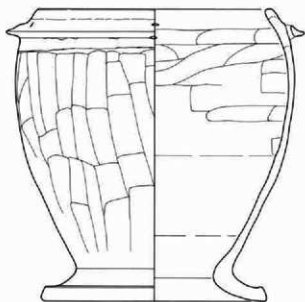
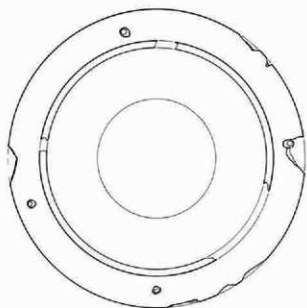
L=164.40m

住居の北西隅および東半は検出できないが、長軸を東西にもつ短軸3.1m、長軸4.9mの中形縦長長方形住居と推定する。基盤層を20cm掘り込んで床面とする。検出した範囲の床面は平坦で整っている。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。119住との重複部にあたるため燃焼部の全形は確認できず、幅20cmの煙道部を検出するにすぎない。住居西側の床面に密着して羽釜、甕、甕型の羽釜が出土する。貯蔵穴および壁溝は検出できない。住居の北西部で148住、149住と、住居の東半で119住とそれぞれ重複する。この住居が149住を切り、119住がこの住居を切って構築する平面精査の所見を得た。148住に伴出土器がないために、148住との新旧関係は不明。

方位 +95° 面積 測定不可能





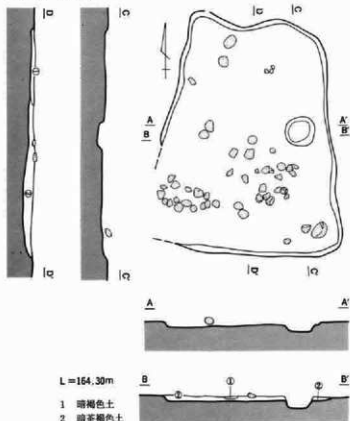


4

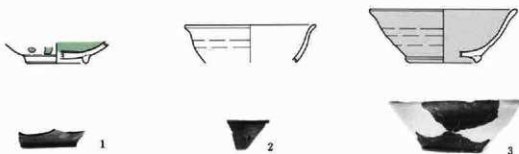
5

172号住居

遺物観察表 48

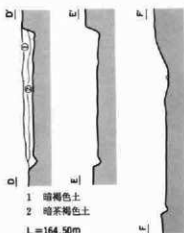
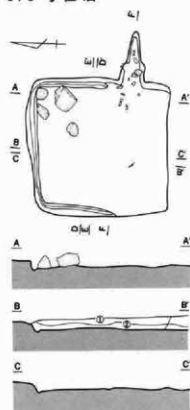


住居の南西隅は検出できないが、短軸3.6m、長軸4.9mで、長軸を南北にもつ不整形な中形横長方形住居。基盤層を10cm掘り込んで床面とする。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。検出した壁に竈の痕跡を示す焼土などが一切検出できない。貯蔵穴および壁溝はない。須恵器の坏、高台付埴、灰釉陶器高台付埴が、いずれも覆土内より出土する。住居の南半を中心にして出土する多量の角閃石安山岩は、出土レベルが床面よりやや高く、住居の埋没過程のもの。住居の南西隅で120住と重複する。この住居が120住に切られる平面精査の所見を得、伴出する土器の型式でも矛盾がない。方位 +91° 面積 16.81㎡(推)

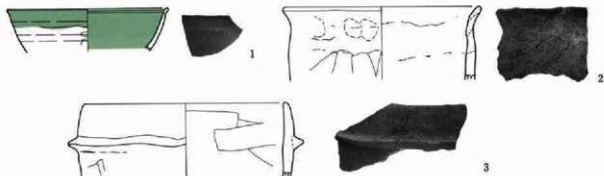


173号住居

遺物観察表 48

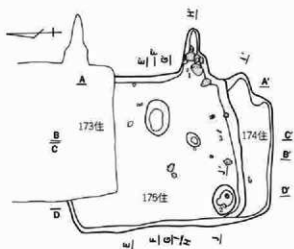


一辺3.0mの超小形正方形住居。基盤層を20cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に支柱穴はない。東壁の南側に竈を設置する。燃焼部は幅40cm、奥行き40cmで壁外に造り出す壁外型を呈し、煙道は火床の底面から約25°の角度で立ち上がり、奥壁の外側60cmまで伸びる。焚口部の両側と奥壁の両側に石材を据えた痕跡がある。壁溝は幅10cm、深さ5cmで、住居北半の各壁下に巡る。竈内より土釜、竈手前より羽釜、覆土より灰釉陶器塊がそれぞれ出土する。住居の南半で175住と重複する。この住居が175住を切って構築する土層断面の所見を得たが、伴出する土器の型式は173住→175住の順を示して逆転している。方位 +87° 面積 8.42㎡



174・175号住居

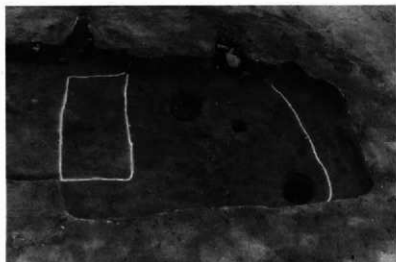
遺物観察表 48・49



- 1 茶褐色土
- 2 黒褐色土
- 3 暗褐色土

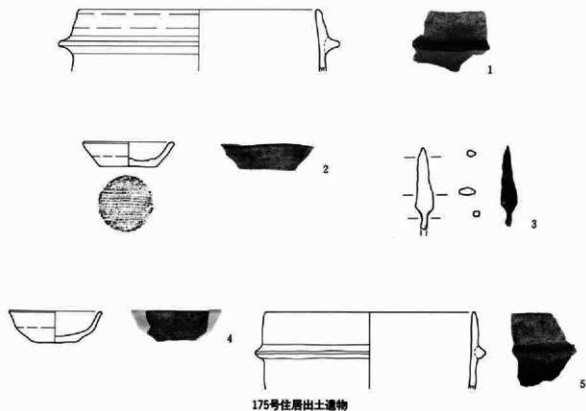
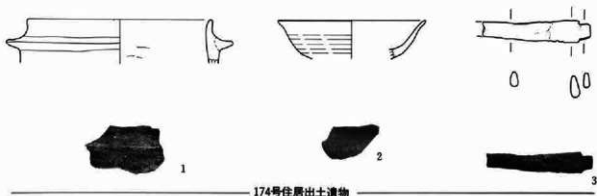
- 1 暗茶褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 暗灰褐色土
- 4 同上

L=164.50m



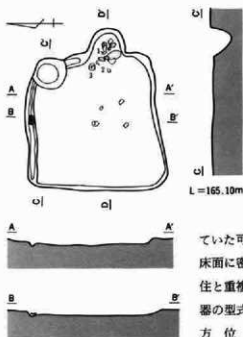
174号住居 南壁部を検出するのみで外形が確定できない。基盤層を20cm掘り込んで床面とする。壁内に支柱穴はない。東壁の南側に設置した竈は燃烧部を壁外に造り出す壁外型を呈す。覆土内より羽釜、須恵器坑が出土。方位 +91° 面積 測定不可能

175号住居 長軸を南北にもつ短軸3.1m、長軸3.9mの小形横長長方形住居。基盤層を30cm掘り込んで床面とする。壁内に支柱穴はない。東壁の南側に設置した竈は燃烧部が幅40cm、奥行き50cmの壁外型を呈す。燃烧部より出土する構築材の石は、奥壁の両側に据えたもの以外は原位置を留めない。煙道は奥壁の上面から掘り込む。住居の南西隅に直径50cm、深さ40cmの円形プランで貯蔵穴を設ける。竈内より羽釜、南壁際中央部の床面直上より鉄鏝、覆土内より須恵器坏が出土する。この住居が174住を切り、173住がこの住居を切って構築する土層断面の所見を得たが、173住との新旧関係については、伴出する土器の型式が173住→175住の順を示して逆転している。方位 +84° 面積 11.95㎡(推定)



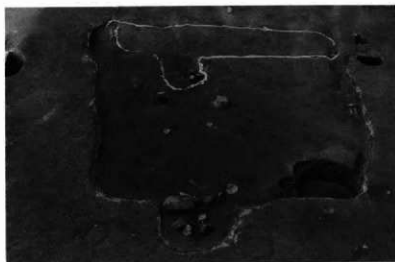
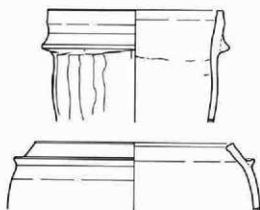
177号住居

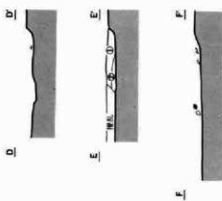
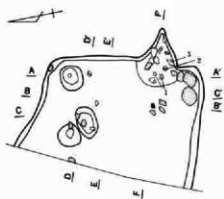
遺物観察表 49



短軸2.8m、長軸2.9mの超小形正方形住居。基盤層を10cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の両側に設置する。然焼部は幅60cm、奥行き50cmで、半円形状に壁外へ造り出す壁外型を呈す。然焼部より出土する石は竈の構築材として用いられていたものと考えられるが、いずれも原位置を留めていない。焚口部の両側に小さな掘り込みを検出することから、石材を据えていた可能性が高い。煙道は検出できない。竈内より羽釜、竈手前の床面に密着して須恵器高台付塊がそれぞれ出土する。住居の西半で182住と重複する。新旧関係を判定する実証的資料はないが、伴出する土器の型式は177住→182住の順を示す。

方位 +86° 面積 7.88㎡





- 1 黒褐色土
- 2 暗褐色土

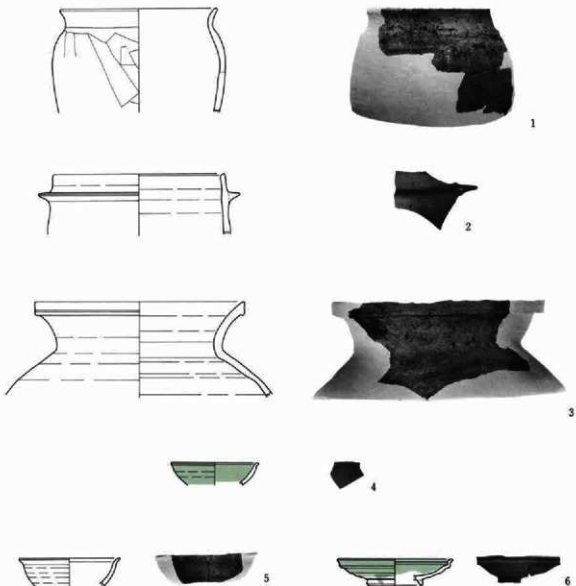


L=165.20m



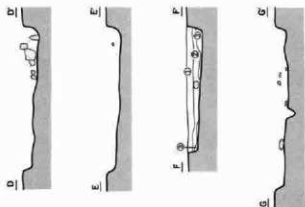
住居の西半が調査区域外のため全形は確認できず、外形が確定できない。南北軸3.4mを測る。基盤層を20cm掘り込んで平坦な床面を造る。住居の北半で直径40cm、深さ20cm程のピット2個を検出するが、この住居に伴うか否かの判定ができない。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。燃燒部は幅50cm、奥行き40cmで壁外に造り出す壁外型を呈し、煙道は奥壁の上面から壁を掘り込む。焚口部の同側に補強用の石材を検出した。竈手前の床面直上より土釜、羽釜、甕が出土するほか、住居の覆土より須恵器杯、灰釉陶器の埴、折縁皿が出土する。他の住居と重複することなく、調査区域の西端に単独で占地する。

方位 +107 面積 測定不可能



179号住居

遺物観察表 50

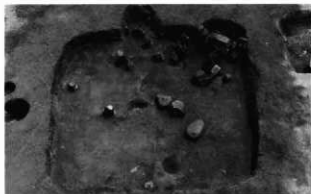
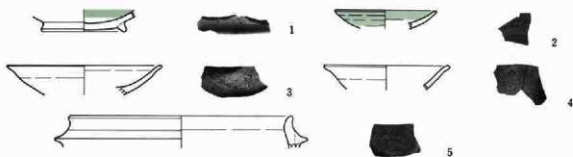


L=165.30m

- 1 暗褐色土
- 2 暗茶褐色土
- 3 暗褐色土



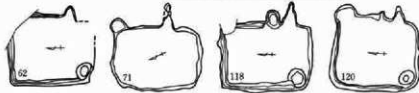
短軸2.7m、長軸2.9mの超小形正方形住居。基盤層を20cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に支柱穴はない。竈は東壁の中央部(A竈)から南端(B竈)へ造り替える。いずれも燃焼部を壁外に造り出す壁外型で、B竈は焚口部の両側に据えた石材の上に、加工した石材を横架して鳥居状の焚口部を構築し、火床の中央部に柱状の石材を埋め込んで支脚とする。煙道は火床の底面から奥壁の外側50cmまで伸びる。竈内より灰軸陶器坑、須恵器坑、住居の覆土内より羽釜がそれぞれ出土する。他の住居と重複せずに単独占地。方位 +96° 面積 7.26m²



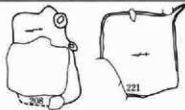
11世紀代の竪穴住居分布



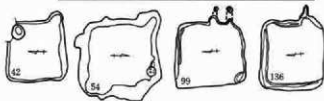
中形正方形



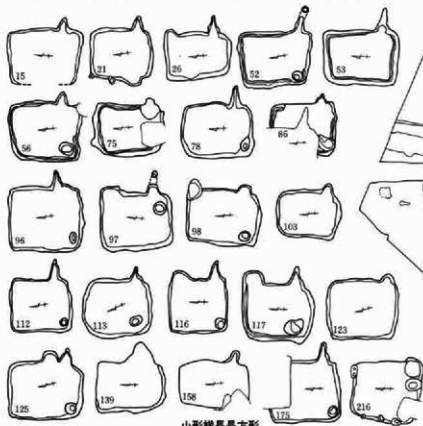
中形横長方形



中形縦長方形

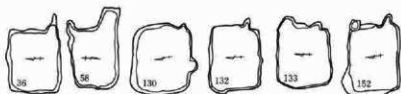


小形正方形

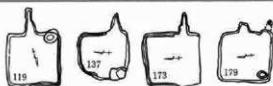


小形横長方形

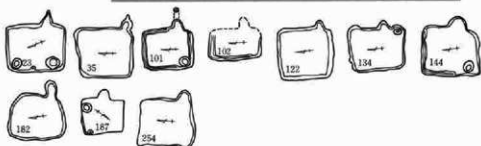




小形縦長長方形



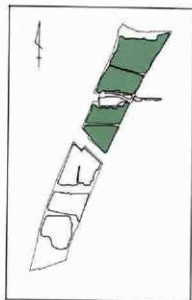
超小形正方形



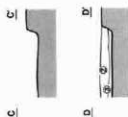
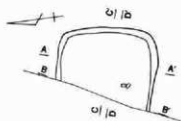
超小形横長長方形



超小形縦長長方形

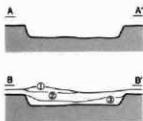


挿図11 11世紀代の竪穴住居分布図

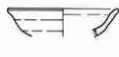


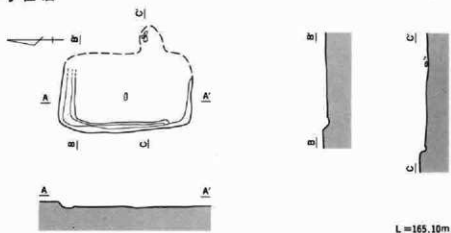
- 1 茶褐色土
- 2 黒褐色土
- 3 暗褐色土

L=165.40m



住居の西半が調査区域外のため全形は確認できず、外形が確定できない。南北軸2.1mを測る。検出した壁に竈の痕跡を示す焼土などが一切検出できないことから、竈が未検出の西壁に設置されていたと仮定すると、187住に住居の規模が近似し、年代も比較的近接している。基盤層を20cm掘り込んで床面とする。検出した床面は平坦で整っている。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。覆土内より羽釜、須恵器坏が出土する。他の住居と重複することなく単独で占地。方位 +98° 面積 測定不可能



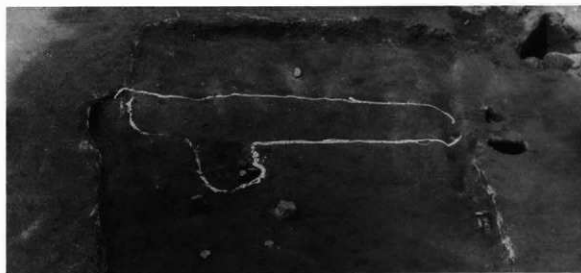


短軸1.7m、長軸2.8mで、長軸を南北にもつ超小形横長長方形住居。基盤層を10cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅50cm、奥行き50cmで、半円形状に壁外へ造り出す壁外型を呈す。煙道は検出できない。壁溝は幅15cm、深さ5cmで、北壁と西壁下に巡る。覆土内より須恵器片が出土する。住居の東側で177住と重複する。新旧関係を判定する実証的資料はないが、伴出する土器の型式は177住→182住の順を示す。

方位 +89° 面積 4.51㎡ (推定)



1

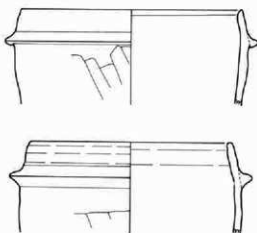
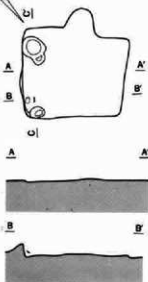


187号住居

遺物観察表 51

短軸1.9m、長軸2.2mで、長軸を南北にもつ超小形横長方形住居。基盤層を5cm掘り込んで床面とする。床面は全体に平坦で良く整っている。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は西壁の中央部に設置する。掘り込みが浅いため全形を明確に把握することはできないが、燃焼部は幅60cm、奥行き50cmで、半円形状に壁外へ造り出す壁外型を呈す。煙道は検出できない。住居の南西隅に一辺40cm、深さ40cmの方形プランで貯蔵穴を配置する。住居南東隅の床面直上より須恵器環が出土するほか、覆土内より羽釜、須恵器環が出土する。他の住居と重複することなく、単独で占地する。

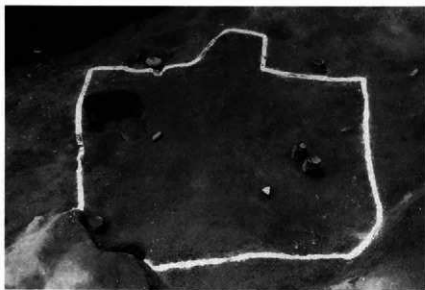
L=164.50m 方位 -133° 面積 4.01m²



2



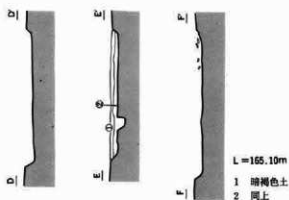
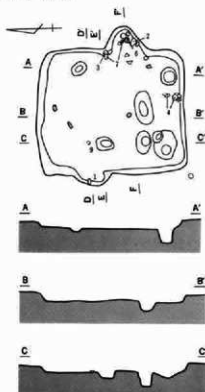
4



5



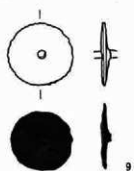
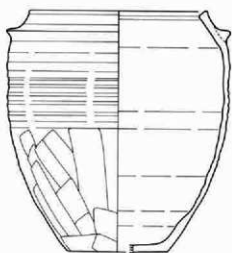
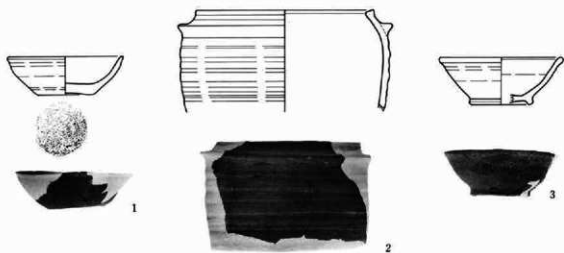
6

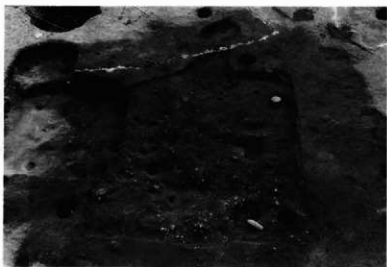
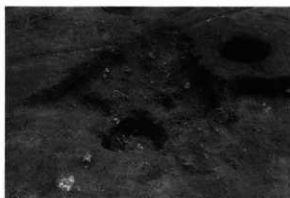
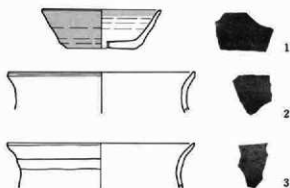
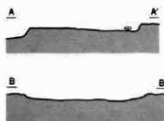
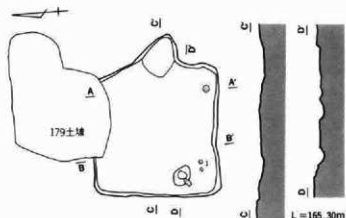


長軸を南北にもつ短軸2.6m、長軸3.2mの小形横長長方形住居。基盤層を15cm掘り込んで床面とする。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の中央からやや南側に設置する。燃烧部は幅60cm、奥行き40cmで、半円形状に壁外へ造り出す壁外型を呈す。火床の中央部に柱状の石を埋め込んで支脚とする。住居の南西隅に直径30cm、深さ30cmの円形プランで貯蔵穴を配置する。住居南西部のピットは、この住居に伴うか否かが判定できない。西壁際北側の床面に密着して須恵器坏、竈内と南壁際中央部より羽釜が出土するほか、住居北西部より鉄製紡錘車が出土する。住居の南東隅で232住と重複する。この住居が232住を切つて構築する平面精査の所見を得た。

方位 +89° 面積 8.35m²



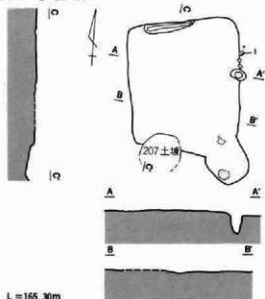




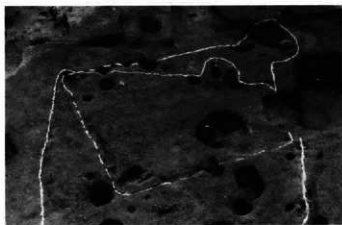
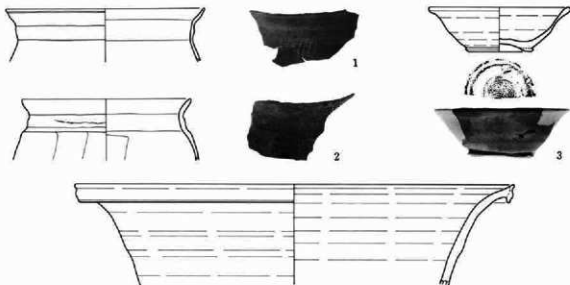
住居の北東隅は検出できないが、長軸を東西にもつ短軸2.6m、長軸2.9mの超小形縦長長方形を呈す。基盤層を5cm掘り込んで床面とする。床面は全体に小さな起伏が多く、平坦な面は少ない。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。東壁のほぼ中央部に竈を設置する。燃焼部は幅60cm、奥行き50cmで、半円形状に壁外へ造り出す壁外型を呈す。煙道は検出できない。

貯蔵穴および壁溝はない。南壁際西側の床面直上より須恵器坏破片が出土するほか、覆土内より甕の破片が出土する。他の住居と重複することなく単独で占地するが、立地する位置的な関係から、住居の東側で近接する200住との同時存在はあり得ない。方位 +94° 面積 7.26㎡(推定)

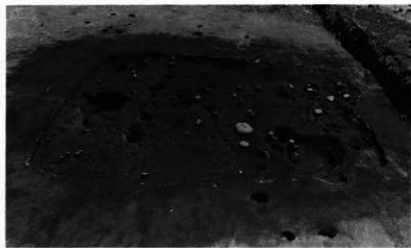
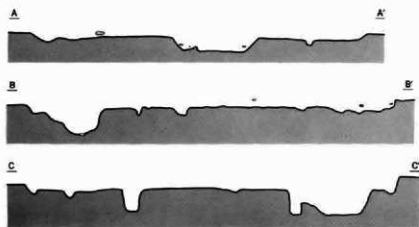
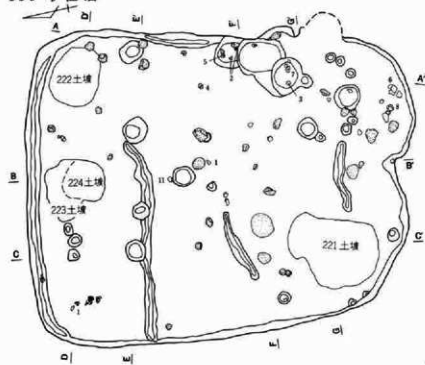
192号住居



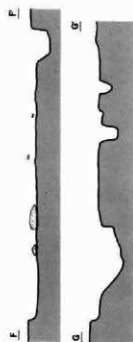
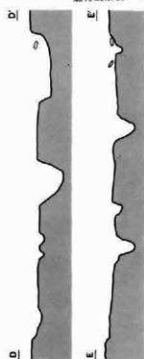
短軸2.4m、長軸2.7mで、長軸を南北にもつ超小形横長方形住居。基盤層を僅かに掘り込んで床面とする。床面の大半が191住との重複部にあたる。住居南東隅のピットはこの住居に伴うか否かが判定できない。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。検出した壁に電の痕跡を示す焼土などは一切検出できない。長軸を南北にもつ横長型の住居は、東壁の南側に電を設置する類例が圧倒的に多いことから、この住居も東壁に設置していた可能性が高い。東壁際北側の床面直上より壘、覆土内より須恵器高台付塊が出土。この住居が重複する211住を切る平面精査の所見を得、191住との新旧関係を判定する実証的資料を欠く。伴出する土器の型式は191住→192住→211住の順で、平面精査の所見と逆転する。方位 +86° 面積 6.32㎡



199号住居



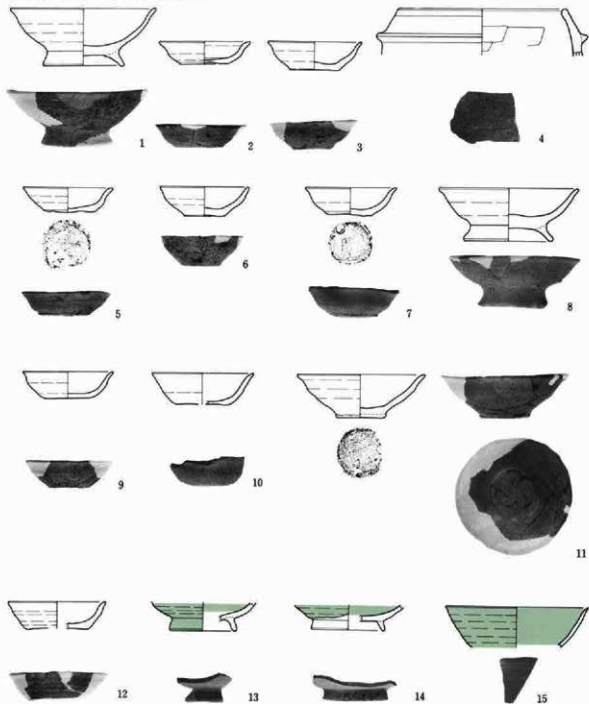
遺物観察表 55

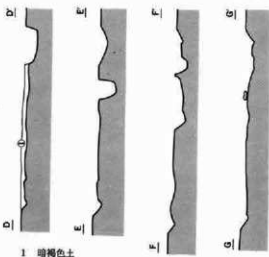
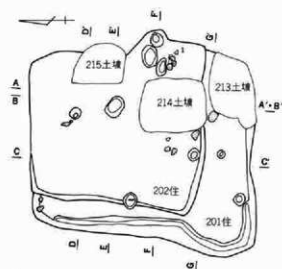


L=165.10m

短軸6.4m、長軸7.9mで、長軸を南北にもつ超大形横長方形住居。住居の南東部に重複する他の住居が存在する可能性もあるが、掘り込みが浅いために明確に確認できず、単独の住居として扱った。基盤層を10cm掘り込んで床面とする。住居のほぼ対角線上に3個の主柱穴を検出した。南西に位置する柱穴は重複する土塊に切られている。竈は東壁の南側に設置する。掘り込みが浅いために全形は確認できず、半円形状に造り出した燃焼部の一部を検出するにすぎない。壁溝は幅20cm、深さ5cmで北壁下のみに通る。住居の南東隅に直径50cmの貯蔵穴様ピットを検出した。住居北西部の床面直上より須恵器高台付境、東壁際中央の床面直上より羽釜、東壁際中央部の不整形なピット内より須恵器坏、灰釉陶器高台付境が出土する。

方位 +10° 面積 49.34㎡





L=165.30m



1



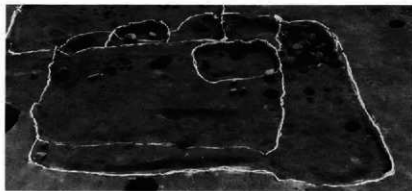
2

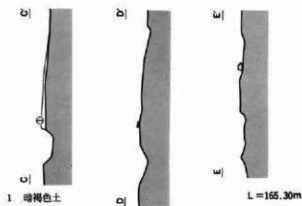
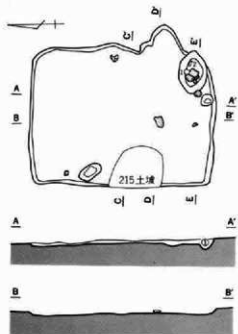
202号住居出土遺物

201号住居 西壁と南壁を検出するのみで住居の全形は確認できず、外形が確定できない。基盤層を10cm掘り込んで床面とする。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈および貯蔵穴はない。西壁下に幅15cm、深さ5cmの壁溝が巡る。伴出遺物はない。住居の北半部で202住、211住と重複する。この住居が211住を切る平面精査の所見を得たが、202住との新旧関係を判定する実証的資料を欠き、この住居に伴出土

器がないために土器型式による判定も不可能。方位 +94°

202号住居 長軸を南北にもつ短軸3.1m、長軸3.7mの小形横長方形住居。基盤層を10cm掘り込んで床面とする。壁内に主柱穴はない。竈は東壁の両側に設置する。燃烧部を半円形状に壁外に造り出す壁外型を呈す。煙道は検出できない。竈内と覆土内より須恵器片が出土する。この住居が211住を切る平面精査の所見を得たが、伴出する土器の型式は202住→211住の順を示す。201住、203住との新旧関係を判定する実証的資料はないが、伴出する土器の型式は202住→203住→211住の順。方位 +92° 面積 11.83m²

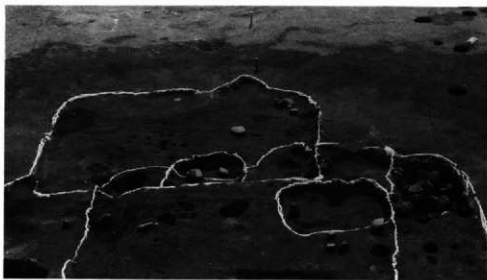


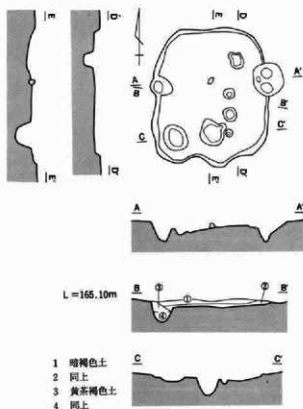


1 暗褐色土

長軸を南北にもつ短軸3.0m、長軸3.9mの小形横長方形住居。基盤層を5cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。燃燒部は幅60cm、奥行き50cmで、半円形状に壁外へ造り出す壁外型を呈す。焚口部の両側に小さな掘り込みを検出することから、焚口部を石材で補強して

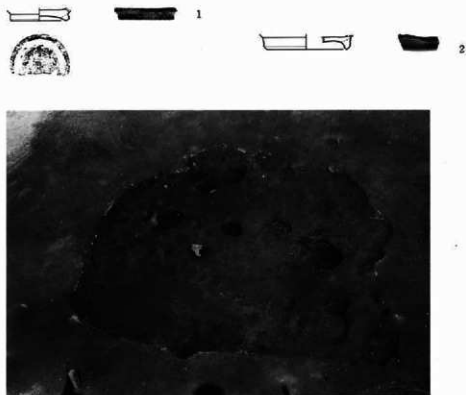
たものと推察される。煙道は検出できない。住居の南東隅に短径60cm、長径90cmの楕円形プランで貯蔵穴を配置する。羽釜、土釜の破片が出土する。重複する202住との新旧関係を判定する実証的資料を欠き、この住居が211住、241住を切る平面精査の所見を得たが、伴出する土器の型式は241住→203住、202住→203住→211住の順を示して、211住との関係が逆転している。方位 +91° 面積 11.10㎡

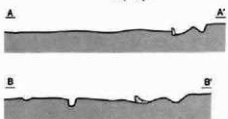
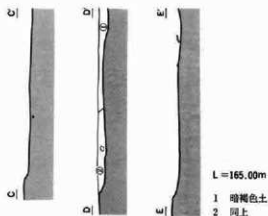
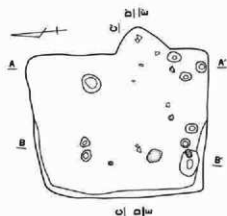




長軸を南北にもち、短軸2.4m、長軸2.9mの超小形横長長方形住居。192号住居に住居の形状、規模、軸線の傾きが近似し、年代も近い。基盤層を10cm掘り込んで構築面とする。構築面には起伏が多い。生活面は明確に把握できない。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は明確に確認できない。東壁の北側に竈状の張り出し部を検出し、焚口部を補強する石材を据えたかのような小さな掘り込みを検出するが、この遺跡で年代が確定し得た住居のうち、東壁の北側に竈を設置する平安時代の住居の類例は226住のみである。貯蔵穴および壁溝は検出できない。覆土内より須恵器高台付埴、灰釉陶器高台付埴が出土する。他の住居と重複することなく、単独で占地する。

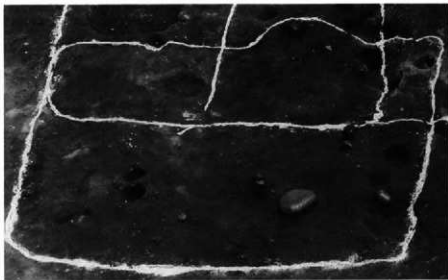
方位 +91° 面積 6.18㎡





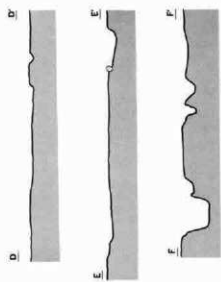
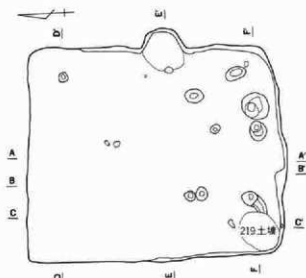
長軸を南北にもち、短軸3.1m、長軸3.7mの小形横長方形住居。基盤層を5cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。西壁際と南壁際に柱穴様のピットを検出するが、いずれも柱穴列をなさない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅80cm、奥行き50cm程で、半円形状に壁外に造り出す壁外型を呈す。煙道は検出できない。貯蔵穴および壁溝はない。覆土内より須恵器杯、羽釜が出土する。住居の東半で206住、210住と重複する。いずれも新旧関係を判定する実証的資料を欠くが、伴出する土器の型式は210住→205住→206住の順を示す。

方位 +91° 面積 11.15m²



206号住居

遺物観察表 57

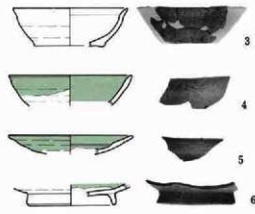


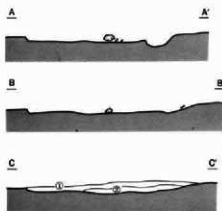
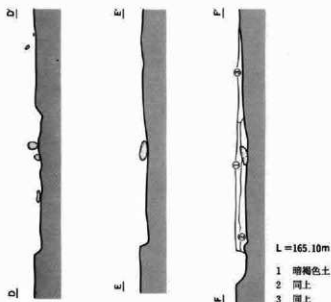
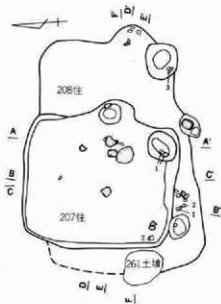
- 1 暗褐色土
 - 2 暗灰色土
 - 3 暗褐色土
- L=165.00m



短軸4.5m、長軸5.6mで、長軸を南北にもつ大形横長方形住居。基盤層を5cm掘り込んで床面とする。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。住居の南半に柱穴様のビット2個を検出するが、対応する北半の柱穴が確認できない。竈は東壁のほぼ中央部に設置する。燃焼部は幅80cm、奥行き40cmで、半円形状に壁外へ造り出す壁外型を呈す。煙道は検出できない。貯蔵穴および壁溝はない。覆土内より羽釜、須恵器杯、灰釉陶器の境、段皿が出土する。住居の北半で205住、210住と重複する。いずれも新旧関係を判定する実証的資料を欠くが、伴出する土器の型式は210住→205住→206住の順を示して、この住居が最も新しい。

方位 +92° 面積 24.36㎡

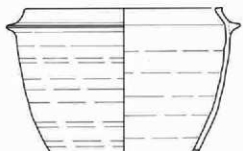




207号住居 長軸を南北にもつ短軸2.7m、長軸3.2mの小形横長長方形住居。基盤層を10cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に主柱穴はない。竈は東壁の中央部よりやや南側に設置する。掘り込みが浅いため明確に把握できないが、燃焼部を壁外に造り出す壁外型を呈す。住居の南東隅に直径60cm、深さ15cmの不整円形プランで貯蔵穴を配置する。貯蔵穴内より羽釜、西壁際南側の床面直上より須恵器坏が出土する。住居の大半が208住と重複する。新旧関係を判定する実証的資料を欠くが、伴出する土器の型式は207住→208住の順を示す。 方位 +98°



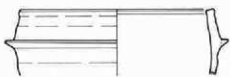
面積 8.43㎡ (推) **208号住居** 住居の北西隅は検出できないが、長軸を東西にもつ短軸3.2m、長軸4.9mの中形縦長長方形住居と推定する。基盤層を5cm掘り込んで床面とする。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。東壁の南側に竈を設置する。燃焼部は半円形状に壁外へ造り出す壁外型を呈す。煙道は検出できない。住居の南東隅に直径70cmの不整円形プランで貯蔵穴を設ける。南壁際西側の床面直上より灰釉陶器皿、高台付埴が出土する。 方位 +92° 面積 15.19㎡(推定)



1



2



3



4



5

6

7

207号住居出土遺物



1

2

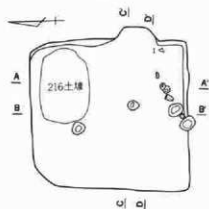


3

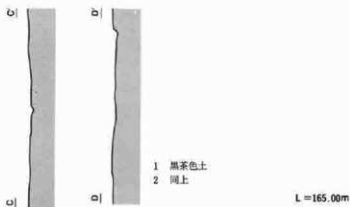
4

5

208号住居出土遺物

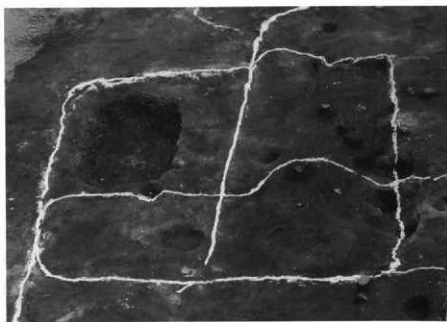


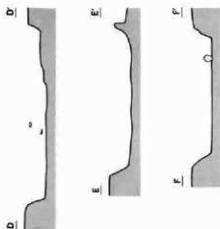
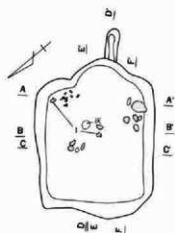
1



短軸3.2m、長軸3.3mの小形正方形住居。基盤層を5cm掘り込んで床面とする。住居の北東部を重複する土壌に深く切られる。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。掘り込みが浅いために全形は確認できないが、燃燒部を壁外に造り出す壁外型と推察される。煙道は検出できない。貯蔵穴および壁溝は検出できない。東壁際南側の床面に密着して灰軸陶器塊が出土する。住居の西半で205住と、南半で206住とそれぞれ重複する。いずれも新旧関係を判定する実証的資料はないが、伴出する土器の型式は210住→205住→206住の順を示して、この住居が最も古く位置付けられる。

方位 +89° 面積 10.40m²





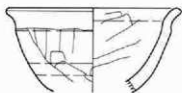
L=165.20m

- 1 黒褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 同上
- 4 茶褐色土
- 5 黒褐色土



長軸を東西にもつ短軸2.5m、長軸2.9mの超小形縦長長方形住居。基盤層を40cm掘り込んで床面とする。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の中央部に設置する。燃燒部を壁外に造り出す壁外型を呈し、煙道は火床の底面から水平に60cm伸びて、垂直に近い状態で立ち上がる。住居北東部の床面に密着して鉢、覆土内より須恵器の坏、高台付埴、灰軸陶器高台付埴、羽釜が出土する。住居の北西部で191住、192住と、住居の南東部で202住、203住とそれぞれ重複する。重複するすべての住居がこの住居を切って構築する平面精査の所見を得たが、伴出する土器の型式は191住→192住→202住→203住→211住の順を示して、平面精査の所見と逆転している。方位 +127° 面積 6.89㎡





1



2



3



4



5



6



7



8



9



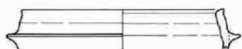
10



11



12



13



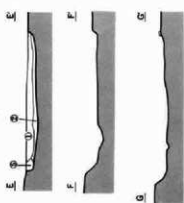
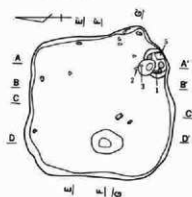
14



15

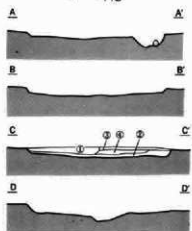
212号住居

遺物観察表 59



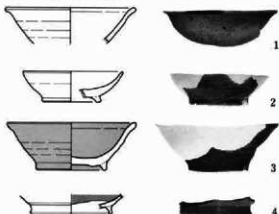
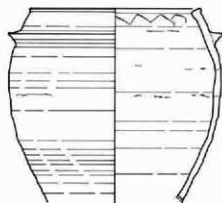
- 1 暗褐色土 4 暗茶褐色土
 - 2 暗茶褐色土 5 黄茶褐色土
 - 3 暗褐色土
- L=164.90m

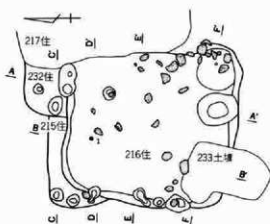
短軸3.0m、長軸3.1mの超小形
 正方形住居。基盤層を10cm掘り込
 んで床面とする。床面は全体に平
 坦で良く整っている。住居西半に
 検出した直径50cm、深さ10cmの
 ビットは、後世の擾乱の可能性が
 高い。壁内に支柱穴はなく、壁外



にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部を壁外に
 造り出す壁外型と推定されるが、掘り込みが浅いために明確ではない。
 住居の南東隅に直径50cm、深さ20cmの円形プランで貯蔵穴を設ける。
 住居南東隅の床面直上より須恵器高台付塊、貯蔵穴内より羽釜が出土
 する。住居の西半で235住と、北半で251住と、南壁で256住とそれぞれ
 重複する。この住居が重複する全ての住居を切って構築する平面精査
 の所見を得、これは伴出する土器の型式が示す順序と一致している。

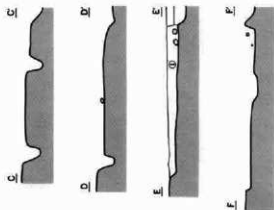
方位 +90° 面積 8.55m²





1 明褐色土

L=165.10m



215号住居 住居北西隅の一部を検出するのみで、外形は確定できない。基盤層を5cm掘り込んで床面とする。柱穴、竈、貯蔵穴は検出できず、伴出土器もない。重複する216住、232住との新旧関係を判定する実証的資料はない。方位 +89° 面積 測定不可能

216号住居 長軸を南北にもつ短軸3.2m、長軸3.6mの小形横長長方形住居。基盤層を15cm掘り込んで床面とする。壁内に主柱穴はない。東壁の南端に設置する竈は、焚口部の両側に補強用の河原石を据えた壁外型を呈す。住居北西部の床面に密着して須恵器高台付壇が出土する。この住居が217住に切られ、218住を切る土層断面の所見を得たが、伴出する土器の型式は218住→217住→216住の順を示す。215住、232住との新旧関係を判定する資料はない。方位 +96° 面積 11.04m²

232号住居 北西隅を検出するのみで、外形は確定できない。基盤層を10cm掘り込む。柱穴、竈などは検出できず、伴出土器もない。188住、215住、216住、217住との新旧関係を判定する資料はない。方位 +95° 面積 測定不可能

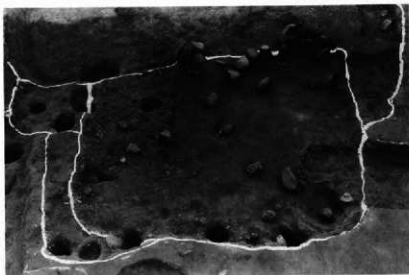


1



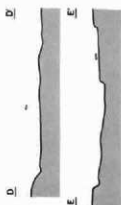
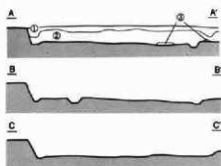
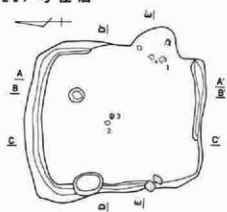
2

216号住居出土遺物



217号住居

遺物観察表 60



- 1 暗褐色土
- 2 明褐色土
- 3 明茶褐色土

L=165.10m

が出土する。住居の西半で216住、232住と、住居の南半で218住とそれぞれ重複する。この住居が216住を切って構築する土層断面の所見を得たが、伴出する土器の型式は逆転している。218住、232住との新旧関係を判定する実証的資料はないが、伴出する土器型式は218住→217住→216住の順を示す。方位 +90° 面積 11.33㎡



1



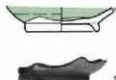
5



6



2



3

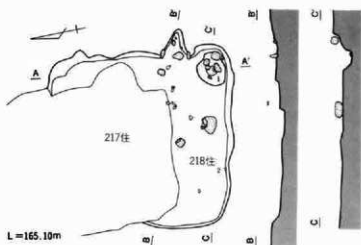


4

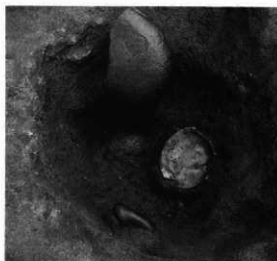


218号住居

遺物観察表 60

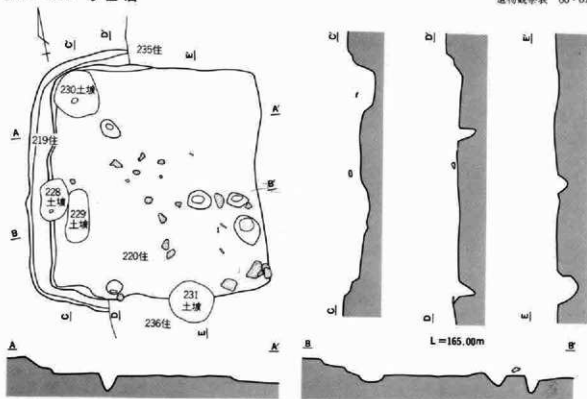


住居の北西部は検出できないが、短軸3.7m、長軸4.0mの小形正方形住居。基盤層を10cm掘り込んで床面とし、壁内に主柱穴はない。東壁の南側に設置する竈は焚口部の両側を河原石で補強する壁外型で、火床に石製支脚を置く。貯蔵穴は住居の南東隅に直径60cm、深さ20cmの円形で、内部より須恵器環が出土する。216住がこの住居を切る平面精査の所見を得、217住、233住との新旧関係を判定する実証的資料はない。方位 +101° 面積 14.20㎡(推)



219・220号住居

遺物観察表 60・61



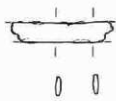
219号住居 住居の西壁部を検出するのみで、外形は確定できない。基盤層を10cm掘り込んで床面とする。柱穴、竈、貯蔵穴は検出できない。羽釜、須恵器坏、灰釉陶器段皿が出土する。重複する220住、235住、236住との新旧関係を判定する実証的資料はないが、土器型式は220住→219住の順を示す。方位+103°

220号住居 一辺4.9mの中形正方形住居。基盤層を15cm掘り込んで床面とする。柱穴、竈、貯蔵穴は検出できない。住居南東部の床面直上より刀子が出土するほか、覆土内より羽釜、須恵器坏、灰釉陶器皿、羽口の破片が出土する。219住、235住、236住、256住との新旧関係を判定する実証的資料を欠くが、伴出する土器の型式は256住→235住・236住→220住→219住の順を示す。方位+98° 面積 21.62㎡

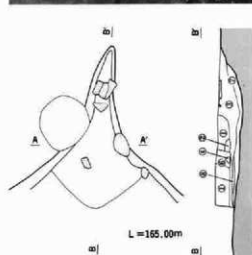
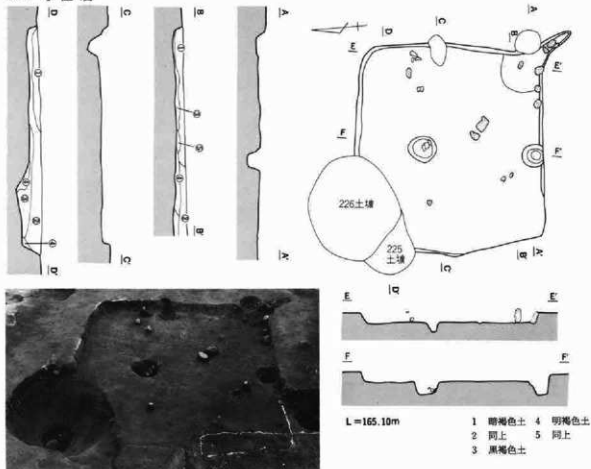




219号住居出土遺物



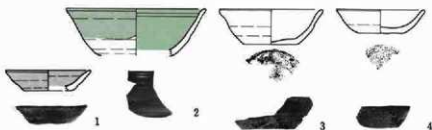
220号住居出土遺物

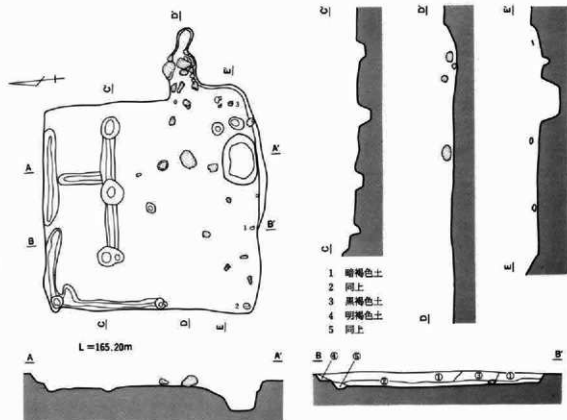


住居の北西隅は重複する土埧に切られて検出できないが、長軸を東西にもつ短軸4.0m、長軸4.5mの中形縦長方形住居。基盤層を20cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に支柱穴はない。竈は住居の南東隅に設置する。燃燒部は幅40cm、奥行き40cmで壁外に造り出す壁外型を呈し、煙道は火床の底面から緩やかに立ち上がり、奥壁の外側60cmまで伸びる。焚口部の向って右側に補強用の河原石を検出した。住居の覆土内より灰胎陶器塊、須恵器環が出土する。住居の南西部で223住と重複する。新旧関係を判定する実証的資料はないが、伴出する土器の型式は223住→221住の順を示す。方位 +94° 面積 16.88㎡ (推定)



- 1 明褐色土 5 黄褐色土
2 暗褐色土 6 明褐色土
3 明褐色土 7 暗褐色土
4 黒褐色土 8 同上



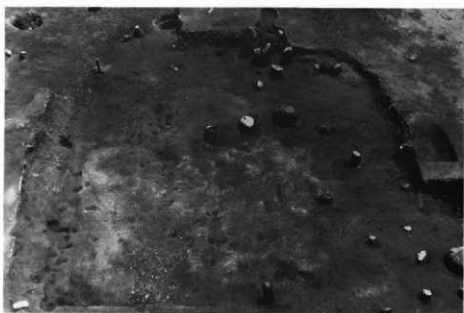
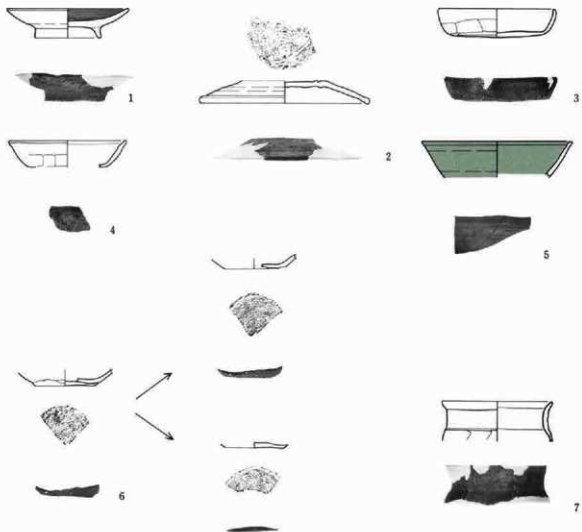


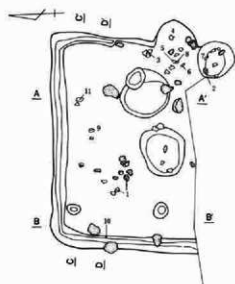
短軸4.4m、長軸4.7mの中形正方形住居。基盤層を10cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。住居の北半に直径40cm、深さ20cm程の柱穴様ピット3個が1.4mの等間隔で並び、ピット間が幅25cm、深さ5cmの浅い溝で結ばれているが、対応する住居南半にピットが検出できない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅50cm、奥行き80cmで壁外に造り出す壁外型を呈し、煙道は奥壁の外側60cmまで伸びる。奥壁の両側に補強材とした扁平な河原石を検出した。南壁際東側に短軸70cm、長軸1.0m、深さ40cmの方形プランで貯蔵穴を設ける。壁溝は幅20cm、深さ5～10cmで、北壁と南壁の一部に巡る。南壁際中央部より皿、住居南西隅より須恵器坏蓋、住居南東隅より坏がいずれも床面直上より出土するほか、覆



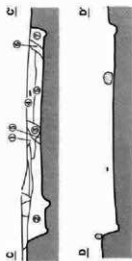
土内より灰粘陶器埴、須恵器坏、甕が出土する。221住、240住、241住、242住とそれぞれ重複する。この住居が重複する240住、241住、242住を切る平面精査の所見を得、伴出する土器の型式も240住→241住・242住→223住の順を示す。221住との新旧関係を判定する実証的資料はないが、伴出する土器の型式は223住→221住の順を示す。

方位 +93° 面積 20.40m²(推)





L=165.00m



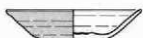
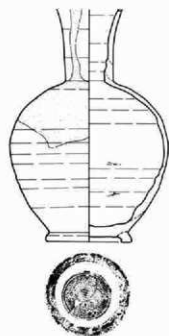
- | | |
|--------|---------|
| 1 黒褐色土 | 5 暗褐色土 |
| 2 暗褐色土 | 6 暗灰褐色土 |
| 3 同上 | 7 茶褐色土 |
| 4 同上 | |

南壁部が調査区域外のため全形は確認できず、外形が確定できない。東西軸4.5mを測る。基盤層を30cm掘り込んで床面とする。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁に設置する。燃烧部は幅80cm、奥行き60cmで、半円形状に壁外へ造り出す壁外型を呈す。煙道は検出できない。幅15cm、深さ5cmの壁溝が、東壁の南半を除く壁下に巡る。住居西側より須恵器壺、竈の周辺部より須恵器の坏、高台付埴、灰釉

陶器皿がいずれも床面直上より出土する。住居の西側で226住と重複する。新旧関係を判定する実証的資料を欠くが、伴出する土器の型式は225住→226住の順を示す。

方位 +92° 面積 測定不可能







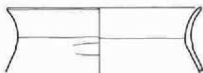
12



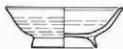
13



14



15

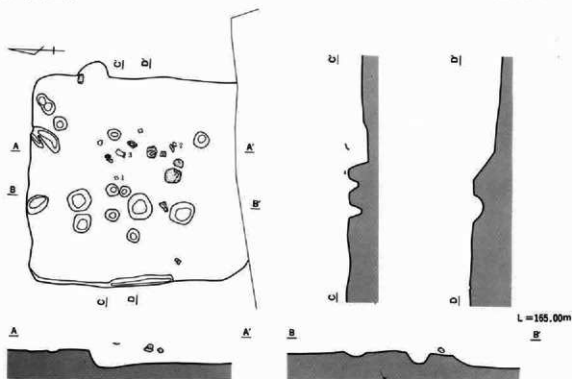


16

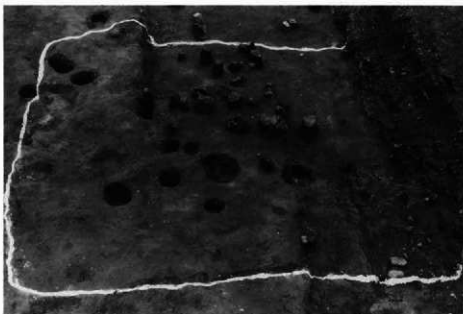


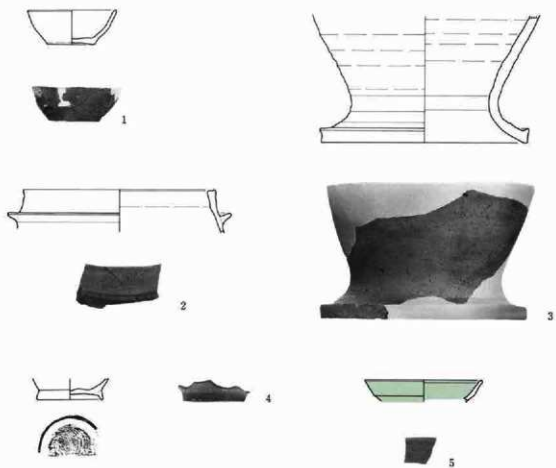
17





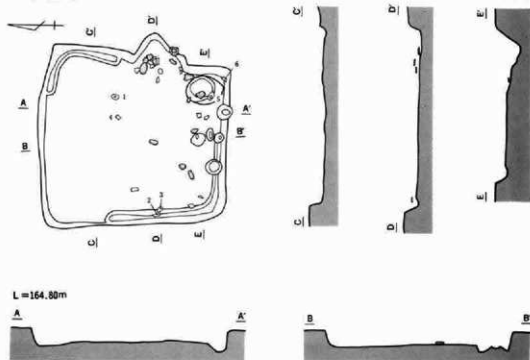
南壁部が調査区域外のため全形は確認できず、外形は確定できない。東西軸4.4mを測る。基盤層を5cm掘り込んで床面とする。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。住居の西半に柱穴様のピットを検出するが対応するピットがなく、柱穴列をなさない。竈は東壁の北側に設置する。燃焼部は幅50cm、奥行き30cmで、半円形状に壁外へ透り出す壁外型を呈す。焚口部の左側に補強用の石材を検出した。住居中央部の床面直上より羽釜、甗、須恵器片が出土する。住居の東半で重複する226住との新旧関係を判定する実証的資料はないが、伴出する土器の型式は225住→226住の順を示す。方位 +90° 面積 測定不可能





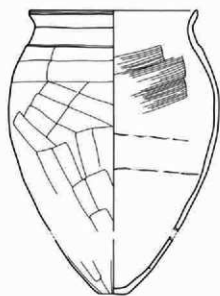
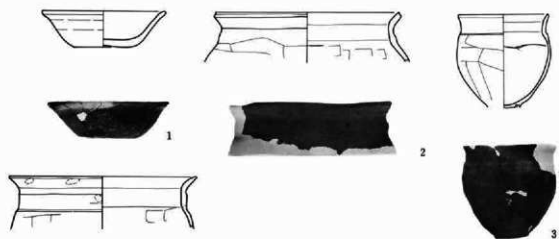
227号住居

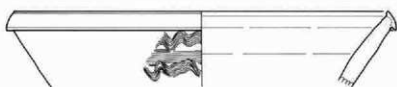
遺物観察表 63

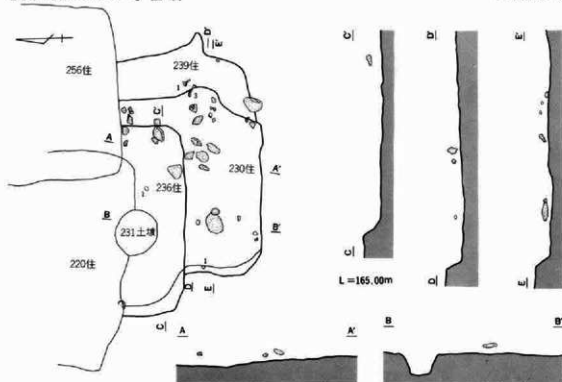


短軸3.7m、長軸4.0mの小形正方形住居。基盤層を30cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅60cm、奥行き60cmで、半円形状に壁外へ造り出す壁外型を呈す。焚口部に向かって左側に、下面を打ち欠いて平坦にした河原石を据える。煙道は検出できない。住居の南東隅に直径60cm、深さ20cmの円形プランで貯蔵穴を配置する。壁溝は幅15cm、深さ5cmで、住居南西隅と北東隅の壁下に巡る。住居中央東側より甕、須恵器環、西壁際より甕がいずれも床面直上より出土するほか、貯蔵穴内より須恵器高台付埴、住居の覆土内より灰軸陶器の埴、皿、須恵器甕が出土する。住居の北西部で231住と重複する。この住居が231住を切って構築する土層断面の所見を得、これは伴出する土器の型式が示す順序と一致している。方位 +90° 面積 14.20㎡









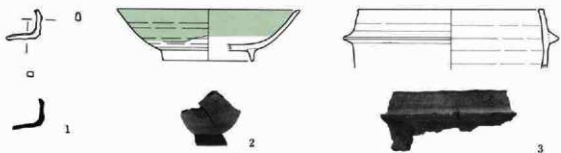
230号住居 住居の南半を検出するのみで外形が確定できない。基盤層を40cm掘り込んで床面とする。壁内に主柱穴はない。東壁の南側に設置する竈は、燃焼部を半円形状に壁外へ造り出す壁外型を呈す。西壁際南側の床面直上より鉄釘、竈内より羽釜、覆土内より灰釉陶器境が出土する。この住居が239住を切る平面精査の所見を得た。236住、256住、263住との新旧関係を判定する実証的資料を欠くが、伴出する土器の型式は256住・257住→236住→239住→230住の順を示す。方位 +92° 面積 測定不可能



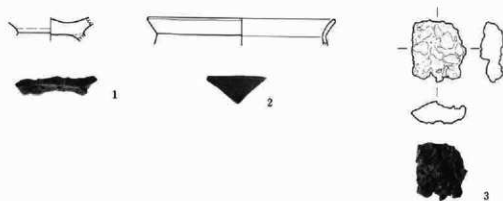
236号住居 南壁部を検出するのみで外形が確定できない。基盤層を40cm掘り込んで床面とする。柱穴はなく、竈は構築面のみを検出。竈の構築面より壺が出土する。

方位 +93° 面積 測定不可能

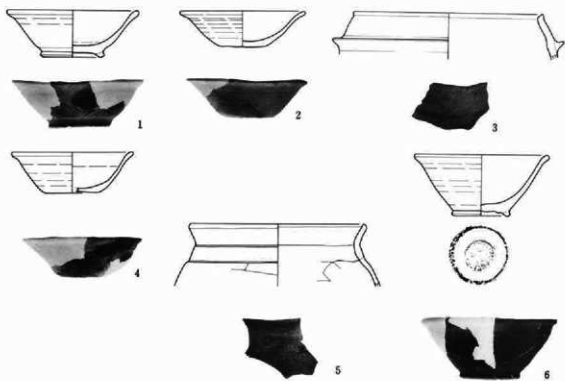
239号住居 東壁の南半を検出するのみで外形が確定できない。基盤層を40cm掘り込んで床面とする。柱穴はない。竈は東壁の南側に設置する。竈西側の床面直上より須恵器高台付埴、覆土より壺が出土。方位 +90° 面積 測定不可能



230号住居出土遺物

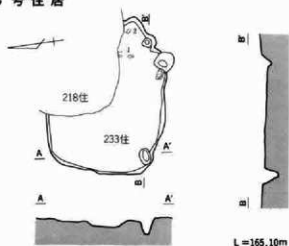


236号住居出土遺物



239号住居出土遺物

233号住居

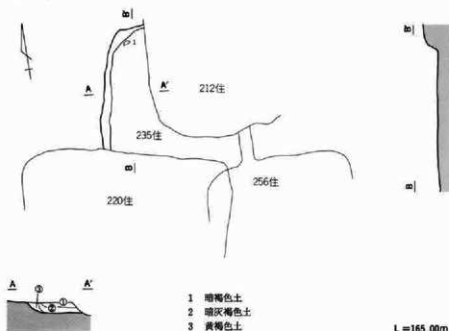


遺物観察表 65

住居の北東部は検出できないが、長軸を東西にもつ短軸2.5m、長軸2.8mの超小形縦長長方形住居。基盤層を5cm掘り込んで床面とする。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。東壁の南側に設置する竈は全形が確認できないが、燃焼部を半円形状に壁外へ造り出す壁外型を呈す。煙道は検出できない。竈内と竈手前の床面直上より須恵器高台付埴が出土する。住居北半部で216住、218住と重複する。いずれも新旧関係を判定する実証的資料を欠くが、伴出する土器の型式は218住→233住→216住の順を示す。

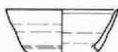
方位 +107° 面積 6.46m²(推定)





- 1 暗褐色土
- 2 暗灰褐色土
- 3 黄褐色土

L=165.00m

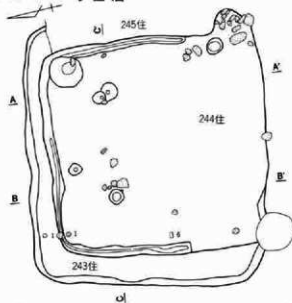


住居の北西部を検出するのみで全形が確認できず、外形は確定できない。基盤層を20cm掘り込んで床面とする。検出した範囲の床面は小さな起伏が多く、平坦ではない。検出した床面の範囲に柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈、貯蔵穴、壁溝は検出できない。住居北西隅の床面に密着して須恵器環が出土する。住居の東半で212住と、南半で219住、220住、256住とそれぞれ重複する。212住がこの住居を切って構築する平面精査の所見を得、これは伴出する土器の型式が示す順序と一致している。219住、220住、256住との新旧関係を判定する実証的資料はないが、各住居に伴出する土器の型式は256住→235住→212住→220住→219住の順を示している。

方位 +97 面積 測定不可能

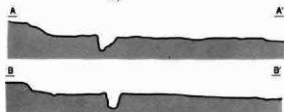
243・244号住居

遺物観察表 67・68



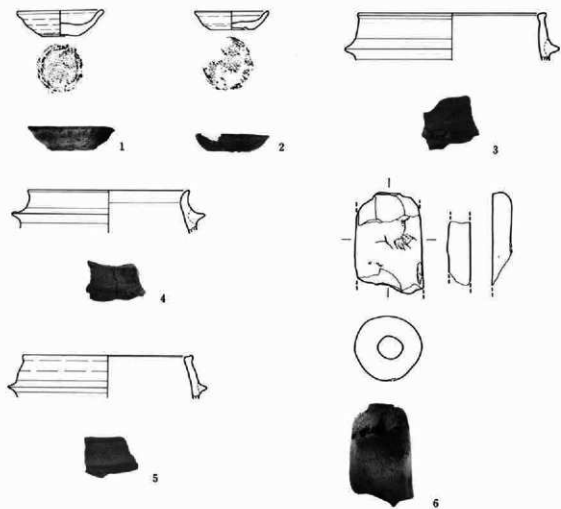
243号住居 住居の全形は確認できないが長軸を東西にもつ短軸5.1m、長軸5.6mの大形縦長方形と推定。基盤層を10cm掘り込んで床面とする。柱穴、竈は検出できない。北壁際西側の床面直上より須恵器坏が出土。方位 +99° 面積 測定不可能

244号住居 一辺4.6mの中形正方形住居。基盤層を15cm掘り込んで床面とする。住居の北半に柱穴様のビット2個を検出するが、対応するビットがない。東壁の南端に設置する竈は、燃焼部を半円形状に壁外へ造り出す。住居北西隅より須恵器坏、覆土内より羽釜が出土。重複する住居の土器型式による順は248住・1号鍛冶遺構→243住→244住→245住。方位 +97° 面積 20.75m²



243号住居出土遺物



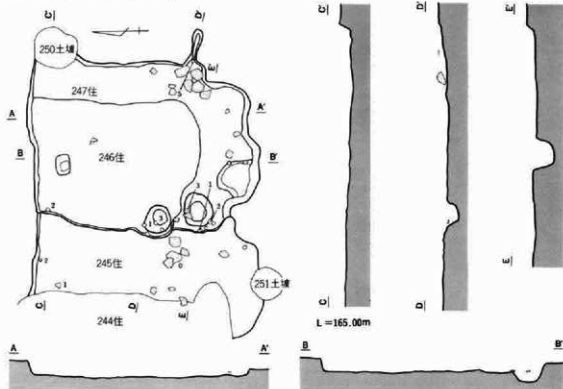


244号住居出土遺物



245・246・247号住居

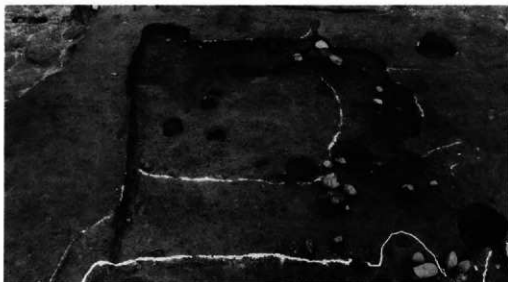
遺物観察表 68

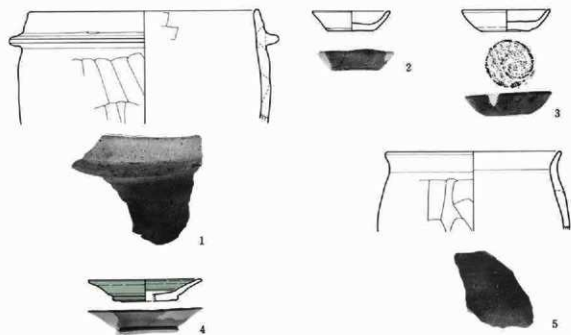


245号住居 住居の外形が確定できない。主柱穴はない。東壁の南側に設置する竈は燃焼部を壁外に造り出す。北壁際の床面直上より羽釜、須恵器坏、覆土内より灰釉陶器段皿が出土。方位 +97° 面積 測定不可能

246号住居 住居の外形が確定できず、柱穴、竈は検出できない。住居南西隅に直径60cmの円形貯蔵穴を設け、内部より須恵器坏が出土。方位 +99° 面積 測定不可能

247号住居 住居の外形が確定できない。南壁に張り出し部をもつ。東壁の南側に設置する竈は燃焼部を壁外に造り出し、構築材の河原石は原位置を留めない。住居南西部の貯蔵穴内より羽釜、須恵器坏が出土。重複する住居の土器型式による順序は264住→248住・1号蔵治遺構→262住→243住→244住・247住→245住→246住。方位 +97° 面積 測定不可能

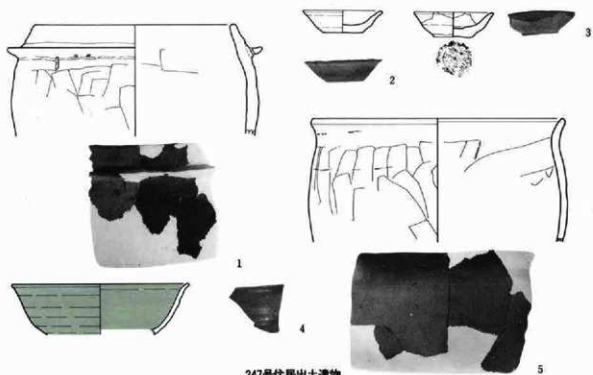




245号住居出土遺物



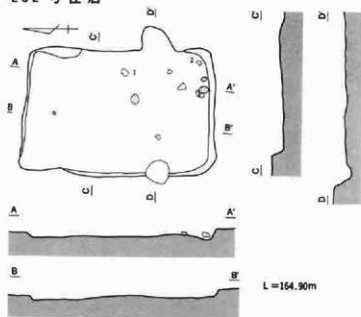
246号住居出土遺物



247号住居出土遺物

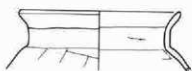
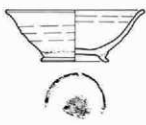
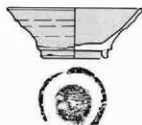
252号住居

遺物観察表 70



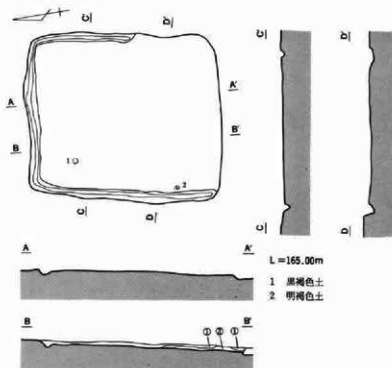
長軸を南北にもち、短軸2.6m、長軸4.1mの小形横長方形住居。基礎層を10cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に支柱穴はない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅60cm、奥行き50cmで、半円形状に壁外へ造り出す壁外型を呈す。東壁際中央部の床面直上より須恵器高台付埴、覆土内より甕、灰釉陶器埴が出土する。この住居が258住を切る平面精査の所見を得た。261住、262住との新旧関係を判定する実証的資料はないが、伴出する土器の型式は258住→252住→262住の順を示す。

方位 +90° 面積 10.65㎡



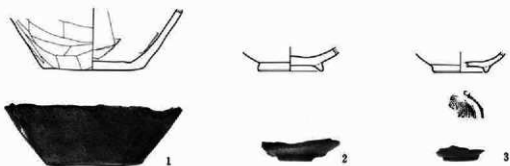
253号住居

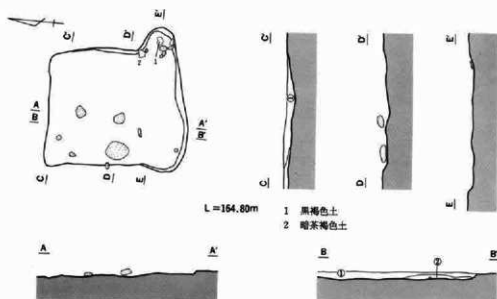
遺物観察表 70



長軸を南北にもつ短軸3.5m、長軸4.1mの小形横長方形住居。基盤層を5cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に支柱穴はない。竈は検出できないが、東壁の南側に設置されていた可能性が高い。幅10cm、深さ5cmの壁溝が検出した壁下に巡る。西壁際の床面に密着して羽釜、須恵器高台付端が出土する。この住居が258住を切る平面精査の所見以外はないが、伴出する土器の型式は258住・264住→262住→253住の順を示す。

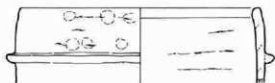
方位 +100° 面積 14.10㎡



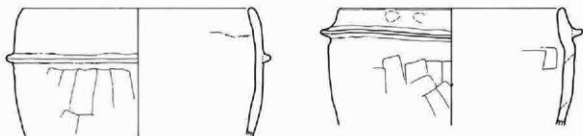


短軸2.4m、長軸2.9mで、長軸を南北にもつ超小形横長方形住居。基盤層を5cm掘り込んで床面とする。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。東壁の南端に竈を設置する。燃焼部は幅60cm、奥行き50cmで、半円形状に壁外へ造り出す壁外型を呈す。煙道は検出できない。竈内より羽釜、住居の覆土内より須恵器片がそれぞれ出土する。住居の北西部で258住と重複する。この住居が258住を切って構築する平面精査の所見を得、伴出する土器の型式が示す順序と一致している。また、立地する位置的な関係から、住居の西側で近接する252住との同時存在はあり得ない。方位 +86° 面積 7.01m²





1



2



3

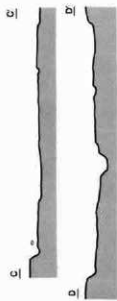
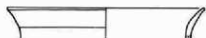
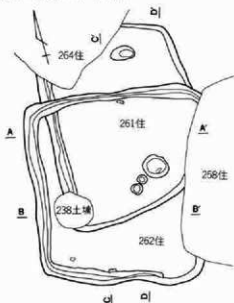


4



261・262号住居

遺物観察表 72



L=164.90m

261号住居 住居の北西隅と南東隅は検出できないが、長軸を南北にもつ短軸3.2m、長軸4.0mの小形横長長方形住居と推定する。基盤層を10cm掘り込んで床面とする。柱穴、竈は検出できず、伴出土器もない。方位 +94° 面積 測定不可能

262号住居 東壁部は検出できないが、長軸を南北にもつ短軸3.6m、長軸4.0mの小形横長長方形住居と推定する。基盤層を10cm掘り込んで床面とし、柱穴、竈は検出できない。幅20cm、深さ5cmの壁溝が巡る。覆土内より甕、須恵器埴が出土する。伴出する土器の型式が示す重複住居の順序は、258住・264住→252住→262住→253住→247住。261住との新旧関係を判定する資料はない。

方位 +105° 面積 14.62㎡(推)

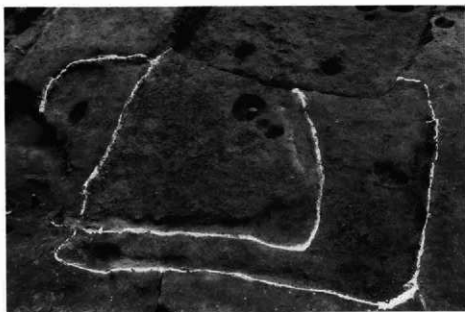


1



2

262号住居出土遺物



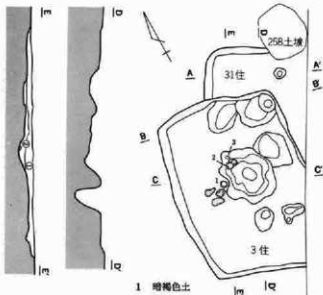
3・31号住居

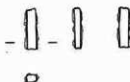
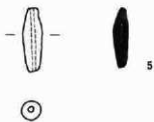
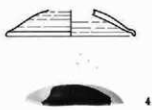
遺物観察表 1

3号住居 長軸を南北にもつ短軸2.9m、長軸3.9mの小形横長長方形。基盤層を10cm掘り込んで床面とし、柱穴、竈は検出できない。住居中央部のピットは床下土壌の可能性がある。伴出土器に型式差があり、重複する31住との新旧関係が不明なため、いずれも年代を確定できない。方位 +102° 面積 10.46㎡(推)

31号住居 北壁部を検出するのみで外形が確定できない。柱穴、竈は検出できない。

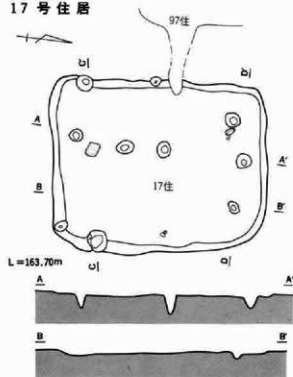
方位 +118° 面積 測定不可能





3・31号住居出土遺物

17号住居

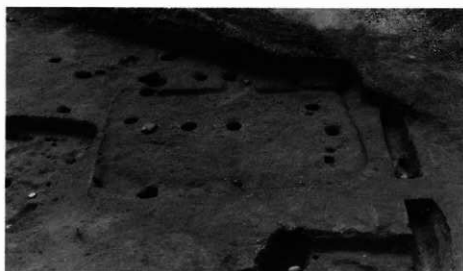
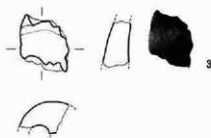


遺物観察表 5

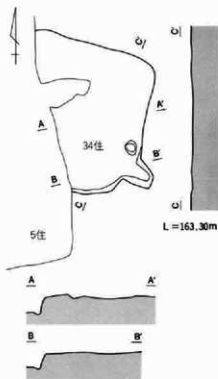
短軸3.6m、長軸4.6m
で、長軸を南北にもつ中
形横長長方形住居。基盤
層を5cm掘り込んで平坦
な床面を造る。壁内に主
柱穴はない。住居内およ
び壁外に柱穴様のピット
を検出するが、この住居
に伴うものはないと判定
した。検出した壁に竈の
痕跡を示す焼土などが一

切確認できない。伴出する土器に型式差があり、層
位での分離も不可能なために、住居の年代が確定で
きない。住居の西側で重複する97住との新旧関係を
判定する実証的資料がない。

方位 +84° 面積 16.14m²



34号住居

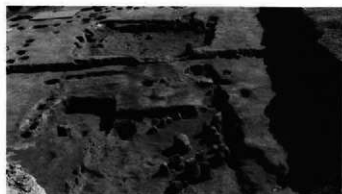
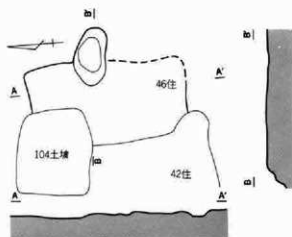


西壁部が検出できず、住居の外形が確定できない。基盤層を5cm掘り込んで床面とする。壁内に支柱穴はない。東壁の南側に設置する竈は燃焼部が幅30cm、奥行き40cmの壁外型。伴出土器がなく、重複する4住、5住との新旧関係を判定する実証的資料がない。方位 +106° 面積 測定不可能

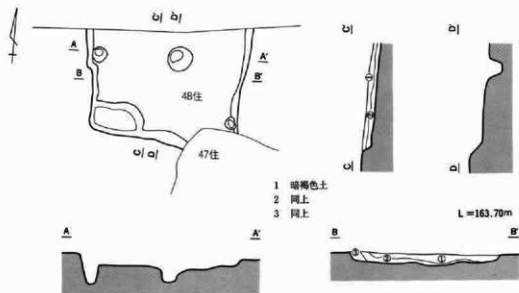


46号住居

住居の東半を検出するのみで、外形が確定できない。基盤層を5cm掘り込んで床面とする。壁内に支柱穴はない。東壁の北側に設置する竈は火床の構築面を検出するにすぎないが、燃焼部を壁外に造り出す。伴出土器がない。この住居が42住に切られる土層断面の所見を得た。41住との新旧関係を判定する資料はない。方位 +89° 面積 測定不可能

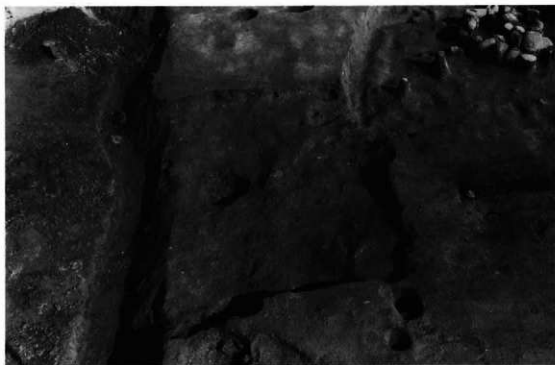


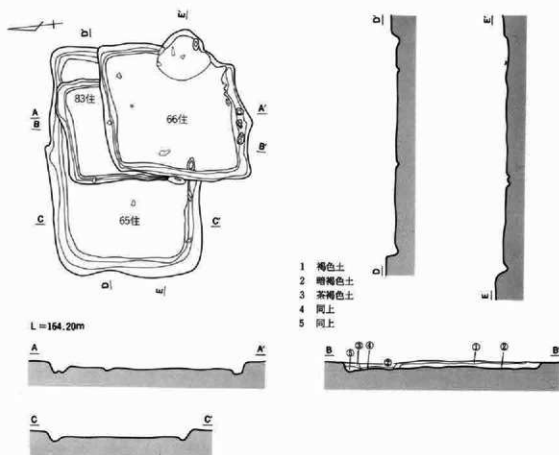
48号住居



住居の北半が調査区域外のため全形が確認できず、外形は確定できない。東西軸3.4mを測る。基盤層を20cm掘り込んで床面とする。床面は全体に北側にかけて傾斜し、平坦ではない。住居の中央部に検出した直径40cm、深さ30cmのピットは、この住居に伴うか否かの判定ができない。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈、貯蔵穴は検出できない。住居の南東隅で47住と重複する。47住がこの住居を切って構築する土層断面の所見を得た。伴出土器がないために、年代の確定ができない。

方位 +90° 面積 測定不可能





65号住居 短軸3.3m、長軸4.7mで、長軸を東西にもつ中形縦長方形住居。検出した壁に竈の痕跡がないことから東壁に竈を設置していたと仮定すると、208住に住居の形状、規模、軸線の傾きが近似している。基盤層を10cm掘り込んで床面とする。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。幅20cm、深さ10cmの壁溝が、検出した各壁下に巡る。覆土内より壺、坏、須恵器坏が出土するが、帰属する住居を特定することができず、66住、83住も含めて年代が確定できない。住居の東半部で66住、83住とそれぞれ重複する。土層断面の所見が示す重複住居の順序は65住→83住→66住の順。方位 +95° 面積 15.08㎡(推)

66号住居 短軸2.9m、長軸3.0mの歪んだ超小形正方形住居。基盤層を10cm掘り込んで床面とする。床面は全体に平坦で良く整っている。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅60cm、奥行き40cmで、半円形状に壁外へ造り出す壁外型を呈す。焚口部の向って左側に補強用の石材を検出し、奥壁の両側に小さな掘り込みを検出することから、燃焼部に石材を用いたものと考えられる。煙道は検出できない。幅10cm、深さ10cmの壁溝が、竈の部分を除く各壁下に巡る。出土土器の帰属が特定できないため、住居の年代を確定することができない。方位 +90° 面積 8.08㎡

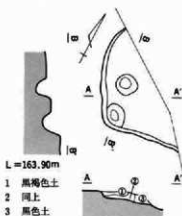
83号住居 住居の北半を検出するのみで全形が確認できず、外形は確定できない。基盤層を10cm掘り込んで平坦な床面を造る。壁内に支柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。竈は検出できない。幅10cm、深さ5～10cmの壁溝が巡る。住居の年代は確定できない。方位 +88° 面積 測定不可能



65・66・83号住居出土遺物



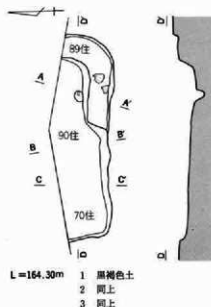
67号住居



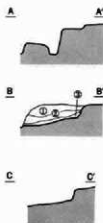
住居の東半部が調査区域外のため全形が確認できず、外形が確定できない。基盤層を15cm掘り込んで床面とする。西壁際に直径50cm、深さ20cmのビット2個を検出するが、この住居に伴うか否かの判定ができない。柱穴、竈は検出できず、伴出土器がないために年代が確定できない。他の住居と重複することなく、調査区域の北端に単独で占地する。

方位 +77° 面積 測定不可能

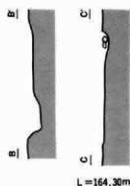
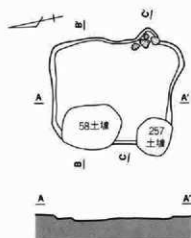
70・89・90号住居



いずれの住居も北半が調査区域外のため外形が確定できない。検出した範囲に柱穴、竈、貯蔵穴はない。重複する全ての住居との新旧関係を判定する実証的資料を欠き、伴出土器がないために土器型式による判定もできない。70号住居 基盤層を20cm掘り込む。方位 +83° 89号住居 基盤層を5cm掘り込む。方位+96° 90号住居 基盤層を30cm掘り込む。方位+94°



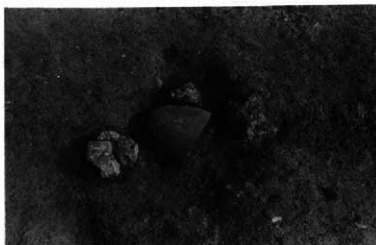
106号住居



L=164.30m

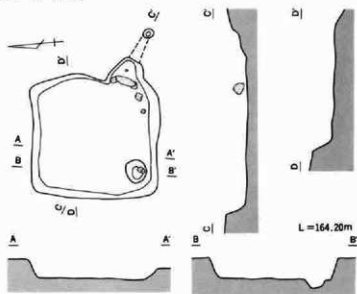
短軸2.2m、長軸2.6mで、長軸を南北にもつ超小形横長方形住居。基盤層を5cm掘り込んで床面とする。壁内に支柱穴はない。竈は東壁の南側に設置する。燃焼部は幅30cm、奥行き20cmで、半円形状に壁外へ造り出す壁外型を呈す。火床に密着して出土する河原石は竈の構築材と考えられるが、原位置を留めていない。煙道は検出できない。伴出土器がなく、年代が確定できない。他の住居と重複することなく、単独で占地する。

方位 +101° 面積 5.72m²(推)

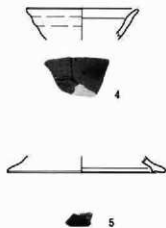
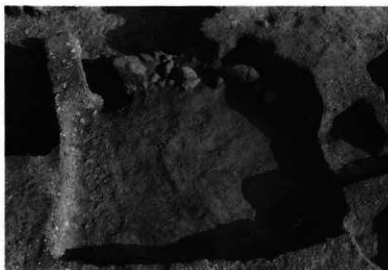


111号住居

遺物観察表 30

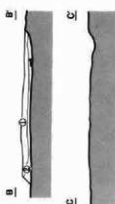
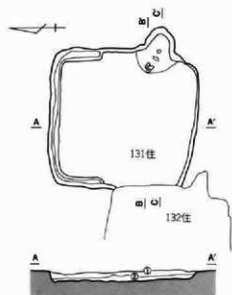


短軸2.5m、長軸2.7mの超小形正方形住居。基盤層を40cm掘り込んで床面とする。壁内に支柱穴はない。東壁の南端に設置する竈は燃焼部が幅50cm、奥行き60cmの壁外型を呈し、煙道は奥壁の外側80cmまで伸びる。焚口部の両側に河原石を据え、この間に角閃石安山岩を横架する。貯蔵穴は住居の南西隅に直径50cm、深さ20cmの円形プラン。伴出土器に型式差がある。この住居が109住を切って構築する土層断面の所見を得た。方位 +95° 面積 6.66㎡



131号住居

遺物観察表 37



L=164.40m

1 暗褐色土

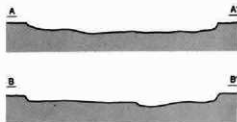
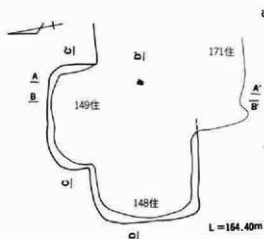
2 同上

短軸3.0m、長軸3.2mの小形正方形住居。基盤層を20cm掘り込んで床面とする。壁内に主柱穴はなく、壁外にも柱穴の痕跡がない。東壁の南側に設置する竈は燃焼部が幅50cm、奥行き40cmで、半円形状に壁外へ造り出す壁外型を呈す。幅10cm、深さ5cmの壁溝が、住居北半の壁下に巡る。伴出土器に型式差があって、住居の年代が確定できない。西壁部で132住と、東壁部で161住とそれぞれ重複する。132住がこの住居を切り、この住居が161住を切って構築する土層断面の所見を得た。

方位 +92° 面積 8.99㎡(推)



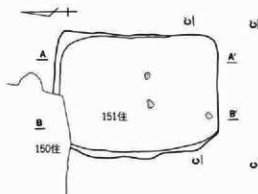
148・149号住居



いずれの住居も外形が確定できず、柱穴、竈、貯蔵穴は検出できない。伴出土器がなく、年代も確定できない。
148号住居 重複する149住、171住との新旧関係を判定する資料はない。方位 +95°
149号住居 171住がこの住居を切って構築する平面精査の所見を得た。148住との新旧関係を判定する資料はない。方位 +98°



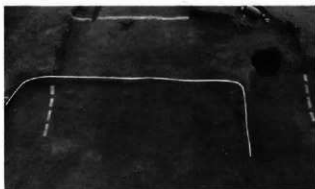
151号住居

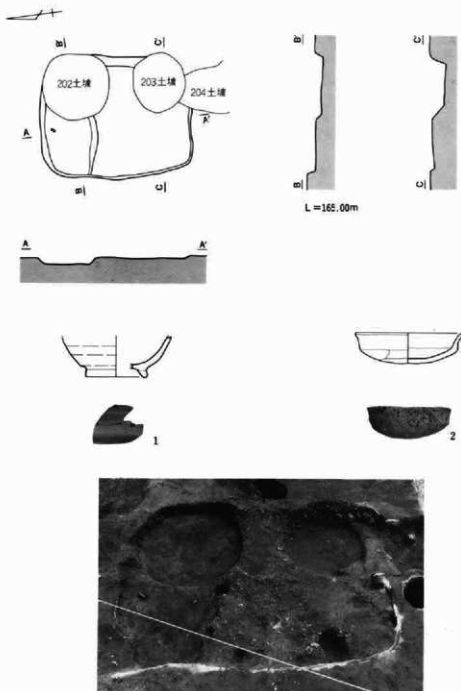


L=164.50m



長軸を南北にもつ短軸2.6m、長軸3.5mの小形横長長方形住居。基盤層を20cm掘り込んで床面とする。柱穴、竈は検出できない。伴出土器がないために年代が確定できない。北壁で150住と、南壁で152住と、東壁で153住と重複する。150住がこの住居を切って構築する土層断面の所見を得た。152住、153住との新旧関係を判定する資料はない。方位 +89° 面積 8.83㎡(推)

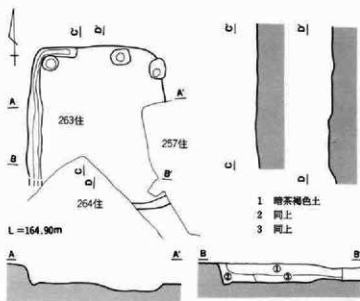




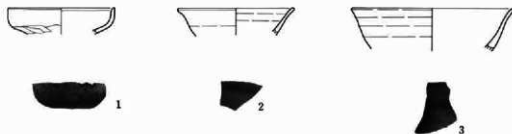
短軸2.6m、長軸3.2mで、長軸を南北にもつ小形横長長方形住居。基盤層を5cm掘り込んで構築面とする。この上に貼床して生活面を造ったと考えられるが、掘り込みが浅いために生活面は確認できない。住居の東半を後世の土壌に切られる。壁内に支柱穴はなく、竈、貯蔵穴も検出できない。伴出する須恵器高台付埴と坏には、大きな型式差があって、住居の年代を確定できないが、近接する188住に住居の形状、規模、軸線の傾きが近似している。他の住居と重複することなく単独で占地するが、立地する位置的な関係から住居の東側で隣接する214住との同時存在はあり得ない。方位 +94° 面積 8.05m² (推)

263号住居

遺物観察表 72



全形は確認できないが、長軸を南北にもつ短軸3.0m、長軸3.5mの小形横長方形住居と推定する。基盤層を30cm掘り込んで床面とする。壁内に主柱穴はなく、竈も検出できない。幅20cm、深さ5cmの壁溝が、西壁と北壁の一部に巡る。出土する坏と須恵器坏に型式差があり、層位での分離も不可能なために、住居の年代が確定できない。重複する230住、239住、246住、247住、257住、264住との新旧関係を判定する資料がない。
方位 +91° 面積 10.06㎡(推)



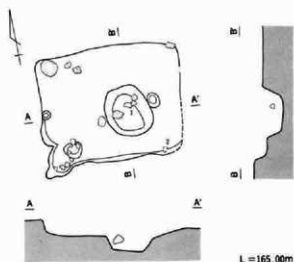
III 鍛冶遺構



挿図12 畿治遺構分布図

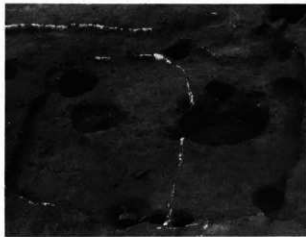
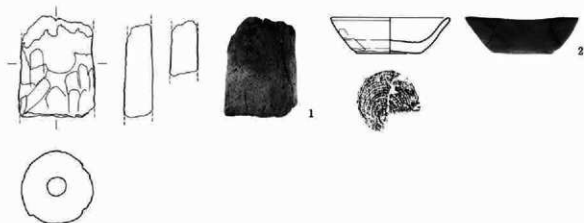
1号鍛冶遺構

遺物観察表 73



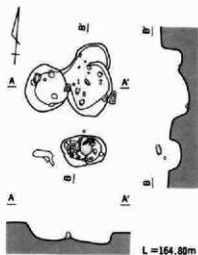
短軸2.4m、長軸3.0mで、長軸を東西にもつ。基盤層を20cm掘り込んで床面とする。壁内に支柱穴はない。竈は遺構の南西隅に設置する。燃焼部は幅50cm、奥行き40cmで壁外に造り出す壁外型を呈す。遺構の中央東側に短軸1.0m、長軸1.2m、深さ30cm程の不正方形ピットを検出し、内部より羽口、熱を受けた痕跡のある河原石が出土することから、小鍛冶遺構と判断した。金床石などは検出できない。遺構南東隅の床面直上より須恵器環が出土する。伴出する土器の型式が示す重複住居の順序は260住→248住・1号鍛冶遺構→244住の順。

方位 -80° 面積 6.88m



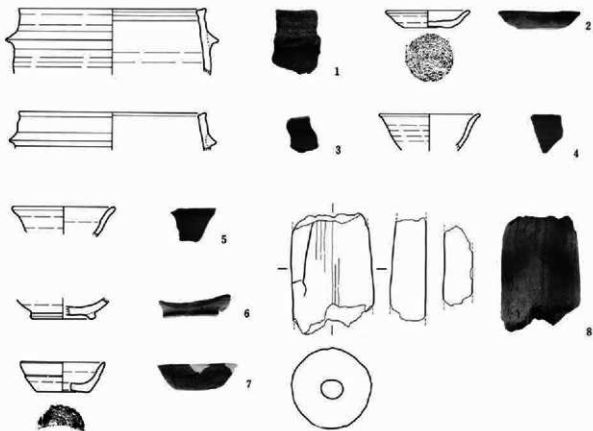
2号鍛冶遺構

遺物観察表 73



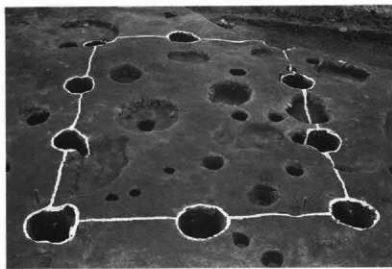
遺構の全形は確認できないが、ピット内より羽口、熱を受けた痕跡を残す河原石を検出することから、小鍛冶遺構と判断した。おそらく竪穴住居状の掘り込みを伴うものと考えられるが、ピット以外は確認できない。ピット内から羽釜、須恵器環が出土するほか、ピットの周辺部には須恵器の環、高台付塊が出土する。伴出する土器の型式が示す重複住居の順序は256住→239住→230住→2号鍛冶遺構の順。

方位 測定不可能 面積 測定不可能



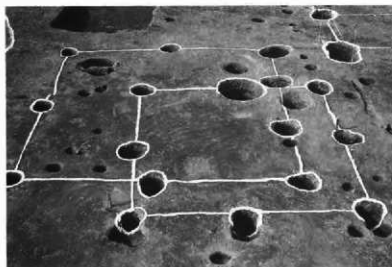
IV 掘立柱建物

掘立柱建物



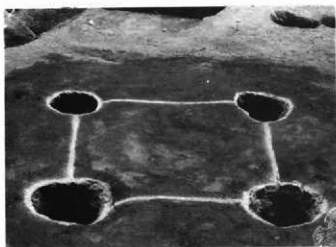
4号掘立柱建物

1



12・13号掘立柱建物

2



14号掘立柱建物

3





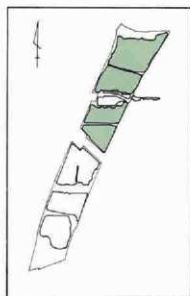
2号掘立柱建物

4



掘立柱建物群

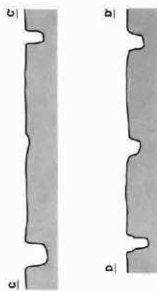
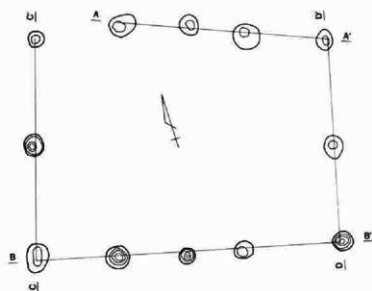
5



349

禅园13 掘立柱建物分布图

1 号掘立柱建物

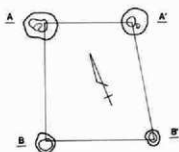


L=164.40m

0 1:80 2m

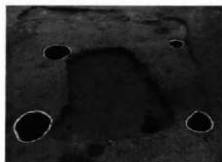


2 号掘立柱建物

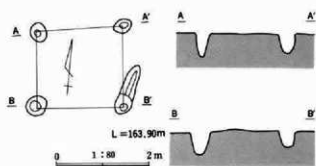


L=163.30m

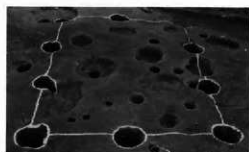
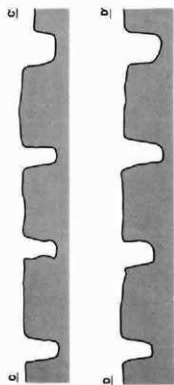
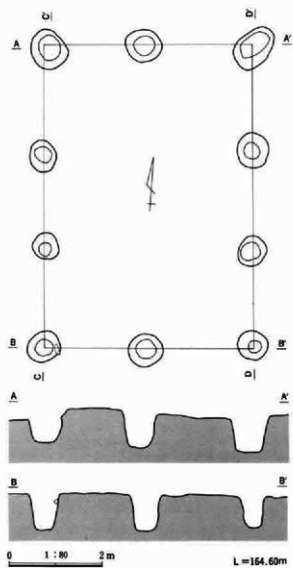
0 1:80 2m



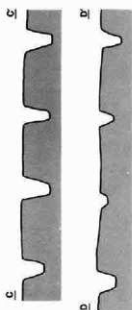
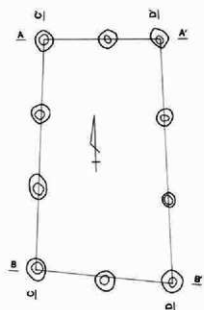
3号掘立柱建物



4号掘立柱建物

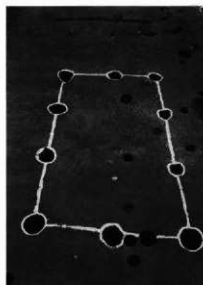


5号掘立柱建物

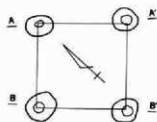


L=164.70m

0 1:80 2m

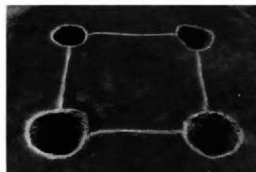


14号掘立柱建物

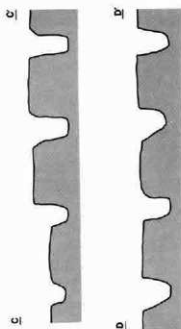
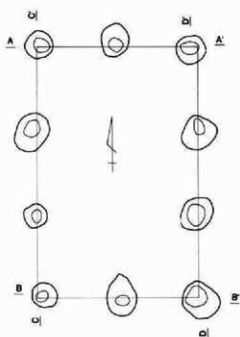


L=164.90m

0 1:80 2m

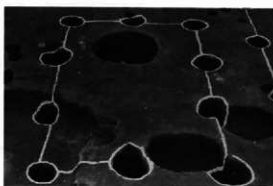


6号掘立柱建物

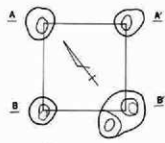


L=164.70m

0 1:80 2m

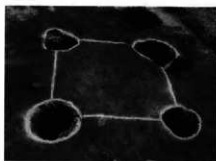


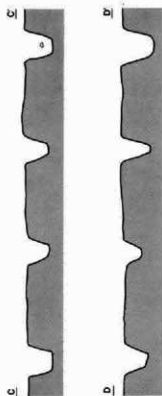
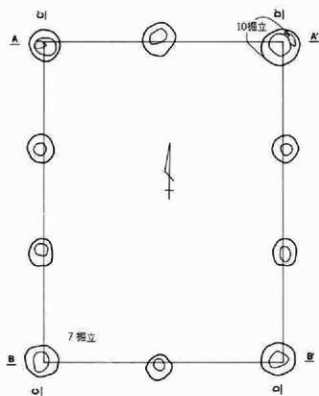
15号掘立柱建物



L=164.90m

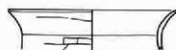
0 1:80 2m





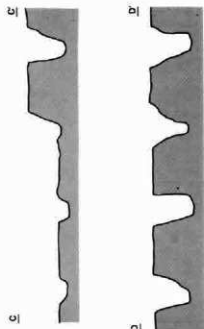
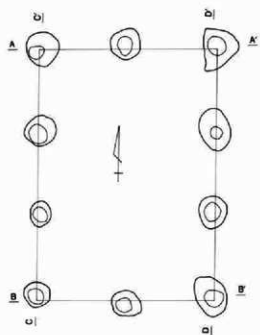
L = 164.50m

0 1 : 80 2m



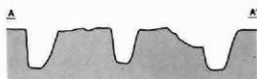
8号掘立柱建物

遺物観察表 73

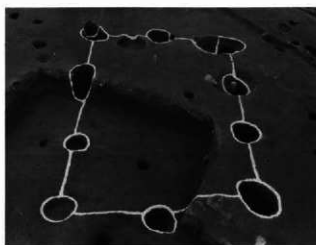


L = 164.70m

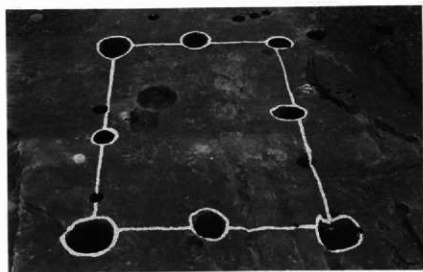
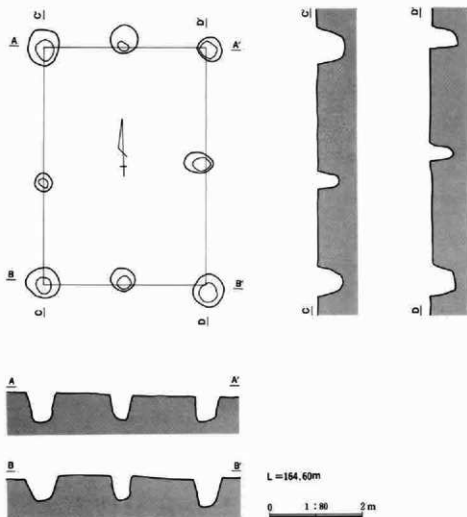
0 1:80 2m



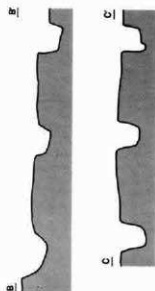
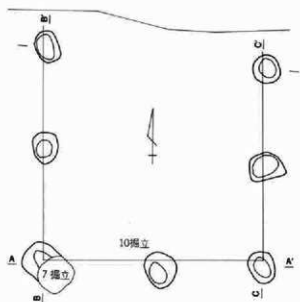
1



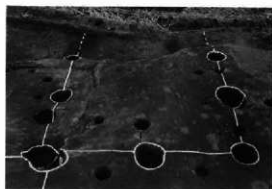
9号掘立柱建物



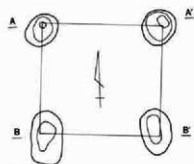
10号据立柱建物



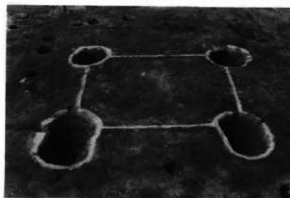
0 1:80 2m L=164.40m



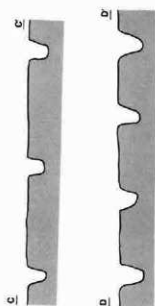
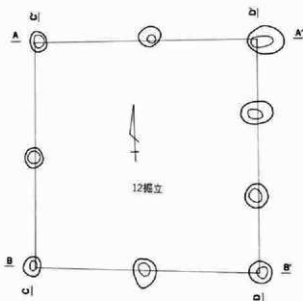
11号据立柱建物



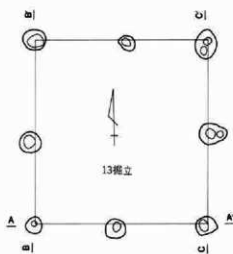
0 1:80 2m L=164.50m



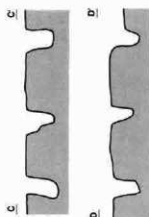
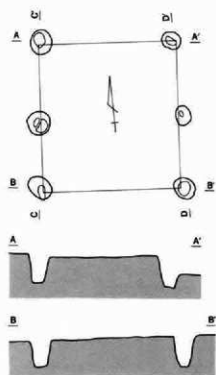
12·13 号据立柱建物



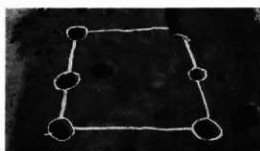
L = 164.50m
0 1 : 80 2m



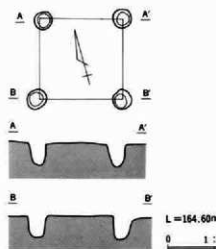
16号掘立柱建物



L = 164.30m
0 1:80 2m

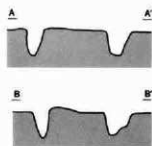
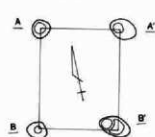


17号掘立柱建物

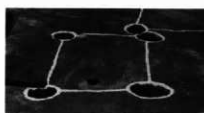


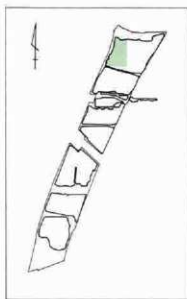
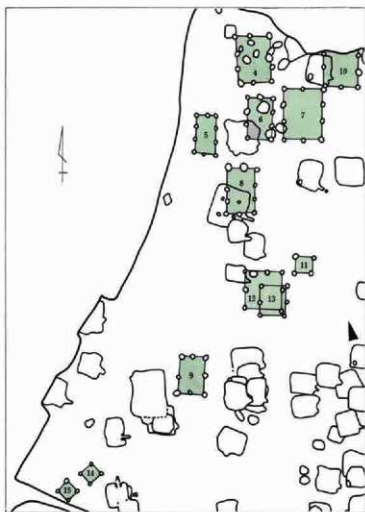
L = 164.60m
0 1:80 2m

18号掘立柱建物



L = 164.60m
0 1:80 2m





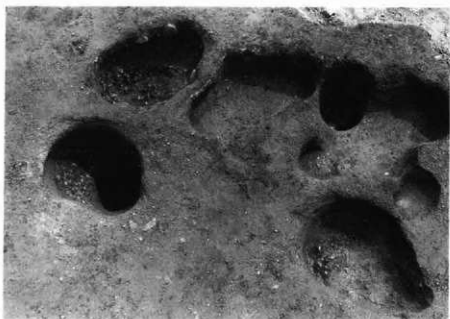
挿図14 掘立柱建物詳細分布図

0 1:500 10m



V 土壙・井戸・溝

土壙・井戸・溝

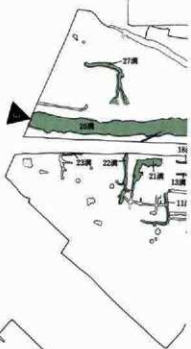


111・112・113・115号土壙

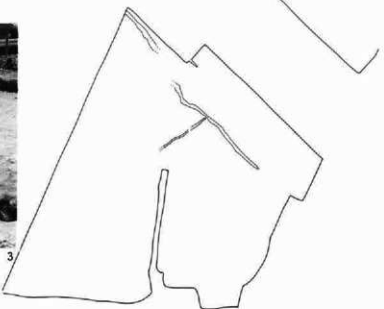


107・151・152・153号土壙

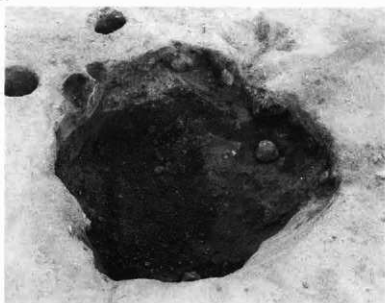
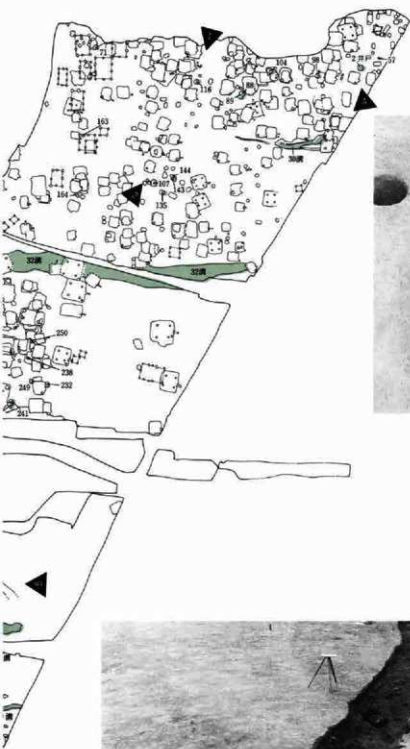
2



26号溝

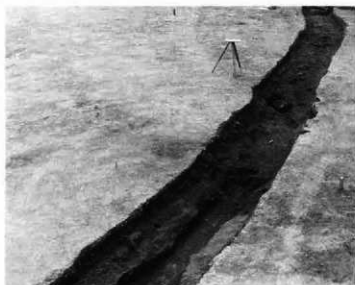


3



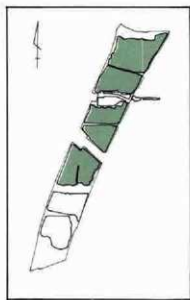
2号井戸

4



28号溝

5

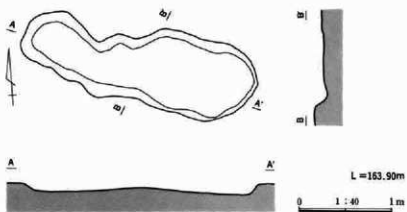


0 1 : 1200 40 m

挿図15 土壇・井戸・溝分布図

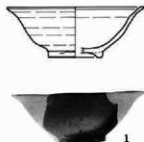
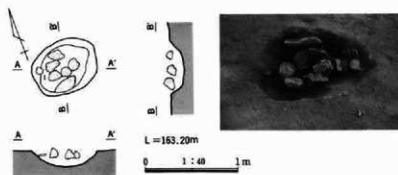
16号土坑

遺物観察表 74



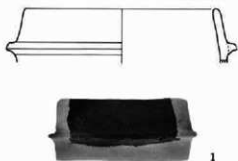
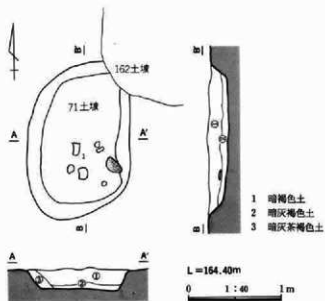
57号土坑

遺物観察表 74



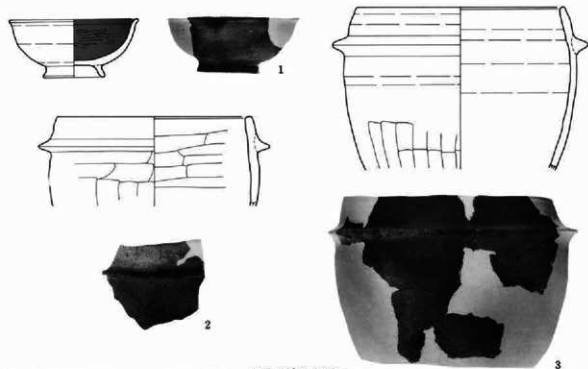
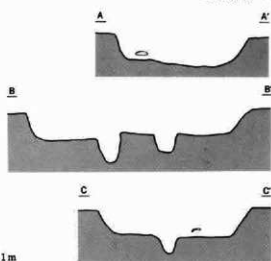
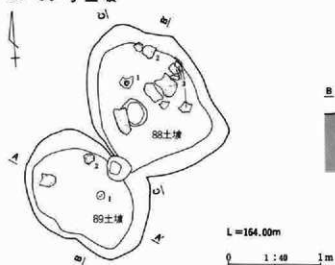
71号土坑

遺物観察表 74



88・89号土壇

遺物観察表 74



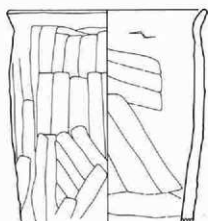
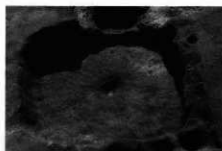
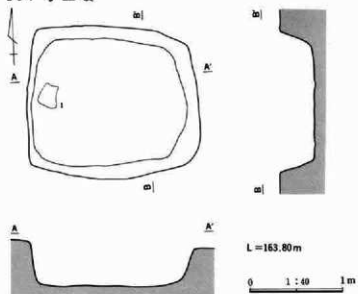
88号土壇出土遺物



89号土壇出土遺物

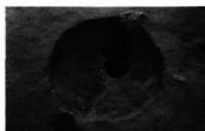
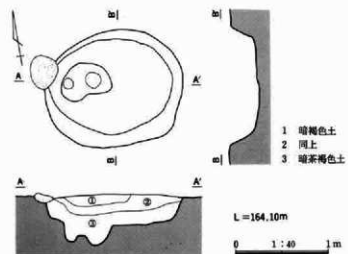
104 号土坑

遺物観察表 74



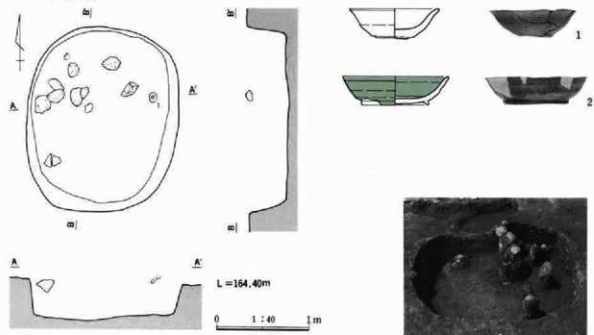
116 号土坑

遺物観察表 75



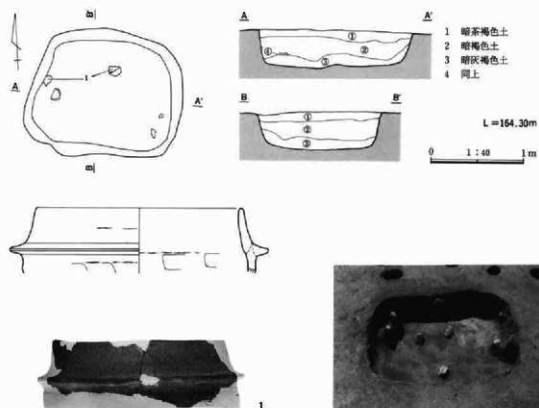
107号土坑

遺物観察表 74



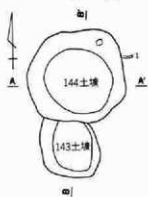
135号土坑

遺物観察表 75

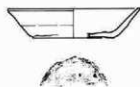


143・144 号土埧

遺物観察表 75



- 1 黄褐色土
- 2 黒色土
- 3 黒褐色土
- 4 黒色土



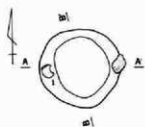
144号土埧出土遺物



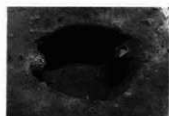
L=164.20m
0 1:40 1m

163 号土埧

遺物観察表 75

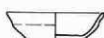
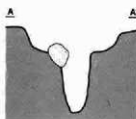
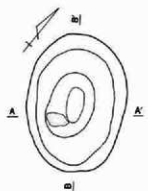


L=164.50m
0 1:40 1m



164 号土埧

遺物観察表 75

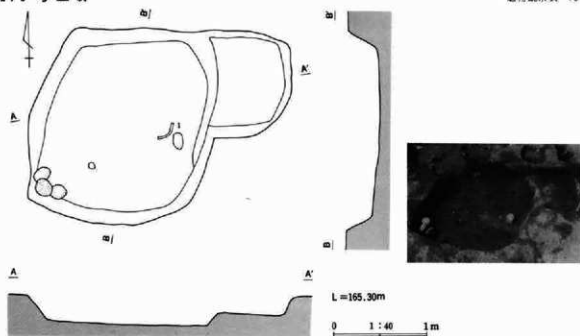


L=164.60m
0 1:40 1m



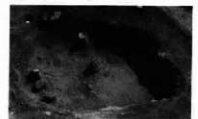
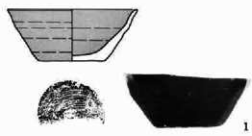
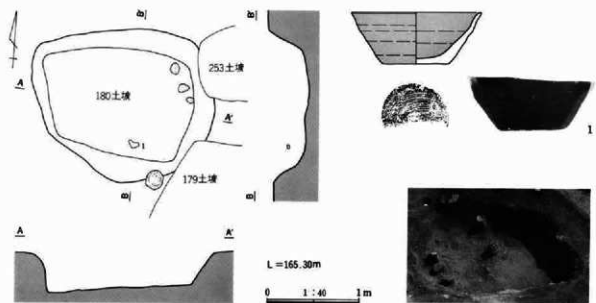
179 号 土 坑

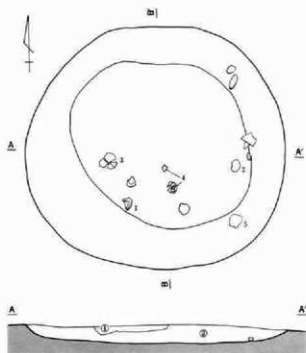
遺物観察表 75



180 号 土 坑

遺物観察表 75

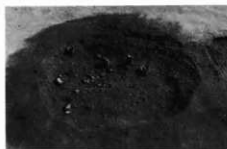




- 1 黒褐色土
- 2 同上

L = 165.30m

0 1 : 40 1m



199・200号土坑

遺物観察表 76



1



199号土坑



200号土坑

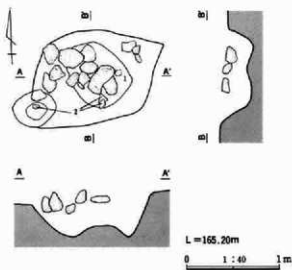


1



213号土坑

遺物観察表 76

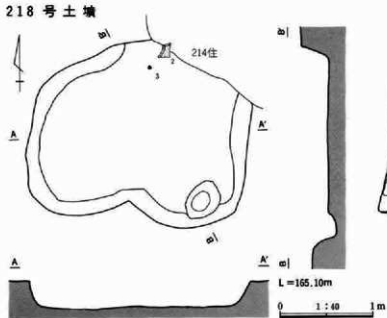


1



2

218号土坑

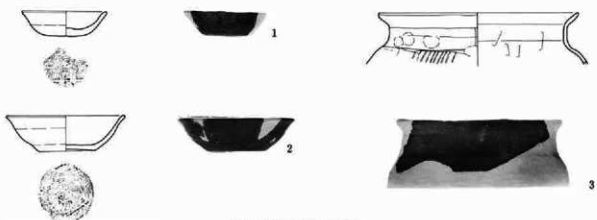
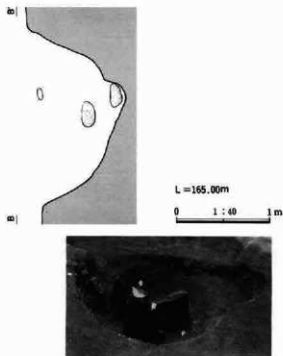
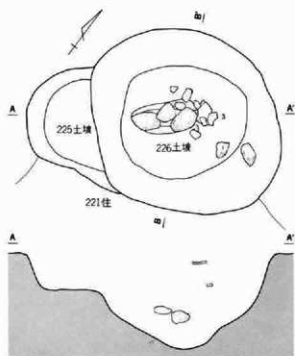


遺物観察表 76

1

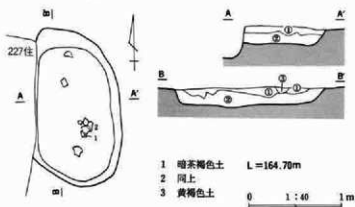


0 1:1 3cm



225・226号土坑出土遺物

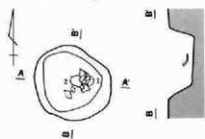
232号土坑



- 1 暗茶褐色土
- 2 同上
- 3 黄褐色土

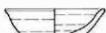


238 号土坑



L=164.80m

0 1:40 1m



遺物観察表 77

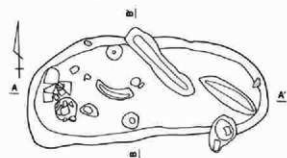


1



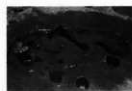
2

240 号土坑

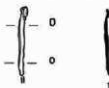


L=165.00m

0 1:40 1m

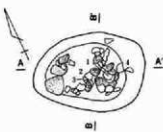


遺物観察表 77



1

241 号土坑



L=164.90m

0 1:40 1m



1



2



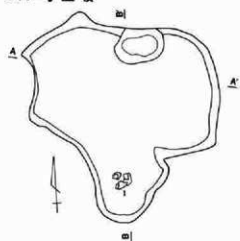
3



4

遺物観察表 77

247 号土坑



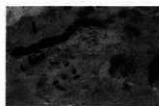
L=164.90m
0 1:40 1m

遺物観察表 77

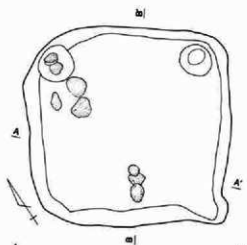


1

1 黒褐色土
2 暗茶褐色土



249 号土坑



L=165.10m

0 1:40 1m

遺物観察表 77



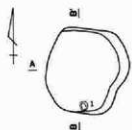
1



2

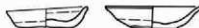
250 号土坑

遺物観察表 78



L=164.90m

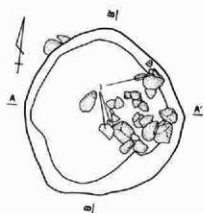
0 1:40 1m



1



2

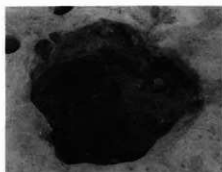
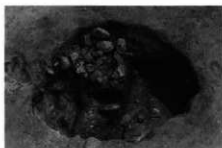


0



L = 163.20m

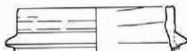
0 1:40 1m



1

9号溝

遺物観察表 78



11号溝

遺物観察表 78



13号溝

遺物観察表 78



22号溝

遺物観察表 79



15号溝

遺物観察表 79



18号溝

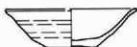
遺物観察表 79



21号沟



1



2



4



5



遺物観察表 79



3



6

23号沟



1

遺物観察表 79



2

27号沟 遺物観察表 80



1

26号溝



遺物観察表 80

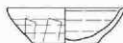


30号溝

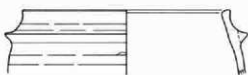
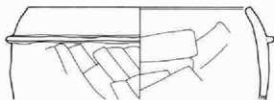


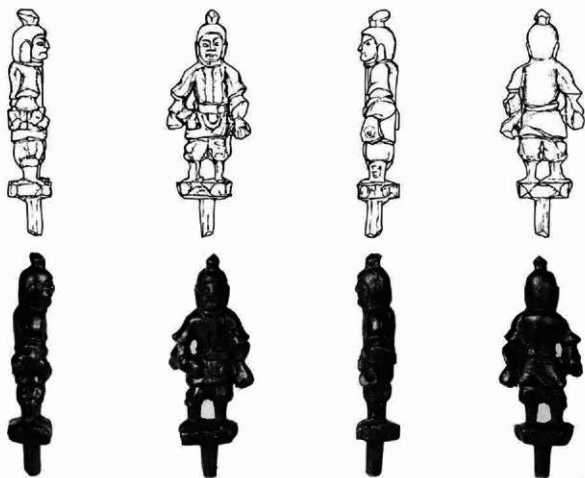
遺物観察表 80

32号溝

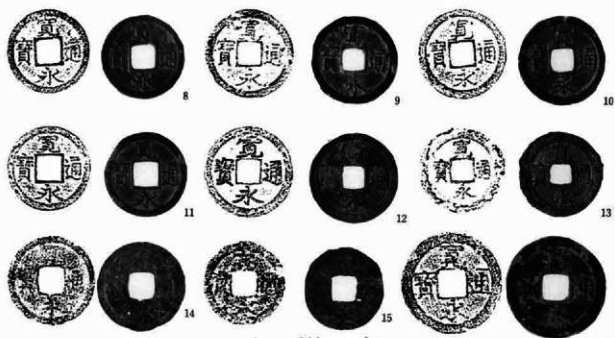


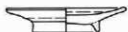
遺物観察表 80



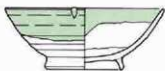


7





1



2

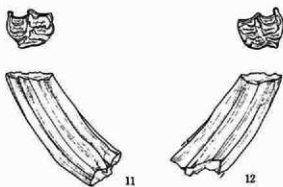
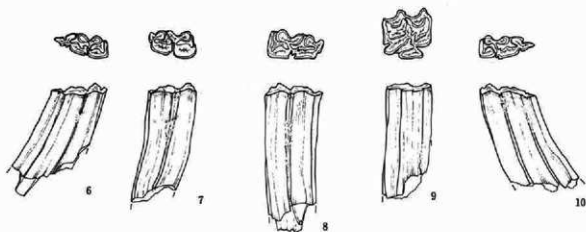
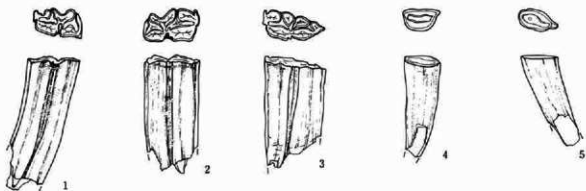


3

VI 出土獸骨

211 号住居

獸骨一覽表 82



181 号住居

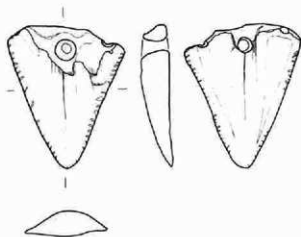
獸骨一覽表 82



0 1 : 2 5 cm

268 号住居

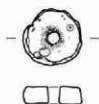
獣骨一覧表 82



0 1:1 3cm

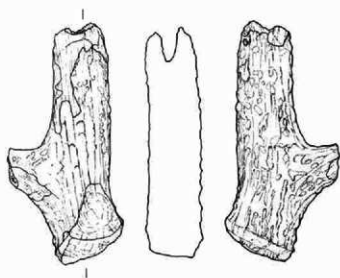
342 号住居

獣骨一覧表 82



270 号住居

獣骨一覧表 82



0 1:2 6cm

278 号住居



獸骨一覧表 82



354 号住居

獸骨一覧表 83



356 号住居

獸骨一覧表 83

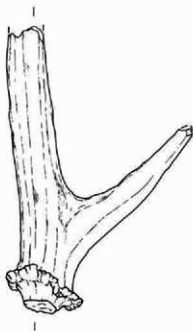


320 号住居

獸骨一覧表 82

407 号住居

獸骨一覧表 83



0 1:2 5cm

4号土城

獸骨一覽表 83



1

2

表 探

獸骨一覽表 83



1

2

3



4

5

6

0 1:2 5cm

VII 分析鑑定所見

有馬条里遺跡出土金銅地藏菩薩立像および 銅造天王立像の調査概要

東京国立博物館

学芸部主任研究官 浅井 和 春

1 はじめに

有馬条里遺跡出土の金銅地藏菩薩立像と銅造天王立像の二軀について彫刻史の立場から調査し、その品質・形状・技法・保存状態等の概要をまとめ、それぞれ簡単な備考を付すこととする。

2 金銅地藏菩薩立像

品 質

銅造鍍金。本体・台座の材質は銅にスズ、鉛、ヒ素をふくむ青銅。鍍金は水銀によるアマルガム鍍金法によるかどうかは不明。

形 状

本体の頭部は現在、顔面をふくむ上半部が火中により一皮むけた状態なので、厳密にいうとその尊名は不明であるが、頭頂部が丸い現状や如来形の着衣などから、ほぼ地藏菩薩に間違いなくおもわれる。これを認めると、頭部は元来、円頂の比丘形で、体部上半身にまず偏衲をつけ、大衣を偏袒右肩にまとう。下半身には裳をつける。左手を屈臂し、右手は垂下する（それぞれ何物かをもつか——地藏菩薩なら左手に宝珠、右手に錫杖）。両足をそろえて立つ体部背面中央上方に光背用の栴を造り出す。台座は三重座で、円形の瓶（?）、腰部、下瓶の三部からなる。

技 法

本体・台座をふくむ一鉢、ムクの像で、首、胸、両足などに鍍金が残る。鑄造技法は、台座両側面部に段差がある状況から、割型によるとみなされる。

保存状況

全体に表面が、まず火中した後、土中であつたため荒れており、頭部をはじめ、台座の立ち上がり部など表面の剝離が著しい。鍍金も、上記箇所をのぞいてほとんど認められない。

備 考

本像はその着衣や衣文、台座などの形式、さらには割型による鑄造技法を用いることから、平安時代後期11世紀の作例とみなされる。類似としては、1974年に茨城県鹿嶋郡鹿嶋町の鹿嶋神宮寺経塚より出土した金銅地藏菩薩立像（全高8.2センチ）があり、その着衣や衣文、手の構え方、台座などの形式はもとより、割型による技法にいたるまで共通している。ちなみに鹿嶋神宮寺経塚出土品一括の年代は11-12世紀と考えられており、本像の年代もそれと矛盾しない。

3 銅造天王立像

品 質

銅造。本体・台座の材質は銅にスズ、鉛、ヒ素を含む青銅。鍍金はみえず。

形 状

本体は頭部に兜（頂部に宝珠形の飾りを、両耳の箇所にはそれを覆う形の造り出し——あるいは耳そのものか——をもうける）をかぶり、目を見開き、口を閉じる瞋怒相をあらわす。体部には甲（襟甲、罽袖、腰

帯、前脩をあらわす)をつけ、肘の後方に大袖を翻えらす。下半身に袴をつける。両足には脚絆をつけ、香をはく。右手を屈臂し、手を右腰にあて、何物かをもつ(握った手の上面に別製持物挿入用の丸穴が残る)。左手は垂下し、やはり何物かをもつ(握った手のなかに、別製の柄のようなものがある)。柄なら持物は剣)。腰を左にひねり、岩座上にたつ。岩座の下に丸枿を造り出す。

技 法

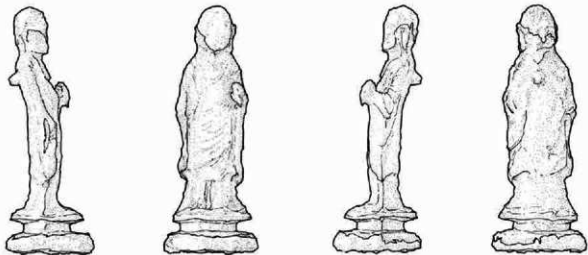
本体・台座およびその下の枿までを含む一鎚、ムクの像で、現在鍍金は認められず、元来それをほどしたか否かも不明である。鋳造技法は、腋下や股間の中央線にバリがある状況から、割型によるものとみなされる。

保存状況

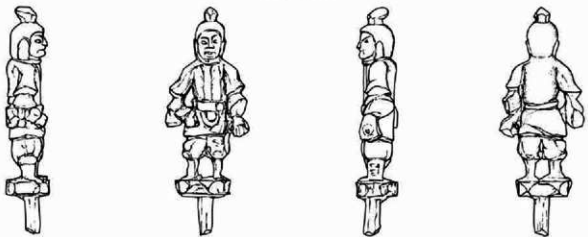
全体に表面の荒れは少なく、土中による錆は一部にのみ認められる。両手の持物は亡失する。

備 考

本像は左手に剣(?)をもち、右手を腰にあてる(持物不明)その形状から、四天王中の持国天に相当すると思われる。また腰甲背面の下に裳裾をあらわさない形式は古様で、わが国では、奈良朝に一般的であったものである。しかし、本像の極端に小さな像高は、その用途や年代を考慮するうえで見逃せず、割型による製作と合わせて、やはり製作年代は経塚への埋納などが一般化した11世紀頃と考えるのが穏当であろう。



地藏菩薩立像



天王立像

0 1:1 3cm



地藏菩薩立像



天王立像

有馬条里遺跡出土地藏菩薩立像・天王立像の 非破壊蛍光X線分析法による化学組成の調査

東京国立文化財研究所

保存科学部化学研究室 平尾良光

1 はじめに

群馬県埋蔵文化財調査事業団からの要請で、群馬県渋川市八木原に所在する有馬条里遺跡から出土した銅製の地藏菩薩立像・天王立像について化学組成を蛍光X線分析法で非破壊的に調査し、資料の材料組成に関する情報を得た。

2 分析法

蛍光X線分析はフィリップス社製波長分散型蛍光X線分析装置PW1404LSで行った。機器の使用条件はスカンジウム管球を用い、60kV、50mAで一次X線を発生させ、資料に照射し、二次X線を放出させる。これを空気圧下でフッ化リチウム結晶で回折分光し、シンチレーションカウンタとガスフローカウンタの併用で測定し、X線強度のスペクトルを得た。測定範囲は10度から60度までで、30分かけて走査した。

3 資料

依頼された資料は2件で、有馬条里遺跡の土壌から発掘された地藏菩薩立像(372頁図3)と、溝から発掘された天王立像(380頁図7)である。地藏菩薩立像は図で示されるような大きさ、外形で、かなり錆化が進み細部が失われている。錆は茶色と緑色が交互に入り組み、銅を主成分としている事が伺われる。蛍光X線測定は像の左肩口部分について行った。天王立像は図で示されるようになりに細部まで残っている。全体として黒っぽく光っており、切込みの凹んだ部分は黒よりも赤みがある。帯の辺りのへこみ部分と足下の先に緑色部分が見えるため、主体部分は銅が主成分であると推定した。蛍光X線測定は像の背面上部の黒く光っている部分について行った。

4 蛍光X線分析の結果

蛍光X線分析法では、表面から深さ約10マイクロメーターまでの情報を得られるだけなので、測定された化学組成は、この厚さまでの情報となる。そして蛍光X線の強度は本来存在する元素量に比例するが、元素ごとによるX線の発生率の違いが影響する。また共存する元素の影響を受けてX線の強度に影響を受ける場合もある。特に表面が錆で覆われている場合、表面が滑らかでない場合などは問題である。今回の両資料とも全面錆で覆われており、金属部分はまったくでない。錆を主体とし、必ずしも本体組成を反映しているとはいえない点問題は残るが、定性的な傾向は掴むことができるので、次のように考察した。

1) 地藏菩薩立像

得られたスペクトル図を図1a、bで示す。この図からすると銅が主成分でスズ、ヒ素が少量現れている程度である。これは錆の組成であるため、必ずしも内部組成とは一致しないが、この地藏菩薩立像の化学組成は銅が主成分であると認められる。鉛、ヒ素、スズが少量含まれている事、特にアンチモン、ビスマス等の不純物が微量含まれている事は元素の量をあまり反映しないとすれば、有馬条里の天部形立像の化学組成とよく似ていると見る事ができる。これらの不純物含量は銅の精錬法に依存していると考えられる。

2) 天王立像

得られたスペクトル図を図2a、bで示す。蛍光X線の強度はそのままでは元素濃度にはならないし、強

調されている元素もあるので、定量的には求められないが、錆びている測定面に関してどの元素が多いか、少ないか程度の判別には使える。この図からすると鉄が最も強く（多く）観測された。次にスズ、鉛、ヒ素の順で銅は5番目の強さである。結果として、像の表面が黒く光っており、首筋などへこんだ部分が赤みを帯びていることから、何等かの理由で鉄の化合物が表面を覆っているように見受けられる。あるいは初めから赤い塗料として紅朽（鉄の酸化物： Fe_2O_3 ）を用いたとも考えられる。スペクトルからするとスズ、ヒ素、鉛が見掛け上多い事は表面の青銅が錆びて銅が流出し、スズ、鉛が酸化物として表面に残り、不溶性物質となって沈着したとも考えられる。一般に錆化が進むときに、青銅表面から銅は抜けやすく、鉛・スズは残る場合が多い事から、この資料においてもこのような状態があったと考えられる。このため表面に錆の薄い膜ができ、見掛け上鉄が強く、またその他の元素も銅に比べてかなり強く現れたと見える。スズ、鉛などの少量元素が実際にどの程度含まれているのかは興味ある所であるが、錆に覆われた外部からでは測りえないのが現状である。

スペクトルの中で角度35.8度あたりに現れている小さなピークは水銀のように思われるが定かではない。37度に金のピークが現れていない事から鍍金のために用いた水銀ではないと推定される。もし水銀ならば、何故ここに用いられているのかは新たな問題である。

アンチモン、ビスマスが現れていない事より、この像と1)の地藏菩薩立像とは化学組成的に異なっており、材料となった銅はお互いにまったく関係がないと思われる。

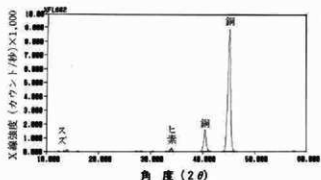


図1 a 地藏菩薩立像の蛍光X線スペクトル図

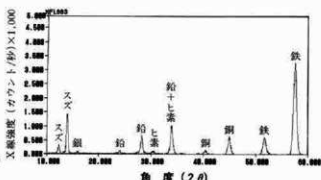


図2 a 天王立像の蛍光X線スペクトル図

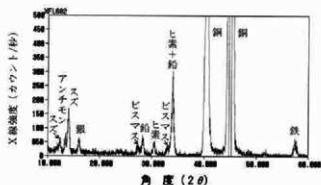


図1 b 地藏菩薩立像の蛍光X線スペクトル図
(1 aを20倍に拡大)

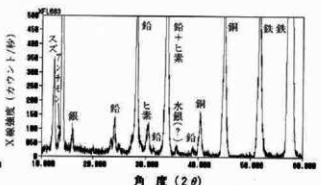
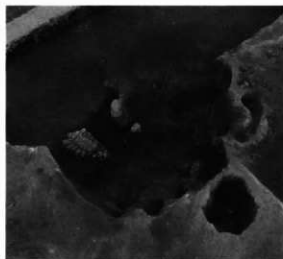
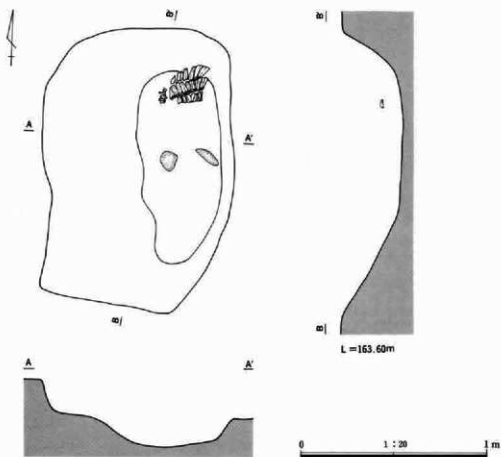


図2 b 天王立像の蛍光X線スペクトル図
(2 aを10倍に拡大)

有馬条里遺跡出土の馬歯

群馬県立大間々高等学校

宮崎重雄



98号土坑



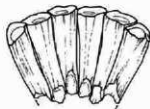
上顎切齒咬合面



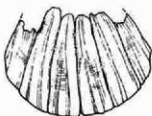
下顎切齒咬合面



同舌側面 (內側)

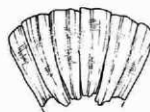


同舌側面 (內側)



同唇側面 (外側)

1



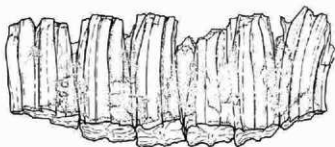
同唇側面 (外側)

2

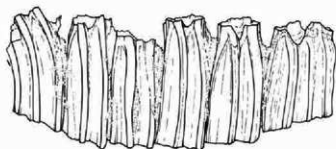
0 1:2 5 cm



右上顎白歯咬合面



同舌側面 (内側)



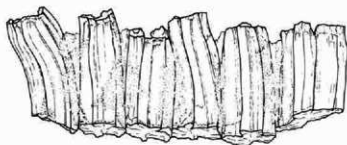
同頰側面 (外側)

3

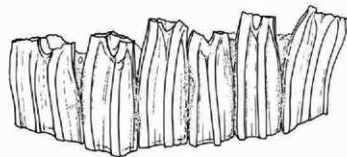
0 1:2 5cm



左上顎臼齒咬合面圖



同舌側面 (内側)



同側側面 (外側)

4

0 1:2 5 cm

群馬県渋川市に所在する有馬条里遺跡から、1頭分の馬歯が出土したので報告する。

時代を示す伴出遺物、副葬物が発見されてなく、時代をしぼることは困難であるが、出土状況から、少なくとも古代～近世のものであることはいえる。藤岡市上栗須遺跡の馬骨で見るように、近世（江戸時代）の埋葬馬は老齢なものが一般的で、本個体が後述のように若い馬であることからすると、古代～中世のものである可能性が考えられる。

残存していた部位は左右の上顎臼歯12本・切歯6本と下顎臼歯12本・切歯6本、およびかなり腐食の進んだ数個の四肢骨片である。歯は臼歯・切歯とも上顎歯と下顎歯がぴったり噛み合った状態で出土した。発掘時の写真で判断すると、後肢骨と思われる骨も解剖学的位置を保って埋存していたことから、当初は1頭分の馬が全身埋もれていたと思われる。歯以外の頭骨、体幹骨は腐食によってほとんど消失している。

歯の保存はきわめて良好であるのに犬歯が見出されず、本個体は雄馬であると考えられる。なお、狼歯は存在していない。

Goubax & Barrier (1926) による切歯の咬耗度を基準にした場合、馬令は7才前後と推定され、Levin (1982) による前臼歯・後臼歯の歯冠高（咬耗度）を基準にした場合も、ほぼ同様の馬令が得られる。馬の7才はヒトの28才程度*（モリス、1989）に相当し、まだ働き盛りである。咬合の状況は正常で、咬合面は平坦な面をなし、歯には病歴を示すような痕跡は見当たらない。骨の保存が不良で、肉食動物による咬痕、人工器物による損傷は観察されない。

体高を推定するのに必要な全長を計測できる部位が存在していないため、信頼度の高い推定体高を得ることができない。上顎全臼歯列長、下顎全臼歯列長のそれぞれ162.6mm、164.0mmを現生の小型在来馬である愛媛県の野間馬の153.7mm、165.3mm、鹿児島県吐噺列島のトカラ馬の157.5mm、163.0mm、中型在来馬である長野県の本曾馬の173.2mm、179.9mm（大塚ほか、1985）と照らしてみると、上記中型在来馬には及ばないが、小型在来馬に近い体高の馬であったことが想定される。今日のポニーを少し大きくした程度の馬であったと考えて良さそうである。

なお、この個体の上顎第三後臼歯の後小窩を囲むエナメルは遠心削壁をなしているエナメル質に連続しており、咬合面からみると、ラグーン状を呈している。このような歯は群馬郡榛東村の大久保A遺跡の平安時代馬（宮崎、1986）などに例があるが、きわめてまれである。単なる個体差なのか、ある品種に特有に出現しやすい形質的な意味があるのかは、今後の検討課題である。

*モリスを基準にし筆者が換算する

文 献

Goubax, A. and G. Barrier., 1892, *The Exterior of the Horse*. Lppincott., Philadelphia.

Levin, M. A., 1982, The use of crown height measurements and eruption-wear sequence to age horses teeth. In Wilson, B., C. Grigson and S. Payne. (eds)

Ageing and sexing Animal Bones from Archaeological sites. British Series 109. P223-225.

宮崎重雄 1986 「吉岡村大久保A遺跡出土の馬歯・馬骨」『大久保A遺跡』II区 吉岡村教育委員会・群馬県教育委員会・日本道路公団 P372-378

モリス、デズモンド著（渡辺政隆訳） 1989 『競馬の動物学』 平凡社

大塚周一・広田圭一・松元光春・横口 勉 1985 「野間馬の形態」『野間馬に関する学術調査報告書』日本馬事協会 P10-15

有馬条里遺跡 98土壇出土馬歯計測値

左上顎白歯

歯 種	歯 種	第二前臼歯	第三前臼歯	第四前臼歯	第一後臼歯	第二後臼歯	第三後臼歯
歯 冠 長	咬 合 面	38.7	27.8	27.3	23.0	24.0	25.4
歯 冠 幅	咬 合 面	23.8	26.8	27.3	24.7	24.2	26.2
原 歯 幅	咬 合 面	9.1	10.6	12.1	11.4	12.1	13.0
歯 冠 高	傾 倒	44.6	54.6	60.6	52.0	58.2	57.4
咬合面の傾斜		103°	90°	82°	90°	90°	60°
エナメル褶曲数		1211	1221	1231	1211	1221	1211
中 附 齧 幅	咬 合 面	4.5	5.0	4.8	3.3	3.5	3.3
	中 央	4.6	5.6	5.2	4.2	4.4	4.0
原 歯 型		1	2	2	2	2	3

単位: mm

左下顎白歯

歯 種	歯 種	第二前臼歯	第三前臼歯	第四前臼歯	第一後臼歯	第二後臼歯	第三後臼歯
歯 冠 長	咬 合 面	32.0	29.0	28.6	24.2	26.0	29.9
歯 冠 幅	前葉咬合面	12.5	15.2	15.1	14.0	13.1	11.8
	後葉咬合面	14.1	15.9	15.5	13.4	12.8	10.5
歯 冠 高	傾 倒	39.0	57.5	67.0	54.8	65.0	65.0
下後齧谷長		6.5	9.2	8.4	7.7	8.2	8.5
下内齧谷長		17.2	15.4	14.1	10.1	12.0	12.2
double knot長	咬合面	14.0	17.4	15.3	13.0	12.4	12.7
咬合面の傾斜		95°	87°	86°	78°	76°	65°
下 内 齧 幅		6.7	6.7	6.0	4.8	4.9	4.7

単位: mm

上顎切歯計測値

歯 種	右			左		
	第三切歯	第二切歯	第一切歯	第一切歯	第二切歯	第三切歯
歯 冠 長	20.6	19.4	17.3	17.8	19.5	20.8
歯 冠 幅		10.5	10.9	11.0	10.9	10.0
歯 冠 高	32.0*	54.5	53.7	53.8	52.3*	36.0*

単位: mm

下顎切歯計測値

歯 種	右			左		
	第三切歯	第二切歯	第一切歯	第一切歯	第二切歯	第三切歯
歯 冠 長	16.4	17.2	15.0	15.0	17.5	16.4
歯 冠 幅	9.7	9.0	9.4	9.5	9.2	9.7
歯 冠 高	41.8*	48.2*	46.8*	48.2	50.3	39.5*

単位: mm

*左上顎全臼歯列長 (咬合面): 166.6mm

*左下顎全臼歯列長 (咬合面): 164.0mm

竪穴住居索引表

住居番号	掲載頁	遺物観察表	グリッド	規模・形状	柱穴	意	面積(㎡)	方位	年代
1	140	1	97E04	超小形正方形	無主柱	東壁南	6.42(推)	+95°	平安時代
2	120	1	15G04	小形縦長長方形	無主柱	東壁南	15.54	+95°	奈良時代
3	329	1	12F49	小形横長長方形	無主柱	不明	10.46(推)	+102°	不明
4	121	1	16G08	無主柱	無主柱	不明	不明	+87°	奈良時代
5	4	2	16G06	中形正方形	4個	東壁北	25.89(推)	+75°	古墳時代後期
6	122	2	15F49	小形横長長方形	無主柱	東壁南	10.86	+102°	奈良時代
7	141	2	16F46	超小形正方形(推)	無主柱	不明	不明	+97°	平安時代
8	141	2	16F45	無主柱	無主柱	東壁	不明	+101°	平安時代
9	143	3	18G02	小形横長長方形	無主柱	東壁南	8.22(推)	+94°	平安時代
10	123	3	19G02	中形横長長方形	無主柱	東壁中	14.35	+89°	奈良時代
11	145	3	18G00	無主柱	無主柱	東壁南	不明	+102°	平安時代
12	146	4	18F49	小形横長長方形	無主柱	東壁南	12.62	+98°	平安時代
13	148	4	20F49	超小形横長長方形	無主柱	東壁南	6.83	+96°	平安時代
14	149	4	21F48	無主柱	無主柱	不明	不明	+91°	平安時代
15	150	5	19F45	小形横長長方形	無主柱	東壁南	10.98(推)	+82°	平安時代
16	6	5	21F45	不明	不明	不明	不明		古墳時代後期
17	331	5	22F44	中形横長長方形	無主柱	不明	16.14	+84°	不明
18	152	6	16F42	無主柱	無主柱	不明	不明	+100°	平安時代
19	153	6	18F41	無主柱	無主柱	不明	不明	+85°	平安時代
20	153	7	17F43	無主柱	無主柱	不明	不明	+97°	平安時代
21	155	7	20F41	小形横長長方形	無主柱	東壁南	8.70	+98°	平安時代
22	156	7	22F42	小形縦長長方形	無主柱	東壁南	8.66	+101°	平安時代
23	157	7	19F40	超小形横長長方形	無主柱	東壁南	7.69	+108°	平安時代
24	158	7	19F38	中形正方形	4個	不明	25.53(推)	+89°	平安時代
25	160	8	23F40	小形正方形	無主柱	東壁南	11.89	+92°	平安時代
26	161	8	27F37	小形横長長方形	無主柱	東壁南	8.26	+97°	平安時代
27	162	8	28F35	小形横長長方形	無主柱	東壁南	8.88	+98°	平安時代
28	121	1	17G08	無主柱	無主柱	不明	不明		不明
29	150	2	20F43	無主柱	無主柱	不明	不明	+90°	不明
30	153	1	18F42	小形横長長方形	無主柱	東壁南	8.20	+93°	不明
31	329	1	12G00	無主柱	無主柱	不明	不明	+118°	不明
32	124	9	13F46	不明	不明	不明	不明	+108°	奈良時代
33	158	9	18F38	不明	不明	不明	不明	+92°	平安時代
34	332	1	14G06	無主柱	無主柱	東壁南	不明	+106°	不明
35	163	9	32F22	超小形横長長方形	無主柱	東壁南	7.63	+87°	平安時代
36	164	9	33F20	小形縦長長方形	無主柱	東壁南	9.02	+95°	平安時代
37	125	9	18G05	無主柱	無主柱	東壁南	不明	+91°	奈良時代
38	6	10	20F44	超小形正方形	無主柱	東壁南	7.47	+98°	古墳時代後期
39	165	10	25G00	中形横長長方形	無主柱	東壁南	14.88	+93°	平安時代
40	165	10	26F49	小形横長長方形	無主柱	東壁南	8.78	+97°	平安時代
41	168	11	28G00	中形横長長方形	無主柱	東壁南	不明	+90°	平安時代
42	169	11	29F48	小形正方形	無主柱	東壁南	9.70(推)	+86°	平安時代
43	8	11	44F08	超大形正方形	4個	東壁中	48.63	+90°	古墳時代後期
44	11	12	42F00	大形横長長方形	4個	東壁南	34.24	+99°	古墳時代後期
45	13	13	44E43	小形正方形	無主柱	東壁南	14.67(推)	+82°	古墳時代後期
46	332	2	28F49	無主柱	無主柱	東壁北	不明	+89°	不明
47	171	13	22G00	小形横長長方形	無主柱	東壁南	11.97	+109°	平安時代
48	333	2	23G01	無主柱	無主柱	不明	不明	+90°	不明
49	15	13	30F18	小形横長長方形	無主柱	東壁南	9.53	+57°	古墳時代後期
50	17	14	27F30	中形正方形(推)	4個	不明	不明	+89°	古墳時代後期

住居 番号	掲載 頁	遺物 調査表	グリッド	規模・形状	柱 穴	竈	面積(㎡)	方位	年 代
51	18	14	32F28	超小形正方形	無主柱	東壁中	7.85	+91°	古墳時代後期
52	173	14	54F45	小形横長長方形	無主柱	東壁南	10.56	+99°	平安時代
53	174	15	48G00	小形横長長方形	無主柱	東壁南	11.14	+93°	平安時代
54	175	15	59F47	小形正方形	無主柱	東壁南	17.26	+93°	平安時代
55	176	15	35F47	中形横長長方形	無主柱	東壁南	17.19	+94°	平安時代
56	178	16	53G02	小形横長長方形	無主柱	東壁南	11.30	+97°	平安時代
57	180	16	40F45	小形正方形	無主柱	東壁南	12.83	+97°	平安時代
58	181	16	46G03	小形縦長長方形	無主柱	南西隅	8.74	-97°	平安時代
59	126	17	40G00	小形正方形	無主柱	東壁南	13.31(推)	+92°	奈良時代
60	182	17	41G00	小形正方形	無主柱	不明	13.76(推)	+92°	平安時代
61	184	18	42G04	小形正方形	無主柱	不明	不明	+90°	平安時代
62	185	18	40G02	中形横長長方形	無主柱	東壁南	17.05(推)	+86°	平安時代
63	186	18	40G01	小形正方形	無主柱	東壁南	不明	+96°	平安時代
64	欠	番							
65	334	18	42F48	中形縦長長方形	無主柱	不明	15.08(推)	+95°	不明
66	334	18	41F47	超小形正方形	無主柱	東壁南	8.08	+90°	不明
67	336		31G02	小形正方形	無主柱	不明	不明	+77°	不明
68	187	19	30G01	小形正方形	無主柱	南壁西	不明	-167°	平安時代
69	188	19	50G03	小形正方形	無主柱	東壁	不明	+91°	平安時代
70	336		49G04	小形正方形	無主柱	不明	不明	+83°	不明
71	189	19	31F43	中形横長長方形	無主柱	東壁南	14.83	+111°	平安時代
72	21	19	30F48	小形正方形	無主柱	不明	15.96(推)	+89°	古墳時代後期
73	191	20	31F46	小形正方形	無主柱	東壁南	不明	+85°	平安時代
74	128	20	31G00	小形横長長方形	無主柱	不明	8.34	+96°	奈良時代
75	193	20	34G02	小形横長長方形	無主柱	東壁南	9.47	+90°	平安時代
76	194	20	33G03	小形正方形	無主柱	不明	不明	+91°	平安時代
77	194	20	33G02	小形横長長方形	無主柱	東壁中	8.27(推)	+93°	平安時代
78	196	21	34F49	小形横長長方形	無主柱	東壁南	10.36(推)	+91°	平安時代
79	129	21	31F47	中形正方形	無主柱	東壁南	20.73(推)	+88°	奈良時代
80	197	22	33G00	小形正方形	無主柱	東壁南	不明	+88°	平安時代
81	22	22	33F49	中形正方形	4個	東壁南	17.42	+62°	古墳時代後期
82	21	22	29F47	小形正方形	無主柱	不明	17.93(推)	+89°	奈良時代
83	334	18	41F48	小形正方形	無主柱	不明	不明	+88°	不明
84	198	23	44G00	小形横長長方形	無主柱	東壁南	11.52	+102°	平安時代
85	199	23	46G01	小形横長長方形	無主柱	東壁南	9.57	+96°	平安時代
86	202	23	47F49	小形横長長方形	無主柱	東壁南	9.23(推)	+90°	平安時代
87	203	23	46F49	中形横長長方形	無主柱	不明	19.54	+97°	平安時代
88	24	23	44F48	大形正方形	3個(4個)	北壁東	33.26	+34°	古墳時代後期
89	336		47G03	小形正方形	無主柱	不明	不明	+96°	不明
90	336		48G04	小形正方形	無主柱	不明	不明	+94°	不明
91	欠	番							
92	204	24	59F38	超小形縦長長方形	無主柱	東壁南	5.76	+95°	平安時代
93	131	25	68F32	超小形正方形	無主柱	東壁南	8.43	+104°	奈良時代
94	132	25	68F35	小形正方形	無主柱	東壁南	不明	+87°	奈良時代
95	206	25	70F30	小形正方形	無主柱	東壁南	不明	+97°	平安時代
96	207	25	28F46	小形横長長方形	無主柱	東壁南	12.99	+95°	平安時代
97	208	26	25F44	小形横長長方形	無主柱	東壁南	11.36	+80°	平安時代
98	210	26	29F40	小形横長長方形	無主柱	東壁南	11.38	+92°	平安時代
99	211	26	28F40	小形正方形	無主柱	東壁南	11.95	+89°	平安時代
100	28	27	39F31	中形正方形	4個	東壁南	19.04	+73°	古墳時代後期

住居 番号	掲載 頁	遺物 観察表	グリッド	規模・形状	柱 穴	竈	面積(㎡)	方位	年 代
101	212	27	26F46	超小形横長長方形	無主柱	東壁南	5.70	+87°	平安時代
102	213	27	59F41	超小形横長長方形	無主柱	東壁南	6.45	+95°	平安時代
103	215	28	57F40	小形横長長方形	無主柱	東壁南	7.74	+95°	平安時代
104	30	28	59F43	中形横長長方形	4個	東壁南	23.35	+107°	古墳時代後期
105	217	28	45F41	小形横長長方形	無主柱	東壁南	12.21	+110°	平安時代
106	337	44	F38	超小形横長長方形	無主柱	東壁南	5.72(推)	+101°	不明
107	32	29	43F38	小形正方形	無主柱	東壁南	9.87	+98°	古墳時代後期
108	34	29	43F36	小形横長長方形	無主柱	東壁南	11.78	+91°	古墳時代後期
109	36	30	33F43	小形正方形	2個	東壁南	15.39	+87°	古墳時代後期
110	37	30	30F44	中形正方形	4個	北壁中	20.40	-12°	古墳時代後期
111	338	30	34F42	超小形正方形	無主柱	東壁南	6.66	+95°	不明
112	219	31	35F36	小形横長長方形	無主柱	東壁南	8.74	+98°	平安時代
113	220	31	47F34	小形横長長方形	無主柱	東壁南	10.35	+112°	平安時代
114	222	31	47F45	小形正方形	無主柱	南壁東	11.78	-169°	平安時代
115	39	31	46F43	小形横長長方形	無主柱	東壁中	11.88	+105°	古墳時代後期
116	223	32	33F34	小形横長長方形	無主柱	東壁南	9.03	+88°	平安時代
117	225	32	33F31	小形横長長方形	無主柱	東壁南	11.47	+88°	平安時代
118	227	32	40F27	中形横長長方形	無主柱	東壁南	16.85	+87°	平安時代
119	230	33	47F37	超小形正方形	無主柱	南壁中	8.02	-164°	平安時代
120	232	34	42F24	中形横長長方形	無主柱	東壁南	18.05	+88°	平安時代
121	235	34	46F26	無主柱	無主柱	不明		+102°	平安時代
122	237	34	41F22	超小形横長長方形	無主柱	東壁南	7.72	+92°	平安時代
123	238	35	38F21	小形横長長方形	無主柱	東壁南	11.46	+105°	平安時代
124	41	35	45F36	小形正方形	無主柱	東壁南	11.49	+91°	古墳時代後期
125	235	35	45F26	小形横長長方形	無主柱	東壁南	11.64	+105°	平安時代
126	240	35	52F25	小形横長長方形	無主柱	東壁南	8.94	+96°	平安時代
127	241	36	52F23	小形横長長方形	無主柱	東壁南	8.95	+94°	平安時代
128	242	36	50F30	超小形正方形	無主柱	東壁南	8.60	+92°	平安時代
129	243	36	51F29	小形横長長方形	無主柱	東壁南	8.64	+76°	平安時代
130	244	36	59F27	小形縦長長方形	無主柱	東壁南	10.88	+105°	平安時代
131	339	37	52F32	小形正方形	無主柱	東壁南	8.99(推)	+92°	不明
132	245	37	54F31	小形縦長長方形	無主柱	東壁南	9.06	+92°	平安時代
133	247	37	54F30	小形縦長長方形	無主柱	東壁南	9.32	+83°	平安時代
134	248	37	59F23	超小形横長長方形	無主柱	東壁南	6.75	+88°	平安時代
135	249	37	56F21	小形縦長長方形(推)	無主柱	東壁南	不明	+98°	平安時代
136	250	38	50F26	小形正方形	無主柱	東壁南	12.07	+94°	平安時代
137	252	38	50F25	超小形正方形	無主柱	東壁南	6.26	+83°	平安時代
138	133	38	58F33	無主柱	無主柱	不明		+88°	奈良時代
139	253	39	58F31	小形横長長方形	無主柱	東壁南	9.15	+91°	平安時代
140	256	39	58F31	無主柱	無主柱	東壁南	不明	+88°	平安時代
141	257	40	64F30	大形横長長方形	無主柱	不明	28.01(推)	+87°	平安時代
142	43	40	64F28	超小形正方形	無主柱	不明	7.71(推)	+82°	古墳時代後期
143	134	40	63F29	小形正方形	無主柱	東壁南	13.25(推)	+89°	奈良時代
144	258	40	50F33	超小形横長長方形	無主柱	東壁南	7.51	+97°	平安時代
145	44	40	38F29	中形正方形	4個	北壁中	20.16	-27°	古墳時代後期
146	259	41	57F32	超小形縦長長方形	無主柱	東壁中	6.77	+87°	平安時代
147									
148	340		50F38		無主柱	不明	不明	+95°	不明
149	340		50F38		無主柱	不明	不明	+98°	不明
150	260	41	48F23	小形横長長方形	無主柱	東壁南	9.94	+85°	平安時代

住居 番号	掲載 頁	遺物 観察表	グリッド	規模・形状	柱 穴	竈	面積(㎡)	方位	年 代
151	340		47F21	小形横長長方形	無主柱	不明	8.83(推)	+89°	不明
152	261	42	47F20	小形縦長長方形	無主柱	東壁南	10.10	+95°	平安時代
153	262	42	46F21		無主柱	東壁南	不明	+88°	平安時代
154	263	42	65F22		無主柱	東壁南	不明	+90°	平安時代
155	47	42	66F24	超小形正方形	無主柱	北壁中	9.06(推)	-14°	古墳時代後期
156	264	43	63F28	超小形縦長長方形	無主柱	東壁南	6.13	+93°	平安時代
157	265	43	57F29	小形横長長方形	無主柱	東壁南	8.84(推)	+98°	平安時代
158	266	43	57F30	小形横長長方形	無主柱	東壁南	8.59(推)	+95°	平安時代
159	256		59F31		無主柱	不明	不明	+86°	不明
160	50	44	66F28	小形横長長方形	無主柱	東壁南	9.12	+83°	古墳時代後期
161	51	44	51F31	小形正方形	無主柱	東壁南	11.33	+90°	古墳時代後期
162	56	44	28F44	小形正方形	無主柱	西壁南	13.72	-93°	古墳時代後期
163	60	45	37F44	超小形正方形	無主柱	南東隅	6.77	+107°	古墳時代後期
164	47		65F24		無主柱	東壁南	不明	+90°	不明
165	264	45	45F21		無主柱	東壁南	不明	+88°	平安時代
166	61	45	51F45	小形正方形	無主柱	東壁南	13.18	+89°	古墳時代後期
167	63	45	36F22	中形正方形	4個	北壁東	20.40	-4°	古墳時代後期
168	69	47	38F25	超小形正方形	無主柱	東壁南	8.80	+83°	古墳時代後期
169	71	47	34F25	超小形正方形	無主柱	不明	6.50	+96°	古墳時代後期
170	135	47	36F31	小形横長長方形	無主柱	東壁南	13.64	+94°	奈良時代
171	267	48	48F37	中形縦長長方形	無主柱	東壁南	不明	+95°	平安時代
172	270	48	40F24	中形横長長方形	無主柱	不明	16.81(推)	+91°	平安時代
173	271	48	50F23	超小形正方形	無主柱	東壁南	8.42	+87°	平安時代
174	272	48	50F21		無主柱	東壁南	不明	+91°	平安時代
175	272	49	50F22	小形横長長方形	無主柱	東壁南	11.95(推)	+84°	平安時代
176	72	49	52F28	超小形正方形	無主柱	北壁東	3.84	+22°	古墳時代後期
177	274	49	75F15	超小形正方形	無主柱	東壁南	7.88	+86°	平安時代
178	275	49	78F12		無主柱	東壁南	不明	+107°	平安時代
179	277	50	80F04	超小形正方形	無主柱	東壁南	7.26	+96°	平安時代
180	280	50	82F04		無主柱	不明	不明	+98°	平安時代
181	73	50	70F18	大形正方形	4個	東壁南	34.94	+71°	古墳時代後期
182	281	51	76F15	超小形横長長方形	無主柱	東壁南	4.51(推)	+89°	平安時代
183	次	番							
184	75	51	48F18	小形縦長長方形	無主柱	東壁中	12.16	+89°	古墳時代後期
185	75		49F19		無主柱	不明	不明	+85°	不明
186	次	番							
187	282	51	52F19	超小形横長長方形	無主柱	西壁中	4.01	-133°	平安時代
188	283	52	70F11	小形横長長方形	無主柱	東壁南	8.35	+89°	平安時代
189	次	番							
190	285	52	79F07	超小形縦長長方形	無主柱	東壁中	7.26(推)	+94°	平安時代
191	76	52	78F05	小形横長長方形	無主柱	東壁南	9.38	+104°	古墳時代後期
192	286	52	77F05	超小形横長長方形	無主柱	不明	6.32	+86°	平安時代
193	77	53	61F17	小形正方形	無主柱	北壁中	12.15	+4°	古墳時代後期
194	78	53	59F17	超大形正方形	4個	東壁南	39.80	+103°	古墳時代後期
195	80	53	58F15	超大形正方形	4個	東壁南	45.70(推)	+101°	古墳時代後期
196	85	54	55F16	小形縦長長方形	無主柱	東壁南	14.41	+121°	古墳時代後期
197	87	54	58F11	超大形縦長長方形	無主柱	東壁南	25.76	+95°	古墳時代後期
198	次	番							
199	287	55	69E47	超大形横長長方形	3個(4個)	東壁南	49.34	+100°	平安時代
200	91	56	76F08	中形正方形	4個	東壁南	21.84	+67°	古墳時代後期

住居 番号	掲載 頁	遺物 観察表	グリッド	規模・形状	柱 穴	竈	面積(㎡)	方位	年 代
201	289		77F01		無主柱	不明	不明	+94°	不明
202	289	56	77F02	小形横長長方形	無主柱	東壁南	11.83	+92°	平安時代
203	290	56	75F03	小形横長長方形	無主柱	東壁南	11.10	+91°	平安時代
204	291	56	73F13	超小形横長長方形	無主柱	不明	6.18	+91°	平安時代
205	292	57	70F14	小形横長長方形	無主柱	東壁南	11.15	+91°	平安時代
206	293	57	69F13	大形横長長方形	無主柱	東壁中	24.36	+92°	平安時代
207	294	57	65F14	小形横長長方形	無主柱	東壁南	8.43(推)	+98°	平安時代
208	294	58	64F14	中形縦長長方形	無主柱	東壁南	15.19(推)	+92°	平安時代
209	341	58	75F11	小形横長長方形	無主柱	不明	8.05(推)	+94°	不明
210	296	58	68F15	小形正方形	無主柱	東壁南	10.40	+89°	平安時代
211	297	58	76F04	超小形縦長長方形	無主柱	東壁中	6.89	+127°	平安時代
212	299	59	64F11	超小形正方形	無主柱	東壁南	8.55	+90°	平安時代
213	欠	番							
214	93	59	73F10	中形正方形	4個	東壁中	19.87	+114°	古墳時代後期
215	300		70F10		無主柱	不明	不明	+89°	不明
216	300	60	69F09	小形横長長方形	無主柱	東壁南	11.04	+96°	平安時代
217	301	60	68F09	小形横長長方形	無主柱	東壁南	11.33	+90°	平安時代
218	302	60	68F08	小形正方形	無主柱	東壁南	14.20(推)	+101°	平安時代
219	303	60	66F10		無主柱	不明	不明	+103°	平安時代
220	303	61	65F10	中形正方形	無主柱	不明	21.62	+98°	平安時代
221	305	61	71F06	中形縦長長方形	無主柱	南東隅	16.88(推)	+94°	平安時代
222	欠	番							
223	306	61	73F05	中形正方形	無主柱	東壁南	20.40(推)	+93°	平安時代
224	95	62	50E30	小形縦長長方形	無主柱	不明	12.28(推)	+67°	古墳時代後期
225	308	62	62E45		無主柱	東壁南	不明	+92°	平安時代
226	311	63	63E46		無主柱	東壁北	不明	+90°	平安時代
227	313	63	63E48	小形正方形	無主柱	東壁南	14.20	+90°	平安時代
228	96	64	66F01	小形縦長長方形	無主柱	西壁南	9.12	-103°	古墳時代後期
229	98	64	72F02	超小形正方形	無主柱	東壁南	6.70	+93°	古墳時代後期
230	316	65	64F07		無主柱	東壁南	不明	+92°	平安時代
231	100	65	63F00	超小形正方形	無主柱	東壁南	8.33	+88°	古墳時代後期
232	300		69F10		不明	不明	不明	+95°	不明
233	318	65	68F07	超小形縦長長方形	無主柱	東壁南	6.46	+107°	平安時代
234	欠	番							
235	319	66	65F11		無主柱	不明	不明	+97°	平安時代
236	316	66	65F08		無主柱	不明	不明	+93°	平安時代
237	欠	番							
238	欠	番							
239	316	66	63F07		無主柱	東壁南	不明	+90°	平安時代
240	102	66	75F05	小形縦長長方形	無主柱	東壁南	12.82(推)	+112°	古墳時代後期
241	103	67	74F03	小形正方形	1個	東壁南	13.99	+83°	古墳時代後期
242	105	67	71F04	超小形横長長方形	無主柱	東壁南	7.63	+105°	古墳時代後期
243	320	67	69F06	大形縦長長方形	無主柱	不明	不明	+99°	平安時代
244	320	68	69F06	中形正方形	無主柱	東壁南	20.75	+97°	平安時代
245	322	68	67F05		無主柱	東壁南	不明	+97°	平安時代
246	322	68	66F05		無主柱	不明	不明	+99°	平安時代
247	322	68	66F04		無主柱	東壁南	不明	+97°	平安時代
248	234	69	68F05		無主柱	東壁	不明	+88°	平安時代
249	欠	番							
250	107	69	60F03	大形横長長方形	4個	東壁南	27.86	+104°	古墳時代後期

住居 番号	掲載 頁	遺物 観察表	グリッド	規模・形状	柱 穴	竈	面積(㎡)	方位	年 代
251	109	69	63F12	小形正方形	無主柱	東壁南	12.26	+117'	古墳時代後期
252	324	70	63F02	小形横長長方形	無主柱	東壁南	10.65	+90'	平安時代
253	325	70	63F04	小形横長長方形	無主柱	不明	14.10	+100'	平安時代
254	326	70	62F02	超小形横長長方形	無主柱	東壁南	7.01	+86'	平安時代
255	欠	番							
256	111	71	63F09	小形縦長長方形	無主柱	北壁西	14.60	-2'	古墳時代後期
257	113	71	63F06	超小形正方形	無主柱	東壁南	9.23	+71'	古墳時代後期
258	114	71	62F03	小形横長長方形	4個	東壁南	14.56	+111'	古墳時代後期
259	欠	番							
260	136	71	68F03		無主柱	東壁	不明	+100'	奈良時代
261	328		65F02	小形横長長方形	無主柱	不明	不明	+94'	不明
262	328	72	65F02	小形横長長方形	無主柱	不明	14.62(推)	+105'	平安時代
263	342	72	64F07	小形横長長方形	無主柱	不明	10.06(推)	+91'	不明
264	116	72	64F05	超小形正方形	無主柱	西壁南	8.05	-131'	古墳時代後期

掘立柱建物索引表

掘立 番号	掲載 頁	遺物 観察表	グリッド	棟走向	柱 間	短軸 (m)	長軸 (m)	面積(㎡)	方位	重 複
1	350		45F00	E-W	2×4	4.8	6.4	30.72	+102'	44住
2	350		11G06	N-S	1×1	2.1	2.5	5.25	+20'	
3	351		23F31	E-W	1×1	1.7	1.8	3.06	+83'	
4	351		57G01	N-S	2×3	4.4	6.4	28.16	-5'	
5	352		60F47	N-S	2×3	2.7	5.0	13.50	+3'	
6	353		57F48	N-S	2×3	3.4	5.3	18.02	0'	54住
7	354	73	53F48	N-S	2×3	5.1	6.8	34.68	-2'	56住 10掘立
8	355	73	58F43	N-S	2×3	3.8	5.4	20.52	-3'	104住
9	356		61F31	N-S	2×2	3.5	5.0	17.50	+1'	
10	357		51G02	N-S	2×?		4.7		-2'	56住 7掘立
11	357		54F39	E-W	1×1	2.4	2.6	6.24	+94'	
12	358		56F37	N-S	2×2	4.8	4.9	23.52	+2'	92住 13掘立
13	358		55F36	N-S	2×2	3.7	3.9	14.43	-1'	12掘立
14	352		67F24	N-S	1×1	1.8	1.9	3.42	-41'	
15	353		69F23	N-S	1×1	1.8	1.8	3.24	+40'	
16	359		42F20	N-S	1×2	2.9	3.1	8.99	+2'	122住
17	359		56F04	N-S	1×1	1.7	1.8	3.06	+16'	
18	359		57F03	N-S	1×1	1.7	2.1	3.57	+12'	250住

群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告第116集

有馬条里遺跡II

一関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第35集一

平成3年3月15日 印刷

平成3年3月20日 発行

編集／群馬県埋蔵文化財調査事業団

勢多郡北構村大字下箱田784番地の2

電話(0279)52-2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会

勢多郡北構村大字下箱田784番地の2

電話(0279)52-2511(代表)

印刷／上毎印刷工業株式会社